

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 176

# 小坂向城山城跡 ヒロダン・小坂向遺跡

一般県道種見明戸線道路改築に伴う発掘調査

2003

岡山県教育委員会



1 弥生時代後期～古墳時代前期の遺物



2 碧玉製の玉素材

## 巻頭図版 2



1 遺跡上空から見た現在の集落（北西から）



2 南土壘の土層断面（北東から）



3 北・西土壘の土層断面（東から）

# 序

本報告書は、平成13年度から平成14年度に一般県道種見明戸線道路改築に伴って発掘調査を行った、小坂向城山城跡並びにヒロダン・小坂向遺跡の発掘調査報告書であります。

中国山地を源流にして岡山県のほぼ中央を南流する旭川は、遺跡のある湯原町を経て、吉備高原を蛇行しながら瀬戸内海に至り、古くから川を利用した南北の交流が盛んに行われてきました。

遺跡は、この旭川支流の鉄山川に沿って、狭い谷間を6 km程西へ上って辿り着く、広く開けた見明戸を望む尾根上に位置しています。見明戸地区は現在でも鳥取県の米子や倉吉とを結ぶ交通の要所の一つで、この盆地周辺の尾根上には弥生時代の散布地や中世の山城跡が多く確認されています。

このたび、急な傾斜と長いつづら折れの県道を改築するため、真庭地方振興局により道路改築が計画されました。計画道路用地内の尾根の一つには、平成7年度の分布調査の際に確認された中世の山城跡が含まれ、また、尾根の南裾部は縄文時代から中世の散布地として周知されていました。そのため、岡山県教育委員会と真庭地方振興局との間で事前に協議を重ねてまいりましたが、工事の性格上遺跡の現状保存は困難であるとの結論に達し、記録保存を目的とした発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、土塁で囲まれた削平段をもつ単郭の中世山城跡と、弥生時代から古墳時代の集落遺構が確認されました。このうち集落遺構は、可耕地からの比高差が60mほどもあり、当初はその存在そのものが予想外でした。また、遺物の中には県南部から持ち込まれた土器と山陰地方の土器が多く見られ、さらに特殊器台も発見されるなど、山陽と山陰の交流の拠点として重要であったことがうかがわれます。

これらの調査成果を収載した本報告書が、学術研究に寄与するだけでなく、地域の歴史の解明や文化財の保護・活用の一助となれば幸いに存じます。

発掘調査並びに報告書の作成にあたりましては、真庭地方振興局建設部並びに湯原町教育委員会をはじめ、地元の関係各位からも多大な御支援・御協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成15年11月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 睦夫

# 例 言

1 本書は、一般県道種見明戸線道路改築に伴い、岡山県教育委員会が真庭地方振興局建設部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した、小坂向城山城跡並びにヒロダン・小坂向遺跡の発掘調査報告書である。

なお、本遺跡の名称は報告書作成段階において、遺跡の所在する小字名を用いて発掘調査時の広段城山城跡から変更している。

2 小坂向城山城跡並びにヒロダン・小坂向遺跡は、岡山県真庭郡湯原町見明戸518-1外に所在する。

3 発掘調査は、平成13・14年度に岡山県古代吉備文化財センター職員澤山孝之・杉山一雄が担当して実施した。調査面積は平成13年度が4,920㎡、平成14年度が1,230㎡の合計6,150㎡である。

4 本書の作成は平成14年度に実施し、杉山が担当した。

5 本書の執筆は、第1～3・5章を杉山が行った。第4章については、杉山と澤山が分担して行ったので文責を文末に記した。全体の編集は杉山が行った。

6 発掘調査中に、中井均氏（滋賀県米原町教育委員会）に、山城跡の遺構について現地指導を仰いだ。記してお礼申し上げる。

7 出土遺物のうち必要に応じて鑑定・分析を下記の諸氏及び機関に依頼し、有益な御教示をいただいた。また、そのうちのいくつかについては玉稿を賜った。記して感謝の意を表す。

- ・石材同定 妹尾 護（倉敷芸術科学大学）
- ・土器の胎土・赤色顔料分析 白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）
- ・炭化材のC<sup>14</sup>年代測定 バリノサーヴェイ株式会社
- ・炭化材の樹種同定 バリノサーヴェイ株式会社

8 出土遺物のうち、旧石器時代の遺物と考えられる第99図S21の石器について、稲田孝司氏（岡山大学）より貴重な御教示をいただいた。記してお礼申し上げる。

9 遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。

10 本書に関連する出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

# 凡 例

- 1 本書に用いた高度値は標高である。また、方位は第2・5図は平面直角座標第V系(日本測地系)の座標北で、第10図以後の遺構個別図は磁北である。調査地における磁北は西偏7°10′である。
- 2 抄録に記載した経緯度は、日本測地系に準拠している。
- 3 本書に掲載した遺構・遺物の縮尺は基本的に次のとおり統一している。  
遺構 竪穴住居：1/80 段状遺構：1/80 土壙：1/40 溝：1/40  
遺物 土器：1/4 土製品：1/2 石器：2/3・1/2・1/4・1/8 金属器：1/2
- 4 本書の遺構全体図中などにおいて、遺構名を次のとおり省略して表記している。  
竪穴住居：住 段状遺構：段 土壙：土
- 5 本書では、竪穴住居と段状遺構の分別は、次のとおりに便宜的に定義付けて行っている。  
竪穴住居：床面が平らで、四方に掘り込んで壁面を持つか、床面に火処を持つ遺構。  
段状遺構：床面が平らで、二ないし三方向に掘り込みを持つ遺構。
- 6 本書に掲載した遺物は、土器・土製品・石器・金属製品に分類し、それぞれについて連番とし、土製品・石器・金属製品については、番号の前に次のとおり記号を冠している。  
土製品：C (Clay) 石器：S (Stone) 金属器：M (Metal)
- 7 本書に掲載した土器のうち、実測図の中軸線両側に白抜きがあるものは、小片のため口径の不確実なものである。
- 8 本書第1図に使用した地図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「湯本」「勝山」を複製・加筆したものである。
- 9 本書に用いた時代時期区分については、一般的な政治史区分に準拠したが、古墳時代は7世紀前半まで、中世は16世紀中頃までを指している。なお、弥生時代から古墳時代前期までの時期区分については84頁に示した別表のとおりであるが、執筆者間での統一はあえて行っていない。
- 10 本書に掲載した遺構図中の炭・焼土の範囲を次のトーンで表現している。

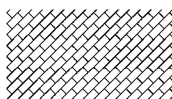


：火処、焼土範囲



：炭散布範囲

- 11 本書に掲載した断面図において、地山表現はA・Bの2種類を次のように使い分けている。



：A



：B

第4図：A = 岩盤、B = 無遺物の堆積層

第6・8図：A = 岩盤とパイラン土、B = 築城以前の流出土

第7図：A = 廃城後の流出土除去後の基盤（土塁の盛土を含む）

第10図以後：A = 岩盤と無遺物の堆積層、B = 古い時期の遺構埋土か遺物包含層

# 目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 遺跡の位置と環境	(杉山) … 1
第2章 調査及び報告書作成の経緯と体制	(杉山) … 3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査の経過	4
第3節 調査及び報告書作成の体制	6
第4節 報告書作成の経過と方法	7
第5節 確認調査の概要と基本土層	7
第3章 小坂向城山城跡	(杉山) … 9
第1節 調査の概要	9
第2節 遺 構	9
第4章 ヒロダン・小坂向遺跡	13
第1節 調査の概要	(杉山) … 13
第2節 尾根上調査区の概要	(杉山・澤山) … 14
(1) 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物	14
(2) 古墳時代後期以降の遺構	58
(3) 遺構に伴わない遺物	59
第3節 斜面調査区の概要	(杉山・澤山) … 63
(1) 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物	63
(2) 遺構に伴わない遺物	78
第5章 まとめ	(杉山) … 80
第1節 小坂向城山城跡について	80
第2節 ヒロダン・小坂向遺跡について	81
附編1 ヒロダン・小坂向遺跡出土土器の胎土分析	(白石) … 85
附編2 ヒロダン・小坂向遺跡から出土した炭化材の年代と樹種	(パリノ・サーヴェイ株式会社) … 93
遺構・遺物一覧表	
写真図版	
報告書抄録	

# 巻頭図版目次

巻頭図版 1	1 弥生時代後期～古墳時代前期の遺物
	2 碧玉製の玉素材

巻頭図版 2	1 遺跡上空から見た現在の集落（北西から）
	2 南土塁の土層断面（北東から）
	3 北・西土塁の土層断面（東から）

## 図 目 次

第 1 図	遺跡の位置 (1/300,000)・調査地周辺の地形と 主要遺跡分布 (1/50,000) …… 2
第 2 図	調査区位置 (1/3,000)・路線周辺採集遺物 (1/4) …… 3
第 3 図	調査区設定及びトレンチ配置 (1/1,500) …… 7
第 4 図	確認トレンチ T 1・T 4 基本土層断面 (1/100) …… 8
第 5 図	調査前地形測量 (1/600) …… 9
第 6 図	郭面土層断面 (1/80) …… 10
第 7 図	調査後地形測量及び断面位置 (1/300) …… 11
第 8 図	土塁土層断面 (1/80) …… 12
第 9 図	弥生時代後期～古墳時代前期の遺構配置 (1/800) …… 13
第10図	竪穴住居 1 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 14
第11図	尾根上調査区 弥生時代後期～古墳時代前期の 遺構配置① (1/300) …… 15
第12図	尾根上調査区 弥生時代後期～古墳時代前期の 遺構配置② (1/300) …… 16
第13図	竪穴住居 2 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 17
第14図	竪穴住居 3 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 17
第15図	竪穴住居 3～7・段状遺構 1 (1/80) …… 18
第16図	竪穴住居 4・5 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 19
第17図	竪穴住居 6 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 20
第18図	竪穴住居 7 出土遺物 (1/4) …… 20
第19図	竪穴住居 7 (1/80) …… 21
第20図	竪穴住居 8 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 22
第21図	竪穴住居 9 (1/80) …… 22
第22図	竪穴住居 10・11 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 23
第23図	竪穴住居 12 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 24
第24図	竪穴住居 13 出土遺物 (1/2・1/4) …… 24
第25図	竪穴住居 13 (1/80) …… 25
第26図	竪穴住居 14～18 (1/80) …… 26
第27図	竪穴住居 14～18の変遷 (1/300) …… 27
第28図	竪穴住居 16 出土遺物 (2/3・1/2) …… 27
第29図	竪穴住居 14～16 (1/80) …… 28
第30図	竪穴住居 14～16 出土遺物 (1/4) …… 29
第31図	竪穴住居 18 出土遺物 (1/4) …… 29

第32図	竪穴住居 17・18 (1/80) …… 30
第33図	竪穴住居 17・18 出土遺物 (2/3・1/2・1/4・1/8) …… 31
第34図	竪穴住居 19・20① (1/80) …… 32
第35図	竪穴住居 19・20② (1/80)・出土遺物① (1/4) …… 33
第36図	竪穴住居 19・20 出土遺物② (1/2・1/4・1/8) …… 34
第37図	竪穴住居 21 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 34
第38図	竪穴住居 22 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 35
第39図	竪穴住居 23 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 35
第40図	竪穴住居 24 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 36
第41図	竪穴住居 25 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 36
第42図	竪穴住居 26 (1/40) …… 36
第43図	段状遺構 1 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 37
第44図	段状遺構 2 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 37
第45図	段状遺構 3 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 38
第46図	段状遺構 4 (1/80) …… 38
第47図	段状遺構 4 出土遺物 (1/2・1/4) …… 39
第48図	段状遺構 5 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 39
第49図	段状遺構 6 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 40
第50図	段状遺構 7 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 40
第51図	段状遺構 8 (1/80) …… 40
第52図	段状遺構 9 (1/80) …… 40
第53図	段状遺構 10 (1/80) …… 41
第54図	段状遺構 11～13 (1/80)・段状遺構 11・12 出土遺物 (1/4) …… 41
第55図	段状遺構 13 出土遺物 (1/4) …… 42
第56図	段状遺構 14 (1/80) …… 42
第57図	段状遺構 15 (1/80) …… 42
第58図	段状遺構 15 出土遺物 (1/4) …… 43
第59図	段状遺構 16 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 43
第60図	段状遺構 17 (1/80)・出土遺物 (1/4) …… 43
第61図	土壇 1 (1/20)・出土遺物 (1/4) …… 44
第62図	土壇 2 (1/40)・出土遺物 (1/4) …… 44
第63図	土壇 3 (1/40) …… 45
第64図	土壇 4・5 (1/40)・出土遺物 (1/2・1/4・1/8) …… 45
第65図	土壇 6 (1/40) …… 45



第66図	土壙 7 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	46	遺構配置 (1/300) ……………	64	
第67図	土壙 8 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	46	第103図	段状遺構18 (1/80) ……………	65
第68図	土壙 9 (1/40) ……………	46	第104図	段状遺構19・20 (1/80)・段状遺構19出土遺物 (1/4) ……………	65
第69図	土壙10 (1/40)・出土遺物 (1/2・1/4) ……………	47	第105図	段状遺構20出土遺物 (1/4・1/8) ……………	65
第70図	土壙11 (1/40)・出土遺物 (1/2・1/4) ……………	47	第106図	段状遺構21・22 (1/80) ……………	66
第71図	土壙12 (1/40) ……………	48	第107図	段状遺構23・24 (1/80)・段状遺構23出土遺物 (1/4) ……………	66
第72図	土壙13 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	48	第108図	段状遺構25 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	67
第73図	土壙14 (1/40)・出土遺物① (1/4) ……………	49	第109図	段状遺構26 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	67
第74図	土壙14出土遺物② (1/4) ……………	50	第110図	段状遺構27・28 (1/80) ……………	67
第75図	土壙15 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	51	第111図	段状遺構27・28出土遺物 (1/4) ……………	68
第76図	土壙16 (1/40) ……………	51	第112図	西半段状遺構群 (1/80) ……………	68
第77図	土壙17 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	51	第113図	西半段状遺構群出土遺物 (1/4) ……………	69
第78図	土壙18 (1/40) ……………	51	第114図	東半段状遺構群 (1/80) ……………	69
第79図	土壙19 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	51	第115図	東半段状遺構群出土遺物 (1/4・1/8) ……………	70
第80図	土壙20 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	52	第116図	土壙37 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	71
第81図	土壙21 (1/40)・出土遺物 (1/2・1/4) ……………	52	第117図	土壙38 (1/40) ……………	71
第82図	土壙22 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	53	第118図	土壙38出土遺物 (1/4) ……………	72
第83図	土壙23 (1/40) ……………	53	第119図	土壙39 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	73
第84図	土壙24・25 (1/40)・土壙25出土遺物 (1/4) ……	54	第120図	土壙40 (1/40) ……………	73
第85図	土壙26 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	54	第121図	土壙41 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	73
第86図	土壙27 (1/40) ……………	54	第122図	土壙42 (1/40) ……………	74
第87図	土壙28 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	55	第123図	土壙43 (1/40) ……………	75
第88図	土壙29 (1/40) ……………	55	第124図	土壙44 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	75
第89図	土壙30 (1/40) ……………	55	第125図	土壙45 (1/40) ……………	75
第90図	土壙30出土遺物 (1/4) ……………	56	第126図	土壙46 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	75
第91図	土壙31・32 (1/40)・土壙31出土遺物 (1/4) ……	57	第127図	土壙47 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	76
第92図	土壙33 (1/40) ……………	58	第128図	溝 1 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	77
第93図	土壙34 (1/40) ……………	58	第129図	溝 2 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	78
第94図	古墳時代後期以降の遺構配置 (1/800) ……………	58	第130図	溝 3 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	78
第95図	土壙35 (1/40) ……………	59	第131図	溝 4 (1/40) ……………	78
第96図	土壙36 (1/40) ……………	59	第132図	遺構に伴わない遺物① (1/4) ……………	79
第97図	遺構に伴わない遺物① (1/4) ……………	60	第133図	遺構に伴わない遺物② (1/2) ……………	79
第98図	遺構に伴わない遺物② (1/2・1/4) ……………	61	第134図	弥生時代後期～古墳時代前期の時期別主要 遺構変遷 (1/600) ……………	82
第99図	遺構に伴わない遺物③ (2/3・1/2・1/4・1/8) ……	62			
第100図	竪穴住居27 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	63			
第101図	竪穴住居28 (1/80) ……………	63			
第102図	斜面調査区 弥生時代後期～古墳時代前期の				

## 表 目 次

編年対比表……………	84	土製品一覧……………	99
竪穴住居一覧……………	97	石器一覧……………	99
段状遺構一覧……………	98	鉄器一覧……………	100
土壙一覧……………	98		

# 図版目次

図版 1	1 小坂向城山城跡 調査前の空中写真(北西から)	8 ヒロダン・小坂向遺跡 斜面調査区 調査前の状況(北西から)
	2 小坂向城山城跡 調査終了後の空中写真(西から)	図版 6
図版 2	1 小坂向城山城跡 郭面上空写真(上が南)	1 ヒロダン・小坂向遺跡 斜面調査区(西半) 遺構全景(北西から)
	2 小坂向城山城跡 郭内の状況(南東から)	2 ヒロダン・小坂向遺跡 斜面調査区(東半) 遺構全景(南東から)
	3 小坂向城山城跡 西土塁土層断面(南から)	3 ヒロダン・小坂向遺跡 竪穴住居27(南西から)
	4 小坂向城山城跡 南土塁土層断面(東から)	4 ヒロダン・小坂向遺跡 段状遺構21~25周辺(南西から)
	5 ヒロダン・小坂向遺跡 尾根上調査区(西側) 遺構空中写真(上が北東)	5 ヒロダン・小坂向遺跡 東半段状遺構群覆土中土器出土状況(南西から)
図版 3	1 ヒロダン・小坂向遺跡 尾根上調査区(東側) 遺構空中写真(西から)	6 ヒロダン・小坂向遺跡 土壙38土器出土状況(南西から)
	2 ヒロダン・小坂向遺跡 竪穴住居13~20周辺空中写真(上が北)	7 ヒロダン・小坂向遺跡 土壙38完掘状況(南西から)
図版 4	1 ヒロダン・小坂向遺跡 竪穴住居1(南東から)	8 ヒロダン・小坂向遺跡 土壙42~45(南西から)
	2 ヒロダン・小坂向遺跡 竪穴住居3~7周辺(北東から)	図版 7
	3 ヒロダン・小坂向遺跡 竪穴住居5床面土器出土状況(南東から)	ヒロダン・小坂向遺跡 竪穴住居1・3・5・8・10・11・13出土土器
	4 ヒロダン・小坂向遺跡 竪穴住居10・11(北から)	図版 8
	5 ヒロダン・小坂向遺跡 竪穴住居18床面甌出土状況(東から)	ヒロダン・小坂向遺跡 竪穴住居17~20、段状遺構5・13・15出土土器
	6 ヒロダン・小坂向遺跡 竪穴住居22(西から)	図版 9
	7 ヒロダン・小坂向遺跡 段状遺構4、土壙7(南西から)	ヒロダン・小坂向遺跡 土壙1・2・13・14出土土器
	8 ヒロダン・小坂向遺跡 段状遺構6~8、土壙8・9(南東から)	図版10
図版 5	1 ヒロダン・小坂向遺跡 土壙1(北東から)	ヒロダン・小坂向遺跡 土壙14・19・20・28・30出土土器
	2 ヒロダン・小坂向遺跡 土壙4・5(北東から)	図版11
	3 ヒロダン・小坂向遺跡 土壙19(南東から)	ヒロダン・小坂向遺跡 土壙30・31出土土器
	4 ヒロダン・小坂向遺跡 土壙18~21(南から)	図版12
	5 ヒロダン・小坂向遺跡 土壙30土器出土状況(東から)	ヒロダン・小坂向遺跡 段状遺構25・27・28、段状遺構群、土壙38・41出土土器
	6 ヒロダン・小坂向遺跡 土壙35(南東から)	図版13
	7 ヒロダン・小坂向遺跡 土壙36(北東から)	ヒロダン・小坂向遺跡 土壙39・47、溝1・3、包含層出土土器
		図版14
		ヒロダン・小坂向遺跡 出土石器
		図版15
		1 ヒロダン・小坂向遺跡 出土石器
		2 ヒロダン・小坂向遺跡 出土石英塊
		3 ヒロダン・小坂向遺跡 出土鉄鏃X線写真
		図版16
		ヒロダン・小坂向遺跡 出土鉄器

## 第1章 遺跡の位置と環境

小坂向城山城跡とヒロダン・小坂向遺跡は、岡山県の北部で旧美作国の北西部に位置し、現在の行政区分の真庭郡湯原町見明戸に所在する。

湯原町は、県の中央を流れる旭川の上流で、東部中国山地の山間部に位置する。町の中心部は古くからの温泉地として栄え、南の勝山町から山陰に抜ける伯耆往来がここを通る。近世までは、勝山まで旭川を利用して高瀬舟による河川交通が盛んで、勝山からは陸路で物資の運搬が行われていた。

遺跡のある見明戸は、旭川の支流である鉄山川を約6kmほど西進して大きく開けた盆地で、近世までの主要街道からははずれているものの、川沿いに更に進んで美甘村を通り、出雲街道（現在の国道181号線）で四十曲峠を越えて米子に抜けられる。また、見明戸から北進して八束村に抜け、伯耆往来（現在の国道313号線）で犬狭峠を越えて倉吉に出ることもできる。遺跡は、これらの道筋が一目で眼下に見下ろせる尾根上に築かれており、可耕地から約60mの比高差を持つ<sup>1</sup>。

遺跡周辺には、今回の調査で旧石器の可能性のある石器が出土したが、先人の足跡として確実なもの、寺の前遺跡で縄文時代前期の土器が採集され、調査でも縄文時代後半期の切り目石錘の出土がある。弥生時代になると盆地を望む尾根上を中心に集落が営まれるようになり、後期の土器や石器が多く採集されている。平地では、圃場整備が早くに行われているため弥生時代の集落の状況は判然としない。古墳時代に入ると前半期の古墳は旭川流域にみられるが、鉄山川沿いでは後期になってから横穴式石室を持つ古墳が築かれている。該期の集落は近年下湯原で発掘調査が実施され、遺物と共にカマド付きの竪穴住居が検出され、奈良時代の遺構・遺物も合わせて検出されている<sup>2</sup>。中世前半についても平地にある八幡神社周辺で土器が採集されているが、調査が行われていないために不明な点が多い。ただ、圃場整備の際に中世全般にわたった土器や陶磁器が比較的多量に出土したとの報告もあり、平地に集落や館が存在したことは容易に想像される。

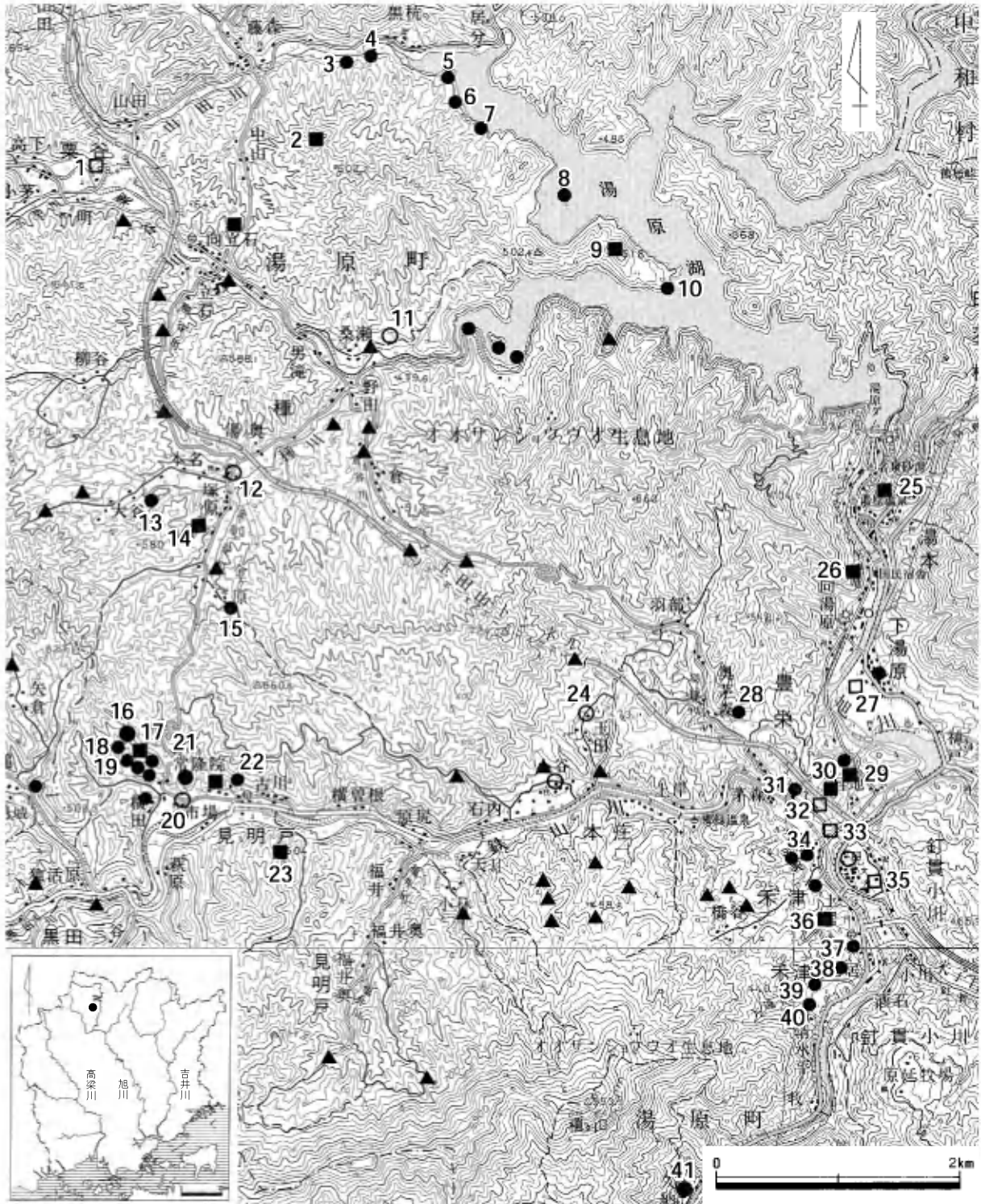
戦国期頃になると山陰の尼子氏と備前の宇喜多氏の勢力争いの関係で、旭川や鉄山川沿いの交通路の要所に山城や砦が築かれ始める。遺跡の近隣では、南西に直線で約1.5kmで視認できる位置に連郭式と考えられる見明戸城山城跡<sup>4</sup>、鉄山川が旭川に流れ込む地点の丘陵上にやはり連郭式の目地城跡や単郭式の藪途山城跡<sup>3</sup>などがある。

近世以降になると、町境の鉄山地区など美甘村を中心にして製鉄遺跡が多く営まれ、谷間には鉄穴流しの跡が多くみられる。遺跡周辺でも中世の遺物に交じって鍛冶滓が採集され、中世以来製鉄が盛んであった様子が窺い知れる。

### 註

- 1 石田 寛監修『岡山県の地理』1978  
斎藤伸英「第Ⅱ部 第二章」『岡山県史 自然風土』1983
- 2 内藤善史編「下湯原B遺跡 藪途山城跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』166 2002 岡山県教育委員会
- 3 註2文献に同じ。
- 4 長尾勝明『新訂訳文 作陽誌』上巻 1912

第1章 遺跡の位置と環境



- 中世の城跡                      □ 鎌倉～室町時代の散布地（集落）                      ○ 弥生～室町時代の散布地（集落）
- 弥生時代の散布地（集落）                      ▲ 製鉄関連遺跡

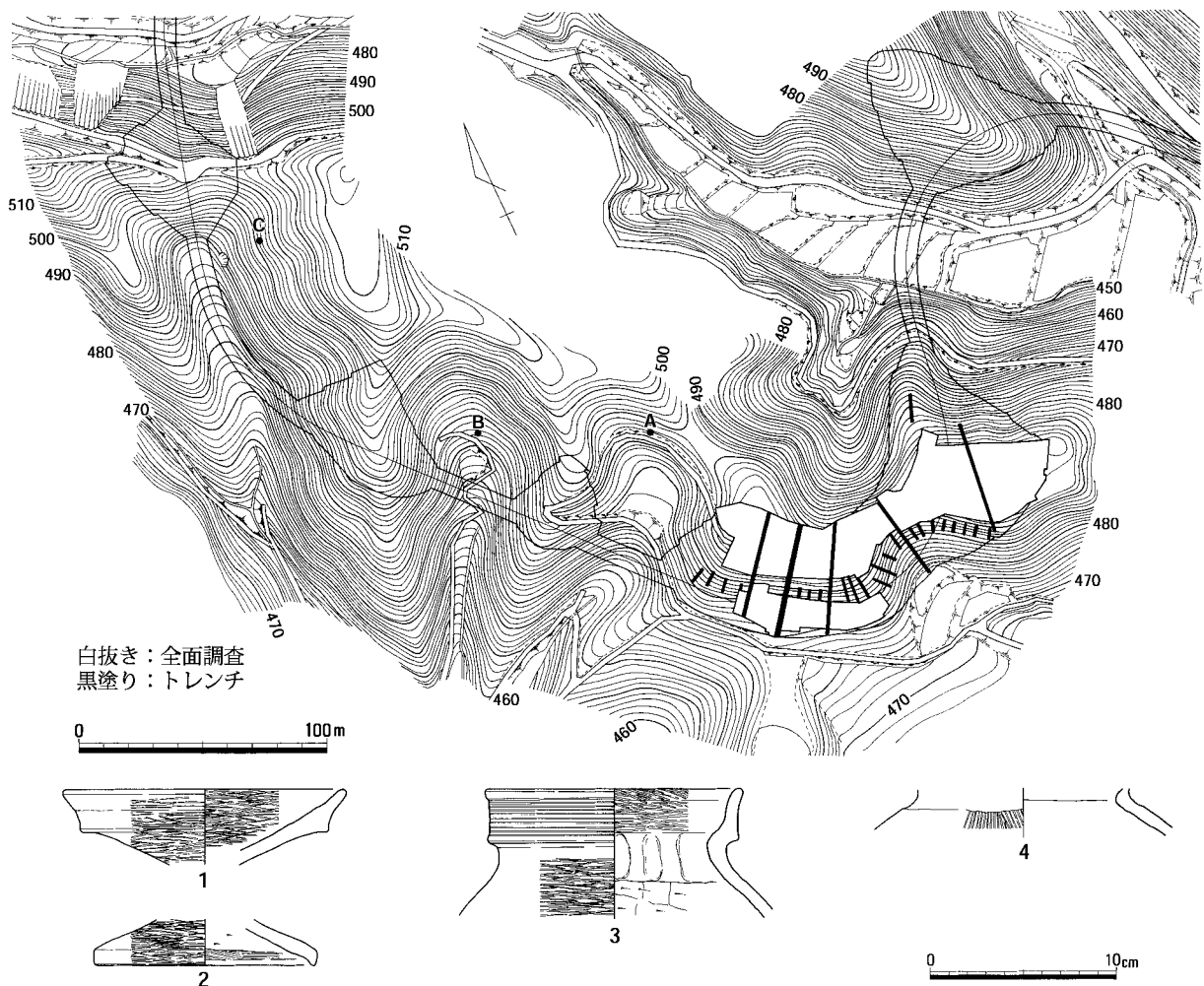
- 1 栗谷A遺跡 2 飯山城跡 3 大免遺跡 4 山の神遺跡 5 黒杭A遺跡 6 黒杭B遺跡 7 黒杭C遺跡 8 小童谷A遺跡 9 釜戸原城跡 10 上の原A遺跡 11 桑瀬遺跡 12 本名遺跡 13 中山遺跡 14 塚原城跡 15 金ヶ原遺跡 16 ヒロダン・小坂向遺跡 17 小坂向城山城跡 18 林ヶなる遺跡 19 広段馬乗場遺跡 20 見明戸八幡神社遺跡 21 寺の前遺跡 22 秋葉山遺跡 23 見明戸城山城跡 24 玉田A遺跡 25 湯山城跡 26 大沼山陣所跡 27 下湯原B遺跡 28 すくもだわ遺跡 29 藪途山城跡 30 目地城跡 31 豊栄遺跡 32 茅森磯尾遺跡 33 目地遺跡 34 三ツ家A遺跡 35 東郷屋敷遺跡 36 土居城跡 37 土居遺跡 38 岡の段遺跡 39 岡のそね遺跡 40 射的の平遺跡 41 久納遺跡

第1図 遺跡の位置 (1/300,000)・調査地周辺の地形と主要遺跡分布 (1/50,000)

## 第2章 調査及び報告書作成の経緯と体制

### 第1節 調査に至る経緯

平成11年12月、湯原町教育委員会（以後、町教委と呼ぶ）から、周知の遺跡である広段城山城跡の近隣で一般県道種見明戸線の道路改良計画があるとの連絡を受け、平成12年1月に岡山県教育庁文化課（以後、文化課と呼ぶ）職員が改良予定地の現地確認を行った。その結果、予定路線が遺跡の所在する尾根を通過することが明らかとなったため、事業主体者である真庭地方振興局建設部（以後、振興局と呼ぶ）に協議を申し入れた。同年4月、改めて文化課と古代吉備文化財センター（以後、文化財センターと呼ぶ）、町教委の三者で現地を訪れて計画路線と遺跡位置を再確認し、調査の必要性を確認した。6月には、振興局から平成12年度中の発掘調査実施の要望があがったが、年度途中での申し入れであることから再度事業計画の見直しを申し入れ、平成13年度に一部記録保存のための発掘調査を実施することで協議・調整を重ねた。その最中の8月、立木の伐採・搬出作業を行うための重機



第2図 調査区位置（1/3,000）・路線周辺採集遺物（1/4）

が進入し、郭面の土塁等遺跡の一部を破壊してしまうという事態が判明し、県教育委員会では振興局に改めて遺跡の重要性を申し入れ、町教委並びに地元への遺跡の周知徹底を行うよう注意を行った。平成13年2月には振興局から文化財保護法第57条の3に基づく埋蔵文化財発掘の通知が提出され、これを受け同年4月から文化財センターにより発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 調査の経過

発掘調査は、当初計画では尾根上の山城跡と認識された郭面を中心とした5,520㎡について、平成13年4月1日から平成14年3月31日までの一年間に文化財センター職員2名があたる予定であった。

4月9日、道路工事関係者から遺跡への進入路の地区が、秋頃には調査区北側の尾根を切り崩した土砂で埋め立て工事を実施する旨報告があった。このため、振興局に対して工事計画の確認と現地協議を申し入れ、協議が行われるまでの間、調査前の地形測量と写真撮影を業者委託して実施した。作業終了間近の4月26日、現地において工事関係者を加えた四者により協議を行い、埋め立て工事と平行して調査を実施し、現場までの進入路並びに通行時の安全の確保などについて確認した。

調査は、調査区西側斜面下の確認調査から実施した。平成7年度に行われた分布調査で、斜面調査区（調査時のⅡ区）の近隣で弥生土器や須恵器などが採集され、広段馬乗場遺跡、広段C遺跡として周知されていたが、遺跡の広がり不明確であった。また、路線外の南西に延びる丘陵が出丸として認識されていたので、堀切などの山城関連遺構が路線内に存在するかどうかを確認する必要もあった。したがって、西側尾根上（調査時のⅠ区）から斜面裾に土層の堆積状況と遺構の有無を確認するため、T1～T4を設定して確認調査を行った。

確認調査の結果、山城関連遺構は明確にできなかったが、各トレンチで弥生土器などの出土がみられ、斜面裾のT1で溝とピット、T2で段状遺構・袋状土壌・溝とピット、T3でも段状遺構が確認され、広段C遺跡が路線内まで広がり、弥生時代の集落が全面に存在することが明らかとなった。このため、当初調査対象外であった斜面調査区630㎡についても全面調査が必要と判断された。T4を設定した地点については、包含層は確認されたが谷部でありトレンチの土層観察のみで調査を終了した。

確認調査の成果から調査計画と調査手順の見直しが必要となり、文化課と調整を行った結果、次の案が出された。

- 1 当初計画では尾根上の山城跡のみが調査対象で、積雪量の多さから冬季の調査の困難性を予測したうえで、年間調査計画が立てられていた。しかし、山城跡のほかに想定されていなかった斜面調査区（Ⅱ区）で弥生時代から古墳時代の遺構が高い密度で存在するため、当初計画分は可能な限り冬季も調査を実施し、増加した調査面積分として調査期間を平成14年度に3カ月間延長する。
- 2 斜面調査区（Ⅱ区）は、西側尾根上調査区（Ⅰ区）の排土場になるため、優先的に全面調査を実施する。

以上2点の調整案で振興局の合意を得て、各区ともに中世と弥生時代から古墳時代の二時期の遺構検出を行い、Ⅱ区→Ⅰ区→Ⅲ区の順に進めた。

Ⅱ区では中世の遺構は確認できず、弥生時代から古墳時代の集落遺構が検出された。

Ⅰ区はT1～T3を尾根上まで延長し、さらにT5・T6を設定して中世の築城痕跡と弥生時代の遺構の残存状況を確認した。この際、T1において南斜面で検出していた押し出し土を基盤層とする

古墳時代の竪穴住居が確認されたことから、築城時に排出されたと考えていた堆積層が弥生時代の排出土であり、T 1～T 6では築城時に排出された土砂がまったく検出されないことが明らかとなった。さらに、現地地形で視認できる段にサブトレンチを設定したところ、すべての地点で弥生時代から古墳時代の遺構が存在することが判明した。

これらの状況から、I区の現地地形は古墳時代前期までの整地痕跡が視認できるのであって、築城時にはまったく造作を行っていないと判断された。11月30日には城跡の構造と機能についての評価を得るため、中井 均氏（滋賀県米原町教育委員会）に現地指導を受け、やはりⅢ区のみが山城跡と評価できるとの指導を得た。

11月16日～12月12日には南斜面にS. T. 1～S. T. 22を設定して土層堆積の確認を行ったところ、斜面には弥生時代から古墳時代の遺構は存在せず、中世の築城時の排出土は東側尾根上調査区（調査時のⅢ区）のみに存在することが確認され、全面調査の範囲を決定した。

I区については流土を除去して検出した古墳時代後期以降の土壌2基（土壙35・36）を調査後、直ちに西側頂部から弥生時代の遺構の調査に取りかかった。平成14年3月12日には弥生時代から古墳時代前期の遺構全体の写真撮影を行い、その後にⅢ区の北斜面にサブトレンチ1本とT 8を延長して掘削した。その結果、北斜面については急傾斜であり、弥生時代の押し出し土の包含層は確認されるものの、弥生時代の遺構は存在しないと判断された。西斜面については、重機により削平された崖面の土層観察では遺構は認められなかったが、土器の出土が見られることから重機による攪乱面までを全面調査することとし、Ⅲ区の全面調査範囲を確定した。

3月25・27日に路線内の樹木の伐採・搬出のために新たに通路を造っていたので、計画路線内の調査区域よりも北の尾根について踏査を行った。その結果、第2図に示したA地点では器台1と台2、B地点で甕3、C地点で甕片4を採集した。いずれの地点も斜面の包含層からの出土であり、斜面上位にはI区と同様の削平面が認められることから、弥生時代後期頃の集落が尾根線上に高所まで広がることが推察された。なお、路線内の尾根では明瞭な削平面や遺物は確認されず、谷部でも製鉄関連の遺物などは認められなかった。

平成14年度は、Ⅲ区の1,230㎡の山城関連の遺構調査から開始した。尾根上にT 7～T 9を設定し、土層と弥生時代遺構の確認を行ったところ、土塁の内側は築城時の削平は受けているものの、弥生時代の遺構が残っており、西土塁の外側の平坦面も竪穴住居が埋没して現状の地形になっていることが判明した。トレンチの結果をもとに、土塁内については建物などの遺構に、土塁の上や裾についても柵に注意を払いつつ、西側から順次表土・流土を除去した。山城関連の調査が終了した後、湯原町教育委員会主催による地元を対象とした現地説明会を開催し、50人を越える参加を得た。説明会后に土塁の土層観察を行い、南土塁は人力で、北土塁から西土塁は重機により盛土と弥生時代の押し出し土の除去を行い遺構の調査を進めた。6月7日には湯原小学校の現地見学があり、6月21日に遺跡全体の弥生時代から古墳時代の遺構写真を撮影し、調査を終了した。

#### 日誌抄

平成13年 4月9日	現場立ち上げ。	10月2日	I区調査再開。
4月26日	調査前地形空中写真撮影。	10月3日	Ⅱ区調査終了。
4月27日	T 1～T 4調査開始。	11月16日	南斜面S. T. 1～22調査開始。
5月16日	I区調査開始。	11月29・30日	現地指導。
5月30日	I区調査中断。Ⅱ区調査開始。	12月11日	I区古墳時代以降の地形空中写真撮影。
7月19日	湯原中学校現場見学。	12月12日	南斜面S. T. 1～22調査終了。

## 第2章 調査及び報告書作成の経緯と体制

平成14年3月12日	I区弥生～古墳時代の遺構空中写真撮影。	5月21日	Ⅲ区山城段階調査終了。Ⅲ区弥生段階調査開始。
3月14日	Ⅲ区調査開始。	5月21～23日	重機による北・西盛土除去。
3月28日	I区調査終了。	6月7日	湯原小学校現場見学。
3月31日	平成13年度調査終了。	6月21日	弥生～古墳時代全景空中写真撮影。
4月8日	Ⅲ区山城段階調査開始。	6月27日	調査終了。
5月13日	Ⅲ区山城段階空中写真撮影。現地説明会。		

## 第3節 調査及び報告書作成の体制

発掘調査は、岡山県教育委員会が真庭地方振興局建設部より依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが実施した。調査は、平成13・14年度にわたって文化財センター職員各2名があたった。また、報告書作成は、平成14年度の調査終了後に職員1名が担当した。以下に、体制を記す。

### 平成13年度

岡山県教育委員会	
教育長	宮野 正司
岡山県教育庁	
教育次長	國貞 忠克
文化課	
課長	松井 英治
課長代理	藤井 守雄
課長代理(埋蔵文化財係長)	松本 和男
主任	奥山 修司
岡山県古代吉備文化財センター	
所長	正岡 睦夫
次長	能登原 巧
〈総務課〉	
課長	安西 正則
総務係長	田中 秀樹
主任	小坂 文男
〈調査第三課〉	
課長	柳瀬 昭彦
課長補佐(第二係長)	山磨 康平
文化財保護主任	澤山 孝之(調査担当)
文化財保護主事	杉山 一雄(調査担当)

### 平成14年度

岡山県教育委員会	
教育長	宮野 正司
岡山県教育庁	
教育次長	三浦 一男
文化課	
課長	西山 猛
課長代理	宮田 正彦
課長代理(埋蔵文化財係長)	松本 和男
文化財保護主任	尾上 元規
主事	浜原 浩司
岡山県古代吉備文化財センター	
所長	正岡 睦夫
次長	藤川 洋二
〈総務課〉	
課長	安西 正則
課長補佐(総務係長)	田中 秀樹
主任	小坂 文男
〈調査第三課〉	
課長	柳瀬 昭彦
課長補佐(第二係長)	山磨 康平
文化財保護主査	澤山 孝之(調査担当)
文化財保護主事	杉山 一雄
	(調査・報告書担当)

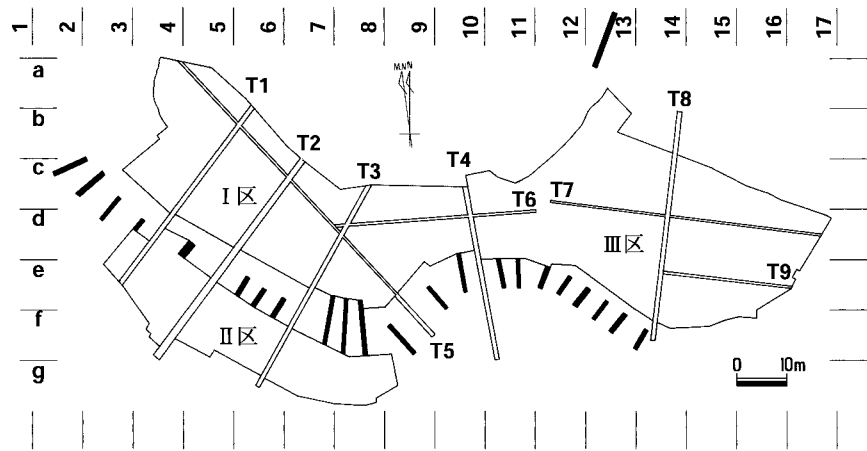
### 協力者

池上 博(岡山県久世町教育委員会)・小田切五白馬・河本 清(くらしき作陽大学)・高垣陽子(鳥取県埋蔵文化財センター)・野田真弓(同)・山栴雅美(同)〈五十音順、敬称略〉



## 第4節 報告書作成の経過と方法

報告書の作成は、調査終了後の平成14年7月1日から平成15年3月31日までの期間で、調査員1名が担当し、文化財センターにおいて行った。出土遺物はコンテナ90箱で、このうち遺構に伴うものは約半数を占め、大半が尾根上部の流出土と弥生時代の排出土からの出土である。



第3図 調査区設定及びトレンチ配置 (1/1,500)

報告書の構成は、本報告書中では遺構の種別毎に連番とし、尾根上調査区（I・III区）と斜面調査区（II区）に大別して、それぞれで遺構・遺物の説明を行った。また、遺構・包含層の位置は、日本測地系に準拠し、遺跡全体に10mのグリッドを組み、国土座標のX=-90,640をaとして南へb・c・・・とし、Y=-60,550を1として東へ2・3・・・とし、北西優位のグリッド名で「1a区」などと表記した。

遺物は、土製品・石器と金属器が若干あるものの土器が主体である。土器については斜面の上下で接合作業を行ったが、接合できた遺物は皆無であった。また、吉備南部産や山陰系など在地以外の土器が多くみられたので、器形から推測される産地との整合性を確認するため、掲載した土器について胎土分析を依頼した。石器についても肉眼同定を依頼して材の同定につとめた。

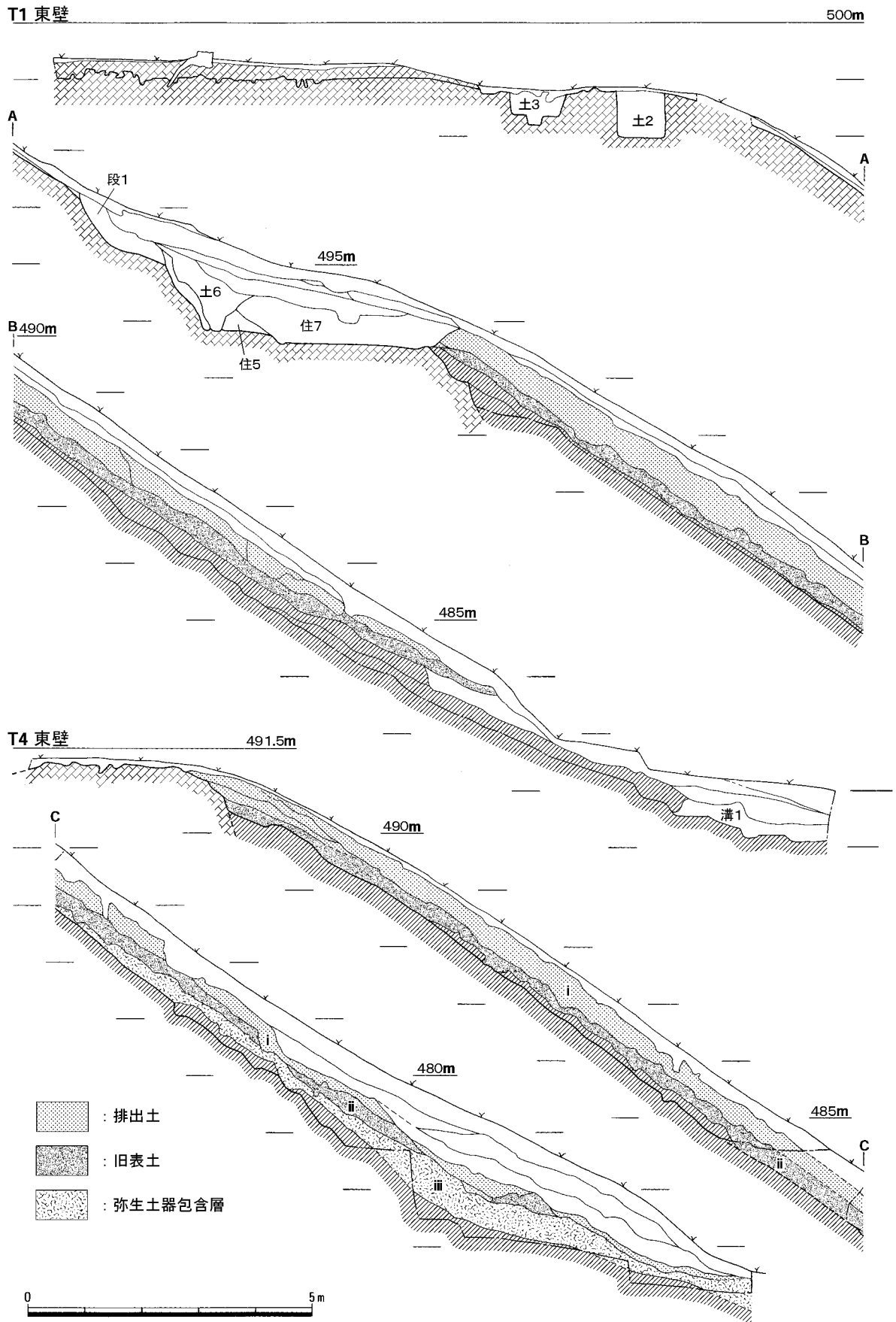
## 第5節 確認調査の概要と基本土層

調査対象である尾根線に直交するように設定したT1～T4・T8の掘削の結果、対象区全域に弥生時代後期から古墳時代前期の遺構が存在し、III区についてのみ中世に山城が築城されていることが明らかになった。第4図にI・II区に設定したT1・T4の土層断面を示した。

T1ではI区頂部平坦面からII区までの土層堆積を示す。頂部には表土層と基盤層の間に一層みられるが、これは植物の根による媒乱土で、弥生時代には上面が大きく削平されている。また、斜面には旧表土直上に排出土があり、これを基盤として竪穴住居7が築かれていることが分かる。

T4ではI区とIII区間の谷部堆積状況を示す。第1層はT1の旧表土に近似しているが、この下の第1層中にも弥生時代後期後葉の土器が含まれる。このことから第1層が竪穴住居14～18、第1層が竪穴住居13を掘削する際に排出された土砂と推察される。

T1・T2の両土層断面共に、弥生時代の排出土上に山城築城時の排出土が確認できないことがみて取れ、斜面もこれらの排出土によって形成された斜度が踏襲されていることが分かる。



第4図 確認トレンチT1・T4基本土層断面 (1/100)

## 第3章 小坂向城山城跡

### 第1節 調査の概要

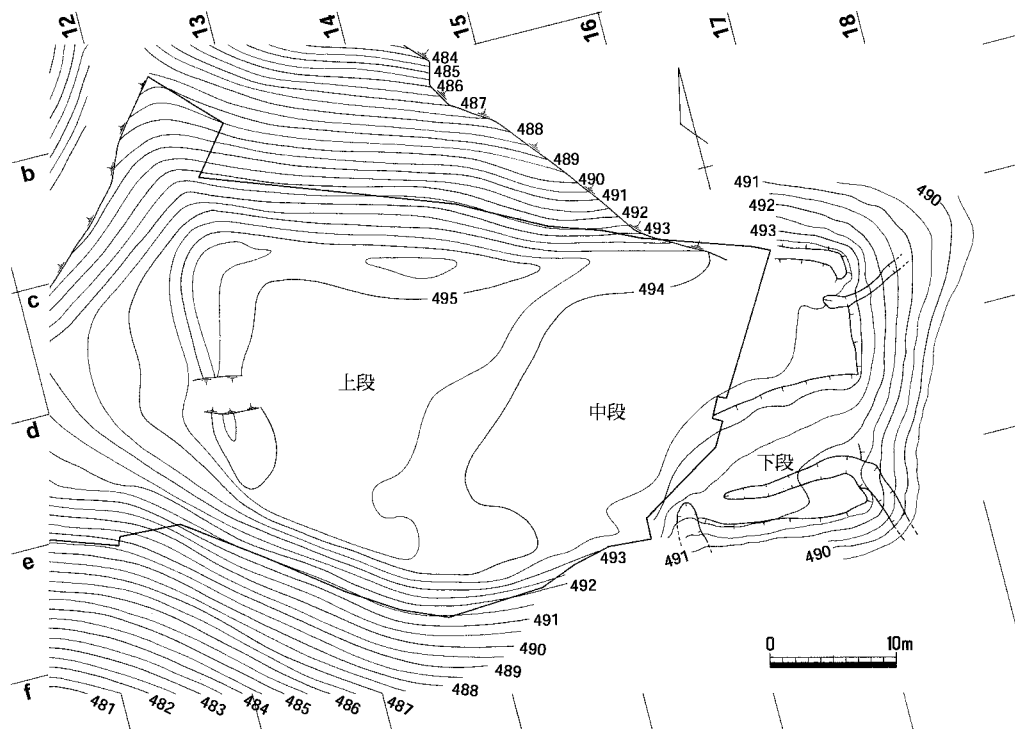
当初は尾根上全域を城域と考えていたが、斜面部の確認トレンチと3～10区を調査した結果、11～16区の土塁に囲まれた空間のみが、中世以降の地形改変を受けていることが明確となった。したがって、調査区外を含めて土塁に囲まれた約676㎡が城域として機能した郭面と判断される。調査は、土塁を縦断するA－B並びにC－Dトレンチを設定して、流土と造成土を分別し、掘り下げを行った。その結果、土塁内を北西から南東に傾斜した三段の平坦面に加工し、削平した土砂で土塁を築いていることが明らかになった。しかし、時期については、古代以降の出土遺物が皆無いため詳細は不明だが、遺跡の立地と土塁の構築状況から室町時代後期頃と考えている。

以後、郭面の西側上位から上段・中段・下段、土塁はそれらの位置から北土塁・西土塁・南土塁と呼称し説明していく。

### 第2節 遺構

郭面（第5～7図、図版1－2、2－1・2）

調査前の地形測量では土塁外の西側にも平坦面が認められたが、この面については下位に竪穴住居



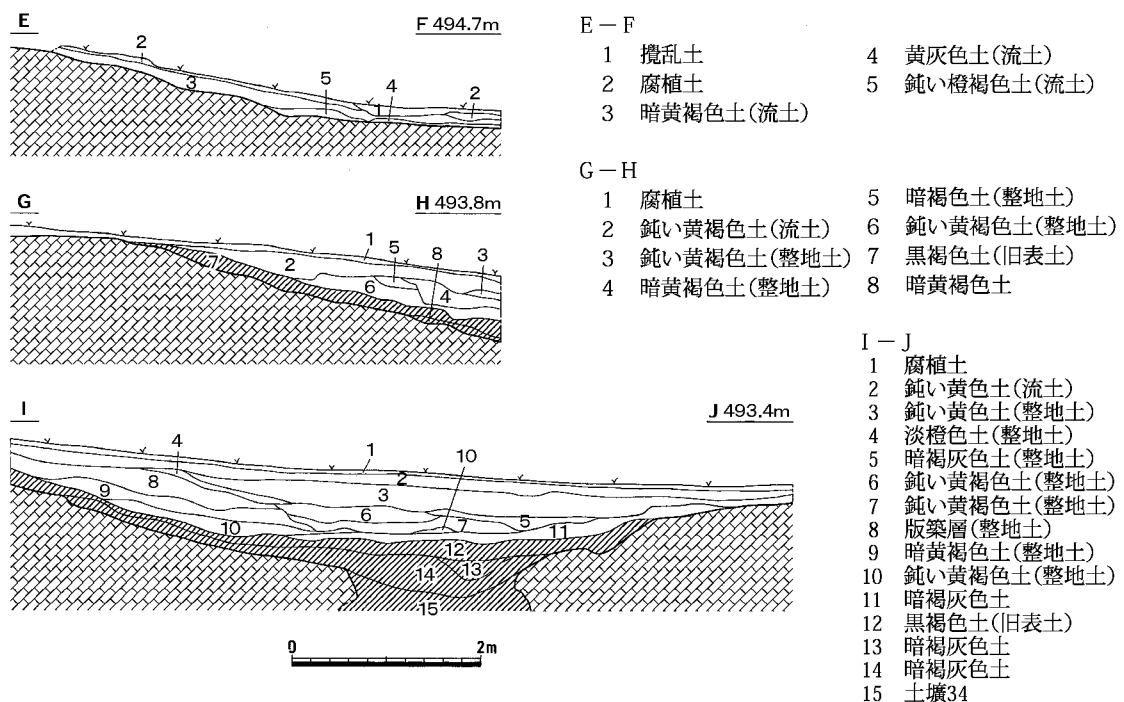
第5図 調査前地形測量 (1/600)

19・20が存在し、その覆土に後世の削平を受けた痕跡がみられないことから、自然地形と判断でき、西土塁がもともと閉塞していたことから郭面として利用していないと考えられる。土塁内は、E-F断面で示したように上段から中段は地山を削平して平坦面を造っており、上段が253㎡、中段が365.7㎡、その段差は約50cmである。この段差は北側では明確に検出できるが、南土塁の裾から約4.5m幅ではスロープ状になり不明瞭であることから、通路としての機能が想定される。また、中段から下段にかけてG-H・I-J断面に示したように、旧表土上に固く締まった押し出された土砂が確認できる。この土砂は、部分的に版築が確認されることから、下段は押し出し土で整地していると考えられ、下段の面積は57.5㎡である。郭面は現状で、盛土などの流出土が約15～20cmの厚さで堆積していたが、流土を除去する際などに遺物や礎石などはみられず柱穴や溝などの施設も確認されなかった。土塁（第5・7・8図、図版2-3・4）

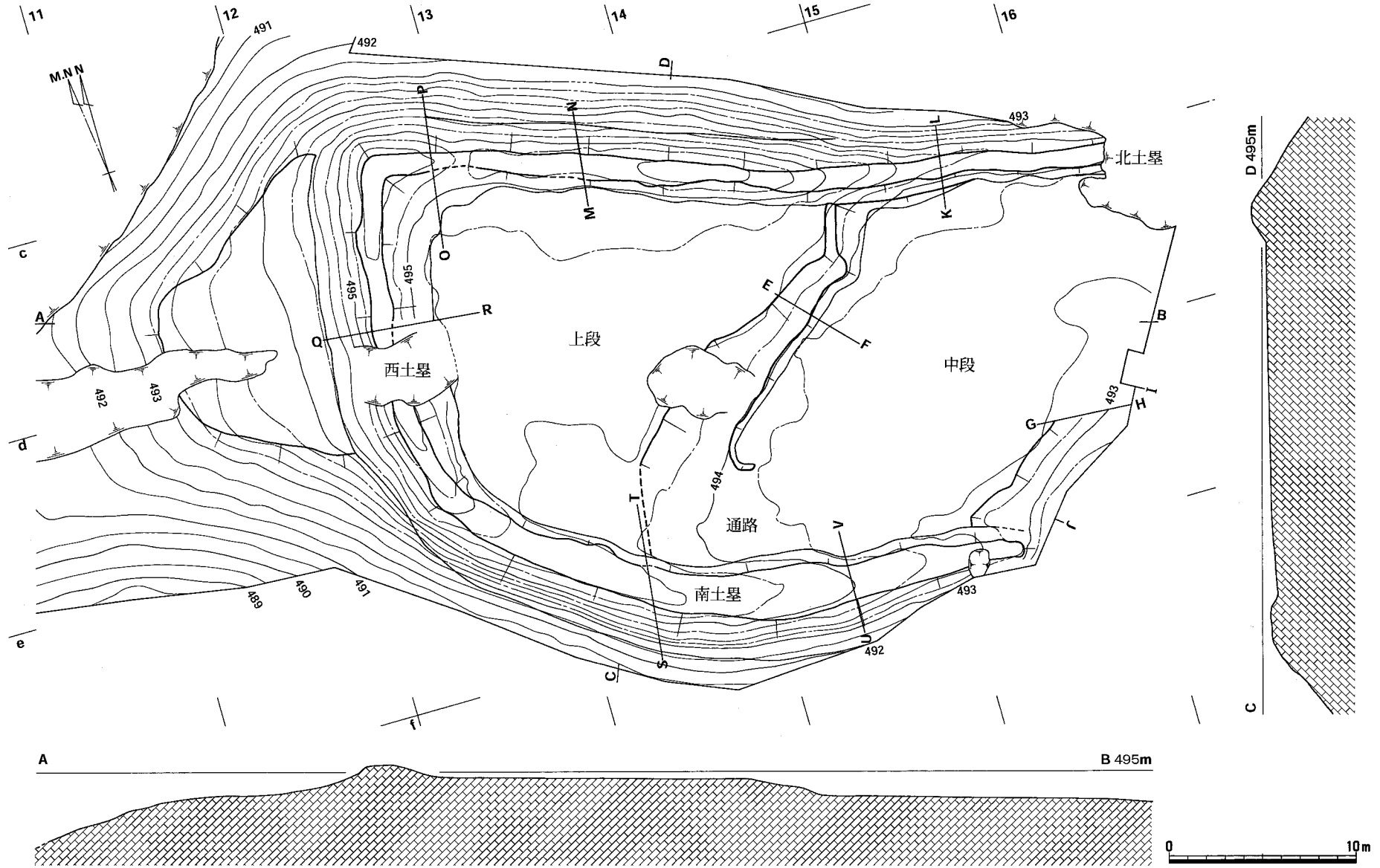
調査区内には北・西・南にしかないが、東土塁も調査区外の中段にのみ存在する。

北土塁はK-L・M-N断面に示した。K-L断面の第7層、M-N断面の第5層は旧表土で、この上に地山ブロックを多く含む掘削土を盛り上げており、部分的に版築がみられる。高さは現状で約50cmを測り、斜面側の斜度は上段で30°、中段で42°とやや緩やかだが、尾根の北斜面自体の斜度は50°以上の急傾斜をなして谷底にいたる。

西土塁はO-P・Q-R断面に示した。O-P断面では、第6・7層を北土塁と同様に盛り上げたのち、粘性の高い第2～5層を内側に貼り、その上で第1層で被覆している。この状況は、Q-R断面の第8～11層土が第12～16層を盛ったのちに貼られていることから確認できる。また、O-P断面の旧表土にあたる第8層上面が、海拔約495mで削平を受けているが、Q-R断面では旧表土上にほぼ同じ高さまで第14～16層が盛られている。このことから西土塁は、旧地形を削平または整地した上で、本格的に盛土を行っていると思われる。土塁の高さは90cm前後と高く、斜度も外側で35°、内側で30°と非常に緩い傾斜を持つ。

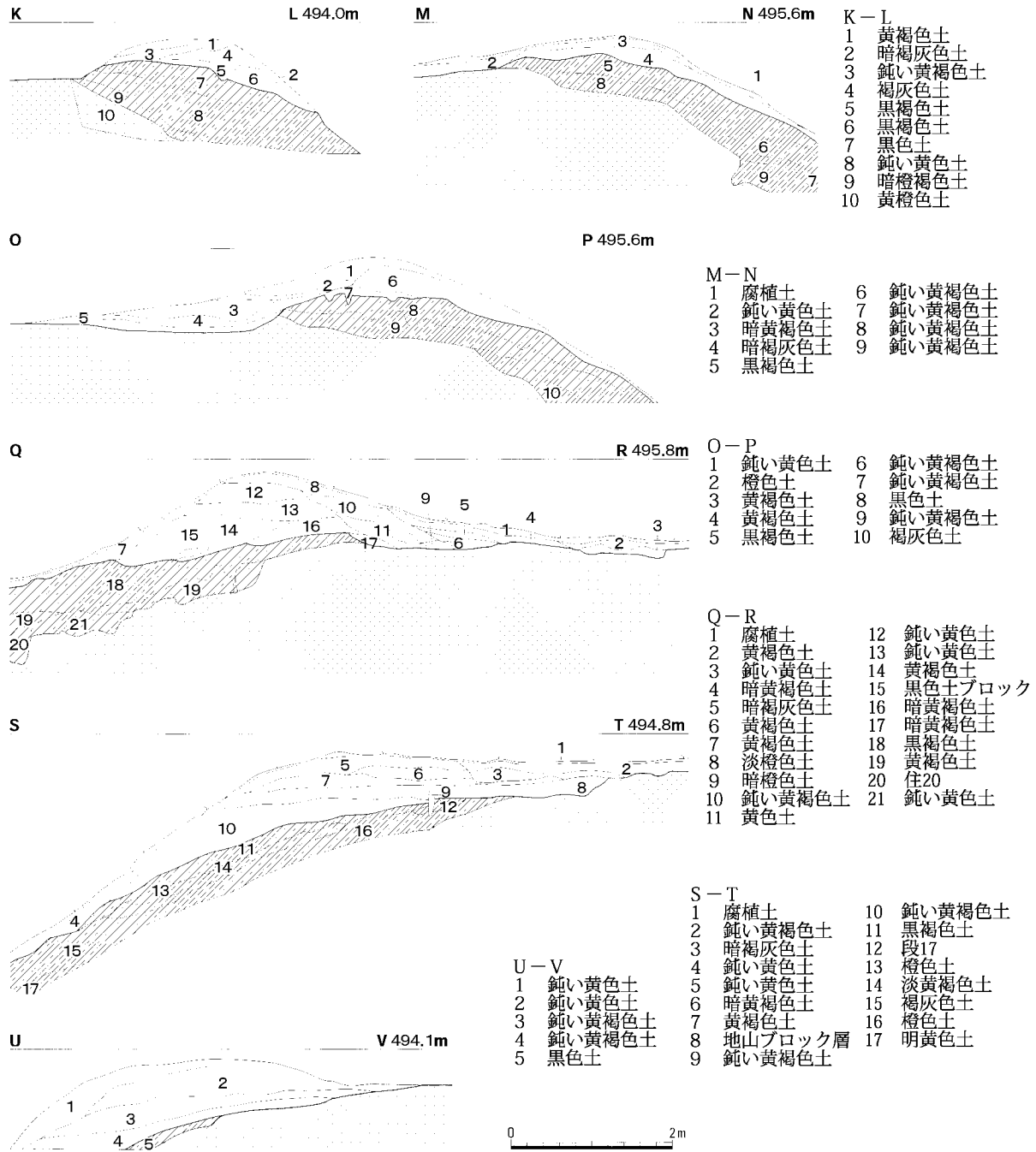


第6図 郭面土層断面 (1/80)



第7図 調査後地形測量及び断面位置 (1/300)

第3章 小坂向城山城跡



第8図 土塁土層断面 (1/80)

南土塁は、調査前の地形測量では高さ10cm弱であったが、S-T断面の観察結果から第2・3層が流土と判断されたことから、約30cmの盛土がなされていることが判明した。さらに旧表土の状況から、まず盛土の部分より少し広めに掘削し、第8・10層で内側の高さまで地固めを行い、その上に第5～7層を水平に盛り上げている。この状況はU-V断面でも確認でき、第3・4層が整地土層で、第1・2層が盛土にあたる。

全体に土塁盛土の流出が激しく、また、植物の影響などで上面や裾で杭や柱穴といった塀もしくは柵などの施設は確認できなかった。

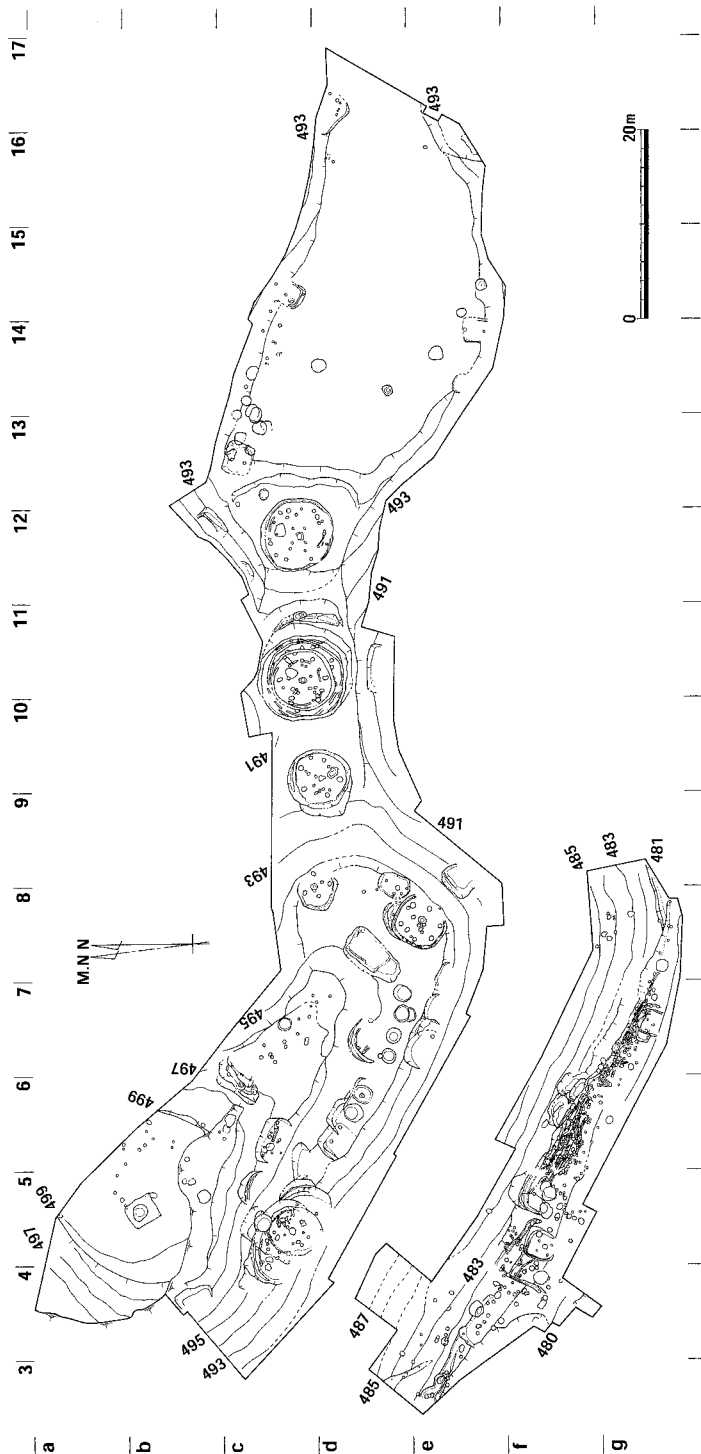
## 第4章 ヒロダン・小坂向遺跡

### 第1節 調査の概要

本遺跡は、第2章で述べたように斜面に設定して行ったトレンチ調査の結果、斜面中腹には遺物包含層が存在するのみで遺構は確認されなかった。従って、ここでは遺構のある尾根上調査区と斜面調査区に分けて検出した遺構について述べていく。

尾根上調査区では大きくは弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉の遺構が連続と確認され、一時断絶があつて古墳時代後期以降の土壇2基が築かれる。前者の時期の遺構としては、竪穴住居26軒、段状遺構17基、土壇34基がある。山城跡が存在した12～16区では築城時に大きく削平を受けているが、本来はこの地点にも竪穴住居などが存在したことは想像に難くない。しかし、遺構相互ではあまり顕著な切り合い関係を持っておらず、尾根上の空間利用に一定の規制が存在するようである。

それに対して斜面調査区では、ほぼ同時期でありながら、竪穴住居2軒、段状遺構11基以上、土壇11基、溝4条などが非常に密集した状態で、遺構規模も小さく、斜面上とは異なった状況を示している。(杉山)



第9図 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構配置 (1/800)

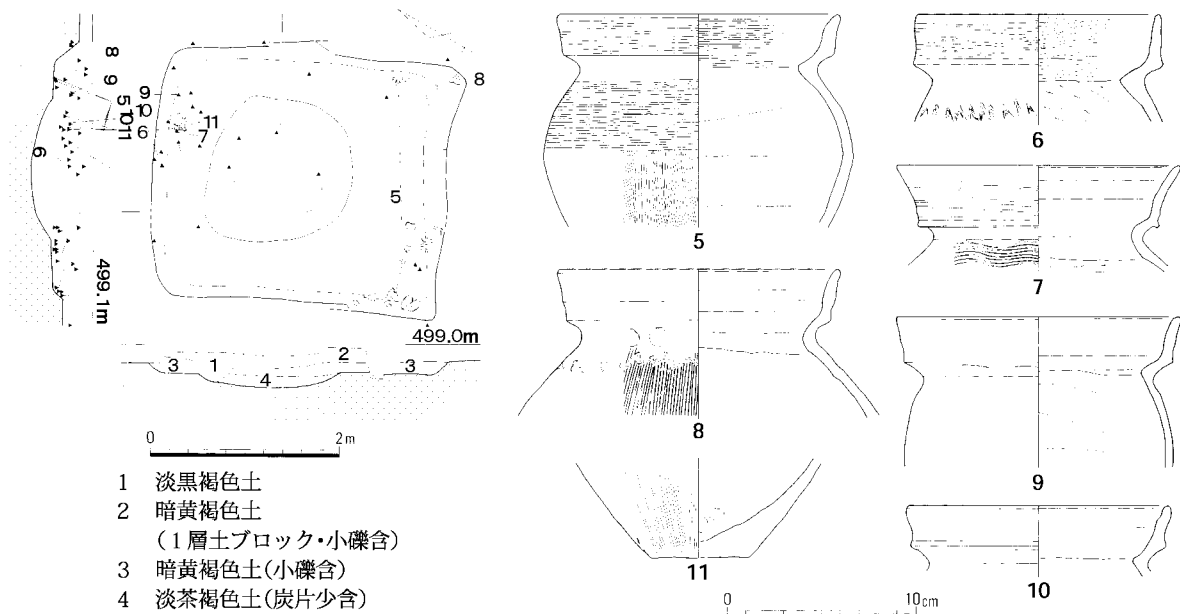
## 第2節 尾根上調査区の概要

### (1) 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

#### 1 竪穴住居

##### 竪穴住居 1 (第10・11図、図版4・7)

4 b区北側中央の現状では平坦面である尾根頂部に位置する。柱構造は確認できなかった。床面中央下では炭片を含む皿状の窪みが検出されたが、性格は判然としない。遺物は第3層の床面南・北隅を中心に出土している。甕5は口径14.8cmを測り、外・内面口縁部はハケメを行う。甕6は口径12.8cmで、外面は波状文とハケメ、内面口縁部はヘラミガキを行う。甕7は口径14.8cmで、外面は波状文とハケメ、内面口縁部はヨコナデを行う。甕8は口径14.7cmで、外面胴部はハケメ後波状文、内外面口縁部はヨコナデを行う。甕9は口径14.9cmで、口縁部内外面はヨコナデを行う。甕10は口径13.7cmで、外面および内面口縁部にヨコナデを行う。甕11は底径5.1cmで平底である。また、甕5～11の内面胴部にはヘラケズリがみられる。時期は弥生後期末葉と思われる。(澤山)



第10図 竪穴住居 1 (1/80)・出土遺物 (1/4)

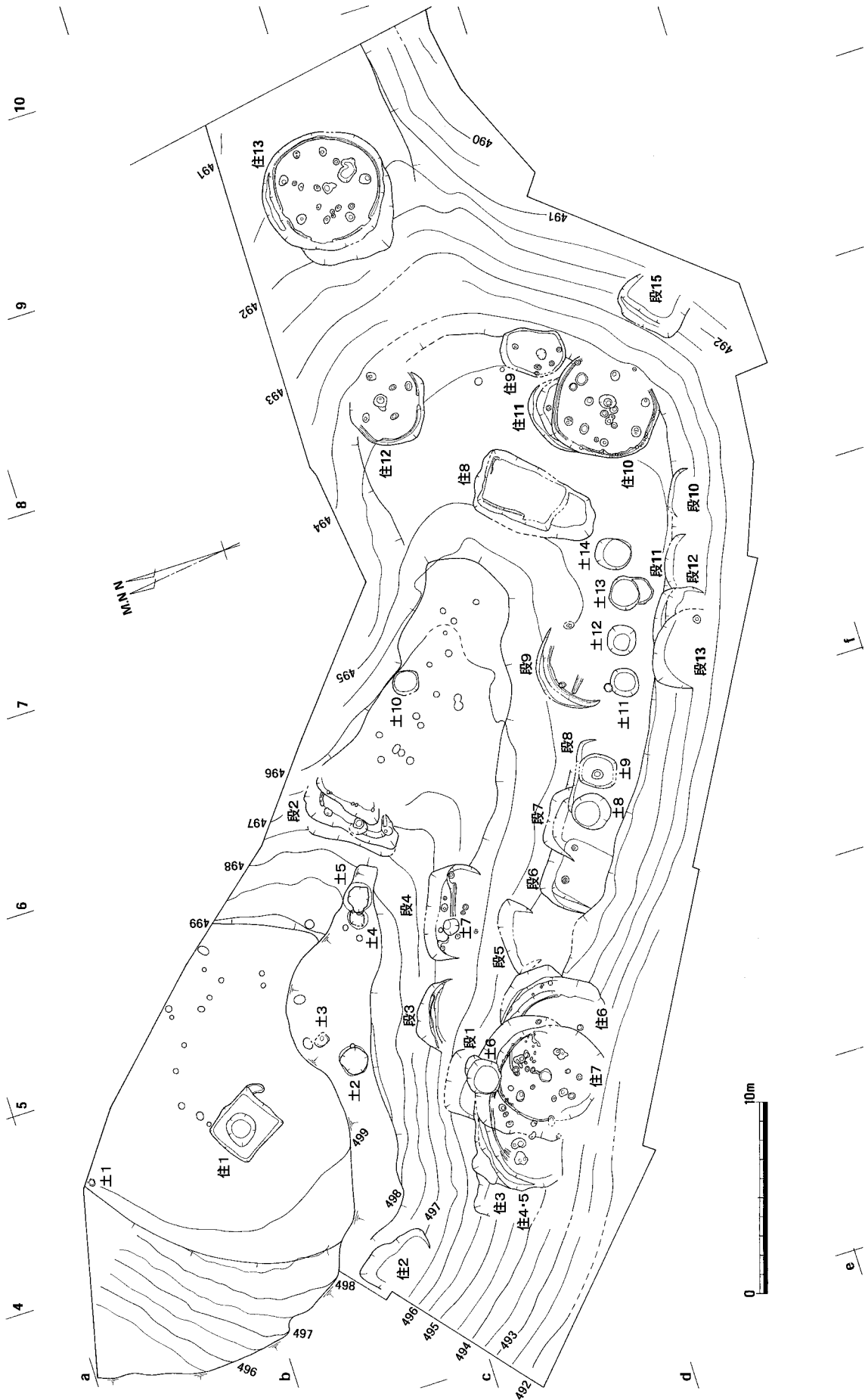
##### 竪穴住居 2 (第11・13図)

3 b区の尾根が西に回り込む南斜面に位置する。埋土は2層に分層されるが、遺物は第1層土に含まれる。床面には焼土塊がみられるが、炭の散布は確認できない。出土遺物は、弥生土器の壺12、甕13～16、円板充填を行う高杯17・18がある。12は上位の肩口で出土した流入品である。14・15の口縁部はヨコナデを行う。時期は、弥生後期後葉頃と判断される。(杉山)

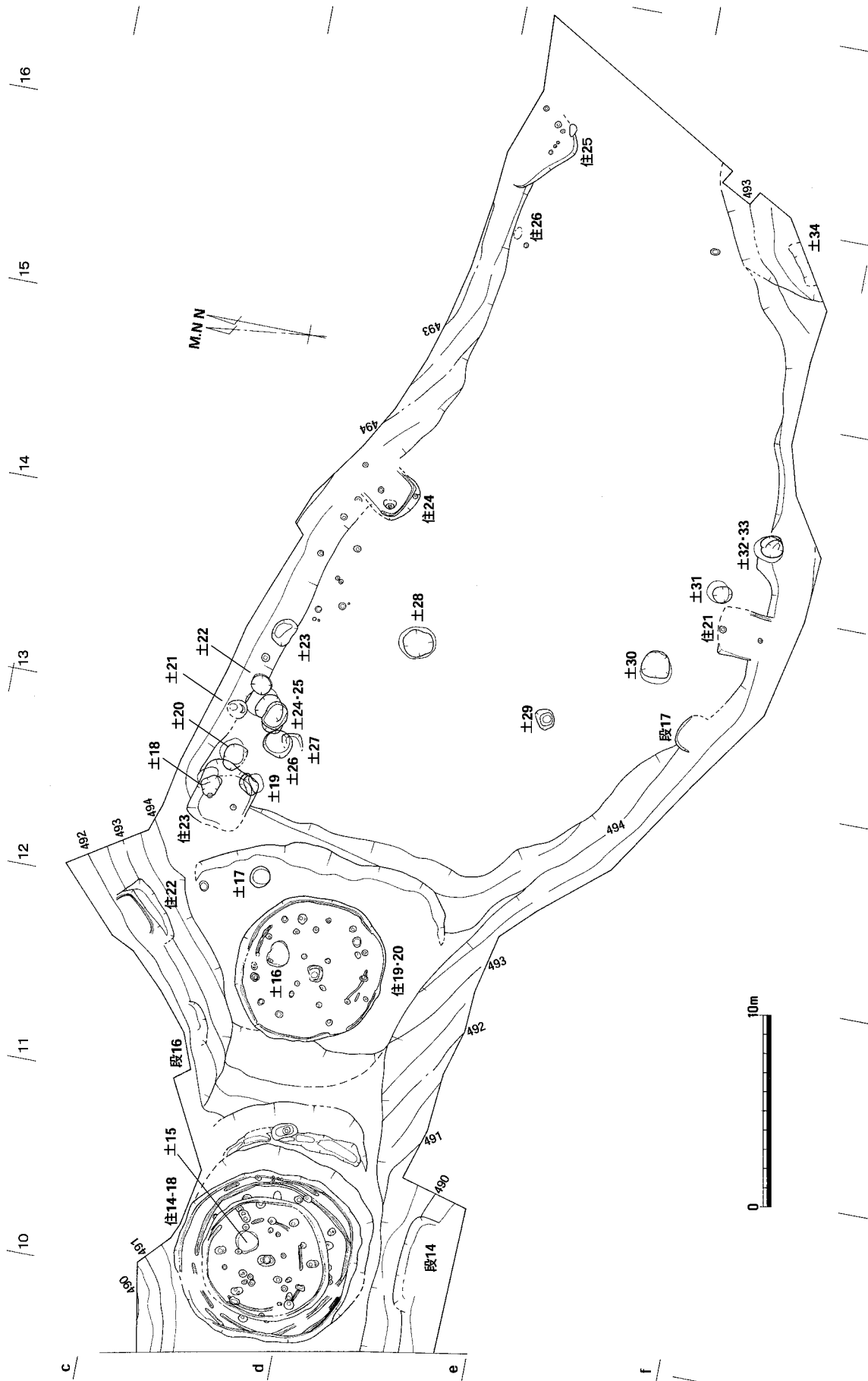
##### 竪穴住居 3～7 (第11・15図、図版4)

3・4 c d区の谷部に位置する住居群で、土層断面の切り合い関係から7が最新で、3と段状遺構

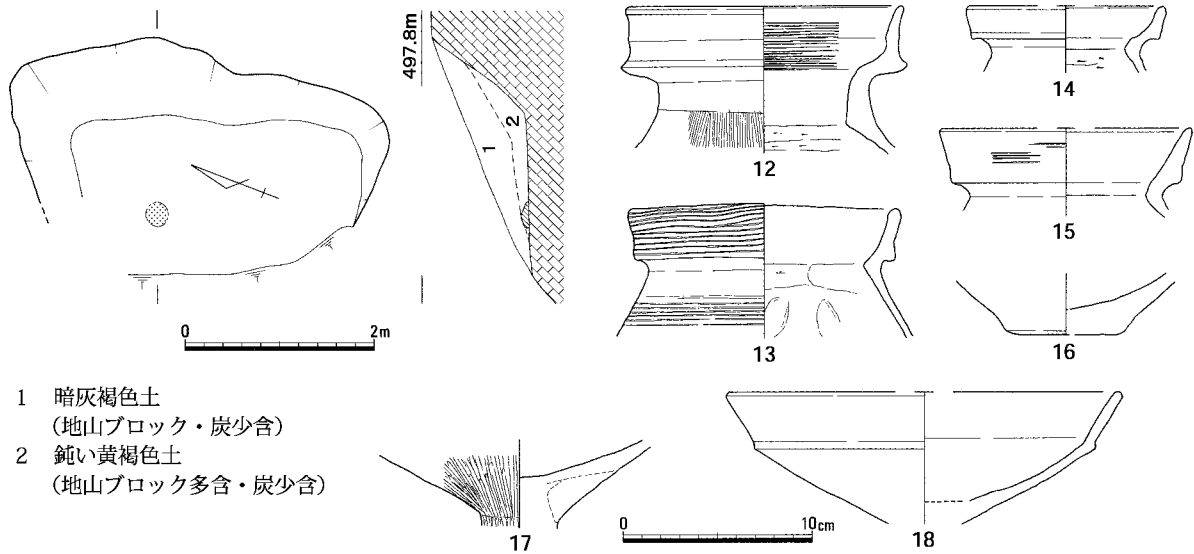




第11図 尾根上調査区 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構配置① (1/300)



第12図 尾根上調査区 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構配置② (1/300)



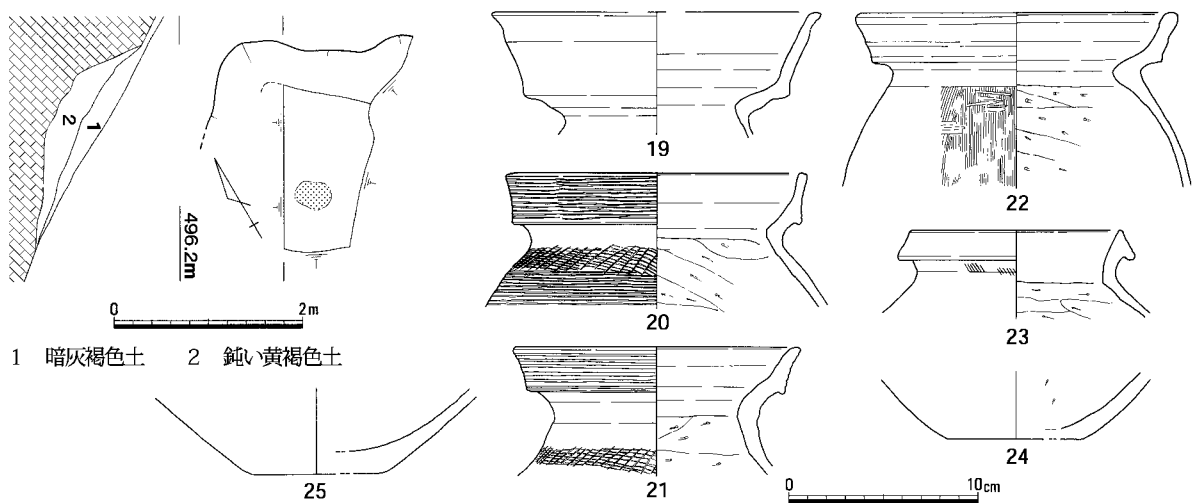
- 1 暗灰褐色土  
(地山ブロック・炭少含)
- 2 鈍い黄褐色土  
(地山ブロック多含・炭少含)

第13図 竪穴住居2 (1/80)・出土遺物 (1/4)

1が最古である。4～6については、支柱穴の本数から4→5→6の順に新しくなると判断される。A-B断面では、4～6の埋土に地山ブロックが多少の差はあれ、非常に目立つことから、人為的な埋め戻しと考えられる。次にC-D断面では、第16層が弥生後期中葉～後葉の土器を含む整地層であることから、斜面を埋め立てた後にこれらの住居を築いたと判断される。また、第8・9層が段状の掘りこみがなされたような堆積状況を示すが、平面では検出できなかった。しかし、この対応層中から壺46が潰れた状態で出土し、これより下位の第13層対応層には地山ブロックが多く含まれることから、本来は段状遺構か住居が存在した可能性はある。(杉山)

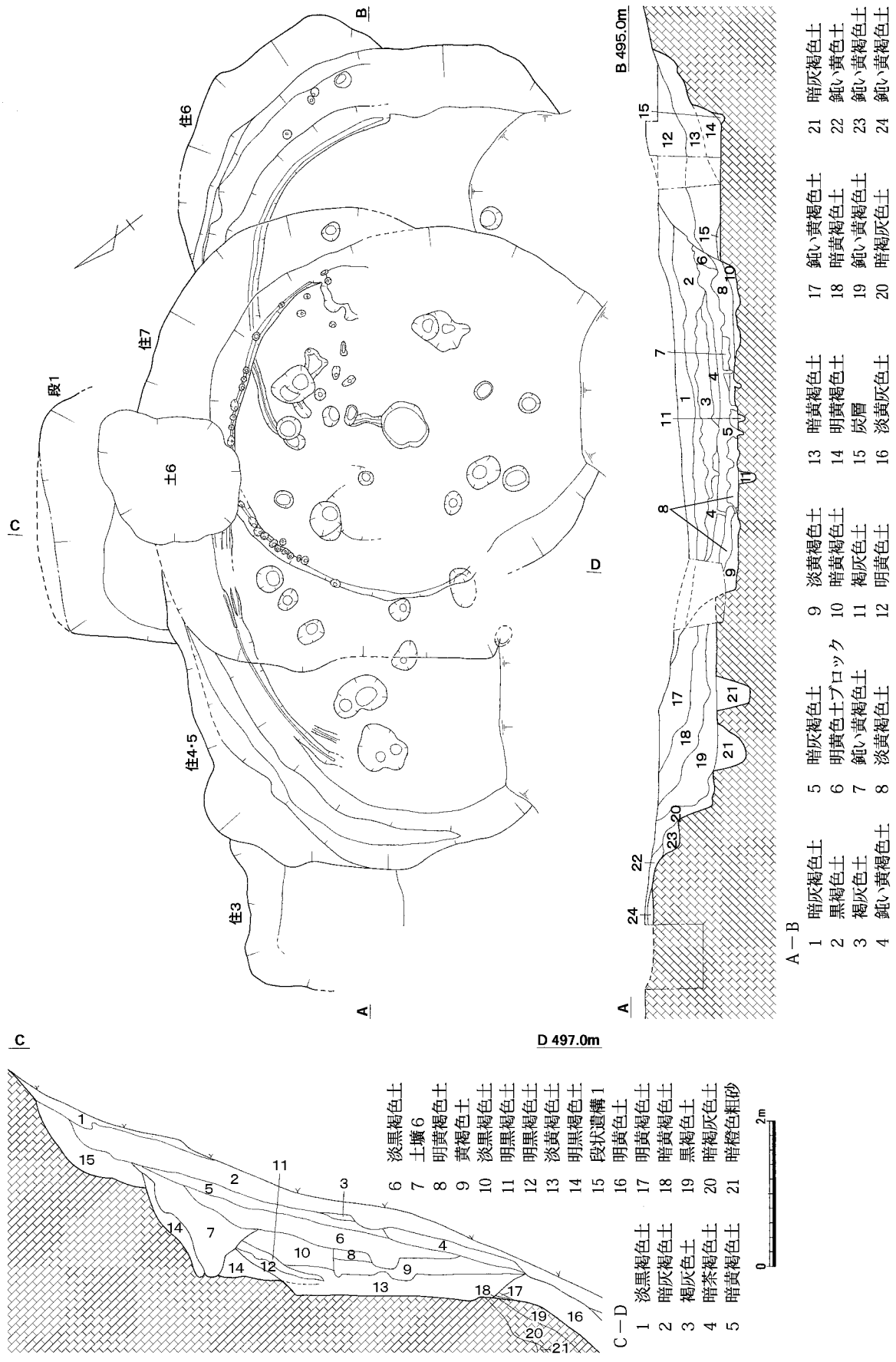
竪穴住居3 (第11・14・15図、図版4・7)

北西隅が検出できたのみで、柱穴や壁体溝は存在しない。床面には焼土と炭の散布がみられるが、被熱は明瞭でない。遺物は甕23～25が埋土中出土で、23・24は胎土から同一個体と判断される。その他は床面より斜面下位の流土から出土したが、出土位置から本遺構からの転落品の可能性が高い。19・21は壺、20・22は甕である。22の肩部外面にはタテハケメの後横方向のミガキを施し、口縁部はヨコナデを行う。時期は、出土土器と切り合い関係から弥生後期後葉と考えられる。(杉山)



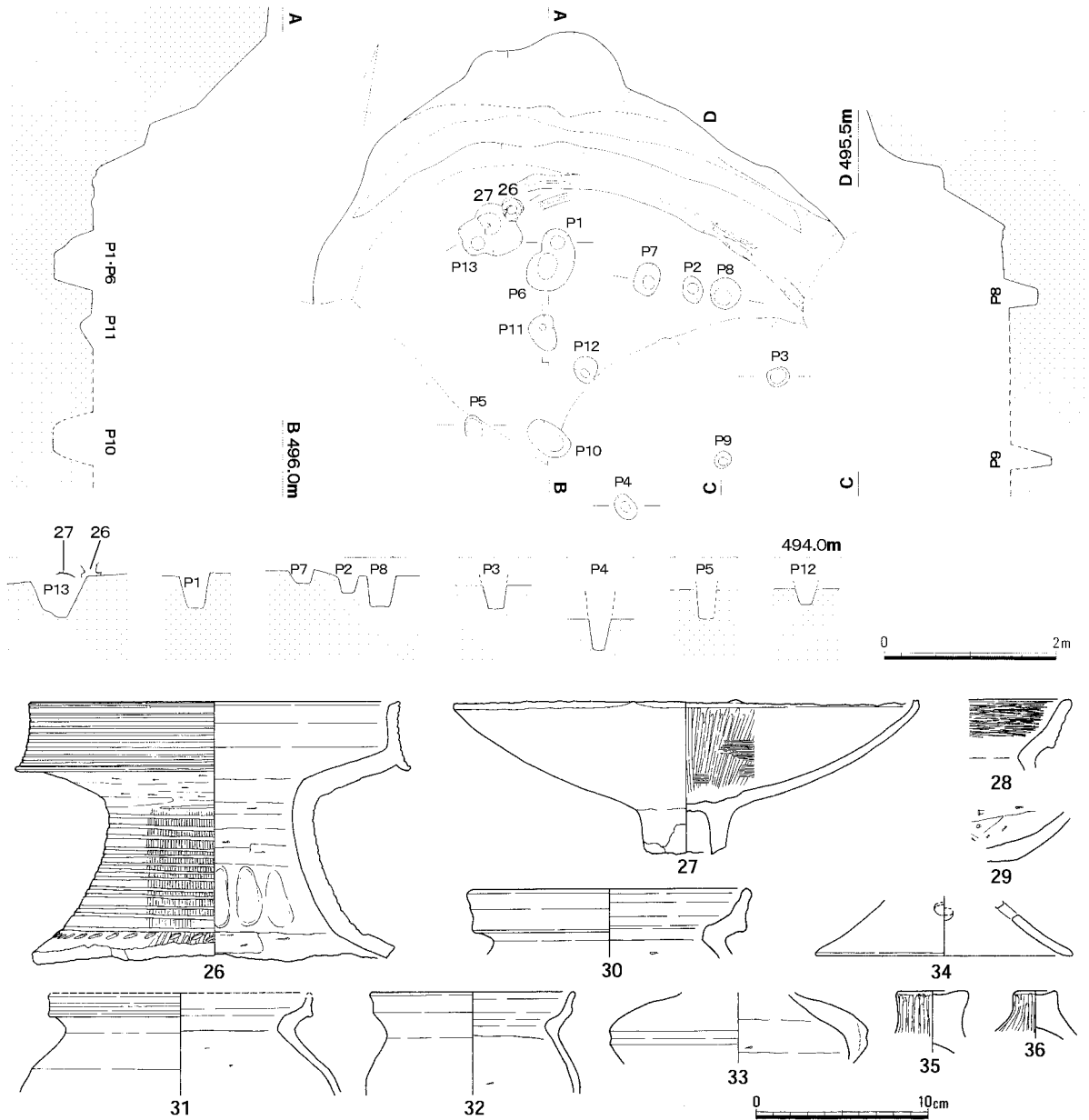
- 1 暗灰褐色土
- 2 鈍い黄褐色土

第14図 竪穴住居3 (1/80)・出土遺物 (1/4)

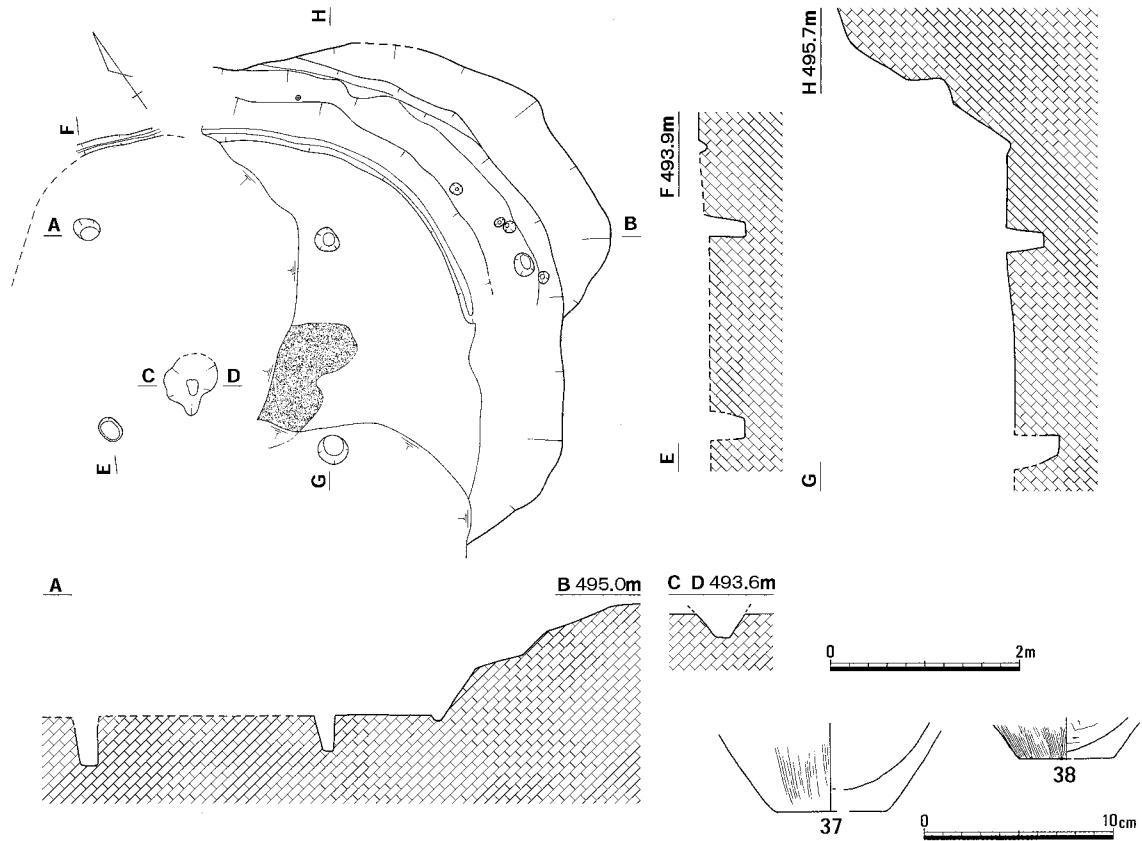


竪穴住居4・5（第11・15・16図、図版4・7）

北西肩部のみが残存しており、北壁部には床面から約60cmの高さに地山を抉るように柵状のテラスがある。床面には2条の壁体溝とピット13基があり、ピットの深さと位置から推測して4がP1～P5、5がP6～P10の5本柱と判断される。P13の上面に26・27が倒立して置かれていることから、P13は住居4の時期に使用されたと推察される。遺物は、壺転用器台26と高杯転用蓋27、壺片28・29が床面から、甕30～32と高杯脚34が柵状のテラスから、直口壺33、蓋35・36が埋土中から出土した。26は口縁拡張部と頸部に沈線が巡り、頸部裾には刺突文を施す。口縁部内・外面と頸部外面には赤色顔料が塗布されるが、口縁部の下端から外反部外面は塗布後にヘラケズリを行っている。他の土器に比して焼成が良く、調整・施文も丁寧で一見特殊壺を想起させるが、胎土に角閃石が明瞭には含まれないことから、近隣で製作されたものと考えられる。鈍い黄橙色を呈した27は、内面に煤の付着が看取される。時期は土器から弥生後期末葉と判断される。（杉山）



第16図 竪穴住居4・5（1/80）・出土遺物（1/4）



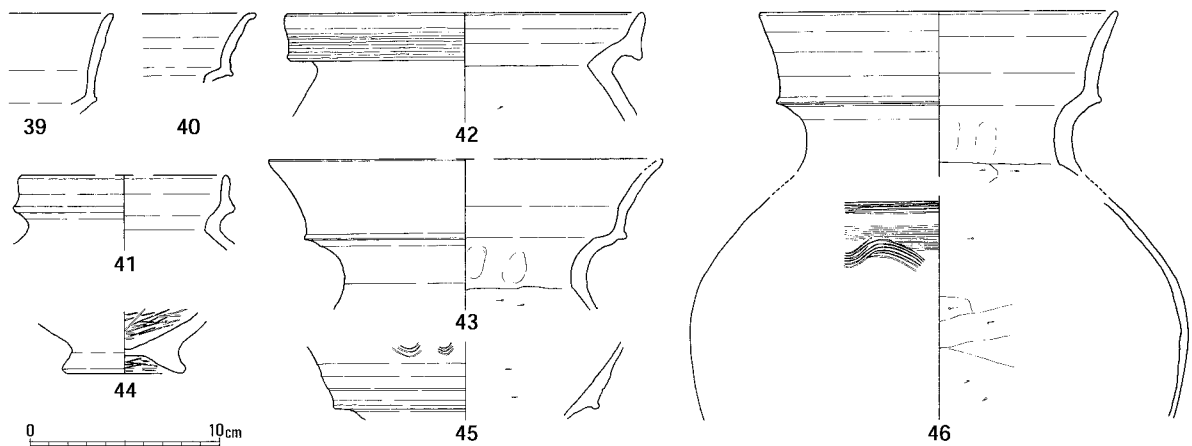
第17図 竪穴住居6 (1/80)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居6 (第11・15・17図、図版4)

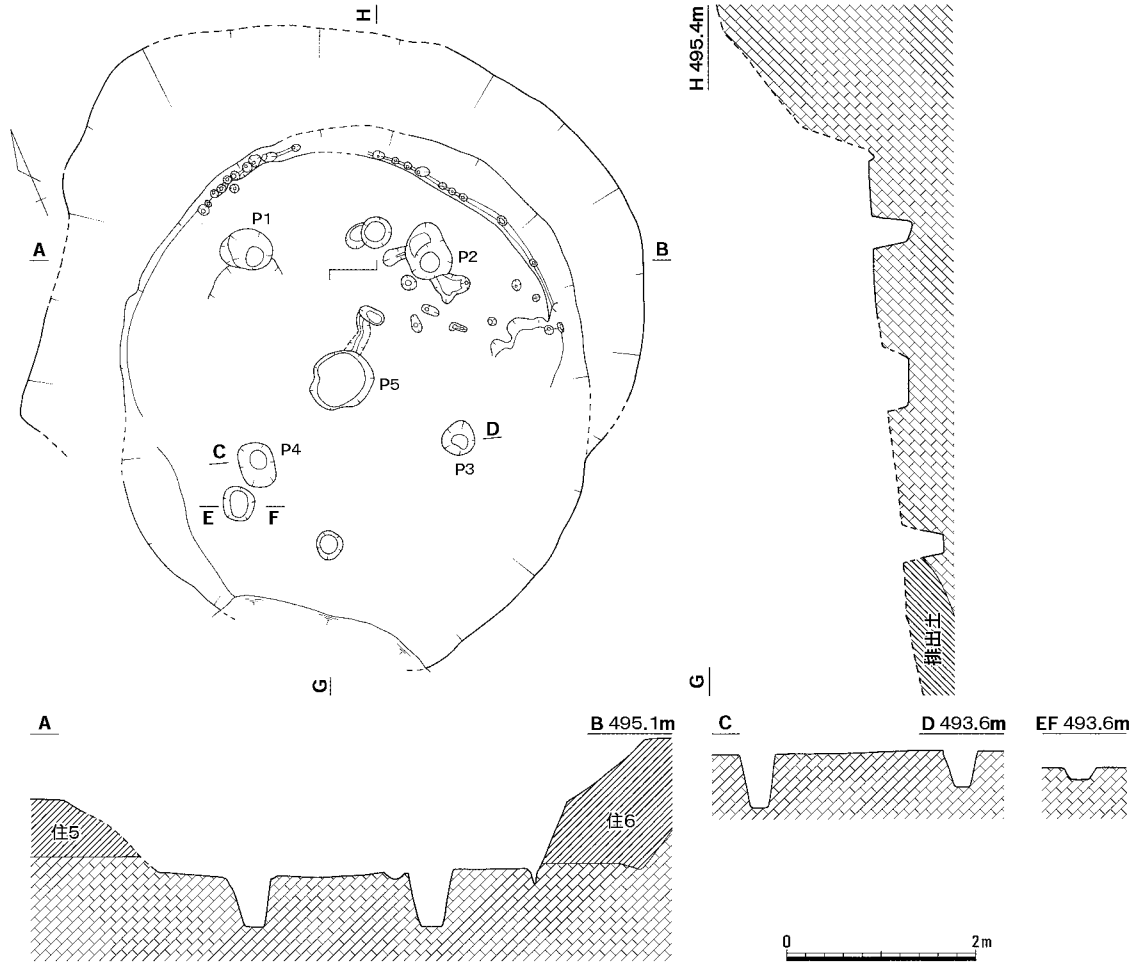
北から東のみを検出した壁面には、床から約60cmの高さに壁面を扶るよう棚状のテラスがある。床面には4本の柱穴と、中央に炭の散布と炭を多く含んだ中央穴があり、壁際に壁体溝が巡る。出土遺物は埋土中に僅かに弥生土器の小片があり、37・38は外面にタテハケメのある甕の底部である。時期は、遺構の相互関係から弥生後期末葉頃と推察される。(杉山)

竪穴住居7 (第11・15・18・19図、図版4)

斜面下位の南側の壁のみ検出できていない。床面も南半は掘りすぎたため壁体溝の有無は不明である。床面には柱穴と北側の壁際には杭状の小ピットを持つ壁体溝がある。柱穴はその深さと位置から、



第18図 竪穴住居7 出土遺物 (1/4)



第19図 竪穴住居7 (1/80)

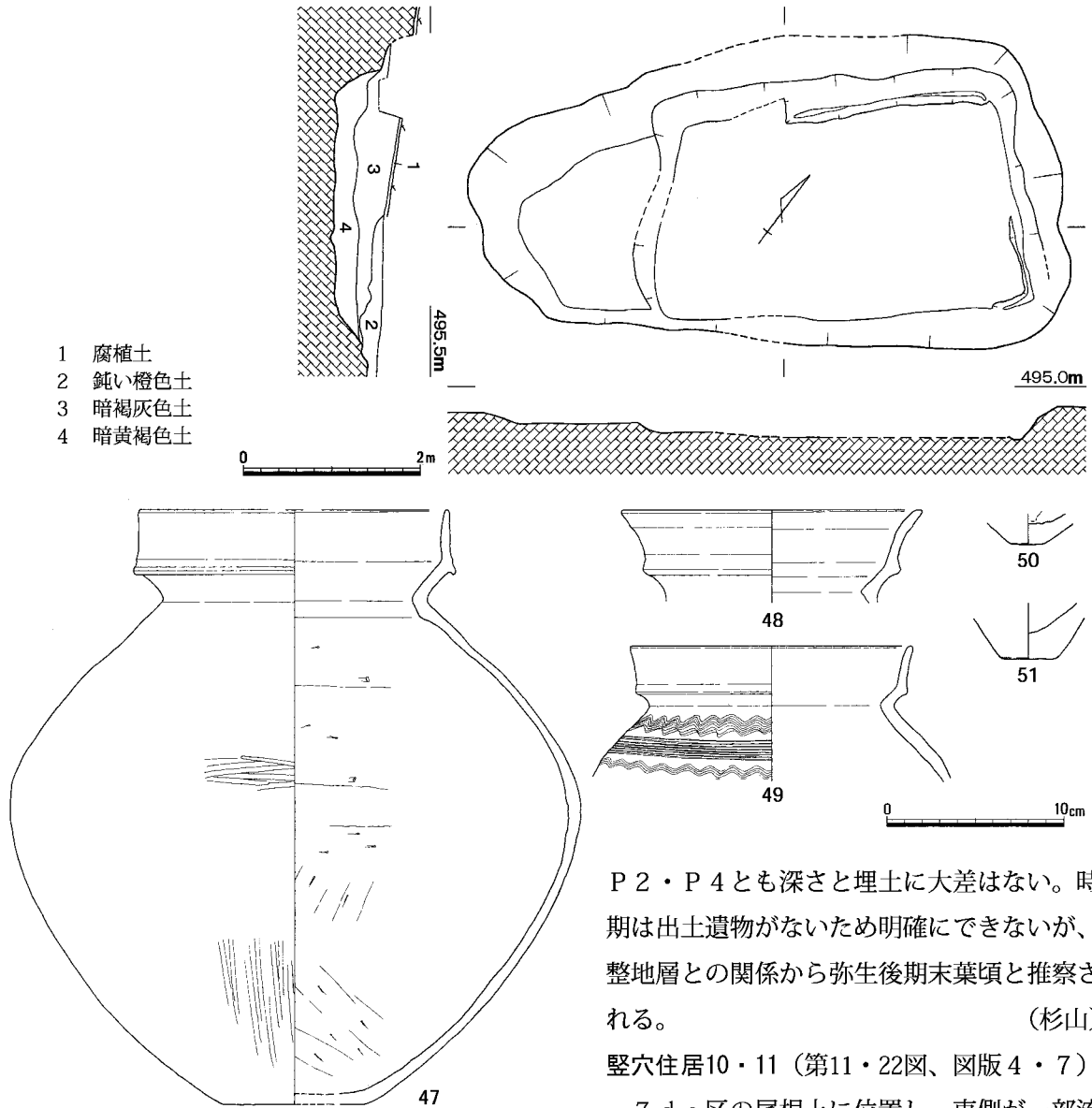
P 1～P 4が支柱穴でP 5が中央穴になると考えられるが、P 5には炭・焼土はまったく含まれていない。出土遺物は大半が埋土中で、壺39が床面、壺40・45と甕41・42・44が第15図A－B断面の第8～10層、壺43と甕46が第5層出土である。甕46の肩部外面には櫛状工具による平行線文と波状文が施文される。時期は下層出土遺物から、弥生後期末葉頃と推察される。(杉山)

竪穴住居8 (第11・20図、図版7)

7 d区の尾根中央に位置し、主軸を等高線に平行するようにとる。床面は北側が約10cm下がっており、南側はスロープ状に緩やかにあがる。北側の床面には壁体溝があるが、床面の大半を掘りすぎたため柱穴や被熱面は確認できていない。埋土は地山ブロックを含まず、北壁際の第3層中から壺47の破片がまとまって出土した。47は図上で完形復元した壺で、表面が剥落して調整は不明瞭だが口縁部はヨコナデを行い、胴部最大径付近の外面には横方向のミガキが看取される。壺48、甕49～51は第3層以下で出土し、48の外面には赤色顔料が塗布される。時期は弥生後期末葉と判断される。(杉山)

竪穴住居9 (第11・21図)

7・8 d区の東斜面に位置し、弥生後期後葉の土器を包含する整地層を基盤に持つ。床面中央南寄りに炭の入った皿状の窪みと被熱面、柱穴5基がある。窪み内と周辺の土は精密水洗を行ったが炭以外は含まれていなかった。また、柱穴の配置から、P 1とP 3の2本柱の構造をとると考えられるが、



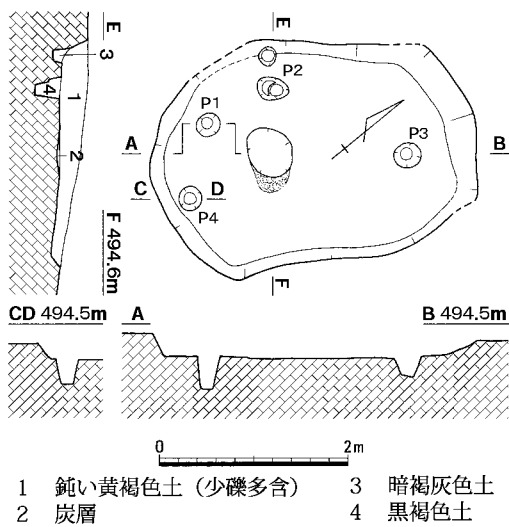
第20図 竪穴住居 8 (1/80)・出土遺物 (1/4)

P 2・P 4とも深さと埋土に大差はない。時期は出土遺物がないため明確にできないが、整地層との関係から弥生後期末葉頃と推察される。(杉山)

竪穴住居10・11 (第11・22図、図版4・7)

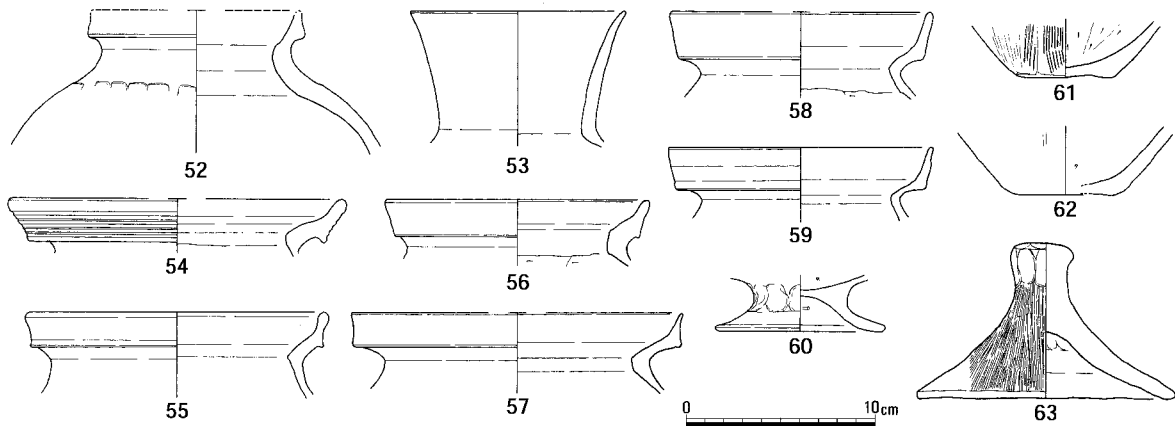
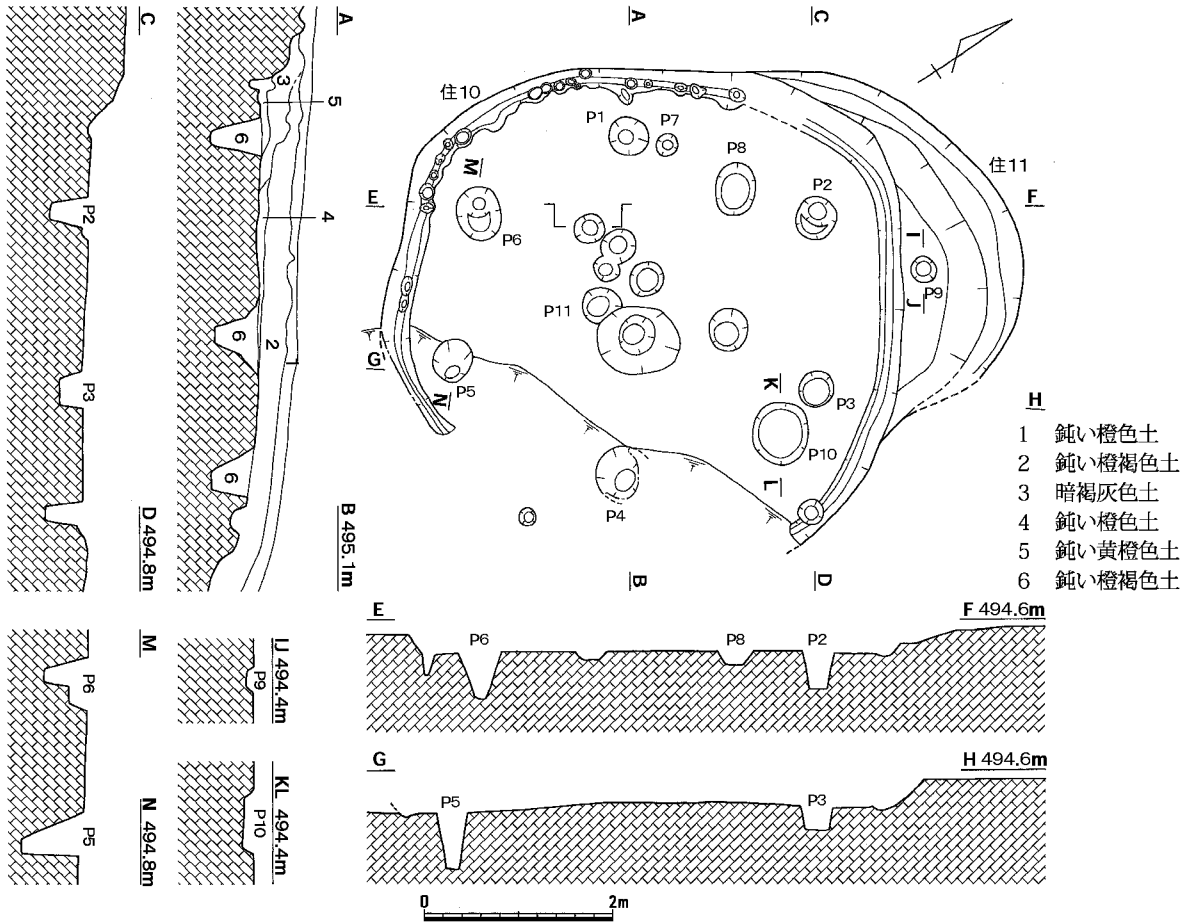
7 d e 区の尾根上に位置し、東側が一部流出している。床面には杭状のピットを持つ壁

体溝があり、中央には炭を含んだ中央穴があるものの明瞭な被熱面は確認できない。検出当初は一軒と考えていたが、壁体溝の状況から二軒が重複していると判断される。しかし、埋土に大きな差が認められないので、前後関係は土層では確認できていない。したがって、支柱穴のあり方から推測して、P 1～P 6の6本柱の南側の住居を古く10とし、P 7かP 8～P 11の4本柱の北側を新しく11として認識した。遺物は第2～4層の埋土から出土している。52・53は壺、54～62は甕、63は蓋である。54は口縁部に沈線が残り古い様相を示すが、その他の甕は確認できるものでヨコナデを行っている。時期は、出土遺



第21図 竪穴住居 9 (1/80)



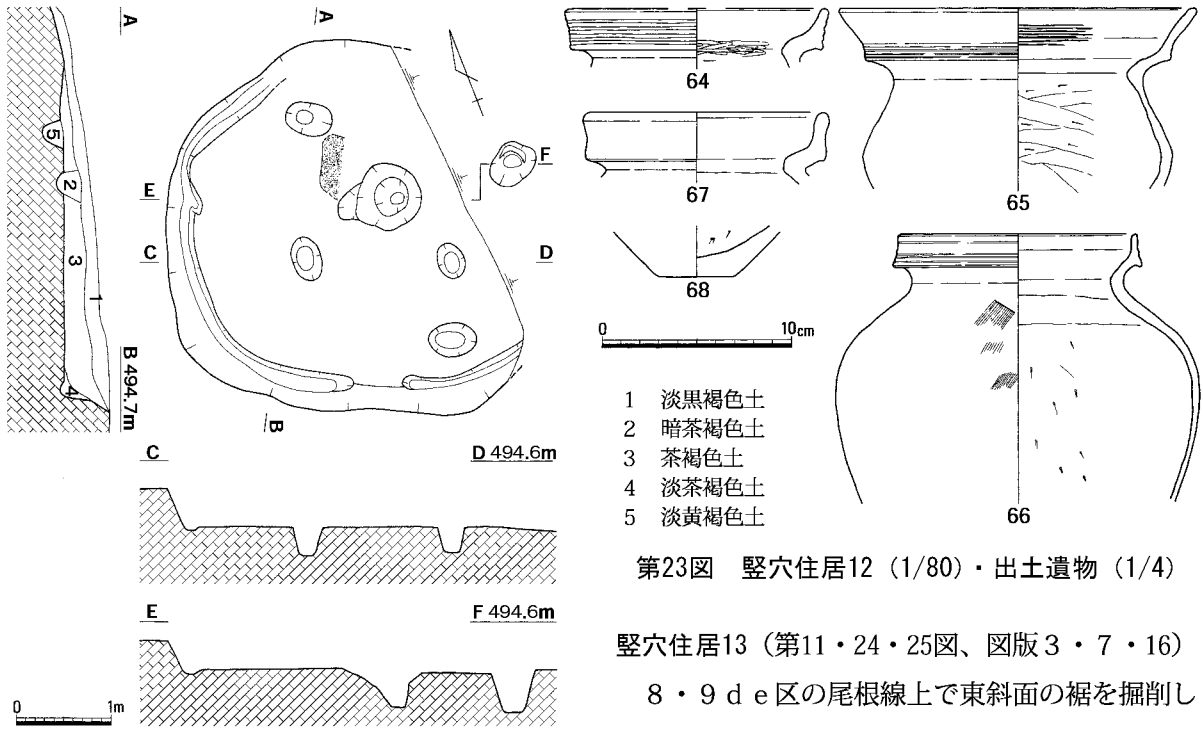


第22図 竪穴住居10・11 (1/80)・出土遺物 (1/4)

物と本住居を構築する際に排出したと考えられる土砂が斜面下位の弥生後期後葉の段状遺構15を埋めていることから弥生後期後葉から末葉と判断される。(杉山)

竪穴住居12 (第11・23図)

7・8 c d 区の尾根上の北東斜面に移行する部分に位置し、中央穴周辺で被熱痕跡がみられた。甕64は口径13.5cmで、肥厚した口縁部から外上方に延びる端部に4条の貝殻条痕文を施す。甕65は口径13.8cmで、薄手の口縁部から外上方に開く端部に条線を残す。甕66は口径12.4cmで、肩部が最大胴径で口縁部から内傾して立ち上がる端部に条線を残す。甕67は口径12.3cmで、肥厚口縁部からほぼ直口する端部にヨコナデを行う。甕68は底径4.1cmと狭い。時期は弥生後期後葉と思われる。(澤山)

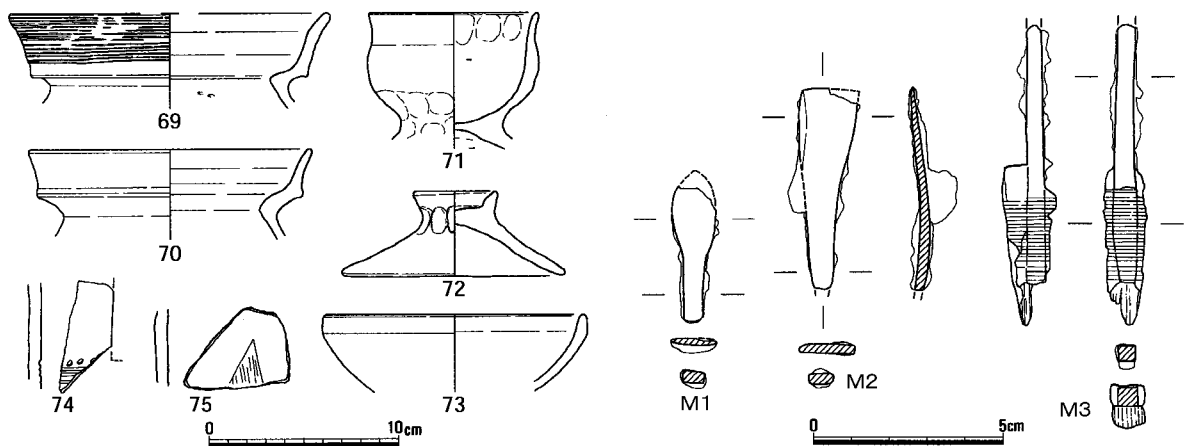


第23図 竪穴住居12 (1/80)・出土遺物 (1/4)

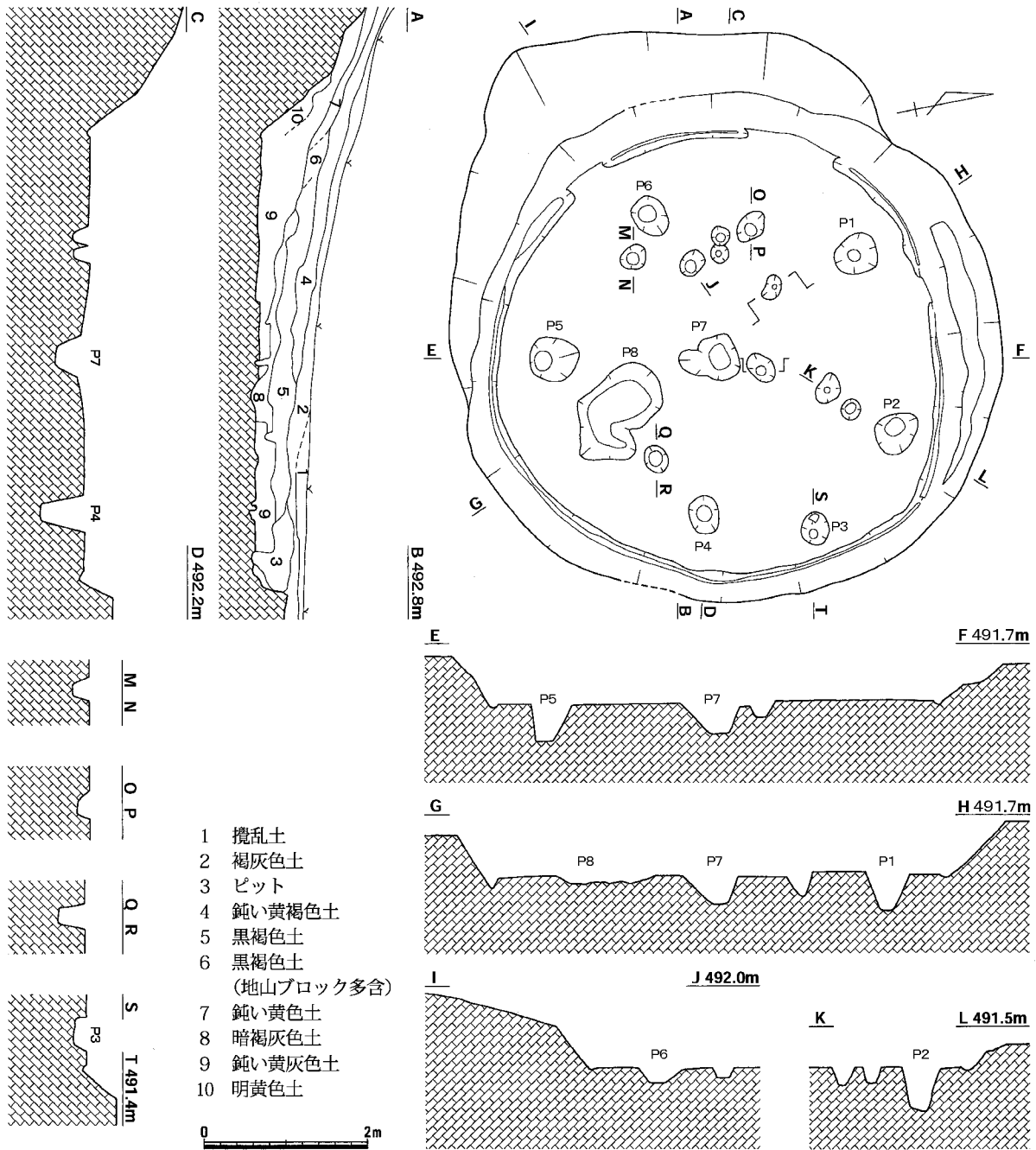
竪穴住居13 (第11・24・25図、図版3・7・16)

8・9 d e 区の尾根線上で東斜面の裾を掘削して築かれている。地山には花崗岩脈が走っている

ため、床面で検出した柱穴・ピットと壁体溝は深さがまちまちである。壁面北側には、床面から約20cmの高さに幅の狭いテラスが作出されているが性格は不明である。床面にはP1～P6の6本の支柱穴があり、中央に炭が僅かに散布する中央穴P7がある。不定形のP8は、底面が凸凹で約10cmと浅いことから、岩脈上に掘られたために掘削途中で廃棄されたと推察される。遺物は第5～7層までを上層、第8～10層を下層として取り上げた。図示した遺物はすべて下層埋土出土である。甕69は口縁外面には櫛描沈線が巡り、甕70の口縁外面はヨコナデを行う。台付き鉢71は内外に赤色顔料が塗布され、72が蓋、73は高杯である。74・75は角閃石の目立つ胎土に外面に赤色顔料が塗布された土器で、器台片と考えられる。74は方形の透かしがあき、沈線と刺突文が巡る。75は鋸歯文が施文されている。M1は柳葉の有茎鉄鏃、M2は形状から方頭式の鉄鏃と判断した。M3は棒状の鉄器を木に縛った状態が看取され、緊縛痕が一面のみにしかみられないことから同様の鉄器が外れていると推察され、この状況からヤスの可能性が高いと思われる。時期は、弥生後期後葉と判断される。(杉山)



第24図 竪穴住居13出土遺物 (1/2・1/4)

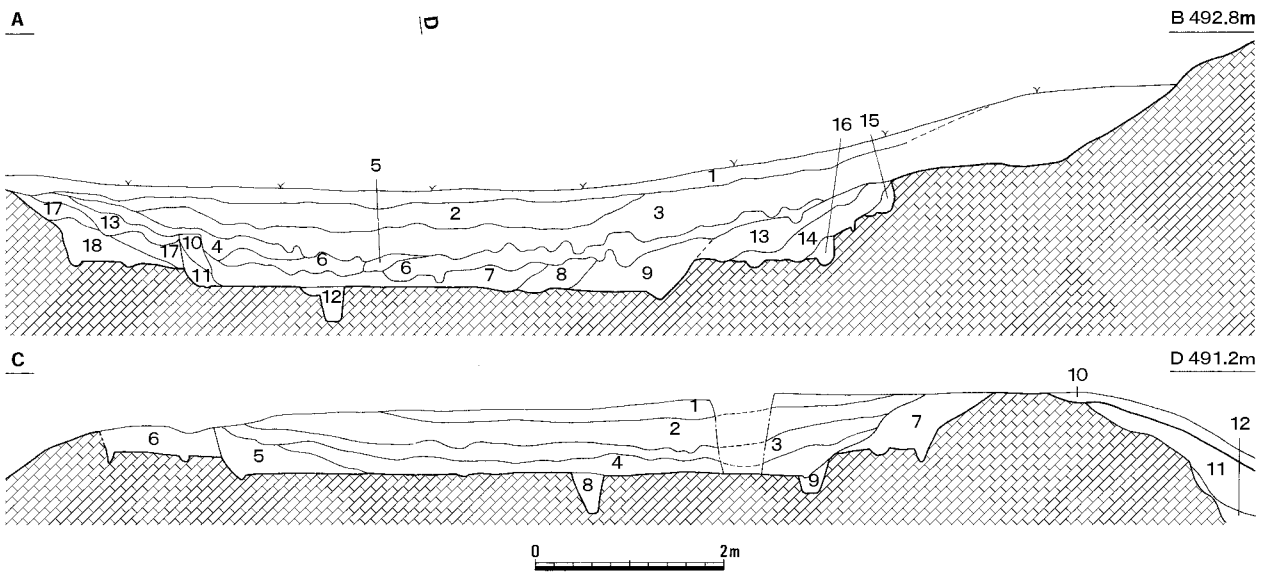
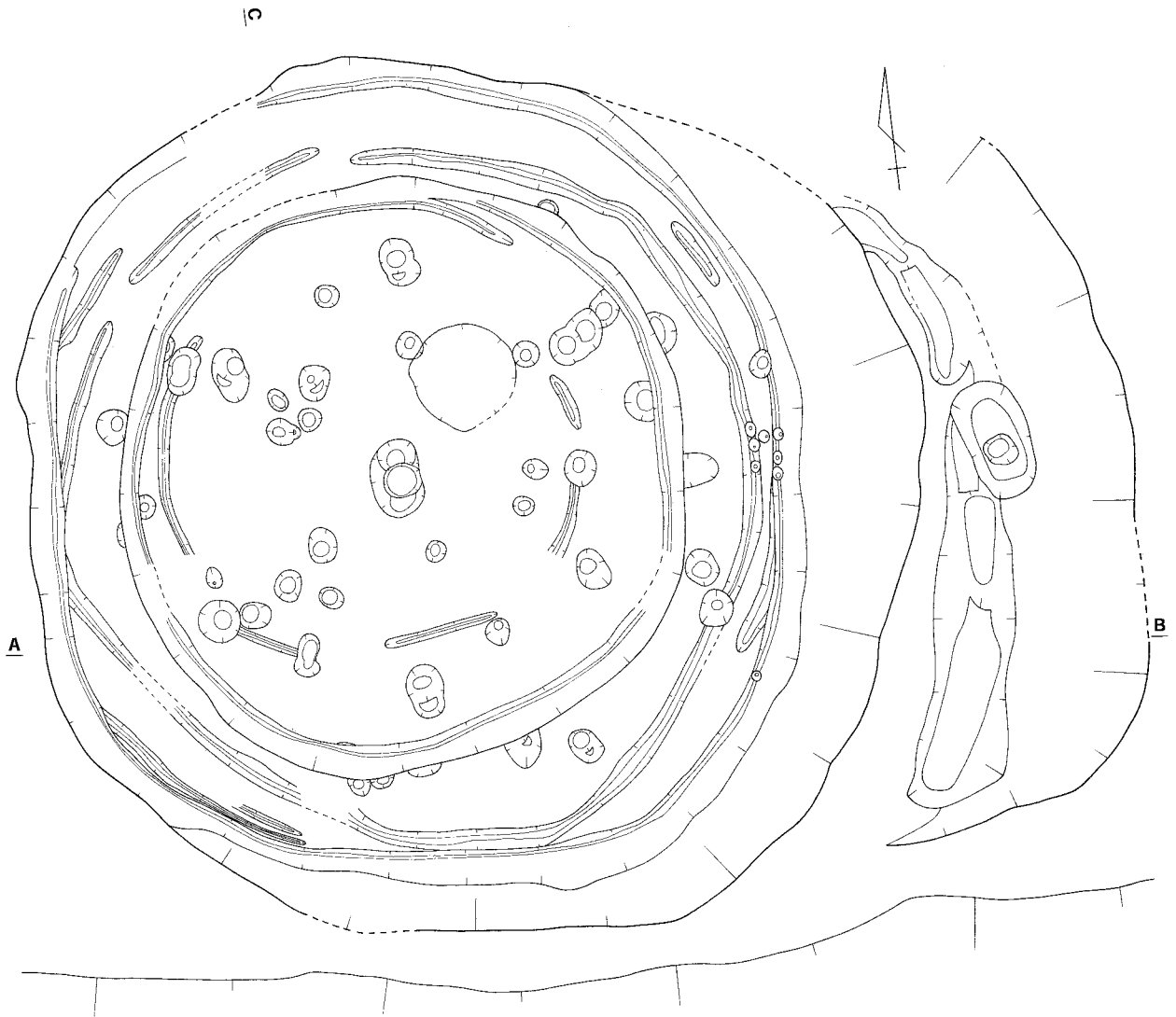


第25図 竪穴住居13 (1/80)

竪穴住居14~18 (第12・26・27図、図版3)

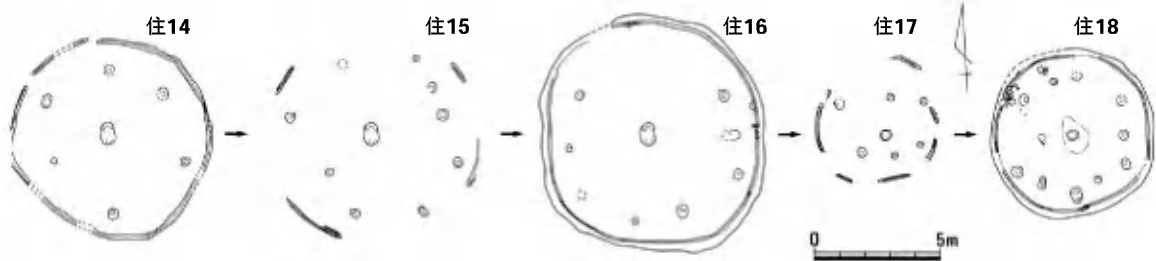
9~11 c d 区の尾根線上で、西斜面を掘削して築かれている。東斜面に床幅約1mの段を造りだし、さらに住居部分を掘削している。埋土はA-B断面の観察から、第13~18層で埋没した古段階の住居中央に再度新段階の住居を掘削していると判断された。そこで第1・2層を覆土、第3~5層を上層埋土、第6層を中層、第7~11層を下層とし、第13~18層は一括して遺物を取り上げた。平面は第13層上面付近で検出作業を行ったが、明確な形状を示さないことから各段階の前後関係は床面の溝とピットの切り合い関係で推測した。

その結果、古段階は二回の建て替えで、14→15→16の順に拡大し、一旦埋め戻した後に17を掘削して18に拡張して廃絶していることが明らかとなった。また、東側の段との直接の関係は不明瞭だが、



第26図 竪穴住居14~18 (1/80)

A-B	1 褐灰色土	7 鈍い黄褐色土	14 鈍い黄褐色土	C-D	1 暗褐灰色土	7 暗黄褐色土
	2 黒褐色土	8 鈍い黄褐色土	15 黄色土		2 黒褐色土	8 褐灰色土
	3 鈍い黄褐色土	9 鈍い黄褐色土	16 鈍い黄色土		3 鈍い黄褐色土	9 褐灰色土
	4 暗褐灰色土	10 鈍い黄褐色土	17 暗黄褐色土		4 褐灰色土	10 暗黄褐色土
	5 暗褐灰色土 (黒色土ブロック含)	11 鈍い黄褐色土	18 暗黄褐色土		5 鈍い黄褐色土	11 鈍い黄色土
	6 鈍い黄褐色土	12 暗褐灰色土			6 鈍い黄褐色土	12 段状遺構14



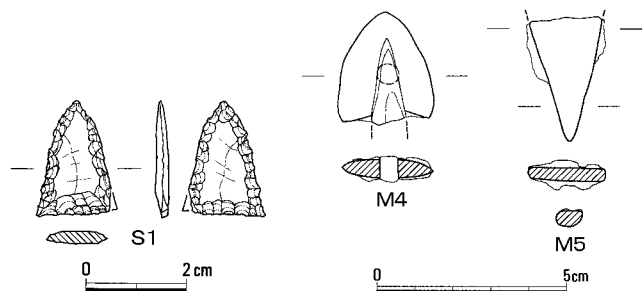
第27図 竪穴住居14~18の変遷 (1/300)

第3層の堆積状況と段の床面付近の出土遺物から古段階には掘削されていたと判断される。(杉山) 竪穴住居14~16 (第12・28~30図、図版3・14~16)

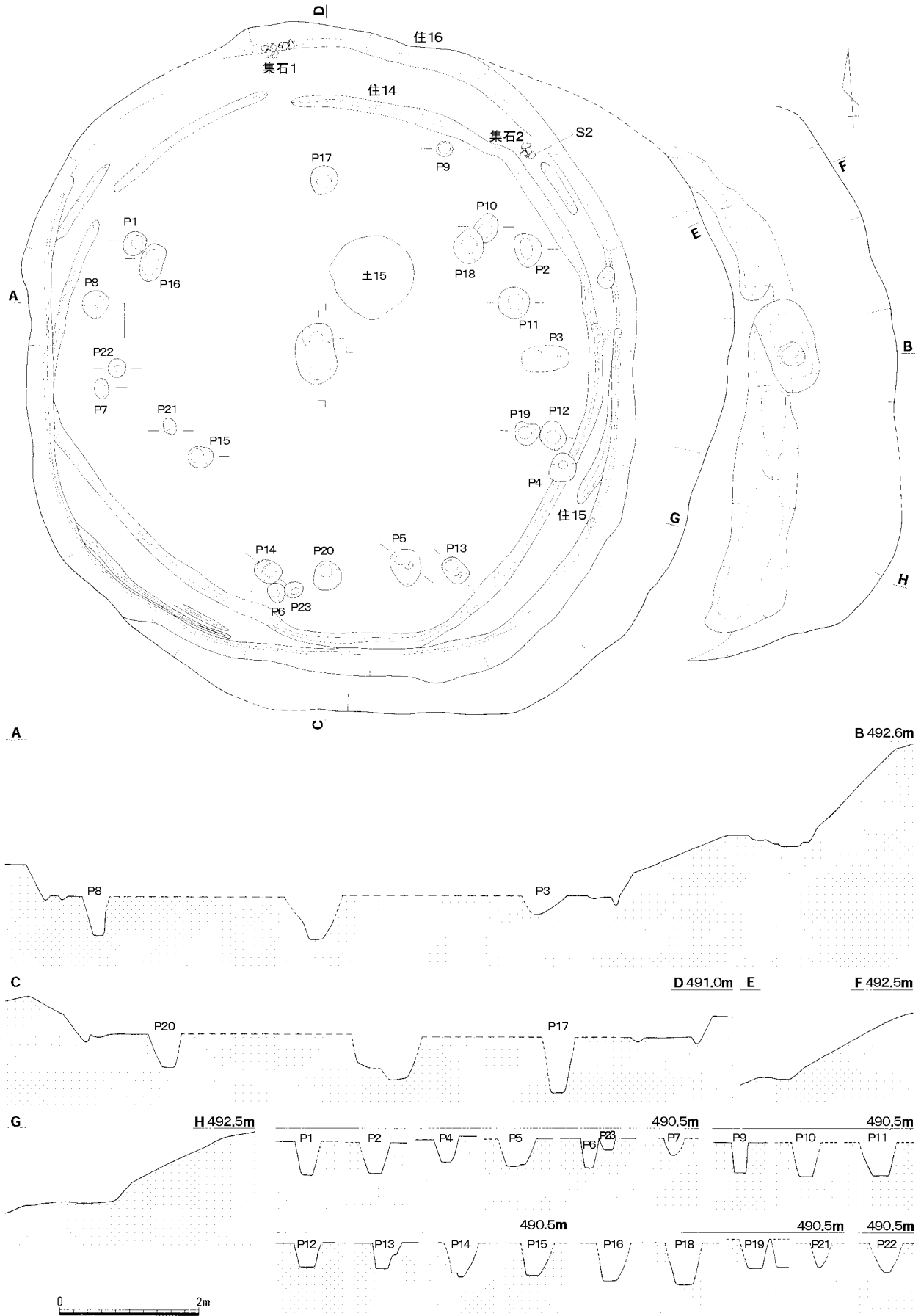
古段階の住居群で、中央穴は共有したまま14→15→16順に新しくなる。14はP 16~P 21の6本柱、15はP 8とP 9の間に本来は柱穴が1基あると推察され、P 8~P 15に加えて9本柱と想定される。16はP 1~P 7の7本しか不明だが柱間から推測してP 1-P 2間に2基とP 6-P 7間に1基が存在すると想定され、10本柱と考えられる。15・16の段階では東の柱穴間隔が狭く一直線に並ぶことから、斜面側を補強する意味があると考えられる。また、北側床面と壁体溝上に二カ所の集石がある。集石1は円礫と角礫を上面がほぼ平らになるように並べ、集石2は叩き石S 2と角礫を組んで置かれていた。南側でも集石は散見されたが厳密な位置は確認できていないため、これらの性格は明確でない。東斜面部の削平段床面には深さ15cm前後の溝と住居の中軸上に深さ20cmほどのピットを持つ土壇状の落ち込みがみられる。遺物は埋土の下層を中心に弥生土器が出土した。石鏃S 1と叩き石S 2、甕76は床面から、甕82が14の壁体溝中から出土した。76は口縁部外面に沈線が巡り、口縁部内面にハケメがみられる。77は頸部に沈線が巡る壺、78~80・83は甕で、78の口縁部はヨコナデ、83の口縁部外面には擬凹線が看取される。81は蓋、84は東側の段の床面出土の壺で赤色顔料が塗布される。高杯85は精製粘土を使用している。86は手捏ね土器である。形態・焼成・胎土の特徴から82・83・85は吉備南部からの搬入品の可能性が高い。M 4は矢柄痕跡の残る鉄鏃で、M 5は鉄器の先端部片で、現存では板状を呈するが器種は明確でない。時期は出土遺物から弥生後期後葉と判断される。(杉山)

竪穴住居17・18 (第12・31~33図、図版3・4・8)

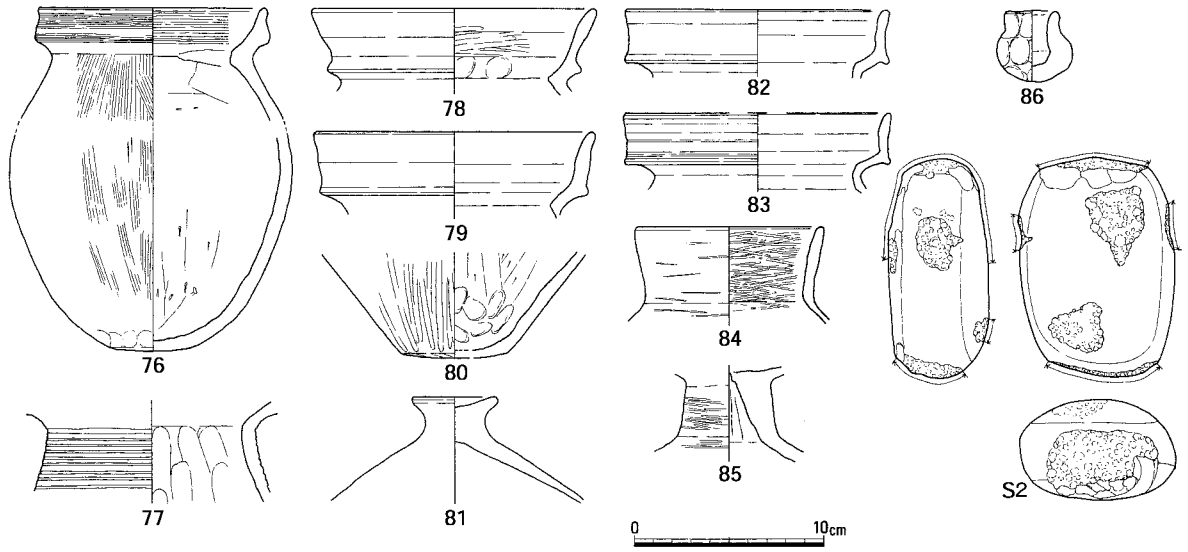
新段階の住居群で、中央穴は古段階のものを掘りなおして使用している。P 1~P 6の6本柱の17からP 7~P 12の6本柱の18に新しくなる。18の柱穴はP 7-P 8間とP 9-P 12間にP 13~P 16が補助的に据えられている。P 7-P 12間の距離は約290cmと広いので床面を精査したが、柱穴は存在しなかった。また、南側の壁体溝上



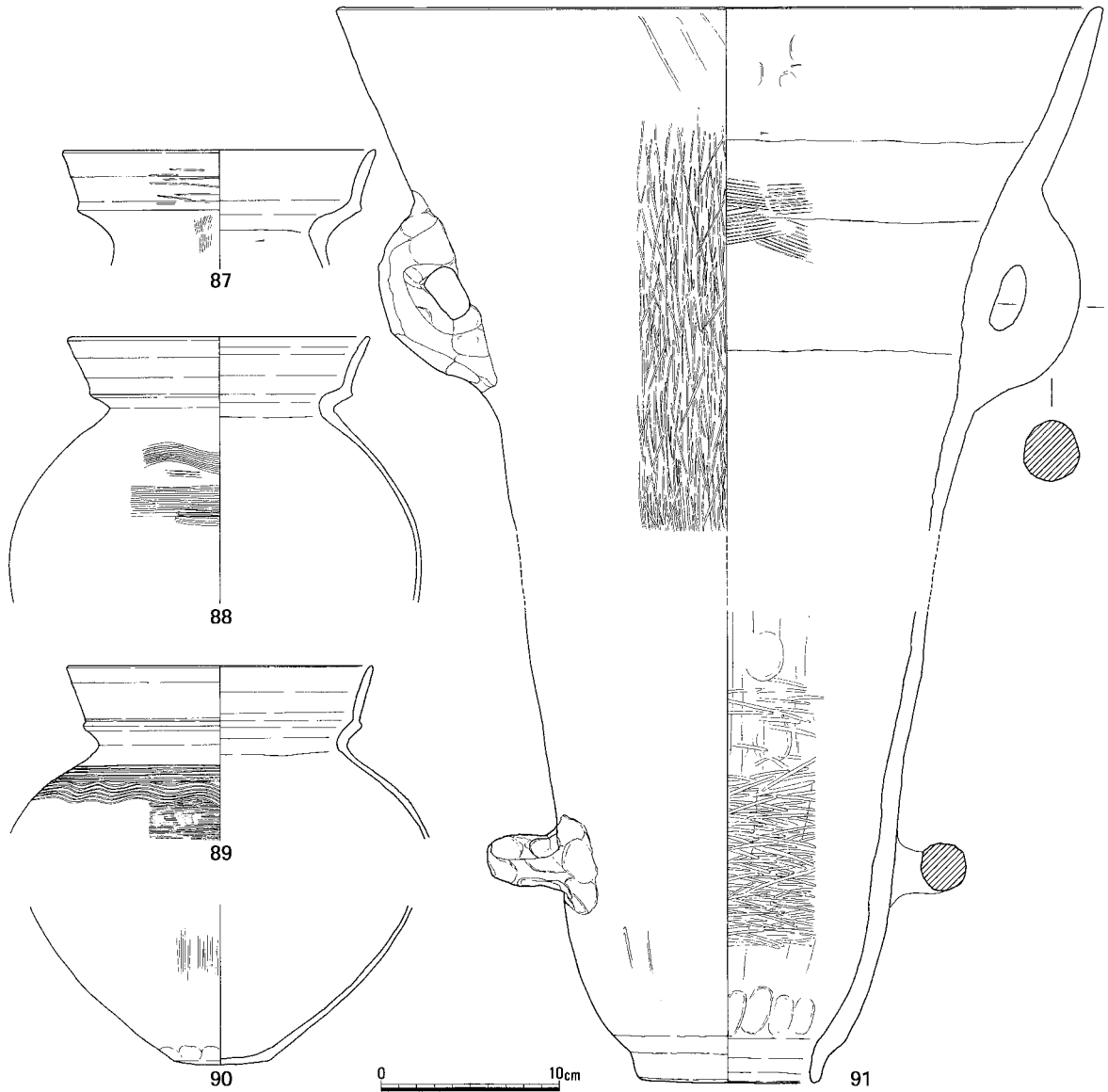
第28図 竪穴住居16出土遺物 (2/3・1/2)



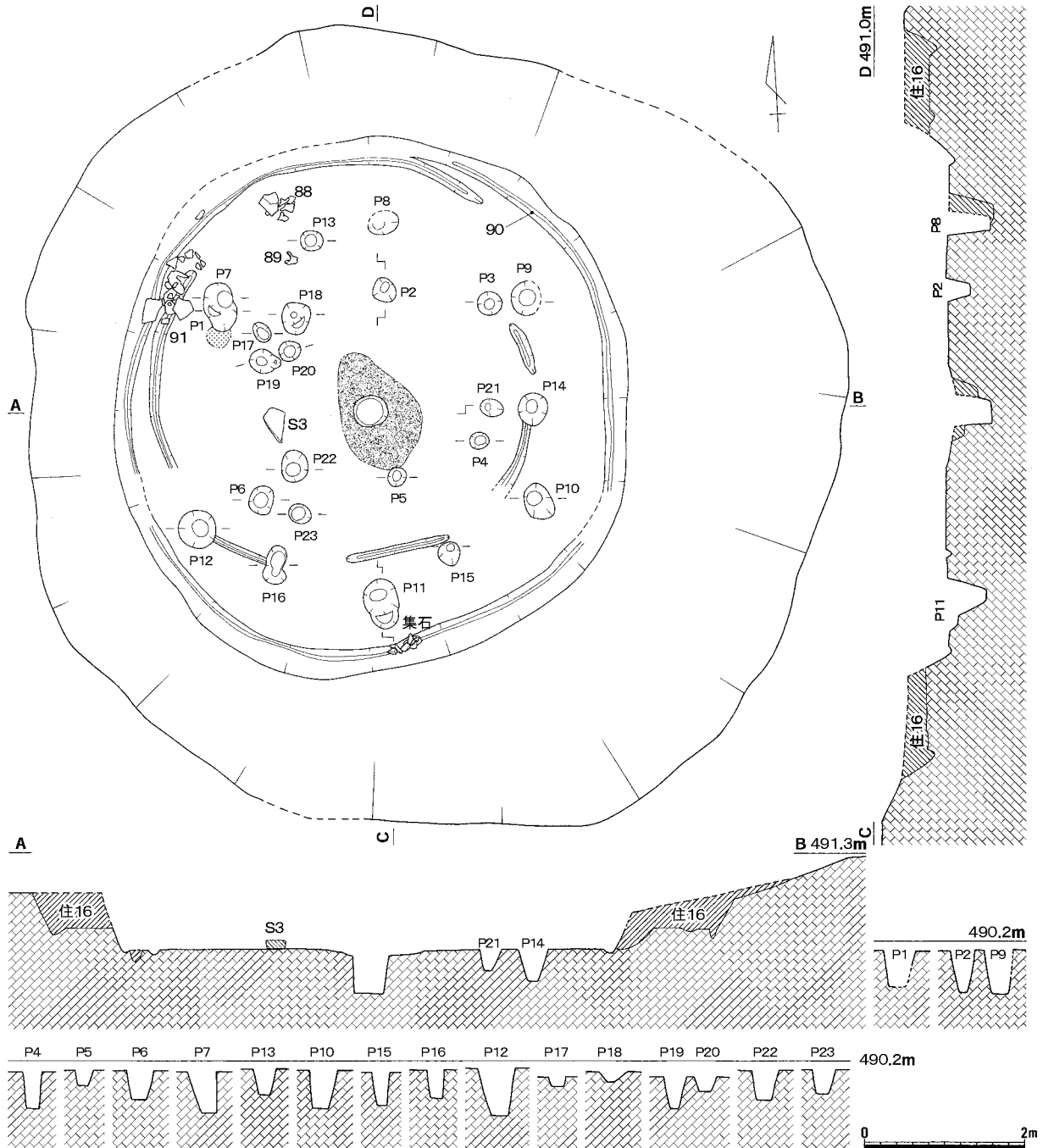
第29図 竪穴住居14~16 (1/80)



第30図 竪穴住居14~16出土遺物 (1/4)



第31図 竪穴住居18出土遺物 (1/4)



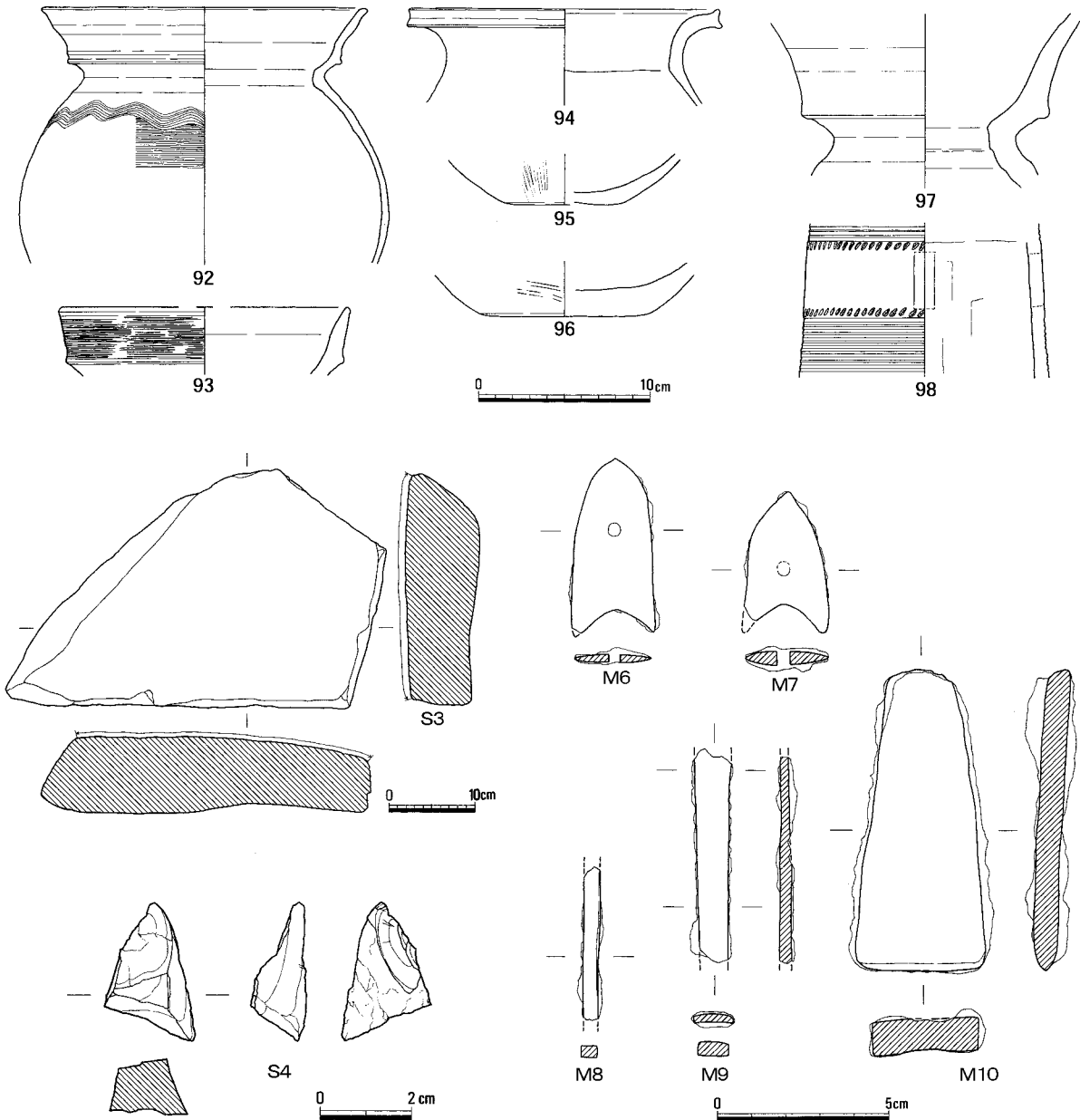
第32図 竪穴住居17・18 (1/80)

には円礫と角礫が組んで置かれている。遺物は、床面から弥生土器88~91と台石S3が出土し、壺87はP6内から出土した。甕88・89の口縁部はヨコナデを行い、肩部には櫛描き文が巡る。甕90の底部は平底を意識している。図上復元した甕は、床面で破碎した状態で出土した。表面には煤の付着はみられず、断面楕円形の把手にも明確な擦痕はない。甕92・93・95・96と壺94、器台97・98は埋土下層出土である。98は胎土に角閃石が目立つことから備中南部からの搬入品と考えられる。S4は覆土中出土の碧玉製の素材片である。M6・M7は鉄鏃、M8は竪穴住居13出土の鉄器に形状的に類似するので、ヤスと考えられる。M9はヤリガンナ、M10は南側埋土上層出土の鉄斧である。

時期は、弥生後期末葉と判断される。

(杉山)

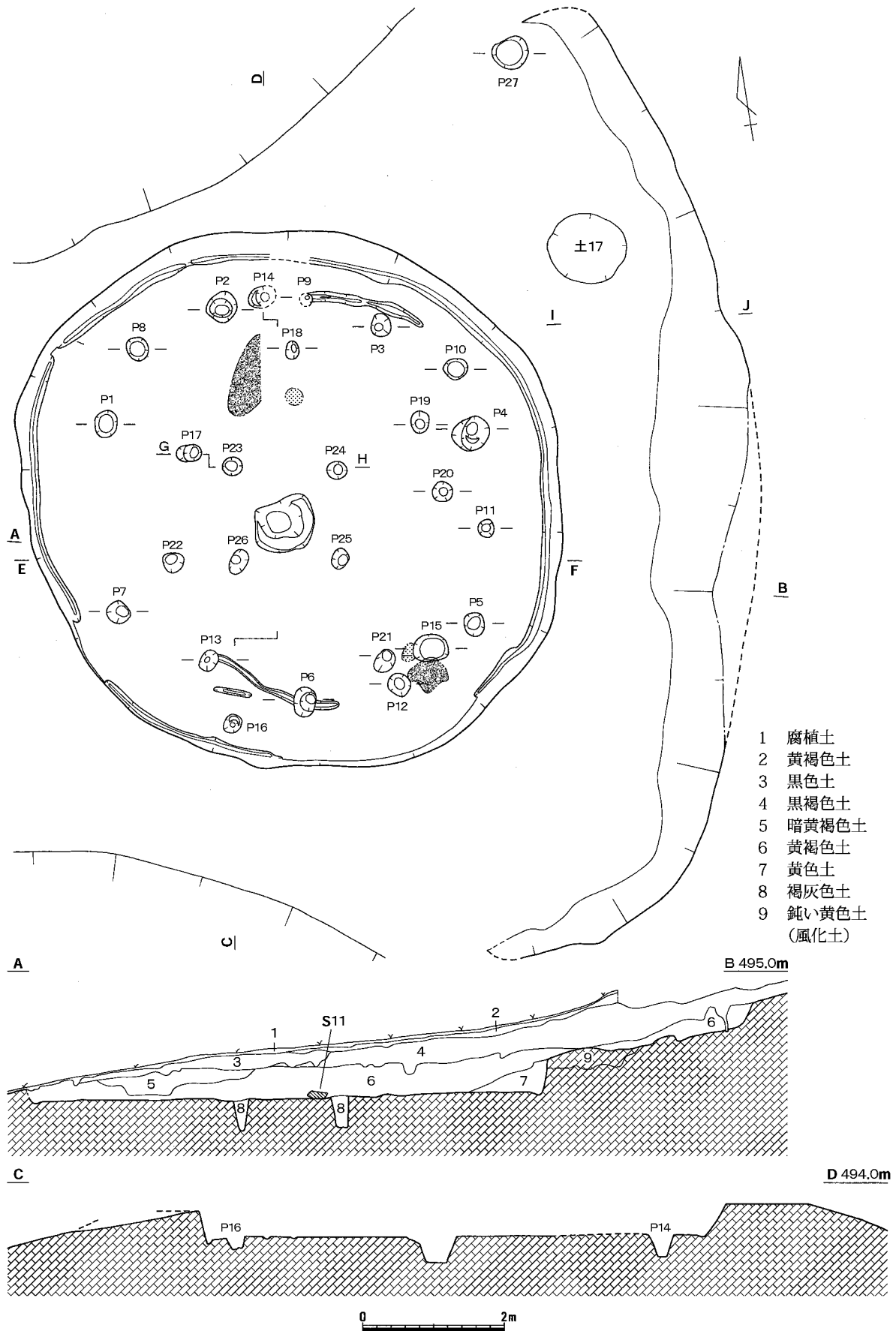




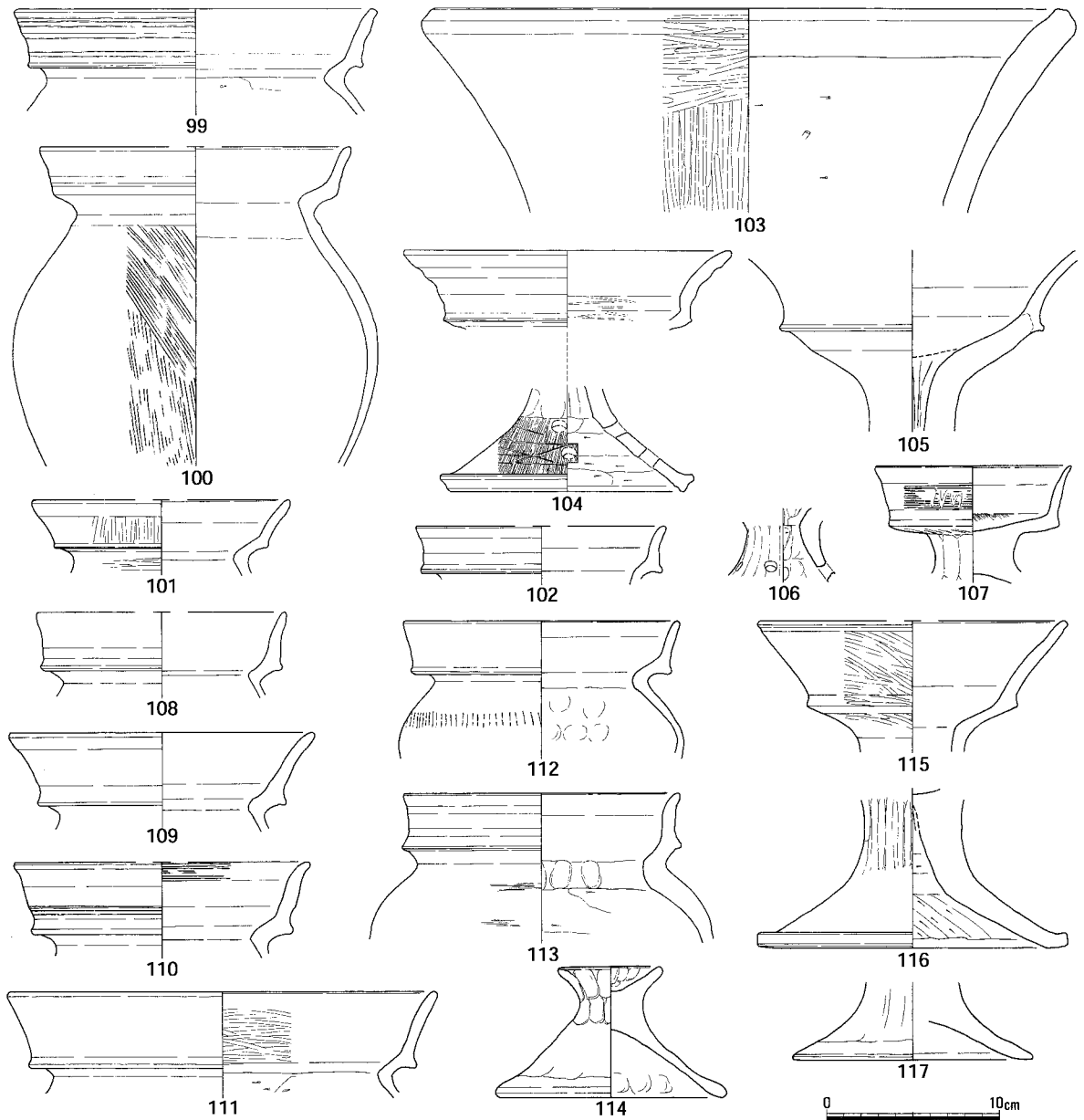
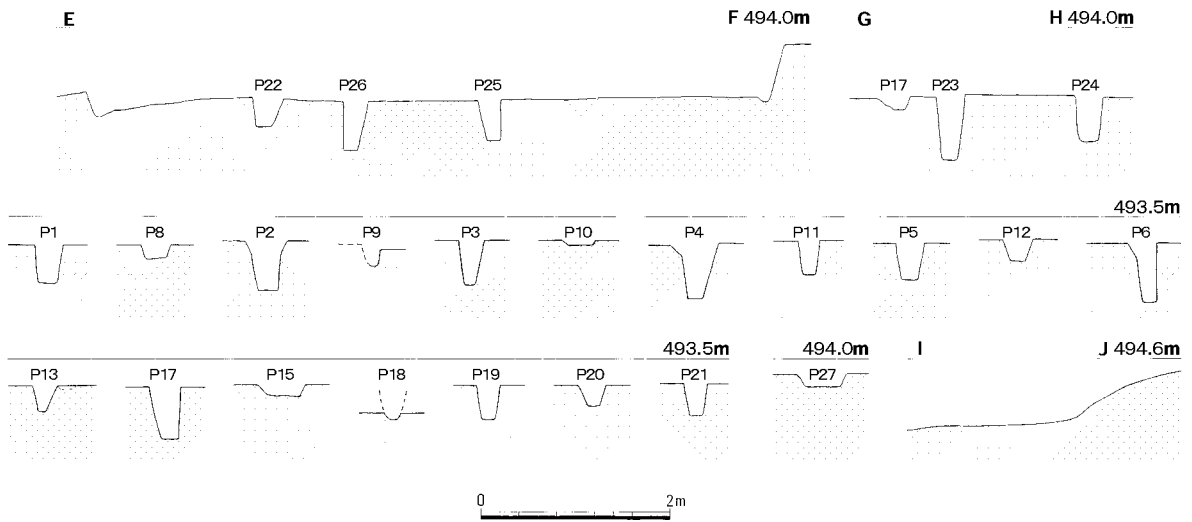
第33図 竪穴住居17・18出土遺物 (2/3・1/2・1/4・1/8)

竪穴住居19・20 (第12・34~36図、図版3・8・14~16)

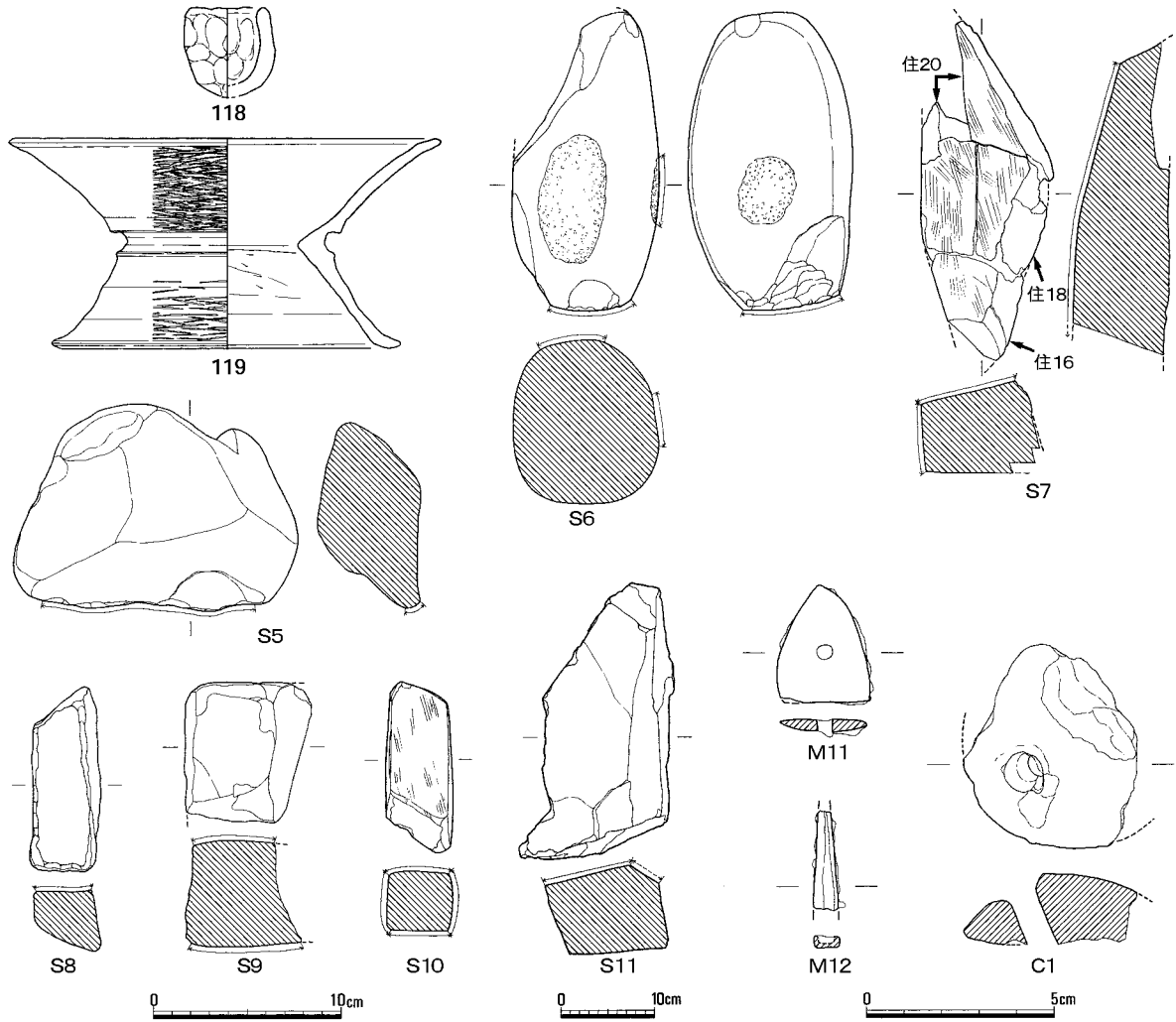
11・12c d区で尾根上に位置する。東側の斜面上位には長さ約13.4m、高さ約80cmの段を掘削して平坦面を築き、幅1.4mの空間をあけて住居部分を掘削している。住居床面には壁体溝と柱穴、被熱面が中央穴を挟んで南北に二カ所ある。壁体溝の内側にはさらに部分的に溝が巡ることから、中央穴を共有して一回の建て替えが想定され、古い段階のものを19、新しい段階のものを20とした。19はP17~P22の6本柱で、20はP1~P7の7本柱が想定されそれぞれの中間にP8~P13が添えられていると考えられる。また、中央穴の周囲にあるP23~P26は19の段階からの施設かどうかは埋土からは明確にできない。遺物は第4・5層を上層、第6・7層を下層として取り上げた。甕99~101と高杯104~107は床面から、甕103はP11内の上位で蓋をするようにして出土した。甕108は中央穴から、壺109は東側削平段の床面で出土した。甕102・110・111・113、器台115、高杯116は下層、甕112、蓋114、台117、手捏ね土器118、器台119は上層出土である。叩き石S5・S6は未加工の叩き石である。



第34図 竪穴住居19・20① (1/80)



第35図 竪穴住居19・20② (1/80)・出土遺物① (1/4)

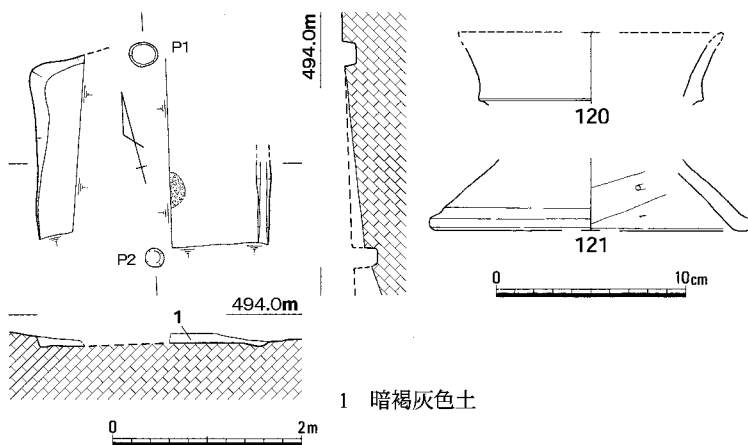


第36図 竪穴住居19・20出土遺物② (1/2・1/4・1/8)

砥石S 7は埋土中の破片と竪穴住居18の覆土中出土品が接合した。S 8～S10は砥石、S11は床面出土の大形の砥石である。M11は無茎鉄鏃、M12はP14内出土の鉄器で、錆化が顕著で器種は不明だが長辺を折り曲げたように観察できる。C1は円孔のあく土製円板で紡錘車の可能性がある。

時期は床面出土土器から弥生後期後葉から末葉と判断される。

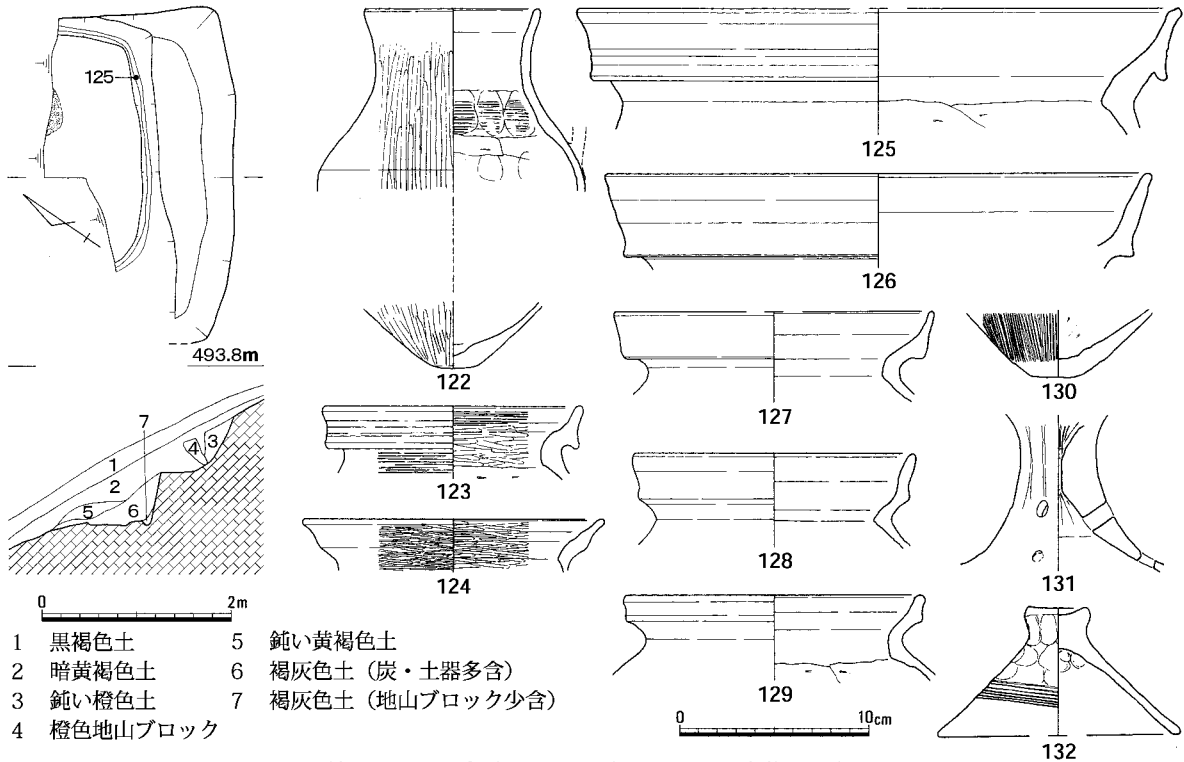
(杉山)



第37図 竪穴住居21 (1/80)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居21 (第12・37図)

13e区南斜面で上面を築城時に削平されているため、埋土はほとんど残っていない。床面には南北軸上に柱間約220cmで柱穴2本とその間に被熱面がある。土層断面では東西壁面に壁体溝がありそうだが、東側でしか検出できなかった。出土遺物はP1と埋土から弥生土器がある。120は橙色の甕片、121は橙色の脚である。小片のた



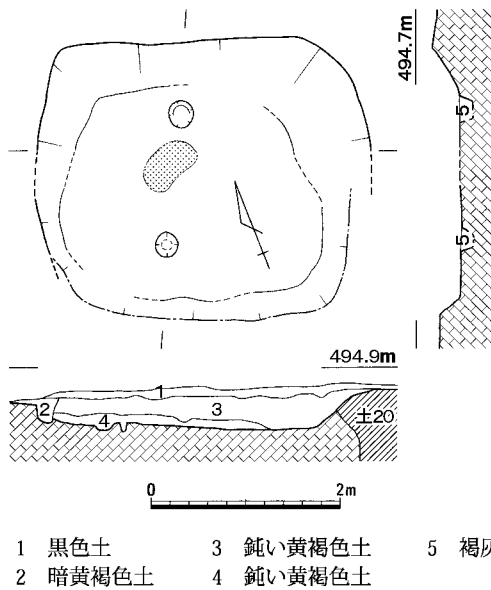
第38図 竪穴住居22 (1/80)・出土遺物 (1/4)

め住居に伴うかどうかは明確でないが、周辺の状況から弥生後期末葉頃と考えられる。(杉山)

竪穴住居22 (第12・38図、図版4)

11 b c 区の西斜面に位置し、奥側に幅40cm前後のテラスを持ち約50cmの段差で床に至る。床面には壁体溝が巡り、中央に被熱面があるが柱穴は存在しない。埋土は第1層が流入土、第2・5層が斜面上位からの排出土である。遺物は第6・7層に多い。壺122はテラス面で、甕125が床面で出土した。123~130は甕、131は本来は円板充填の高杯、132は櫛描き沈線文の巡る蓋である。126は全面に赤色顔料が塗布される。時期は出土土器から弥生後期後葉と判断される。(杉山)

竪穴住居23 (第12・39図)



12 c 区北斜面に位置し、土壌28~30が埋没後に築かれている。床面には南北軸上に柱間140cmで柱穴があり、その間に被熱面がある。第1層が築城前の旧表土で、第3層中には地山土ブロックが含まれるが、人為的に埋め戻されたかどうかは判然としない。133~135は甕、136は高杯である。136は脚部に2個一対の円孔が二対ある。時期は、弥生後期末葉頃と判断される。(杉山)

第39図 竪穴住居23 (1/80)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居24 (第12・40図)

14c区南西の北東斜面で、現状の北土塁下の平坦面に位置する。床面では被熱痕跡がみられ、何らかの作業場とも考えられる。壺137は口径15.4cmで、頸部に沈線文を施し、口縁部から内傾する端部をもつ。甕138は口径13.5cmで薄手の口縁部から外上方に延びる端部を有する。甕139は口径16.2cmで口縁部から外上方に立ち上がる端部をもつ。甕140は口径15.0cmで口縁端部が短く引き出されている。壺141は口径10.6cmで外湾した口縁部をもつ。鉢142・143・144の底部は上げ底である。全体に磨滅が進む。

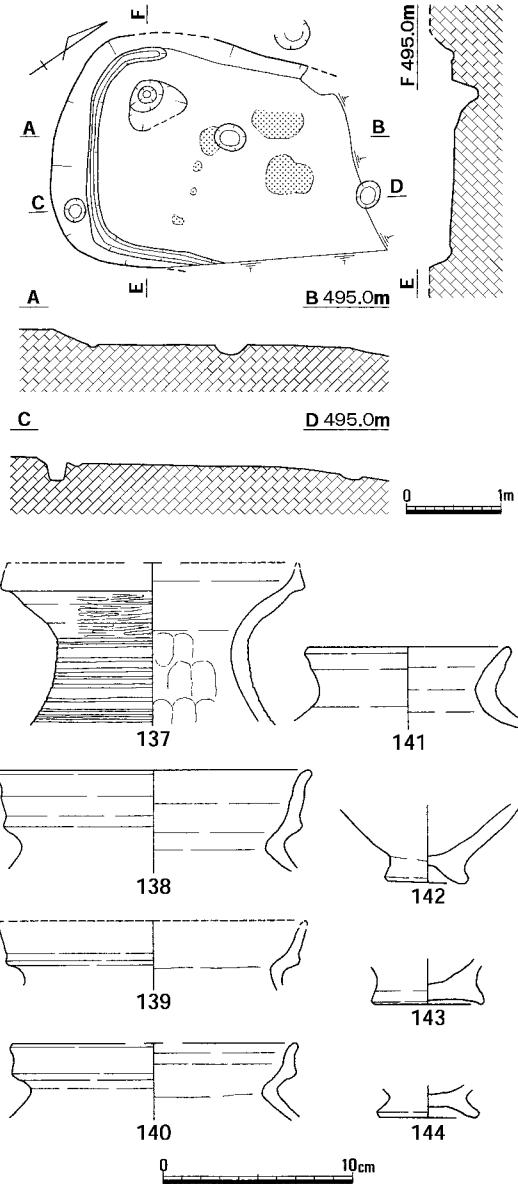
時期は弥生後期後葉と思われる。(澤山)

竪穴住居25 (第12・41図)

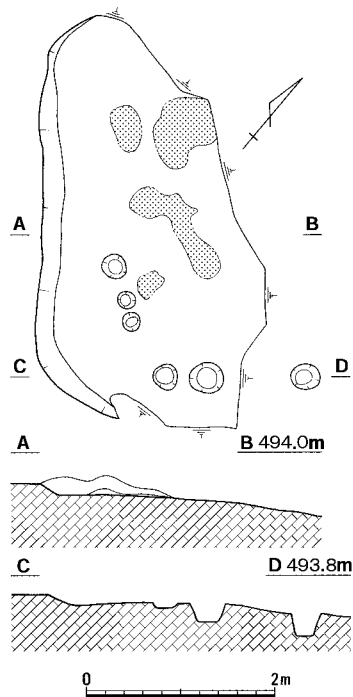
15・16d区北側の北東斜面で、現状の北土塁下の平坦面に位置する。竪穴住居24と同様に床面では被熱痕跡がみられ、何かの作業場とも思われる。遺物は甕145・146、底部147・148、注口土器149などがあり、時期は弥生後期後葉と思われる。(澤山)

竪穴住居26 (第12・42図)

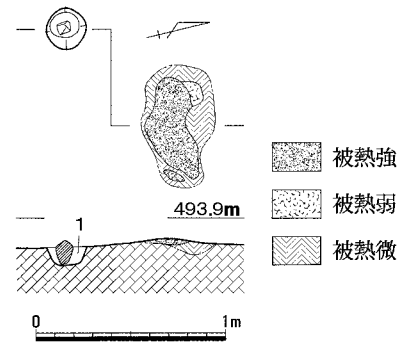
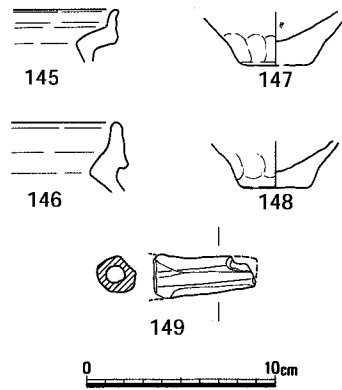
15d区北東の北東斜面に位置する。土塁の削平で被熱痕跡と柱穴のみ検出する。出土遺物はないが、竪穴住居24・25と同時期と思われる。(澤山)



第40図 竪穴住居24 (1/80)・出土遺物 (1/4)



第41図 竪穴住居25 (1/80)・出土遺物 (1/4)



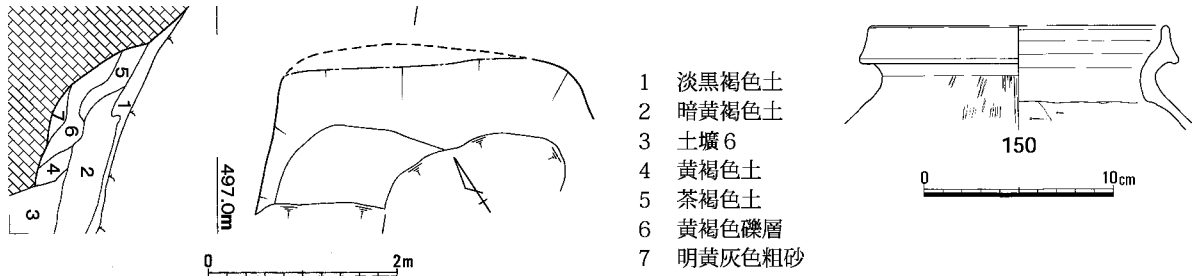
第42図 竪穴住居26 (1/40)

## 2 段状遺構

### 段状遺構 1 (第11・43図)

4c区南斜面に土壌6切られて位置し、僅かに残された床面は比較的水平である。第1～4層は流入土で第5～7層が埋土と判断できる。遺物はほとんど含まず、混入物の少ない地山の風化土であるため人為的に埋められたかどうかは不明である。弥生土器の甕150は第6・7層中から出土した。

時期は、出土土器と遺構の関係から弥生後期後葉と判断される。(杉山)



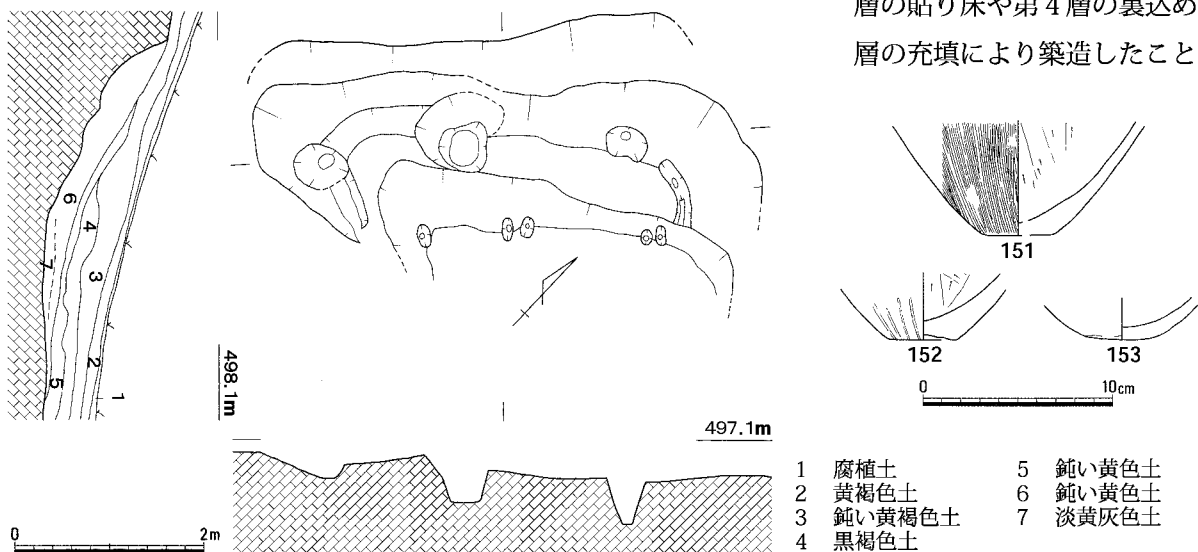
第43図 段状遺構 1 (1/80)・出土遺物 (1/4)

### 段状遺構 2 (第11・44図)

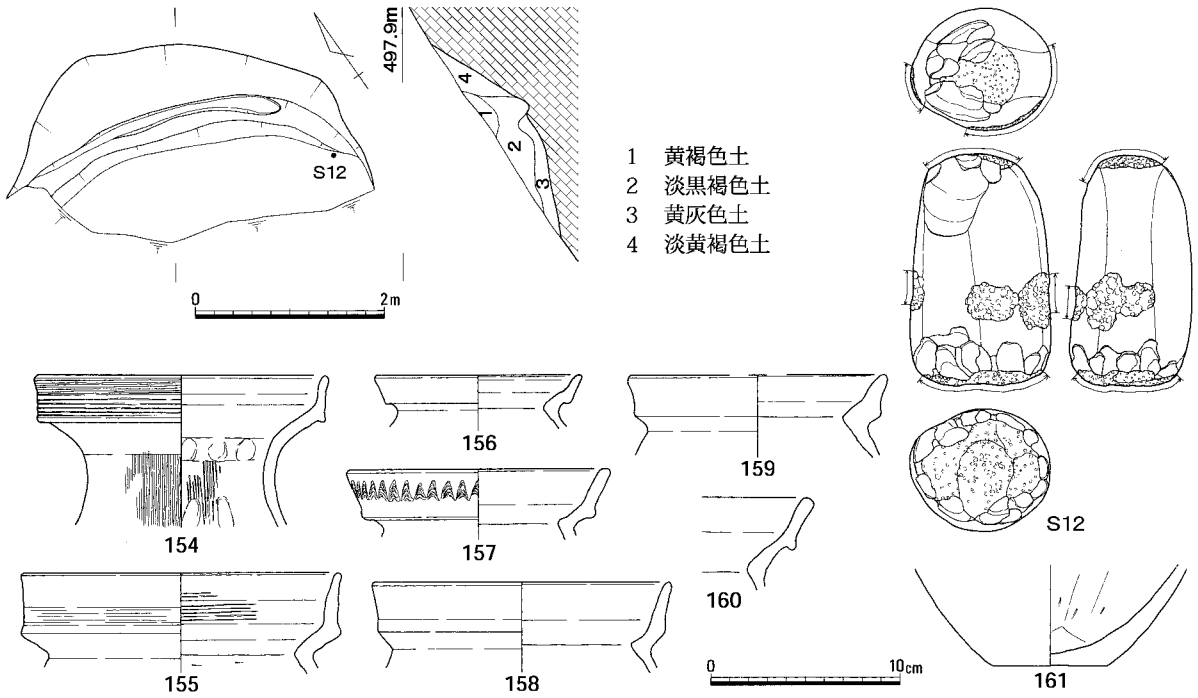
5・6c区の東斜面裾に位置する。平面で西隅の肩がやや歪なのは木根の攪乱を受けているためと考えられ本来は方形に掘削されたと推察される。埋土は第1～4層が流入土で、第5～7層が遺物を含む埋土である。掘削面の床面には奥側に柱穴と考えられるピット3基と壁体溝状の溝1条がある。また、この面からさらに約20cm下がった面の壁際に杭状のピットがあるが、東側の床面には柱穴などは検出されなかった。上下の段の平面形が微妙にずれることから、二時期の遺構の可能性があるが、土層断面では切り合い関係は不明瞭である。遺物には床面付近で出土した弥生土器の甕151～153があり、これらから弥生後期後葉から末葉と考えられる。(杉山)

### 段状遺構 3 (第11・45図、図版14)

4c区北東の南斜面で、現状の平坦部分に位置する。土層断面から斜面を粗く掘削したのち、第3層の貼り床や第4層の裏込め層の充填により築造したこと



第44図 段状遺構 2 (1/80)・出土遺物 (1/4)



第45図 段状遺構3 (1/80)・出土遺物(1/4)

が確認できた。柱構造は不明であった。遺物をみると、壺154は口径15.2cmで、立ち上がる外面口縁端部にヨコナデ前のハケメを残す。甕155は口径16.7cmで、外上方に延びる口縁端部にヨコナデ前のハケメを残す。甕156は口径10.8cmで、口縁端部は外上方に短く開く。甕157は口径13.7cmで、外上方に開く口縁端部に波状文が巡る。甕158は口径15.6cmで、口縁端部は外上方に開く。甕159は口径13.4cmで、短く外上方に延びる肥厚した口縁端部をもつ。甕160は外上方に延びる薄手の口縁端部をもつ。底部161は底径6.0cmの平底である。また、玢岩製の叩き石S12や不明鉄器がある。

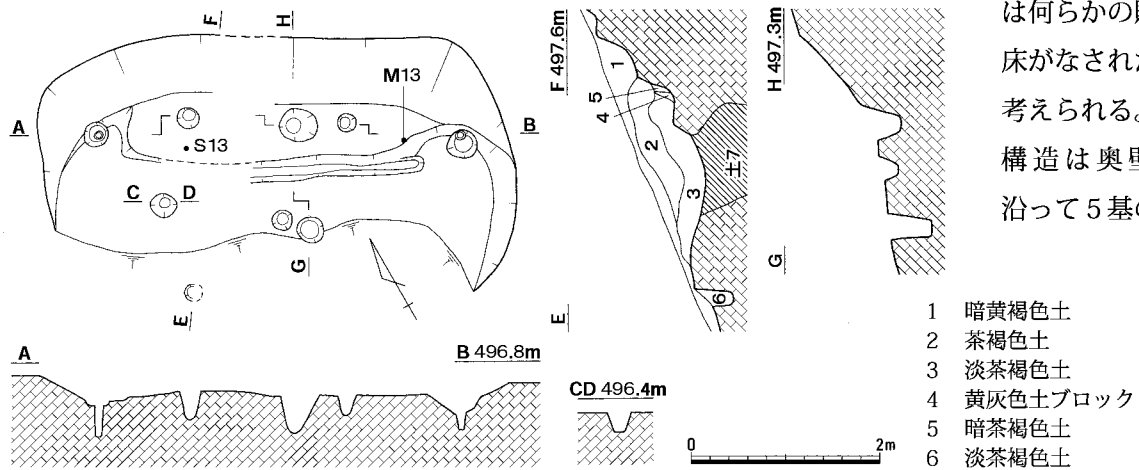
時期は弥生後期後葉と思われる。

(澤山)

段状遺構4 (第11・46・47図、図版4・14・16)

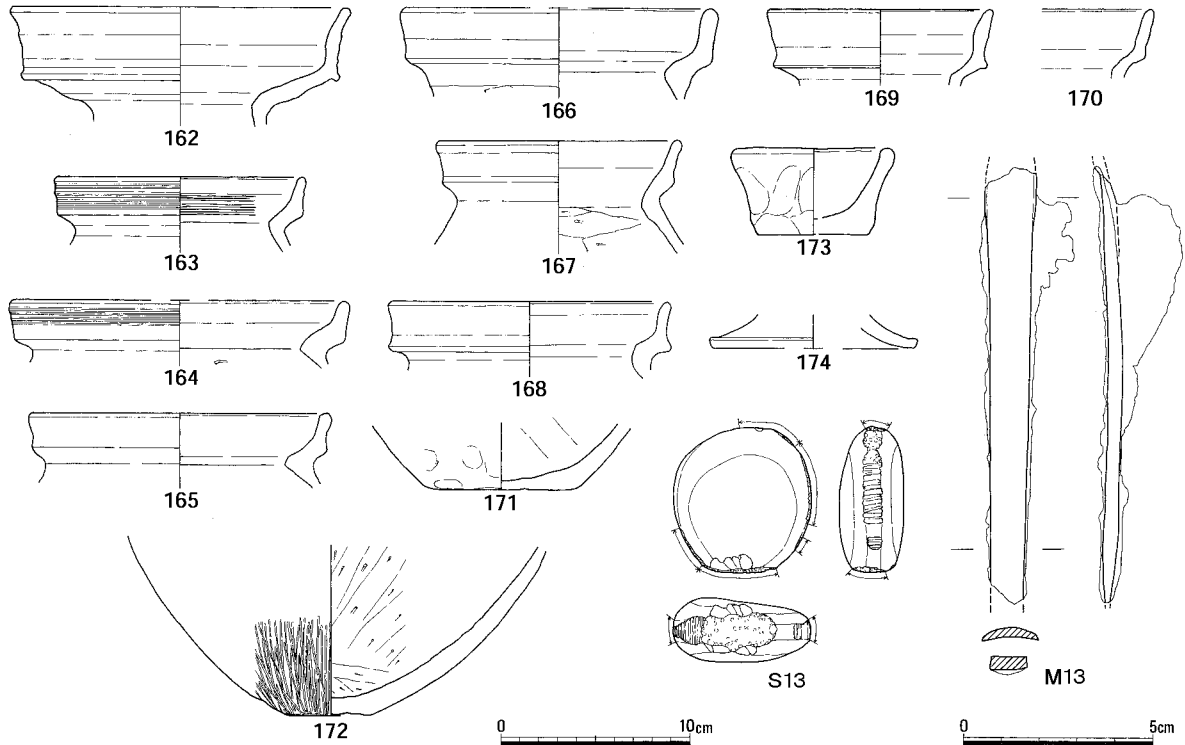
5c区中央付近の南斜面で、現状の平坦部分に位置する。土層断面から斜面をほぼ垂直に3回に分けて掘削したことが確認された。また、奥壁部には段状の高まりがあり、その前面に溝がみられた。

床面の状況からは何らかの貼り床がなされたと考えられる。柱構造は奥壁に沿って5基の柱



第46図 段状遺構4 (1/80)





第47図 段状遺構4出土遺物 (1/2・1/4)

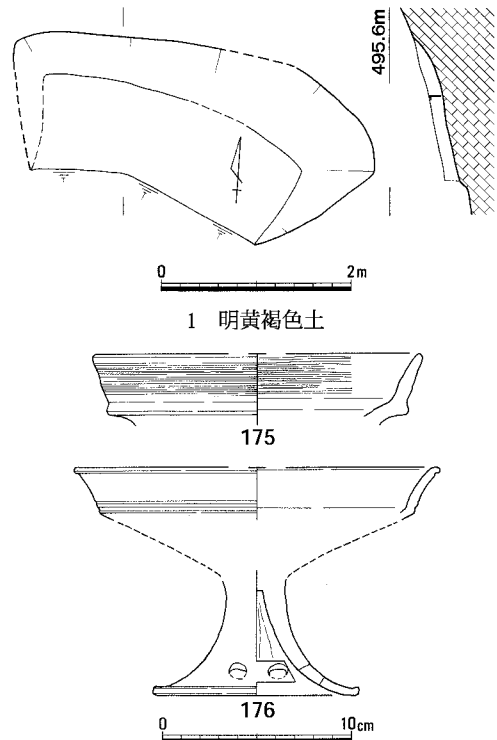
穴が確認されており、これらが使用されたと思われる。遺物をみると口径17.7cmの甕162、口径13.0cmの甕163、口径17.5cmの甕164、口径15.5cmの甕165、口径16.1cmの甕166、口径12.7cmの甕167、口径14.5cmの甕168、口径11.6cmの甕169、破片の甕170などがみられ、いずれも外上方または垂直に立ち上がる口縁端部を有する。甕163・164の口縁端部外面には沈線文あるいは条痕文が施され、その他はヨコナデがみられる。このほか、底径8.1cmの底部171、底径4.5cmの底部172、口径8.0cm、底径5.8cm、器高4.6cmの鉢173、底径10.6cmの高杯174やヤリガンナM13、珩岩製の叩き石S13などが出土している。

時期は弥生後期後葉から末葉と思われる。(澤山)  
段状遺構5 (第11・48図、図版8)

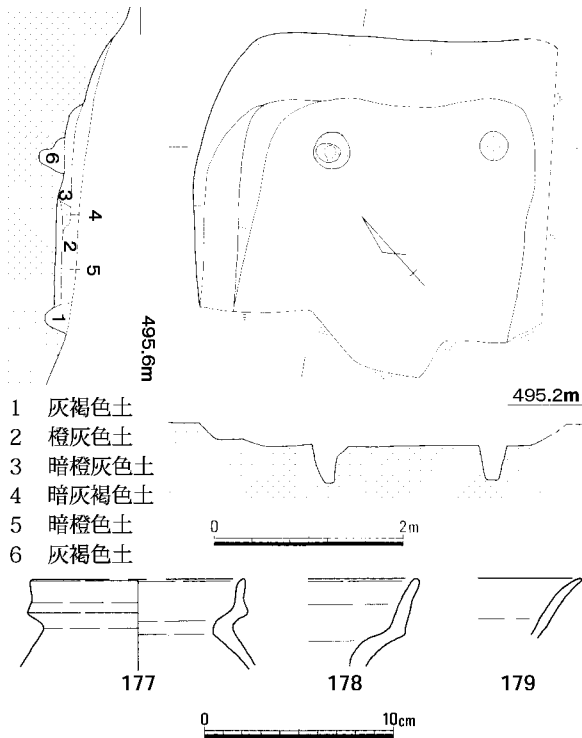
4・5c区南側境界の南斜面に位置し、現状で緩斜面から平坦面に移行する部分にあたる。浅いたわみ状を呈し、柱穴、壁体溝も確認できないため性格が判然としない。出土遺物は口径17.2cmを測る甕175、口径19.8cm、底径10.6cmを測り、脚裾部に2個一対の円孔をもつ高杯176や珩岩製の円礫などが出土している。

時期は弥生後期後葉と思われる。(澤山)  
段状遺構6 (第11・49図、図版4)

5d区北西の南斜面に位置し、現状で緩斜面から平坦面に移行する部分にあたる。築造には斜面をやや直立気味に掘削して「L」字形を取っており、北西壁に



第48図 段状遺構5 (1/80)・出土遺物(1/4)



第49図 段状遺構6 (1/80)・出土遺物 (1/4)

は低い段が認められた。床面は第5層で貼り床がなされたと考えられる。柱構造は奥壁隅に柱穴が配されている。出土遺物は口径11.2cmを測る甕177・178、高杯179などの破片がみられるが、剥離のため調整不明である。

時期は弥生後期末葉と思われる。(澤山)

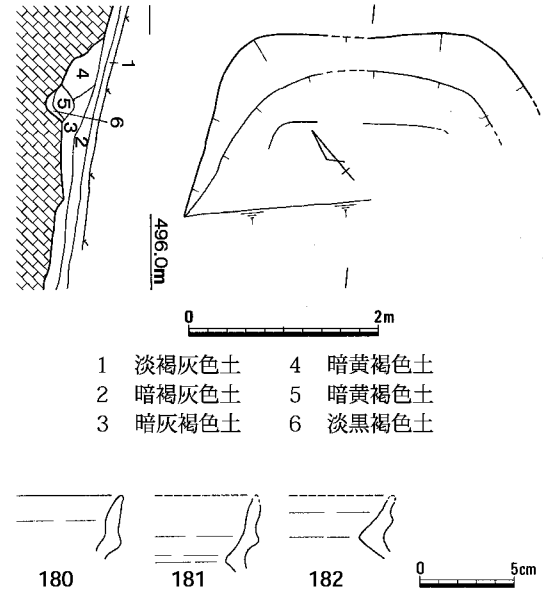
段状遺構7 (第11・50図、図版4)

5 d区北西の南斜面に位置する。現状で緩斜面から平坦面に移行する部分にあたり、段状遺構6・8を切る。土層断面で斜面に外上方への掘削がみられたが、柱穴、壁体溝も確認できないため性格が判然としない。遺物は甕180~182などの破片が出土したが、剥離が進む。

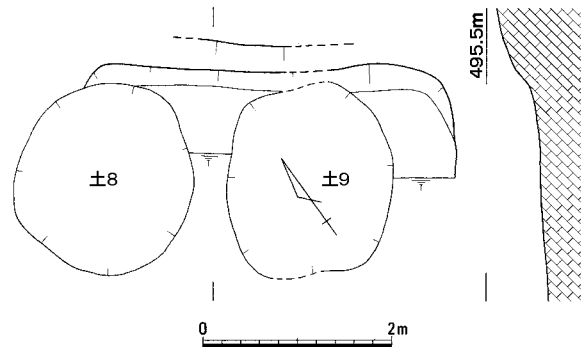
時期は弥生後期末葉と思われる。(澤山)

段状遺構8 (第11・51図、図版4)

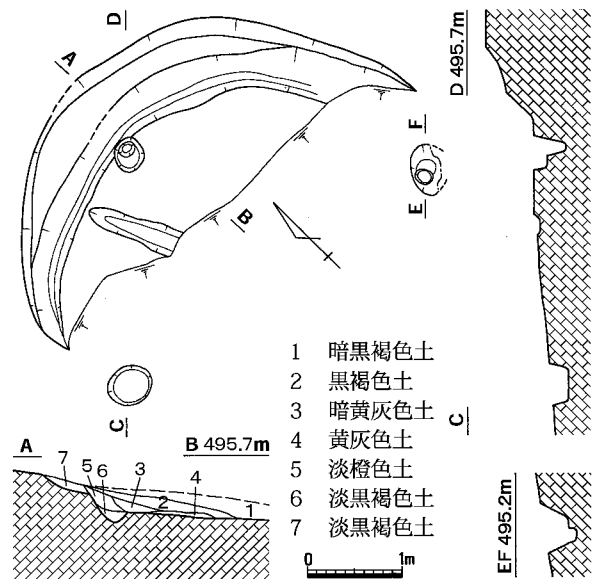
5 d区東側の中央付近の南斜面に位置し、現状では緩斜面から平坦面に移行する部分にあたる。斜面部を掘削して平坦面を築造しているが、遺構の性格は判然としない。精査後に土層8・9を確認した。出土遺物はないが、弥生後期末葉頃と思われる。(澤山)



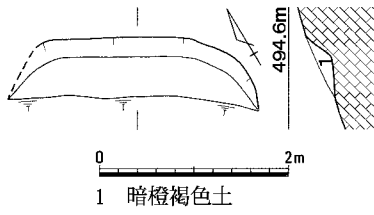
第50図 段状遺構7 (1/80)・出土遺物 (1/4)



第51図 段状遺構8 (1/80)



第52図 段状遺構9 (1/80)



第53図 段状遺構10 (1/80)

段状遺構9 (第11・52図)

6 d区中央付近の南斜面に位置し、緩斜面を「L」字形に掘削して築造される。床面は北側に円弧状の高まりがあり、中央付近から北西方向に小溝がみられる。検出状況から4基の支柱穴を有する竪穴住居の可能性はある。出土遺物がわずかに認められ、弥生後期末葉頃と思われる。(澤山)

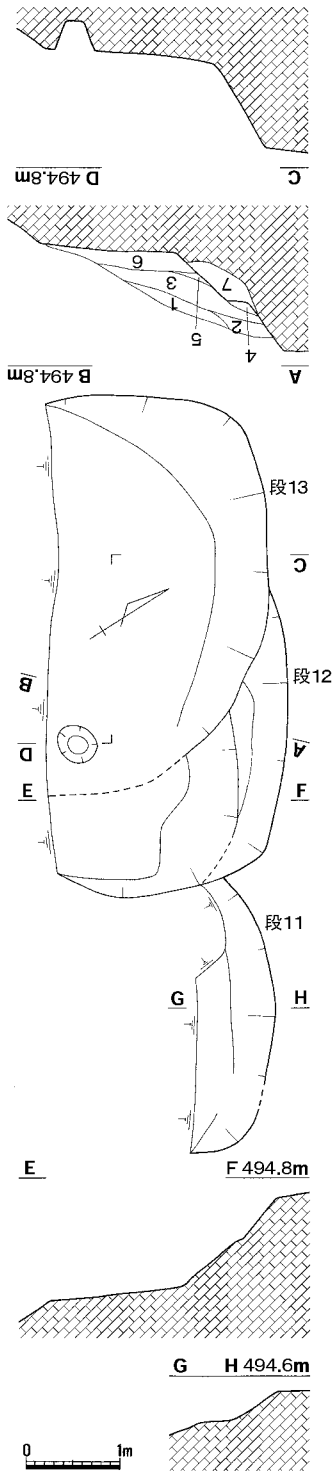
段状遺構10 (第11・53図)

7 e区西側中央付近の南斜面に位置する。平坦面からの急斜面を「L」字形に掘削して、平坦面を築造している。ただし南側は削平を受けており、性格は判然としない。図化していないが出土遺物がみられ、時期は弥生後期末葉頃と思われる。(澤山)

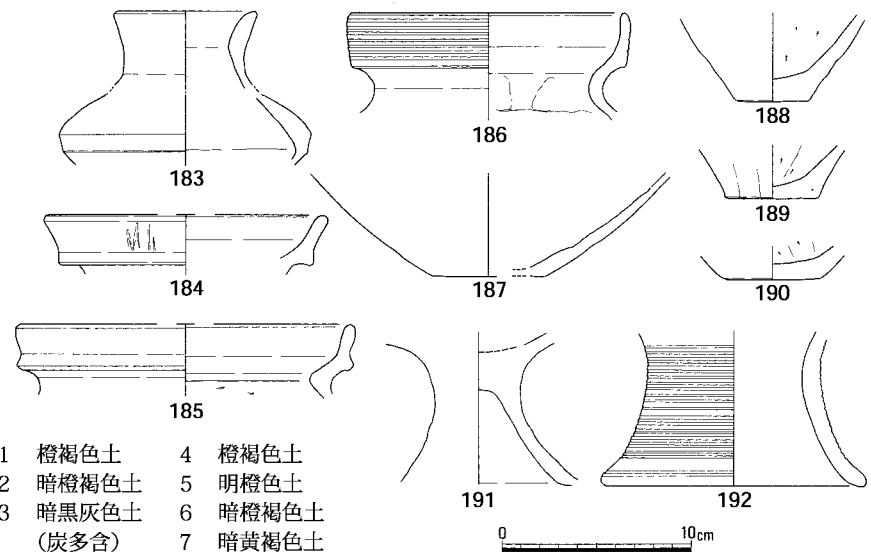
段状遺構11~13 (第11・54・55図、図版8)

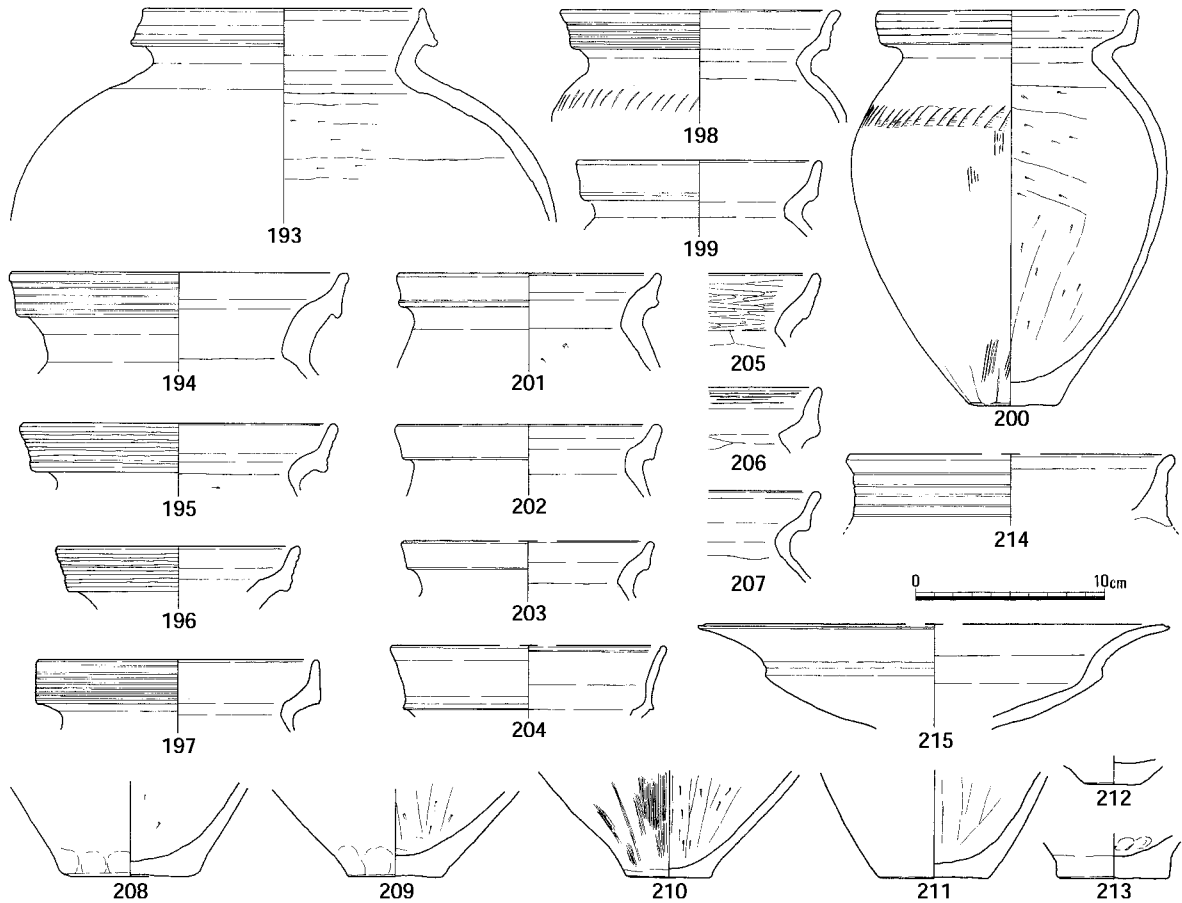
11は6 e区北東付近、12・13は6 e区の北側中央付近の南斜面で、現状では平坦面から急斜面に移行する部分に位置する。それぞれ切り合い関係がみられ、11→12→13の順に新しい。いずれも急斜面を掘削して平坦面を築造するが、床面状況から南側では盛り土・貼り床がなされたと思われる。柱構造は判然としない。

遺物はまとめて出土したが、検出段階でこれらが同一遺構と認識したために、詳細な分別が困難となった。11・12からは壺183、甕184~187、底部188~190、高杯191がみられる。192は器種が不明瞭だが、外面に沈線が巡り、外面から脚端部まで赤色顔料が僅かに残ることから器台と思われる。13からは壺193・214、甕194~207、底部208~213、高杯215や円礫が確認された。時期は弥生後期後葉と思われる。(澤山)



第54図 段状遺構11~13 (1/80)・段状遺構11・12出土遺物 (1/4)

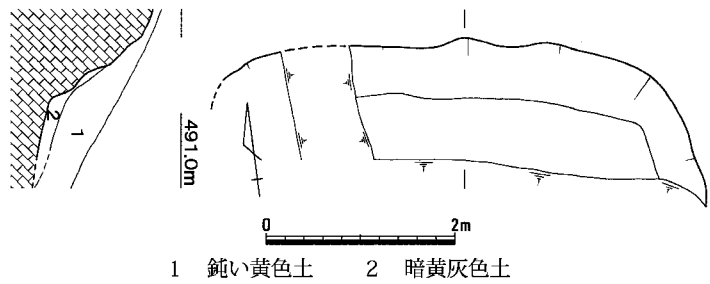




第55図 段状遺構13出土遺物 (1/4)

段状遺構14 (第12・56図)

10d区南斜面に位置する方形の段で、第1層は竪穴住居14の掘削時に排出されたと考えられる土で、第2層は流入土である。竪穴住居との関係から弥生後期後葉頃と推察されるが、機能については床面の大半が流出しているため明確でない。(杉山)

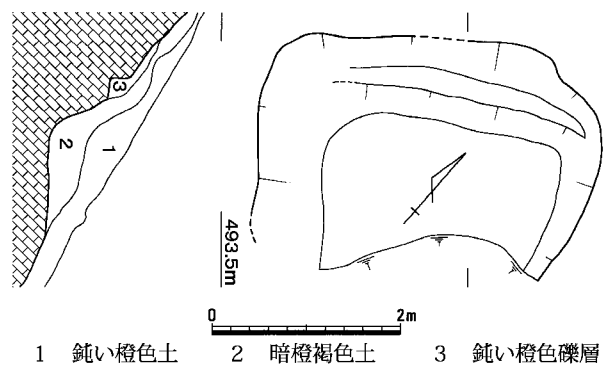


1 鈍い黄色土 2 暗黄灰色土  
第56図 段状遺構14 (1/80)

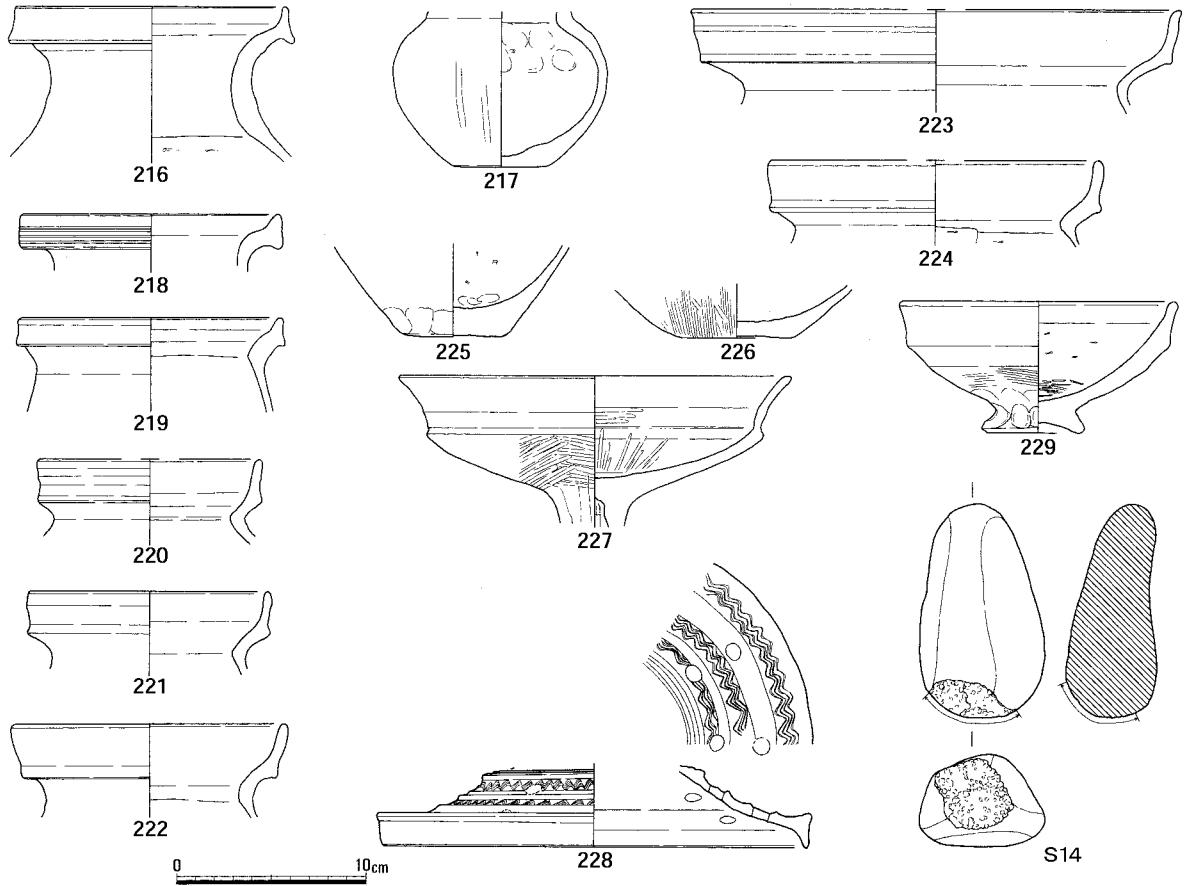
段状遺構15 (第11・57・58図、図版8・14)

7・8e区の東斜面に位置する方形の段で、奥側に幅約25cmで床面からの高さ約60cmのテラスを持つ。床面はほぼ水平だが焼土面や柱穴はない。第1層は竪穴住居10・11の掘削時に排出されたと考えられる土で、第2・3層がそれ以前の流入・崩落土である。

出土遺物は大半が第2層中に含まれている。216~218は壺、219~226は甕、227・228は高杯、229は脚付杯、S14は叩き石である。



1 鈍い橙色土 2 暗橙褐色土 3 鈍い橙色礫層  
第57図 段状遺構15 (1/80)



第58図 段状遺構15出土遺物 (1/4)

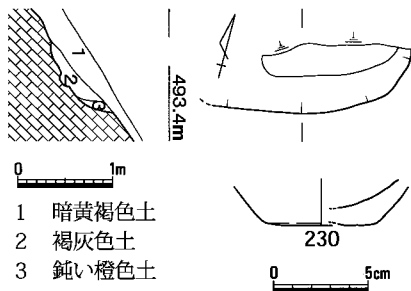
227は床面出土で杯部外面には放射状にミガキを施す。228は外面に櫛描き波状文を施す。227～229には赤色顔料が塗布される。時期は、出土土器から弥生後期後葉と判断できる。(杉山)

段状遺構16 (第12・59図)

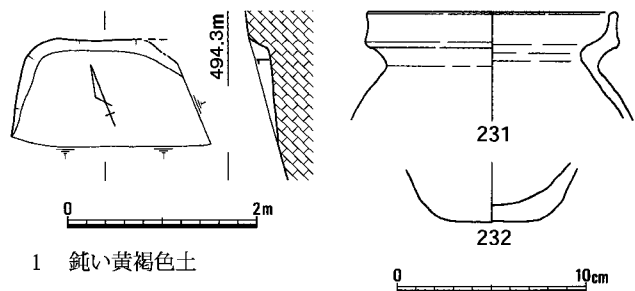
11c区西斜面に位置する。流出が著しく床面もほとんどないので機能は不明である。埋土はすべて流入土で、遺物は弥生土器の小片が第1・2層にあるのみである。時期は、竪穴住居22と選地が似ることから弥生後期後葉頃と推察される。(杉山)

段状遺構17 (第12・60図)

13e区の南斜面に位置し、上面を築城時に削平を受けている。床面は水平だが焼土面などはみられない。遺物は北西隅の床面で弥生土器の甕231・232が出土した。段の機能は明確ではないが、時期は出土土器から弥生後期後葉頃と考えられる。(杉山)



第59図 段状遺構16 (1/80)・出土遺物 (1/4)

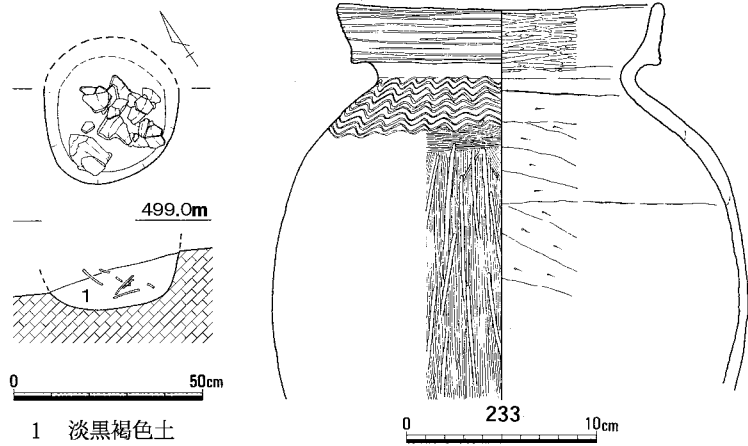


第60図 段状遺構17 (1/80)・出土遺物 (1/4)

3 土 墳

土墳 1 (第11・61図、図版5・9)

4 a 区中央付近の西斜面に位置し、現状では平坦面となる部分にあたる。土墳内からは破碎した甕と拳大の礫が出土した。甕233は口径16.7cmで外面胴部にハケメ後ヘラミガキ、肩部と口縁部に波状貝殻条痕文を施し、内面胴部はヘラケズリ、口縁部はヘラミガキを行っている。時期は弥生後期後葉と思われる。(澤山)

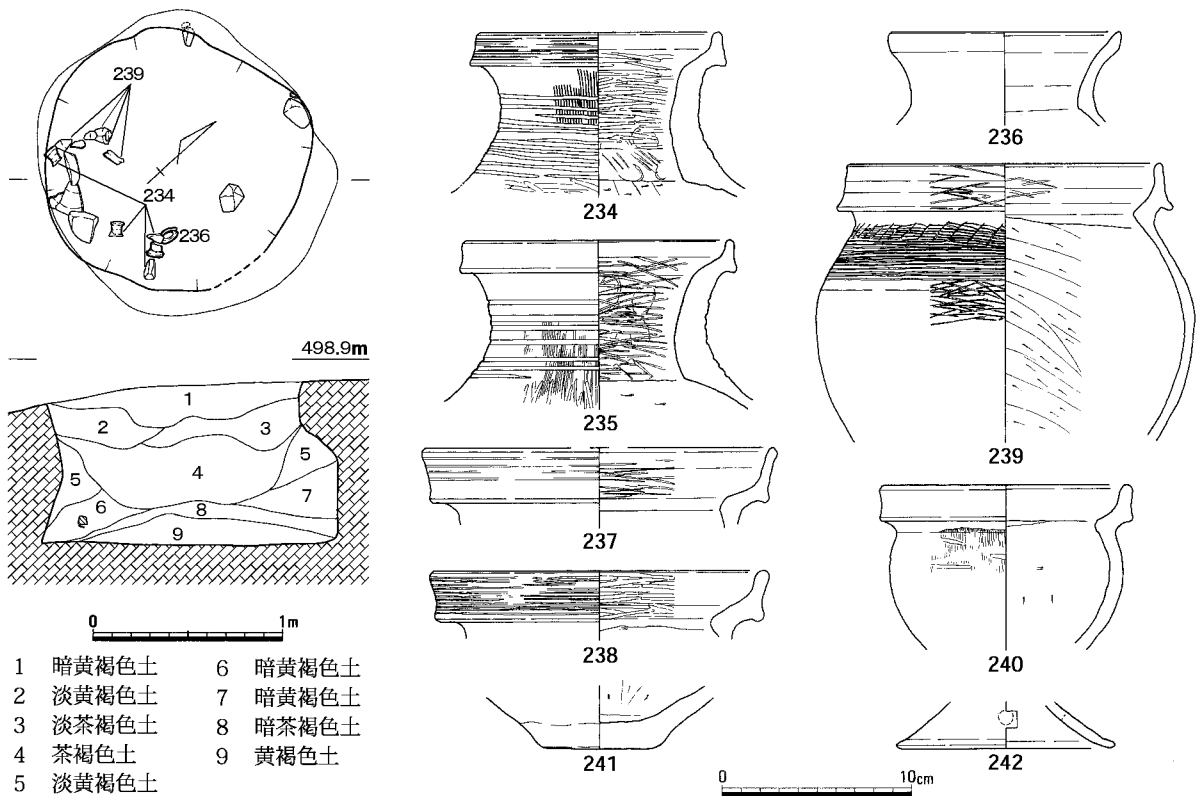


第61図 土墳 1 (1/20)・出土遺物 (1/4)

土墳 2 (第11・62図、図版9)

4 b 区南東付近の南斜面で、現状では平坦部に位置する。遺構形状から貯蔵穴と考えられる。土層断面をみると、初期流入土の第8・9層が凸状に堆積していた後、第5～7層、そして最終的に第1～4層がレンズ状に堆積している状況がみてとれる。また、第8層には炭片・焼土粒を含む。

出土遺物をみると、口径12.6cmの壺234、口径14.0cmの壺235、口径12.1～12.6cmの壺236、口径18.4cmの甕237、口径17.4cmの甕238、口径16.4cmの甕239、口径12.9cmの甕240、底径5.8cmの底部241、底径11.0cmの高杯242などがみられた。また、図化していないが、円礫が2個出土しており、うち1個に被熱痕跡が認められる。時期は弥生後期後葉と思われる。(澤山)

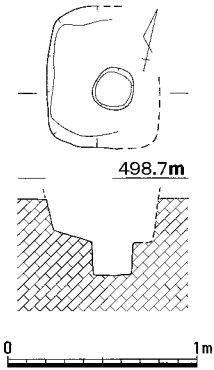


- |         |         |
|---------|---------|
| 1 暗黄褐色土 | 6 暗黄褐色土 |
| 2 淡黄褐色土 | 7 暗黄褐色土 |
| 3 淡茶褐色土 | 8 暗茶褐色土 |
| 4 茶褐色土  | 9 黄褐色土  |
| 5 淡黄褐色土 |         |

第62図 土墳 2 (1/40)・出土遺物 (1/4)

土壌3 (第11・63図)

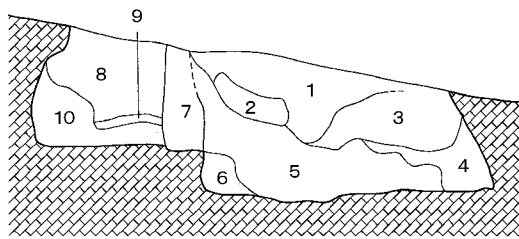
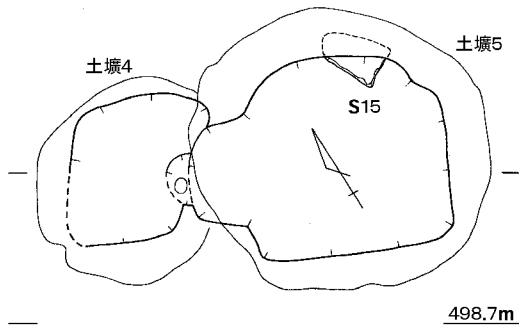
4b区の重機攪乱面で検出した。東側は植物根により攪乱を受けており平面形は不明瞭だが、底面には径約20cmのピットを持ち、底面は比較的平らである。規模が小さいことから柱穴の可能性も否定できない。出土遺物がないが、暗灰褐色の埋土の状況から土壌4と同時期頃と推察される。(杉山)



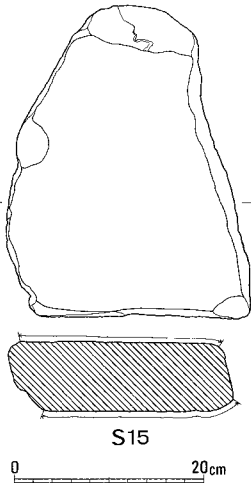
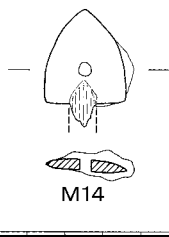
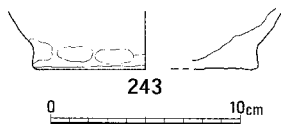
第63図 土壌3 (1/40)

土壌4・5 (第11・64図、図版5・16)

5c区の重機攪乱面で検出した。土層観察から4の埋没後に第7層のピットが掘られ、その後に5が掘削されている。平面形は5の西側上面が崩れて歪になっているが、両者とも方形を意識していると推察される。遺物は5の底面付近からのみ出土し、弥生土器243は甕、M14は鉄鏃、S15は使用頻度の高くない台石である。時期は出土土器から弥生後期後葉頃に機能していたと考えられる。(杉山)



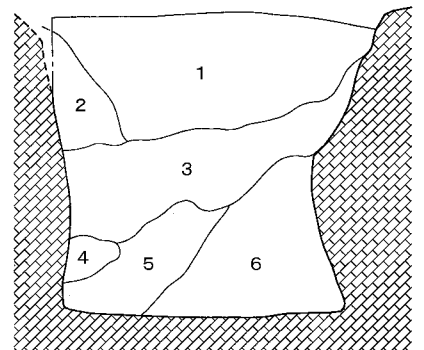
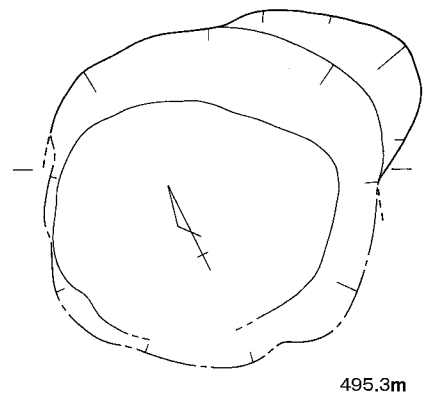
- |              |          |
|--------------|----------|
| 1 淡灰黄色土      | 8 暗灰褐色土  |
| 2 黄白色地山ブロック  | 9 地山ブロック |
| 3 灰褐色土       | 10 暗灰褐色土 |
| 4 暗灰褐色土      |          |
| 5 灰褐色土       |          |
| 6 暗灰褐色土      |          |
| 7 暗灰褐色土(ピット) |          |



第64図 土壌4・5 (1/40)・出土遺物 (1/2・1/4・1/8)

土壌6 (第11・65図)

4c区の竪穴住居7の埋没後に掘削された円形土壌である。埋土は第6層が地山の崩落土で第1～5層は流入土である。出土遺物は弥生土器の小片があるのみで時期は明確でないが、周辺の状況から古墳時代前期頃に機能したと推察される。(杉山)

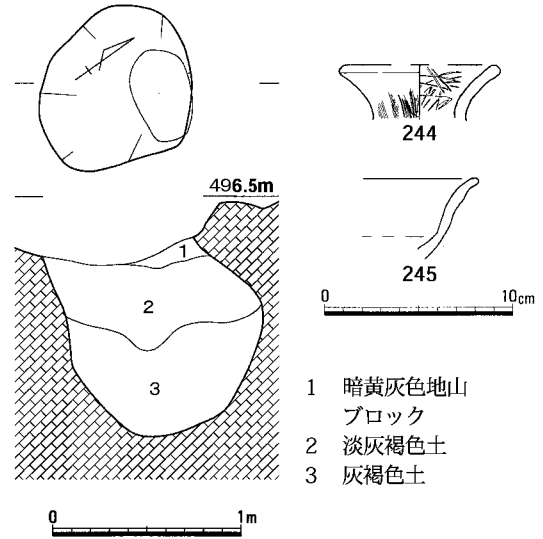


- |         |          |
|---------|----------|
| 1 暗褐色土  | 4 地山ブロック |
| 2 暗褐色土  | 5 褐色土    |
| 3 暗黄褐色土 | 6 地山礫層   |

第65図 土壌6 (1/40)

土壌7 (第11・66図、図版4)

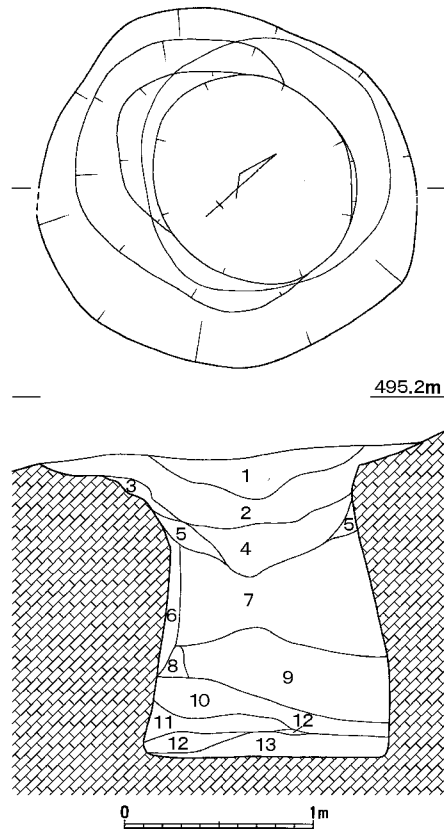
5c区中央付近の南斜面に位置し、現状で急斜面から平坦面に移行する部分にあたる。遺構形状から貯蔵穴と思われる。段状遺構4に先行すると考えているが、付属施設として機能した可能性も考えられる。出土遺物は口径7.7cmを測り、外面ハケメ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキを行っている壺244や破片の高杯245などがみられる。時期は弥生後期後葉から末葉と思われる。(澤山)



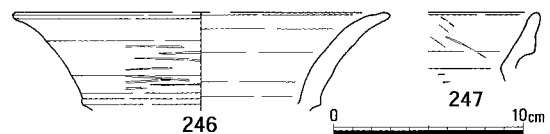
第66図 土壌7 (1/40)・出土遺物 (1/4)

土壌8 (第11・67図、図版4)

5d区中央付近の南斜面に位置し、現状では緩斜面から平坦面に移行する部分にあたる。遺構形状から貯蔵穴と思われる。土層断面から初期流入土の第10~13層の堆積後、第6~9層、そして最終的に第1~5層のレンズ状堆積がみてとれる。第12層では炭片・焼土粒を含む。遺物は口径19.6cmを測る鼓形器台246、甕247の破片などが出土しており、時期は弥生後期末葉と思われる。(澤山)



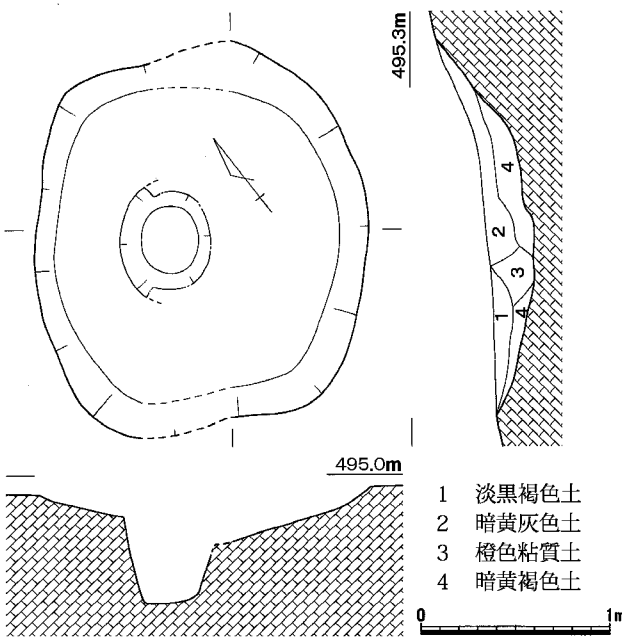
- |         |          |          |
|---------|----------|----------|
| 1 淡黒褐色土 | 6 淡灰褐色土  | 11 淡灰白色土 |
| 2 暗赤褐色土 | 7 淡灰白色土  | 12 暗赤褐色土 |
| 3 淡黄灰色土 | 8 灰褐色土   | 13 茶褐色土  |
| 4 茶褐色土  | 9 灰緑色土   |          |
| 5 淡茶褐色土 | 10 淡茶褐色土 |          |



第67図 土壌8 (1/40)・出土遺物 (1/4)

土壌9 (第11・68図、図版4)

5d区東側中央付近の南斜面に位置し、現状で平坦面にあたる。段状遺構8の床面精査時に確認され、掘り下げの結果中央に小形の窪みをもつ土壌であることが判明した。しかし、土壌8と平面形態や規模



第68図 土壌9 (1/40)



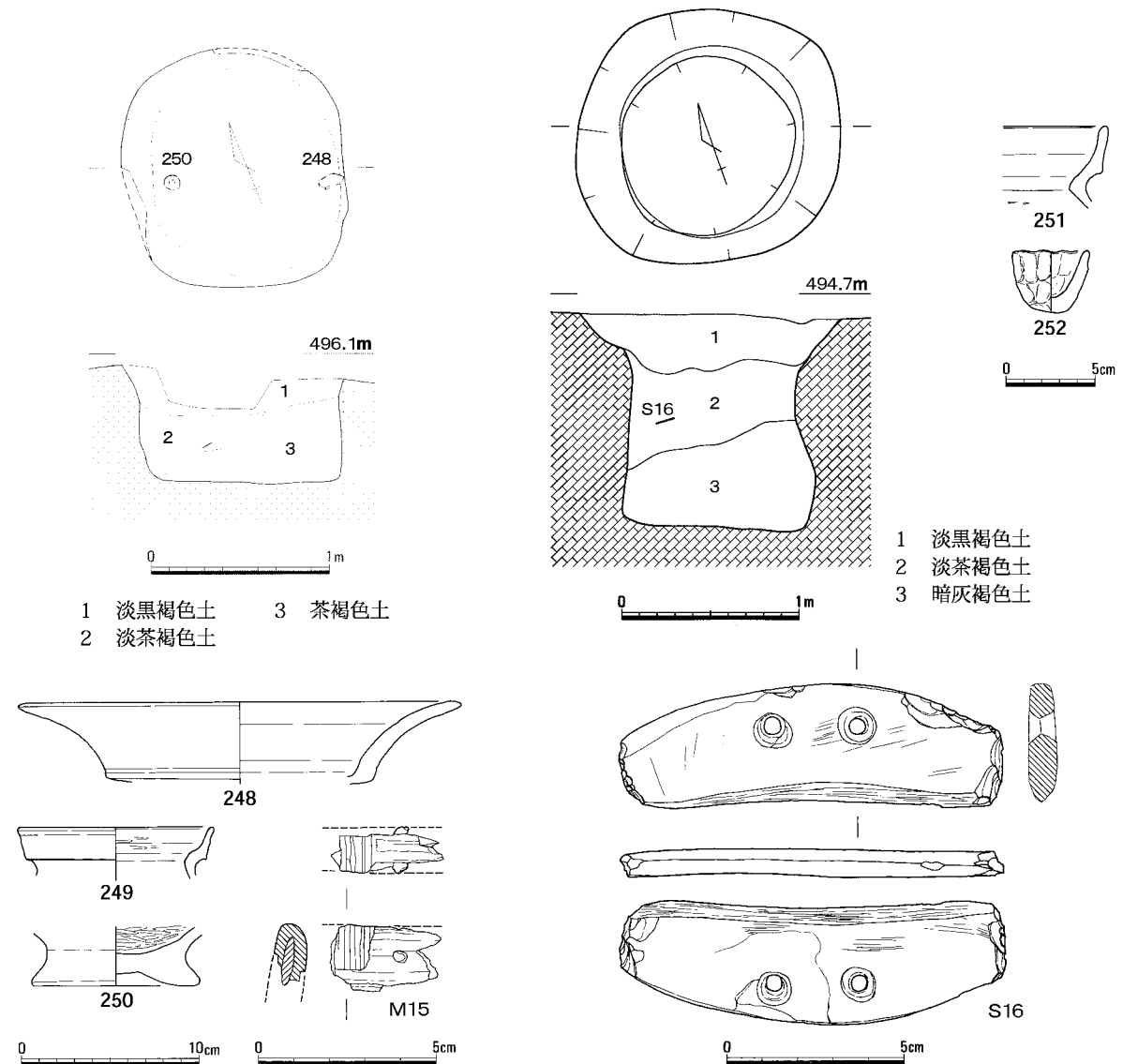
が類似することから、当初は袋状土壌の築造を目指したが、何らかの理由でそれを断念した可能性も考えられる。出土遺物はないが、弥生後期末葉と思われる。(澤山)

土壌10 (第11・69図、図版16)

6c区中央付近の南斜面に位置し、現状で平坦面にあたる。遺構形状から貯蔵穴と考えられ、土層断面から比較的短期間の埋没が想起される。遺物は口径23.5cmを測り、内外面に剥離が進む壺248、口径12.3cmで内外面にヨコナデの甕249、底径9.2cmで内面にヘラミガキを残す鉢250と木質が一部残存する刀子M15などが出土した。時期は弥生後期後葉と思われる。(澤山)

土壌11 (第11・70図、図版14)

6d区南西側付近の南斜面に位置し、現状で平坦面となっている。遺構形状から貯蔵穴と思われ、この平坦面周辺で確認された袋状土壌群の1基である。土層断面からは短期間の埋没が想起される。遺物は破片の甕251、口径4.2cm、器高3.5cmを測る手捏ねの鉢252などや緑色片岩製の磨製石庖丁S16の完形品などが認められた。この第2層から出土した磨製石庖丁S16は、調査出土の唯一の器種である。時期は弥生後期後葉と思われる。(澤山)

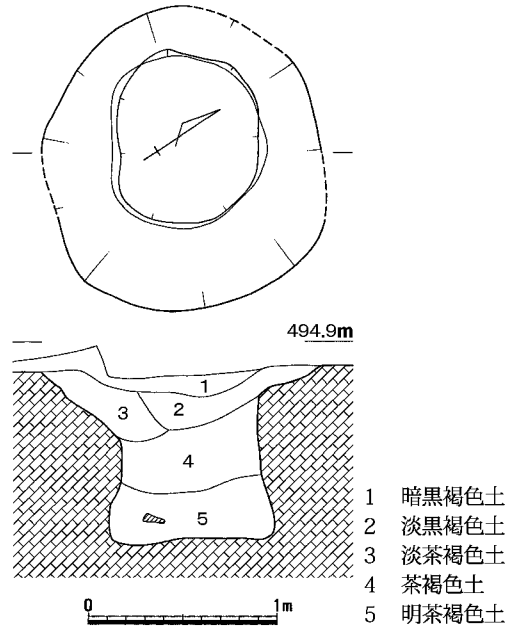


第69図 土壌10 (1/40)・出土遺物(1/2・1/4)

第70図 土壌11 (1/40)・出土遺物 (1/2・1/4)

土壌12 (第11・71図)

6 d区南側中央付近の南斜面に位置し、検出過程において第1層は段状遺構9の埋土にあたることから、遺構はこれより古いと考えられる。遺構形状から貯蔵穴であろう。土層断面から第4・5層の流入後、第1～3層の二次堆積がみてとれる。遺物は若干出土しており、時期は弥生後期後葉と思われる。(澤山)



第71図 土壌12 (1/40)

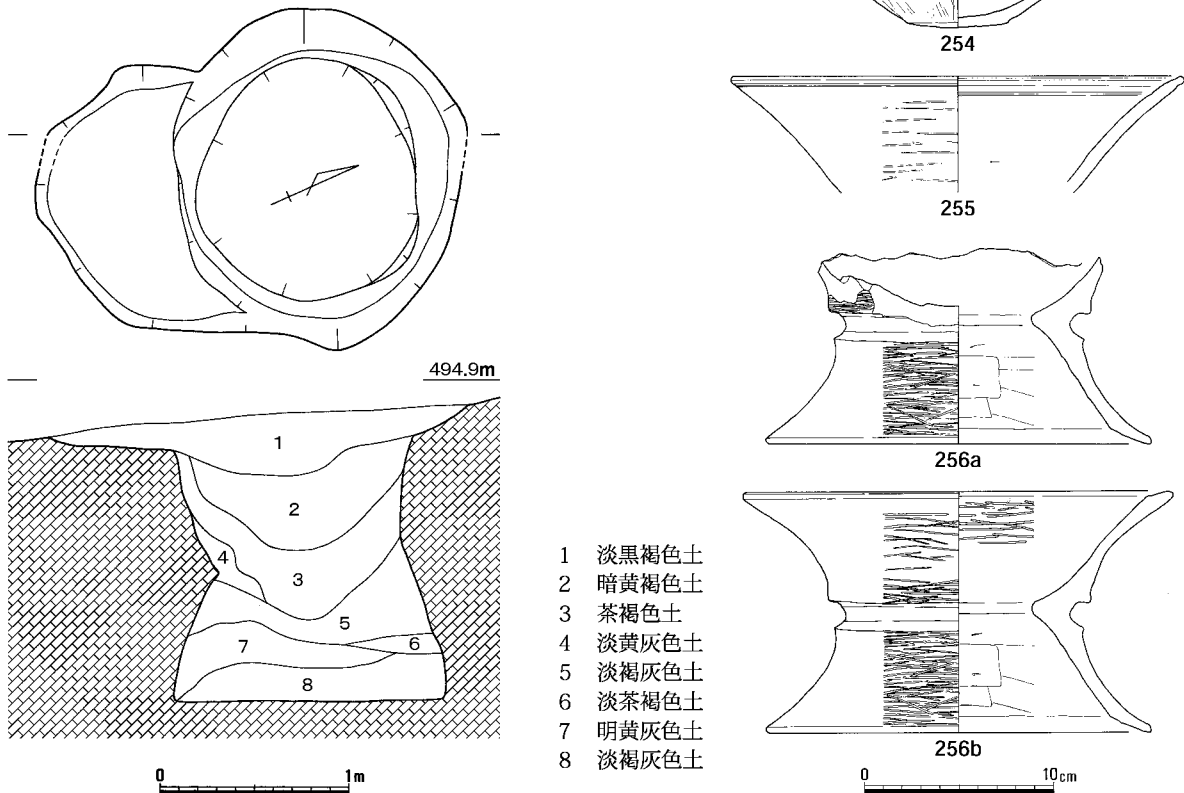
土壌13 (第11・72図、図版9)

6 d区南側中央の南斜面で、現状で平坦部分に位置する。検出では南側の浅いたわみを除去して遺構の掘り方を確認した。遺構形状から貯蔵穴と思われる。土層断面から第5～8層の流入後、第1～4層の二次堆積がみてとれる。出土遺物をみると、口径18.6cmの甕253、底径5.3cmの底部254、口径23.5cmの鼓形器台255、口径22.2cm、底径20.2cm、器高12.8cmの鼓形器台256や円礫片が認められた。なお、鼓形器台256aは土壌14からの破片との接合から256bとなった。

時期は古墳前期初頭と思われる。(澤山)

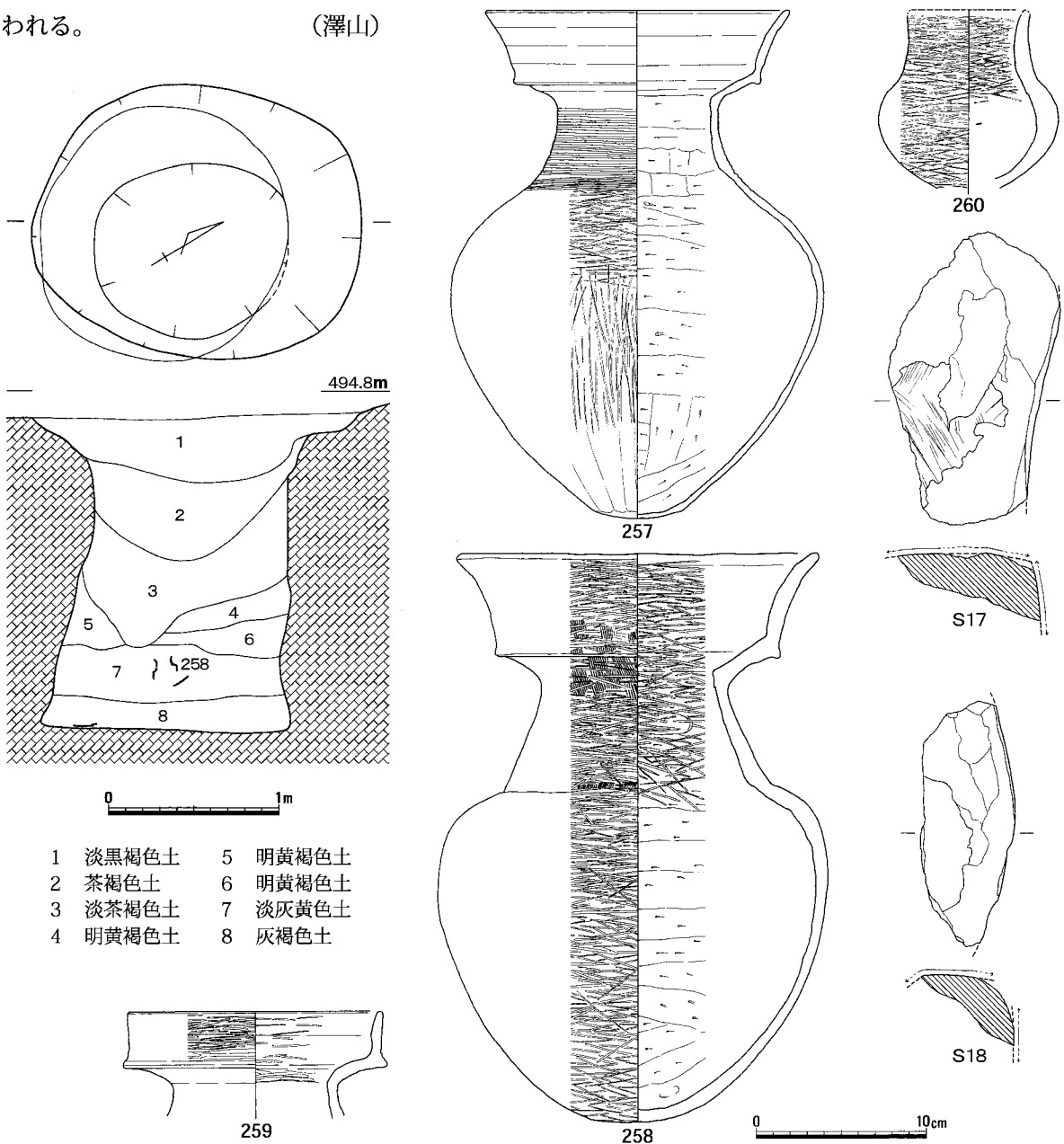
土壌14 (第11・73・74図、図版9・10)

6 d区南東側の南斜面に位置し、現状で平坦部分に

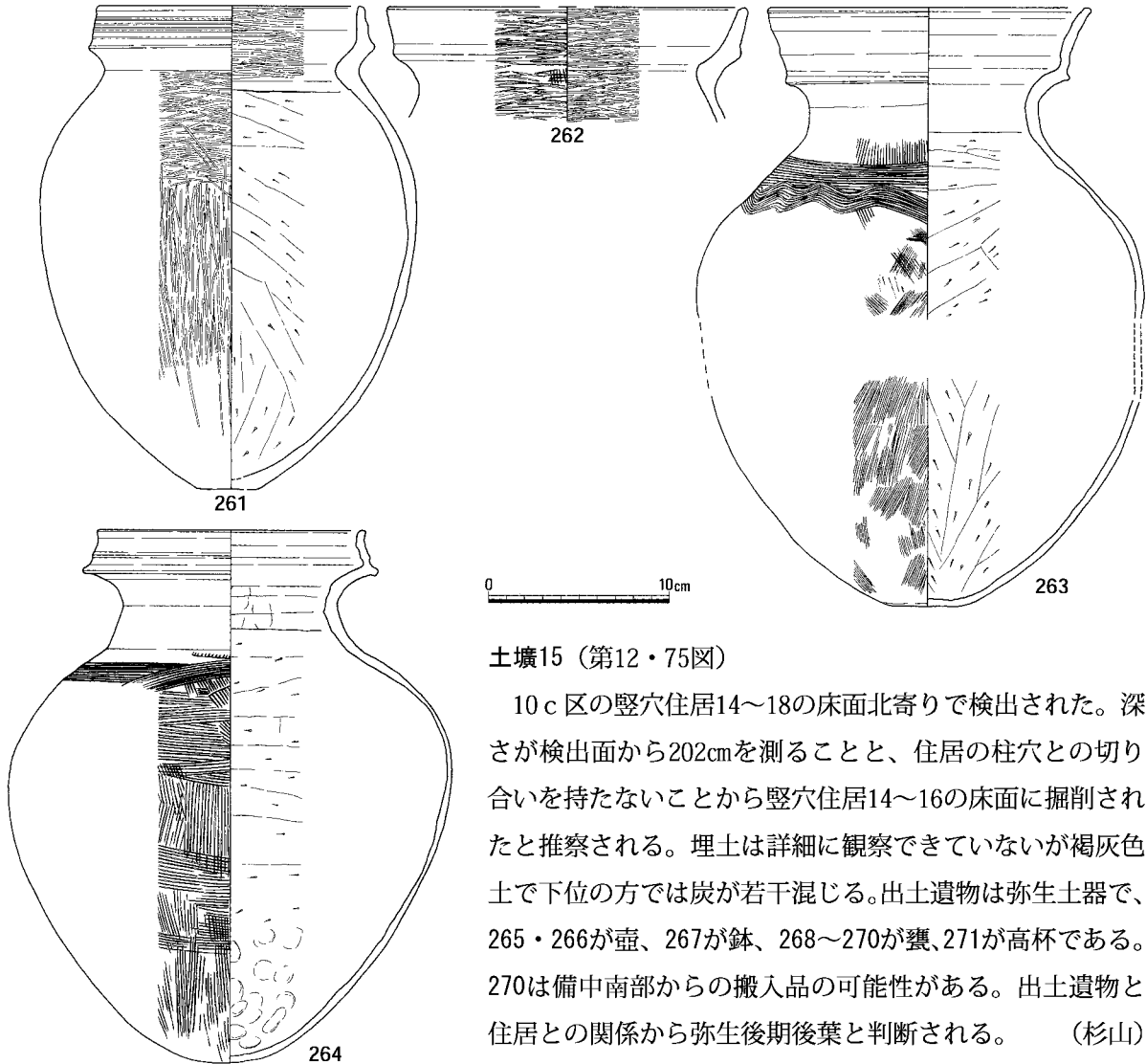


第72図 土壌13 (1/40)・出土遺物 (1/4)

あたる。遺構形状から貯蔵穴と考えられる。土層から初期流入土の第7～8層が堆積した後、第4～6層、そして最終的に第1～3層がレンズ状に堆積している状況がみてとれる。第7層では炭片・焼土粒も包含される。遺物は初期流入土に多くみられる。口径17.7cm、底径5.0cm、器高30.0cmの壺257は、外面胴部ヘラミガキ、頸部沈線文を行う。口径20.5cm、底径4.4cm、器高33.5cmの壺258は、外面ハケメの後ヘラミガキ、内面にヘラミガキを行う。口径14.8cmの壺259は口縁部にヘラミガキを行い、丹塗りである。口径6.7cmの鉢260はヘラミガキを行う。甕261は口径14.4cm、底径3.4cm、器高26.7cmを測り、外面胴部ヘラミガキ、口縁部沈線文、内面口縁部ヘラミガキを行う。甕262は口径19.6cmでヘラミガキがみられる。甕263は口径17.4cm、底径5.0cm、推定器高33.2cmを測り、外面胴部ハケメの後、肩部に波状文、沈線文を巡らす。甕264は口径14.2cm、底径24.5cm、器高29.5cmを測り、外面胴部にハケメを行い、内面胴部下半に指頭圧痕がみられる。また、被熱痕跡がある砥石片S17・S18などがある。時期は古墳前期初頭と思われる。(澤山)



第73図 土層14 (1/40)・出土遺物① (1/4)



第74図 土壌14出土遺物② (1/4)

土壌15 (第12・75図)

10c区の竪穴住居14~18の床面北寄りで検出された。深さが検出面から202cmを測ることと、住居の柱穴との切り合いを持たないことから竪穴住居14~16の床面に掘削されたと推察される。埋土は詳細に観察できていないが褐灰色土で下位の方では炭が若干混じる。出土遺物は弥生土器で、265・266が壺、267が鉢、268~270が甕、271が高杯である。270は備中南部からの搬入品の可能性がある。出土遺物と住居との関係から弥生後期後葉と判断される。(杉山)

土壌16 (第12・76図)

11c区の竪穴住居19・20の床面北寄りで検出された。上面に炭が散布していたことから住居使用時には埋まっていたと考えられ、地山が花崗岩の岩盤であったために掘削途中で廃棄したと推察される。住居と同時期の弥生後期後葉頃と判断される。(杉山)

土壌17 (第12・77図)

12c区の竪穴住居19・20に伴う削平段の床面で検出した。埋土中には第2層に若干の炭が含まれる。機能は不明で、住居使用時に機能していた可能性もあるが、深さが浅いことから段の掘削時に上面が削平されたとも考えられる。時期は弥生土器の甕272から弥生後期後半頃と推察される。(杉山)

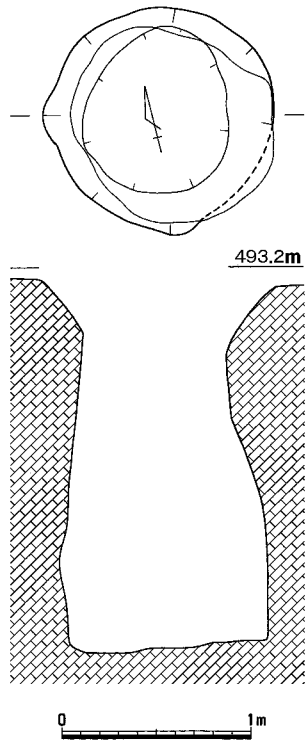
土壌18 (第12・78図、図版5)

12c区の北斜面で検出した。埋土中には第1層を中心に炭が多く含まれる。断面形が横穴状を呈しており、北西部に僅かに傾斜変換点を持つ。出土遺物はないが、竪穴住居23の柱穴に切られ、形状が土壌19に類似することから弥生後期後半と判断される。(杉山)

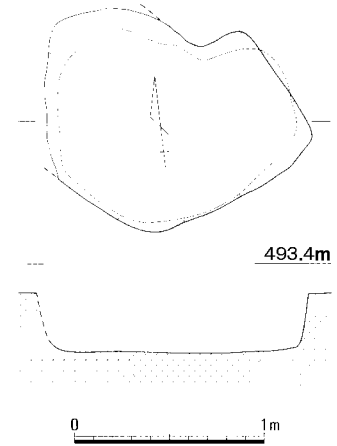
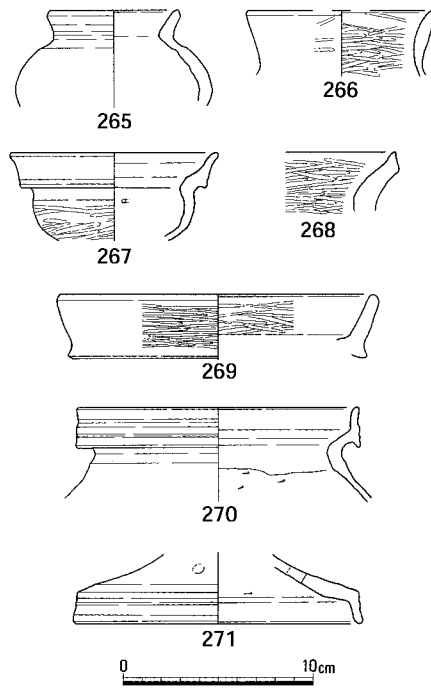
土壌19 (第12・79図、図版5・10・15)

12c区の北斜面付近で検出した。断面形が横穴状を呈し、主軸が土壌18と直交することから同時期に機能していたと考えられる。埋土は流入土と判断され、第1層に少量の炭を包含する。遺物は、第

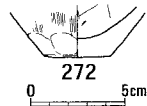
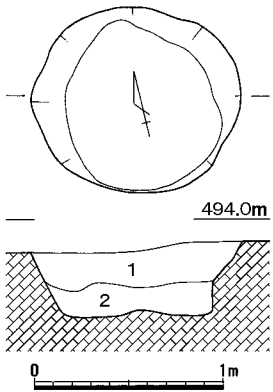
1層中から弥生土器と頁岩製の砥石S19、図示していないがS4と同質の玉素材と考えられる碧玉の碎片1点が出土した。273は甕、274は鈍い黄褐色を呈



第75図 土壌15 (1/40)・出土遺物 (1/4)

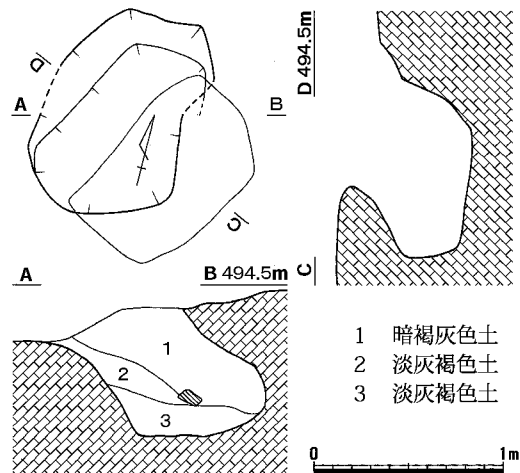


第76図 土壌16 (1/40)

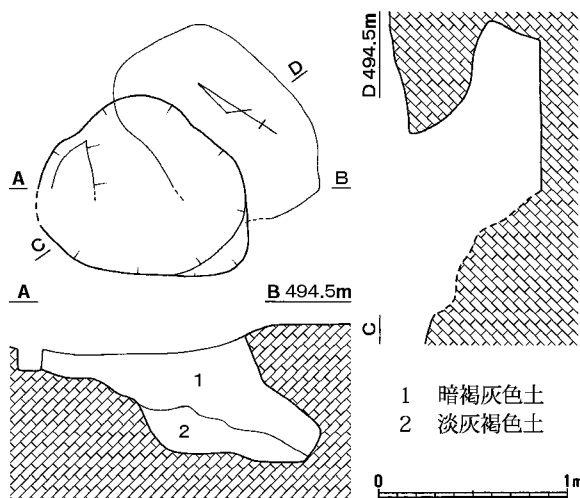


- 1 暗黄褐色土
- 2 鈍い黄褐色土

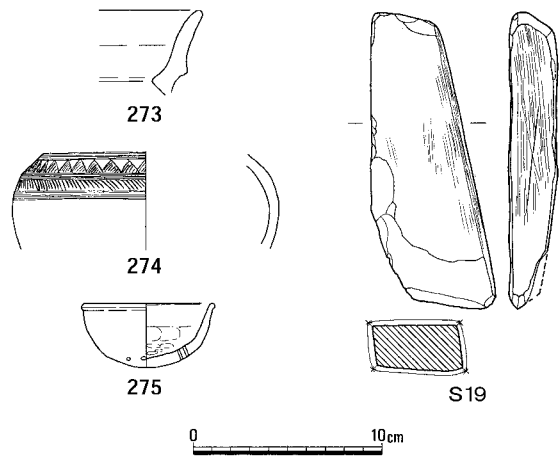
第77図 土壌17 (1/40)・出土遺物 (1/4)



- 1 暗褐色土
- 2 淡灰褐色土
- 3 淡灰褐色土



第78図 土壌18 (1/40)



第79図 土壌19 (1/40)・出土遺物 (1/4)

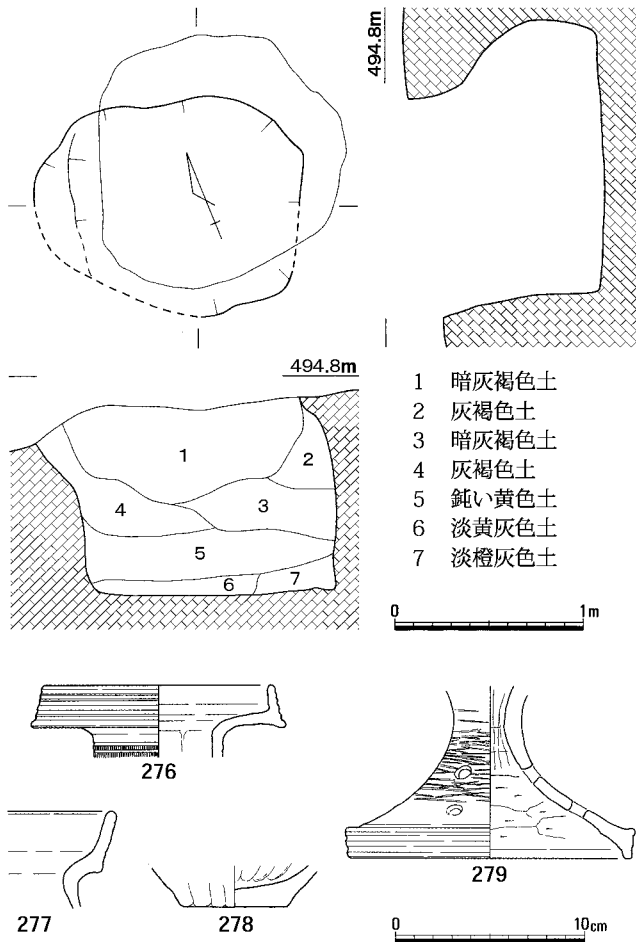
するで、肩部に沈線と鋸歯文が巡る。275は2個一對の穿孔が二カ所あり、蓋と報告される場合もあるがここでは鉢とした。時期は、出土土器から弥生後期後葉と判断される。(杉山)

土壌20 (第12・80図、図版5・10)

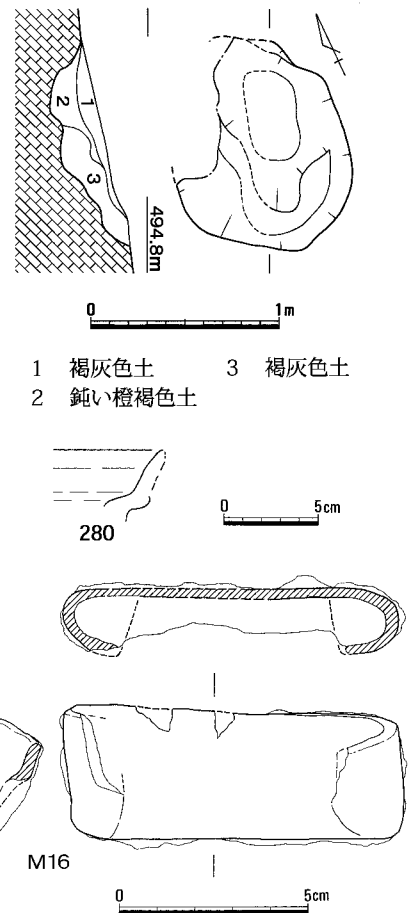
12c区の北斜面部で検出され、西側を竪穴住居23に切られている。上面は築城時に削平を受けていると思われるが、現状での埋土は7層に分層され、第1・2・6層中に炭片が含まれる。第6・7層は流入土の可能性はあるが、第5層は地山ブロックを含まない均質な層で、第2～4層には地山ブロックを含むことから、意図的に埋め戻されたと推察される。第1層は上面の削平を考慮すると掘りかえされた後の流入土の可能性もあるが判然としない。遺物は第1層中から出土した。276は全面に赤色顔料の付着が認められる橙色の壺で、頸部に沈線、口縁拡張部には5条の沈線が巡る。277・278は甕で、277の外面上には沈線が残る。279は鈍い黄橙色を呈する高杯で、拡張された脚端部には2条の擬凹線が巡り、柱部内面にはシボリ痕が看取される。外面には上下二段一組の円孔が3方にある。時期は出土土器から弥生後期後葉と判断される。(杉山)

土壌21 (第12・81図、図版5・16)

12c区の北斜面に位置する不定形の土壌で、底面も凹凸が顕著である。自然の窪みの可能性もあるが第3層中に炭と土器片を含むことから一応土壌として扱う。280は橙色を呈する甕である。鉄製の鋤先M16は第1層上面で出土したが、本遺構に帰属するかどうかは明確でない。時期は土器から弥生後期後葉頃と判断される。(杉山)



第80図 土壌20 (1/40)・出土遺物 (1/4)



第81図 土壌21 (1/40)・出土遺物 (1/2・1/4)

土壌22 (第12・82図)

13c区北斜面に位置し、現状で北土塁下の平坦面の場所にあたる。土壌24・25埋没後に掘削されている。遺構形状から貯蔵穴と考えられ、土層断面から第2・3層が流入した後、第1層の二次堆積がみてとれる。遺物は口径12.7cmを測り、外面口縁部に3条の沈線文を施す甕281が、第3層の底面付近で出土した。時期は弥生後期後葉と思われる。(澤山)

土壌23 (第12・83図)

13c区中央付近の北斜面に位置し、現状では北土塁下の平坦面から急斜面の場所にあたる。底面からは人頭大の礫が1個確認された。出土遺物はなかったが、弥生後期後葉から末葉と思われる。(澤山)

土壌24・25 (第12・84図)

12c区東側中央付近の丘陵北斜面に位置し、現状では北・西土塁下の平坦面にあたる。遺構形状からいずれも貯蔵穴と思われる。土層断面からは24埋没後に25の掘削を示し、第1・2層では炭片・焼土粒を多量に含む。なお、25の第3層の埋土掘削によってこの内壁を検出したが、南側の一部にやや掘り過ぎた場所がある可能性が高い。24の埋土は粗砂と小礫が互層をなしていた。図化した遺物は25からの出土である。壺282は口径15.7cmを測り、「ハ」字状に開く頸部に沈線文を巡らし、口縁部から外上方に端部が立ち上がる。甕283は口径14.7cmで、胴部から屈曲した口縁部の端部が短く引き出されている。甕284は口径17.6cmで胴部から外反した口縁部の端部が外上方に立ち上がる。甕285も同様である。時期は弥生後期後葉と思われる。(澤山)

土壌26 (第12・85図)

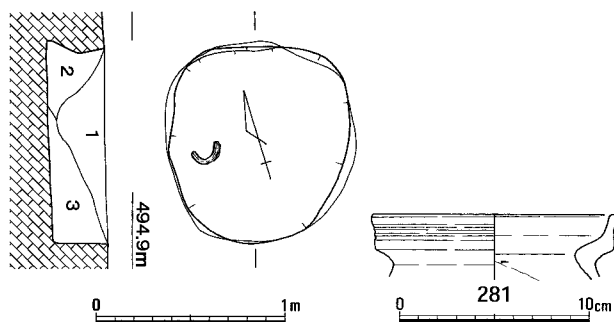
12c区東側中央付近の北斜面に位置し、現状では西土塁下の平坦面の場所にあたる。土壌24・25埋没後に掘削されていると思われる。遺構形状から貯蔵穴と考えられ、土層断面からは第7・8層が流入後、第2～6層、そして第1層の二次堆積がみてとれる。出土遺物は口径7.5cmを測る壺286、底径4.9cmの壺ないし甕の底部287などが認められ、時期は弥生後期末葉である。(澤山)

土壌27 (第12・86図)

12c区東側中央の北斜面で、現状は西土塁下の平坦面に位置する。土壌26の埋没後に掘削され、底面から平石が南東隅で確認された。出土遺物はないが、時期は弥生後期末葉と思われる。(澤山)

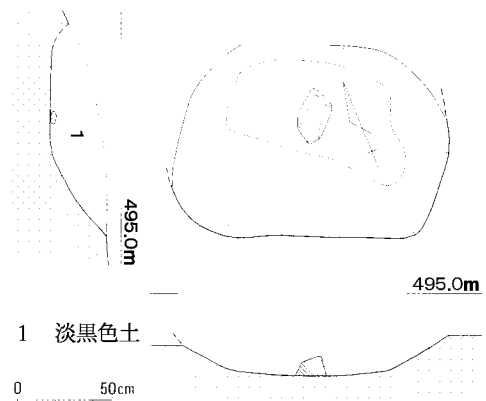
土壌28 (第12・87図、図版10)

13d区北側中央の尾根で、現状では郭面上段の平坦面に位置する。遺構形状から貯蔵穴と考えられ、断面から第5層が流入後、第3～4層、そして炭片を含む第1・2層の二次堆積がみてとれる。遺物

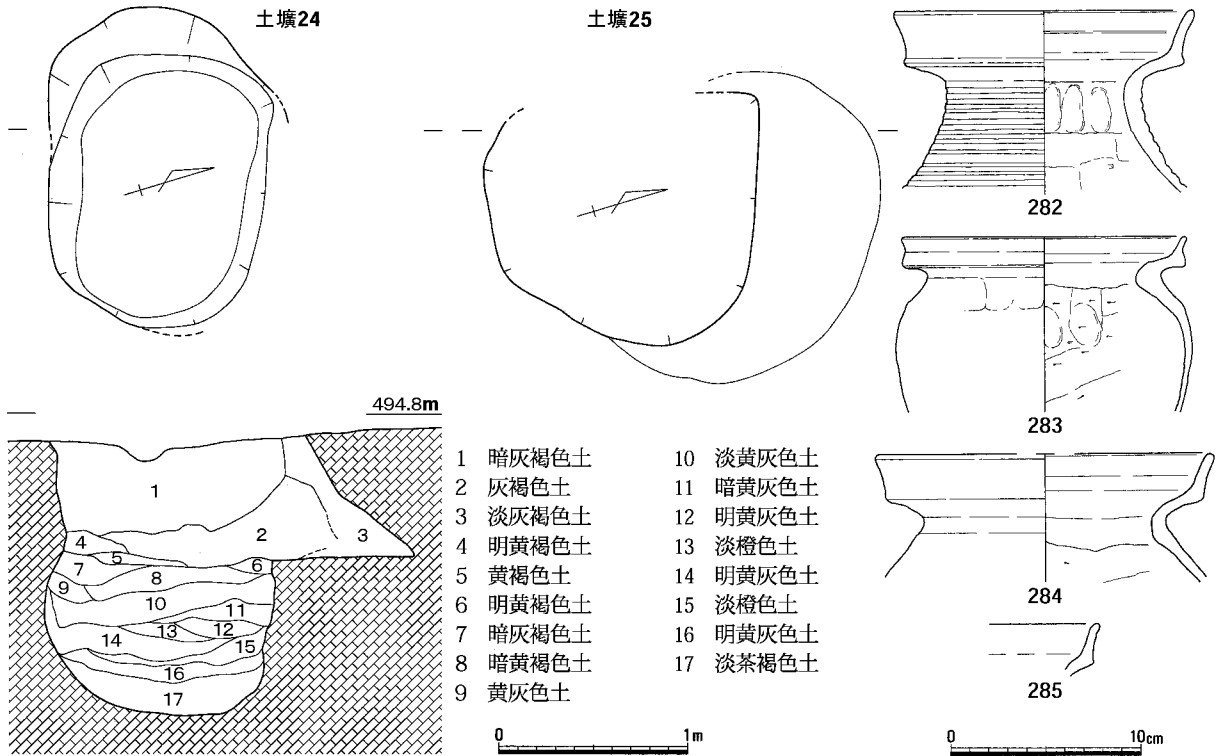


1 暗黒褐色土 3 暗黒灰色土  
2 黒褐色土

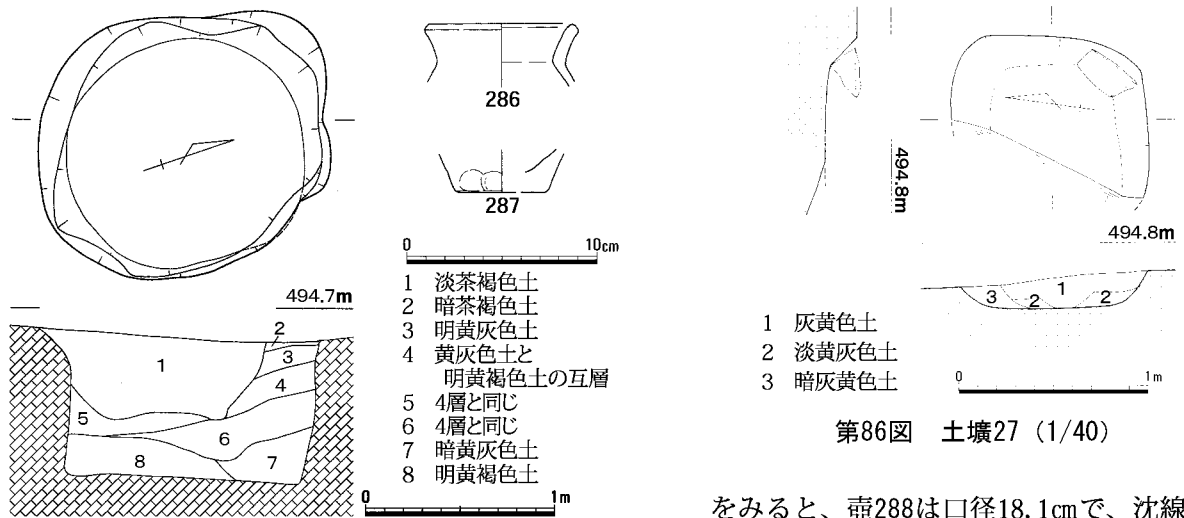
第82図 土壌22 (1/40)・出土遺物 (1/4)



第83図 土壌23 (1/40)



第84図 土壙24・25 (1/40)・土壙25出土遺物 (1/4)



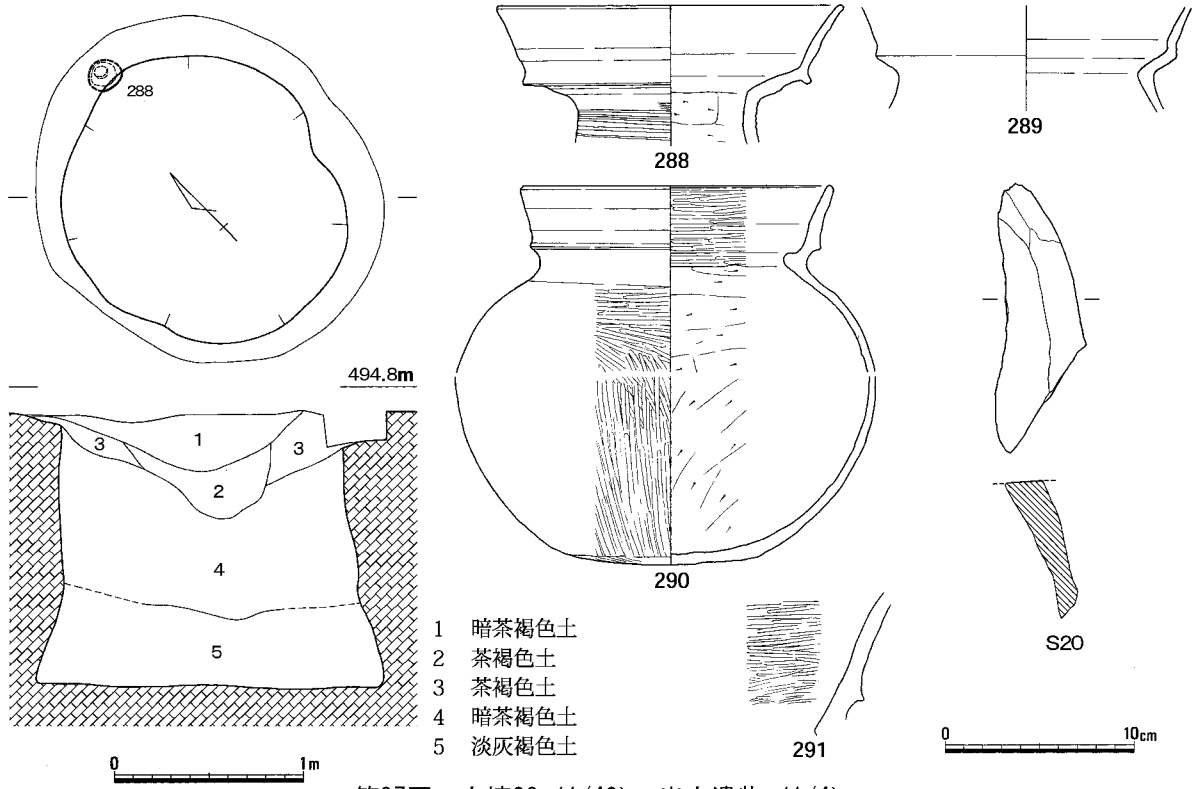
第85図 土壙26 (1/40)・出土遺物 (1/4)

第86図 土壙27 (1/40)

をみると、壺288は口径18.1cmで、沈線文を施した頸部に外反する口縁部から外上方に端部が開く。外面に赤色顔料を残す。壺289は外上方に延びる口縁端部をもつ。甕290は口径16.3cm、底径9.9cm、器高20.0cmで、扁平な球形状の体部で最大胴径は中位にとり、外上方に延びる口縁部は外面ヨコナデ、内面口縁端部と外面胴部にヘラミガキ、胴部内面はヘラケズリを行う。鼓形器台291は内外面に赤色顔料を残す口縁部である。また、花崗斑岩製の砥石S20が出土した。時期は弥生後期末葉と思われる。(澤山) 土壙29 (第12・88図)

13d区南西側の尾根で、現状で郭面上段の平坦面の場所にあたる。検出状況から時期は弥生後期末葉頃と思われるが、周辺の遺構もなく出土遺物も認められなかったため、判然としない。(澤山)

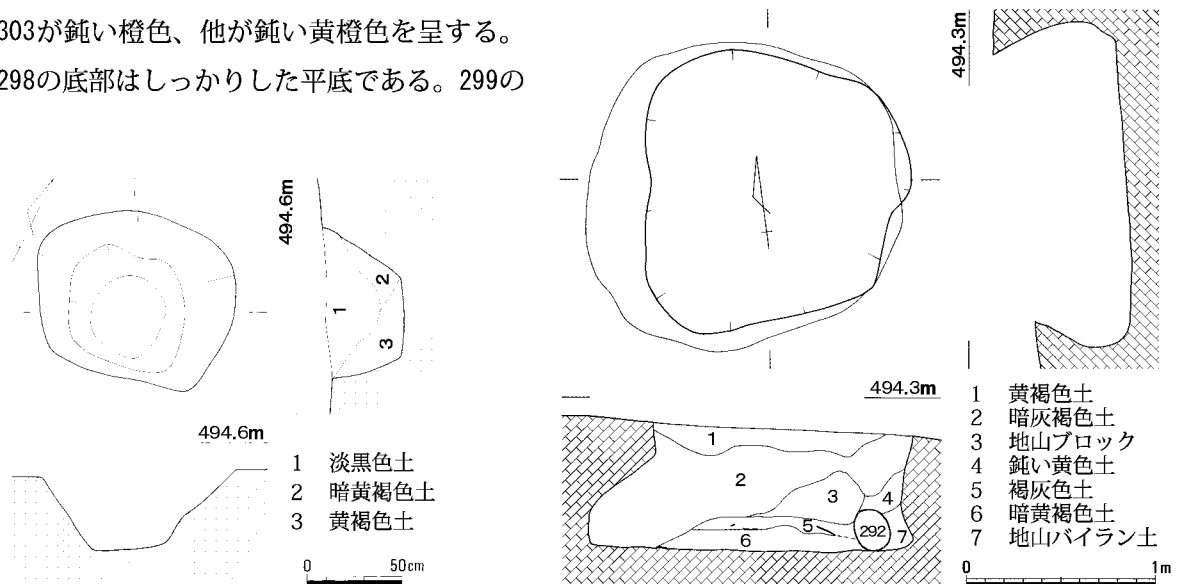




第87図 土壌28 (1/40)・出土遺物 (1/4)

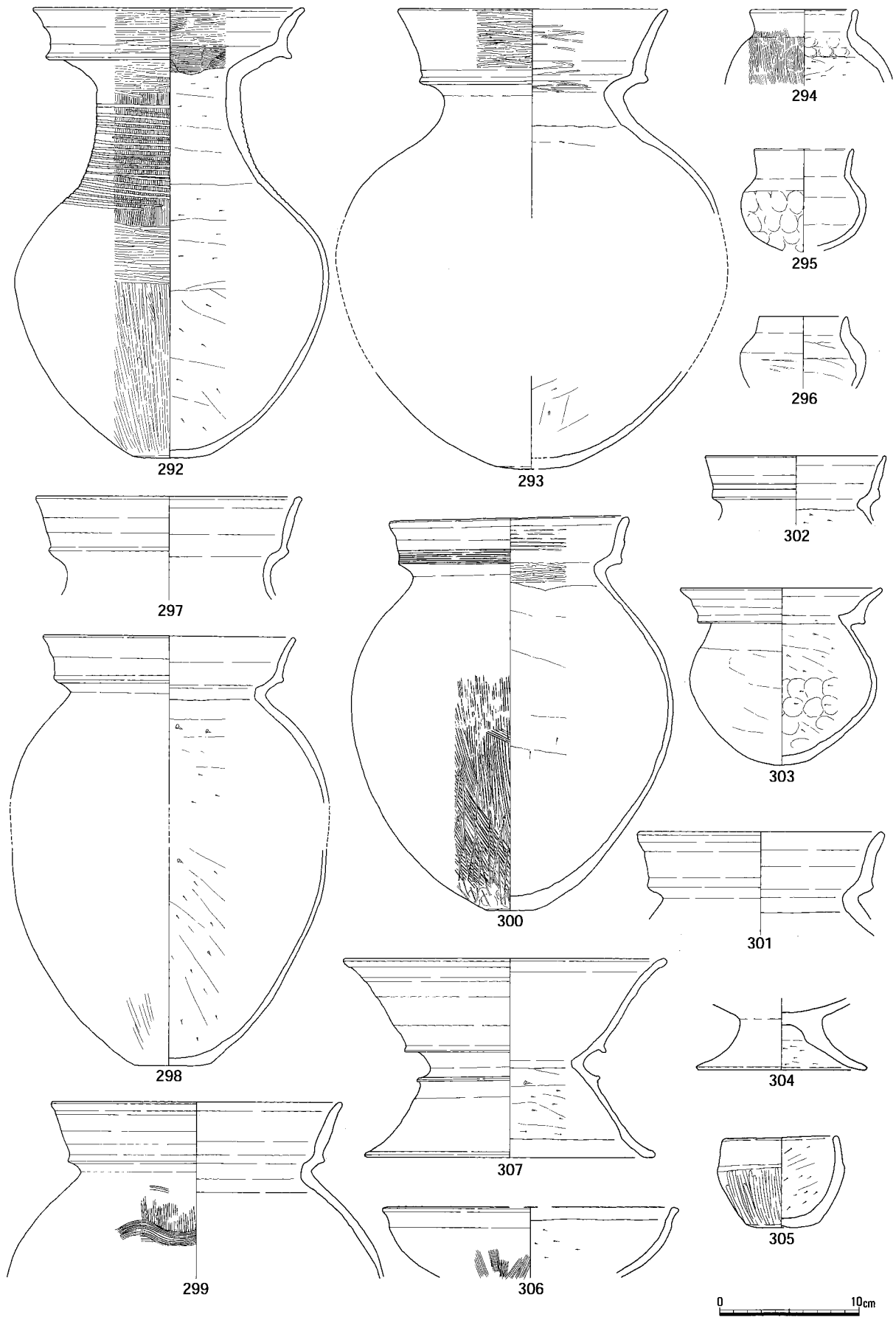
土壌30 (第12・89・90図、図版5・10・11)

13e 区の南斜面側に位置し、上面は築城時の削平を受けている。埋土は7層に分層でき、第5層には少量の炭が含まれる。遺物は292・300・303・306が床面から、その他は第2層を中心とした埋土中から出土した。292は黄褐色を呈する長頸壺で、頸部には螺旋状に沈線を施す。293は浅黄色を呈する壺で、口縁部の内外にはミガキを施す。底部はかるうじて平底を呈し、煤の付着がみられる。292・293は外面全面と口縁部内面に赤色顔料が塗布される。294~296は短頸壺で294が鈍い黄褐色を呈し、他は明褐色を呈する。297は灰白色を呈する壺で、口縁部下端は鈍く突出し、口縁は僅かに外反して端部は丸く収まる。298~303は甕で、300・303が鈍い橙色、他が鈍い黄橙色を呈する。298の底部はしっかりした平底である。299の



第88図 土壌29 (1/40)

第89図 土壌30 (1/40)

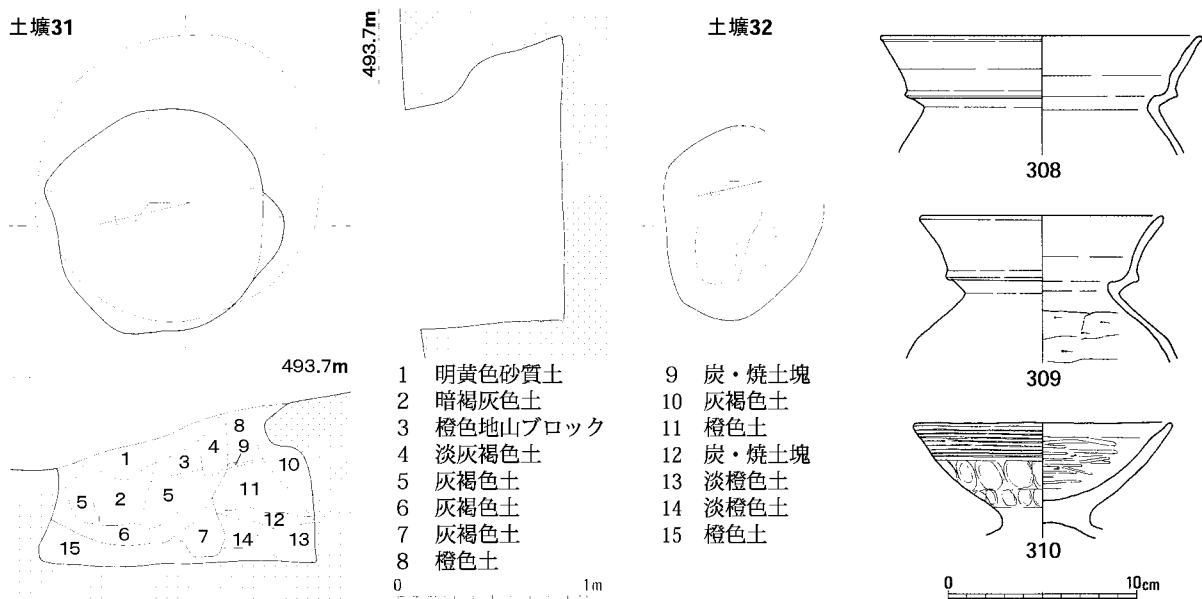


第90図 土壙30出土遺物 (1/4)

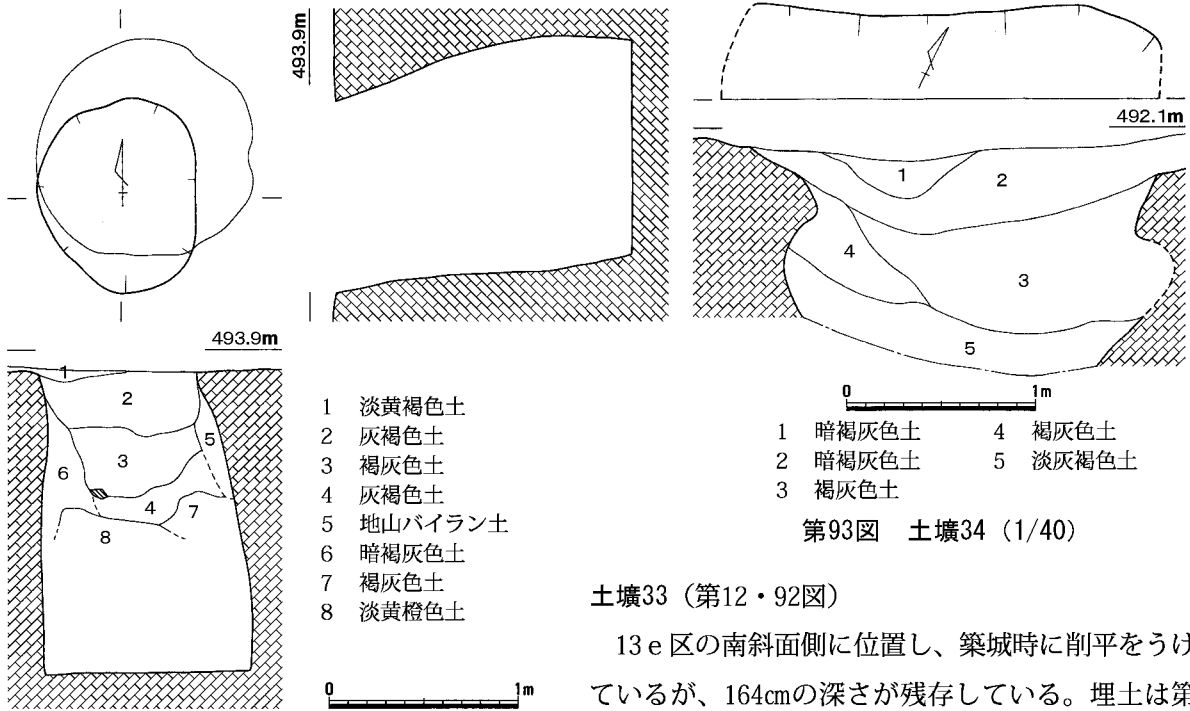
肩部の波状文はハケメと同一工具により施文される。300は口縁部はヨコナデを行うが、下端に沈線が残り、内面にはハケメがみられる。頸部内面にはミガキが看取される。底部外面付近には指頭圧痕がみられ、明瞭な底部を持つ。また、胴部外面にはタテハケメの後ミガキを施すが、最大胴径付近に整形時と思われるタタキ状の面がかすかにみられる。303は器台306に密着して出土した小形甕で、口縁部はヨコナデを行い大きく外反する。胴部外面は丁寧にナデを行い、内面にはヘラケズリの後下半に指頭圧痕が残り、底部はやや平底気味である。304は台状の底部で脚部内面はヘラケズリを行うが、胴部内面は丁寧なナデを行っていることから鉢の可能性はある。305は鉢で、内面は全面ヘラケズリで外面は口縁部を強くナデて稜を持ち、下半は縦方向のミガキを行う。306は鉢と思われるが、外面にはハケメ、内面にはヘラケズリがみられる。口縁端部は強くつまみ出され、端部は面を持つ。307は鈍い橙色を呈する鼓形器台で、口径23cm、脚径20.5cm、器高14.3cm、筒部内径約9cmを測る。外面全面はヨコナデで口縁部内面は丁寧なナデを行うが、端部はヨコナデの稜線を残す。時期は、292が古い様相を残すものの、古墳前期前葉まで機能したと判断される。(杉山)

土壌31・32 (第12・91図、図版11)

14e区の南斜面に位置し、上面は築城時の削平を受けている。第1～6層が32の埋土で、第7層は不明瞭だが第8層以下が31の埋土である。埋土は第12層が焼土と炭のブロック層だが、その他の層には地山ブロックが多量に含まれることから人為的に埋め戻されたと考えられ、31を埋めた後に32を掘削していると判断される。遺物は308の甕が掘り下げ中に、甕309と杯310が壁面近くの床から出土した。308は浅黄橙色を呈し、外方につまみ出された口縁端部は丸く収まる。309は鈍い黄橙色を呈し、外反する口縁の端部はやや厚く尖り気味に収まる。310の口縁部外面にはヨコナデ時の条線が明瞭に残るが、沈線を意識したものかどうかは明確でない。32は、掘削後に炭や焼土粒を多く含んだ第3～6層で一度埋めた後、再度掘削して使用している。第2層中には炭が多量に含まれているが、壁面や床には明確な被熱痕は認められない。また、鉄などの遺物も確認できないので機能は判然としないが、炉のような火を用いた土壌と推察される。時期は、両者がほぼ同時期と考えられることから、31から出土した土器から弥生後期末葉頃と判断される。(杉山)



第91図 土壌31・32 (1/40)・土壌31出土遺物 (1/4)



第92図 土壌33 (1/40)

第93図 土壌34 (1/40)

土壌33 (第12・92図)

13 e 区の南斜面側に位置し、築城時に削平をうけているが、164cmの深さが残存している。埋土は第2層に炭片が僅かにみられ、下位については十分な観察ができていないが、炭や遺物はほとんど含まれていなかった。

第4・8層には地山ブロックが少量含まれるが、人為的に埋められたかどうかは不明瞭である。壁面は尾根側の方のみを袋状に掘削している。出土遺物は弥生土器の小片があるのみで時期は明確でないが、周辺の状況から弥生後期末葉頃と推察される。(杉山)

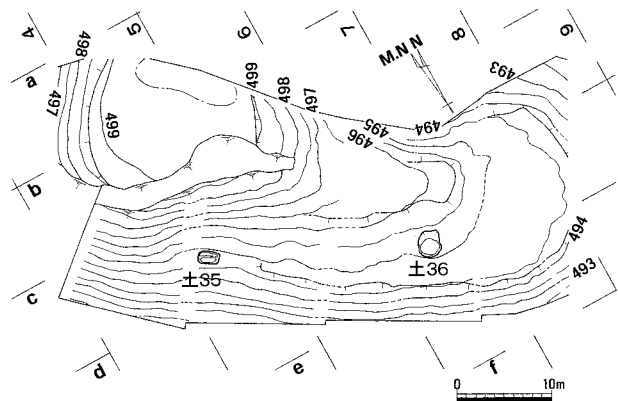
土壌34 (第12・93図)

15 e 区東斜面の調査区境に位置する。第1・2層は埋没後の窪みへの流入土で、第3層以下が埋土だが、第4・5層は地山礫層の礫を多く含んでおり、人工的な埋め戻しが行われたかどうかは判然としない。遺物は弥生土器の小片が埋土中にあることから、弥生後期後半頃と推察される。(杉山)

(2) 古墳時代後期以降の遺構

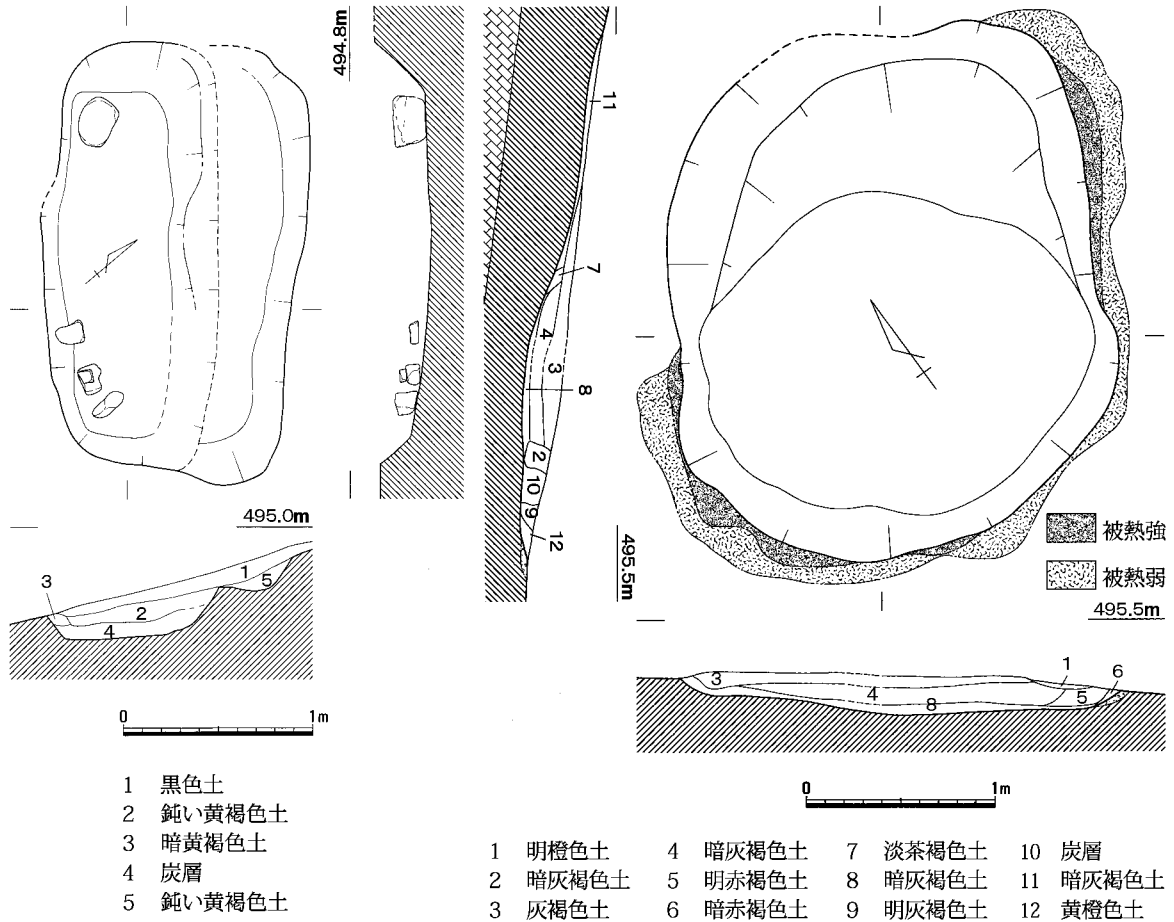
土壌35 (第94・95図、図版5)

4 c 区の竪穴住居7の上面に位置する。検出時は第1層土で被覆され、第2・5層が同質・同色であったため一括で掘り下げたが、2基が重複している可能性は否定できない。第5層を埋土に持つ上段は小炭を多く含む。第2～4層を埋土に持つ下段は第2層には小炭が多いが、第4層は径5cm前後の炭化材が密に含まれる。南辺の床面上には焼土塊がま



第94図 古墳時代後期以降の遺構配置 (1/800)

ばらに置かれているが、面を意識して配置しているとは言い難い。壁面と床面に被熱痕が認められないことから機能は不明である。時期は古墳前期以降であることは明らかで、炭化材を用いて行った放射性炭素年代測定では6世紀中葉～7世紀中葉の年代が出されている。(杉山)



第95図 土壤35 (1/40)

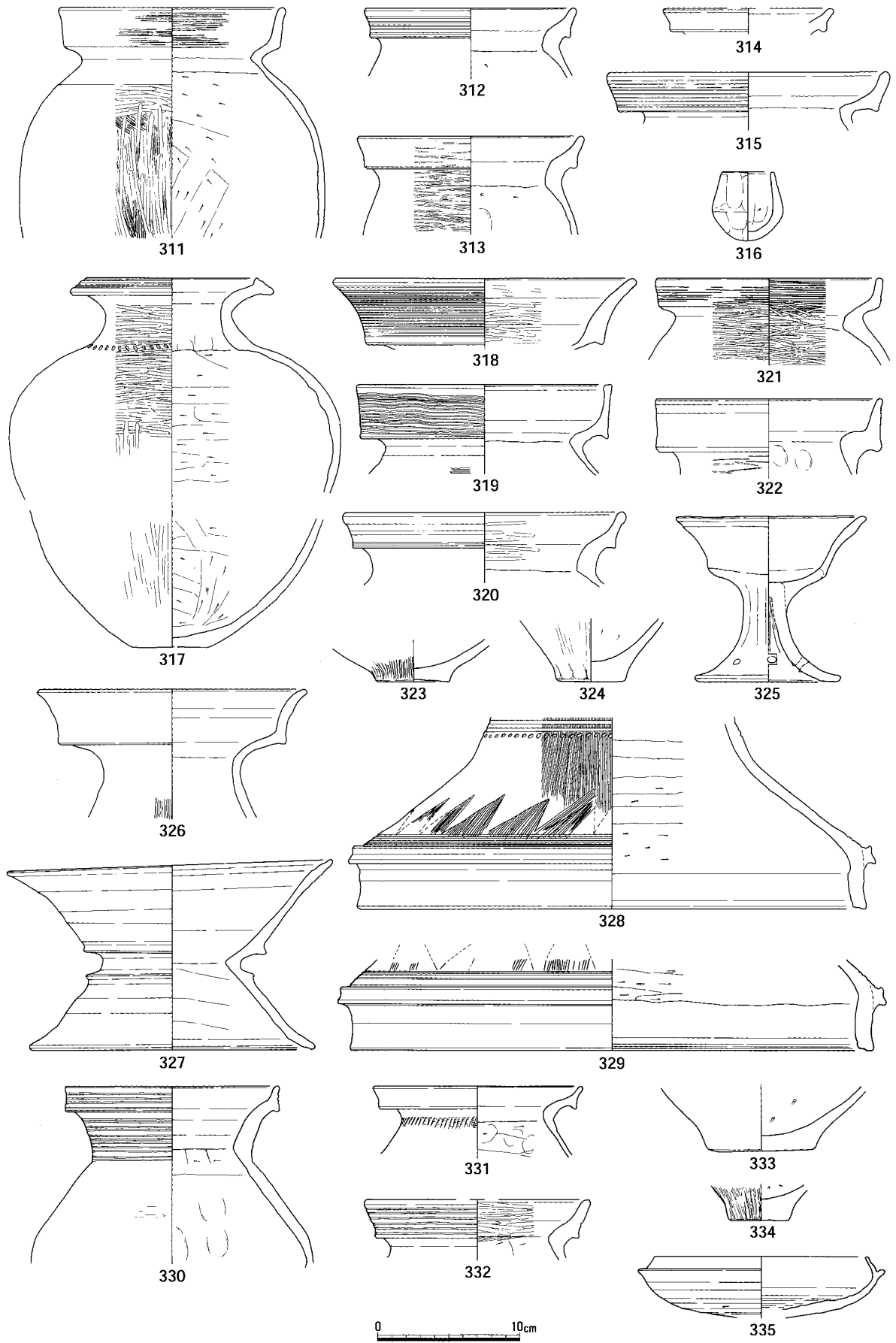
第96図 土壤36 (1/40)

土壤36 (第94・96図、図版5)

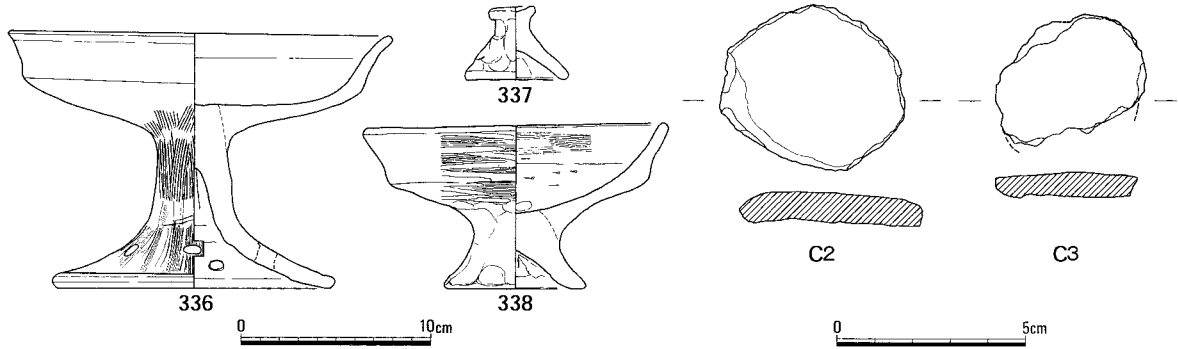
6 d 区中央付近の南斜面付近に位置し、現状で緩斜面から平坦面に移行する下段部分にあたる。平面形は北東—南西方向に長軸をもつ楕円形であるが、北東上位で約5度、中位からは約20度程度の傾斜を有し、中央はやや窪んでいる。また、南東および北東壁はわずかながらも立ち上がりが認められる。各層には炭片や焼土粒などが多く含まれ、壁面周辺には明瞭な被熱痕跡がみられることから、人為的に築造された焼成土壌であったといえる。ただし、旧地形と削平の度合いが推測できず、当初の規模や構造は不明である。出土遺物はなかったが、埋土中の炭化材の放射性炭素年代測定により、誤差範囲を含めると A D 595~665 という暦年代を得た。(澤山)

(3) 遺構に伴わない遺物 (第97~99図、図版13~16)

主に斜面堆積土中から出土した遺物について、土器は地点毎に、その他の遺物は種別毎に報告する。弥生土器311~315の甕は、3・4 a 区西斜面の頂部を削平した際に排出された黄色土から出土した。すべて煤の付着があり、311の口縁部にはヨコナデ時の条線が残る。312・315の口縁部外面には沈線が巡り、313の外面にはミガキが施される。これらから、弥生後期後葉には頂部に遺構が存在していたと推測される。316~325は4 c d 区南斜面の竪穴住居4~6などを築く際に排出された黄色土中出土の弥生土器である。316は手捏ね土器、旧表土直上出土の壺317は、拡張された口縁部には擬凹線が巡り、頸部裾には刺突文が施される。318~322は甕で、318・319は口縁部外面に沈線が巡る。320は



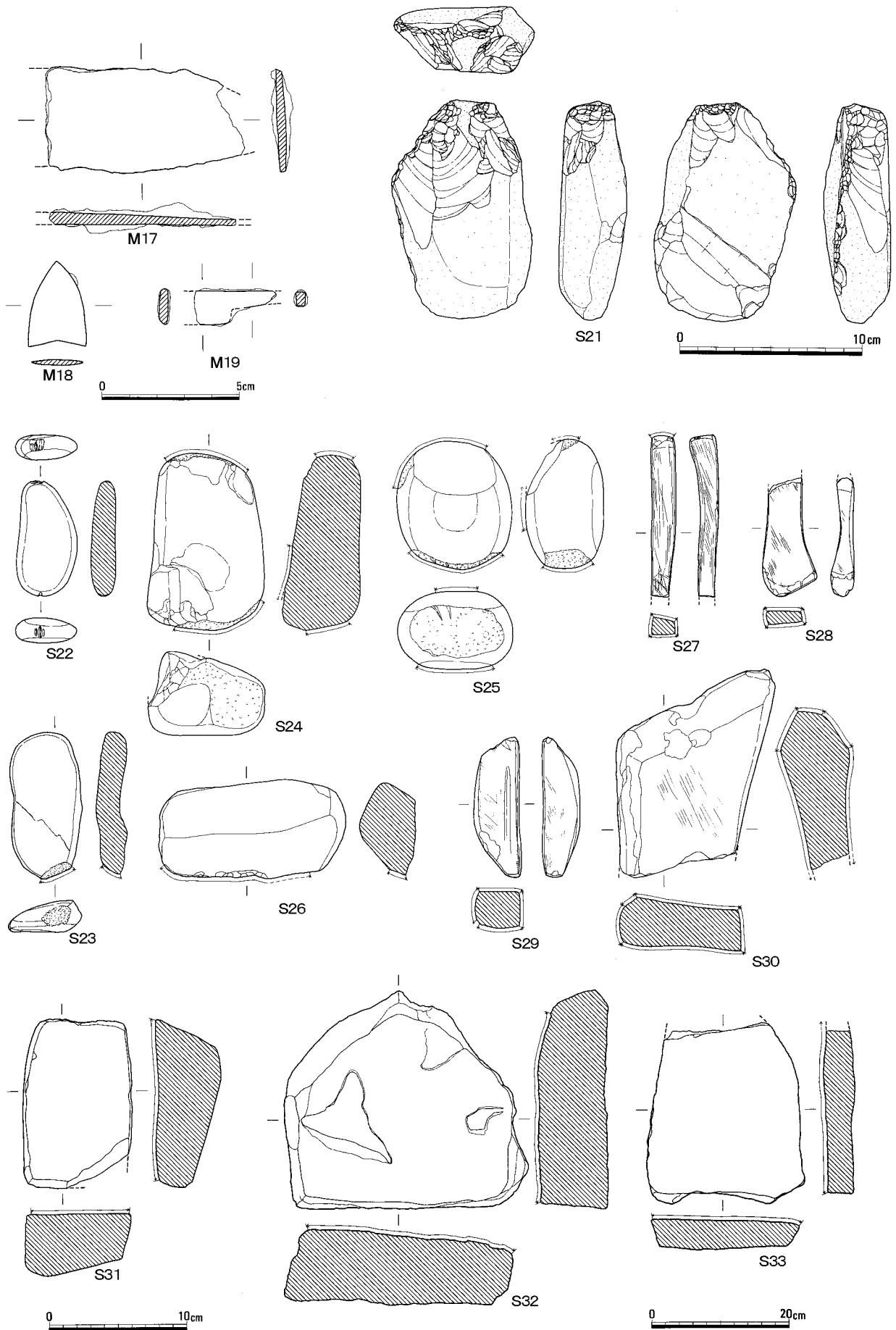
第97図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



第98図 遺構に伴わない遺物② (1/2 · 1/4)

口縁部の内・外面に赤色顔料が塗布されている。321は口縁部に部分的に条線が残るが、胴部の内外とも丁寧にナデを行う。322は頸部に板状工具の当たり痕が残るが調整は不明である。壺底部323は外面に赤色顔料が塗布される。324は甕の底部である。高杯325の脚部の円孔は2個一対で二対ある。土師器壺326・鼓形器台327は段状遺構4の東肩部近くで潰れた状態で出土した。器台328・329は8d区竪穴住居13上位の東斜面流土中から出土した。328は筒部の立ち上がり方から特殊器台と考えられ、両者とも胎土に角閃石を特徴的に含むことから備中地域からの搬入品と判断される。墳墓や墓壙は斜面上位には確認されなかったため、集落内で用いられたと考えられる。壺330、甕331～324は8de区東斜面の竪穴住居10などを掘削する際に排出された黄色土中から出土した。330は口縁拡張部と頸部に沈線が巡る。331は頸部に板状工具による押し引き文が巡る。332は口縁外面には沈線が巡り、内面にはミガキを施す。須恵器杯身335は9・10cd区上面の表土除去中に出土した。築城時に古墳が破壊されたとも推測されるが不明瞭で、位置はやや離れるが土壌35・36の放射性炭素年代に近似した遺物である。高杯336は杯部内面と外面全面に赤色顔料が塗布されており、脚部の円孔は2個一対で二対ある。竪穴住居22の下位で出土しており、本来は住居に帰属すると思われる。脚付杯337は15・16d区の土壘盛土中から出土した。胎土に砂礫を多く含み、杯部の内外全面に赤色顔料が塗布される。338は11d区南斜面の流土出土の手捏ねの蓋である。C2・C3は弥生土器の甕片を転用した円板形土製品で、15c区の土壘盛土中から出土した。M17～M19は鉄器である。M17は確認トレンチT1の黄色土層から出土した薄い板状製品で、刃などはみられない。出土層位から弥生後期中～後葉のものと考えられる。M18は12e区の南土壘盛土中から出土した鎌で、透かし穴はないと思われる。M19は北土壘の盛土から出土した刀子である。両者とも時期は明確でないが、古墳前期前葉までと考えられる。

S21～S33は石器で、S21は風化の状況から旧石器の可能性が高い。自然円礫の端部と側縁部のみに粗く調整を加えており、明確な使用痕がみられないことから礫器の未製品とするか、粗雑なスクレイパーとするかは不明確である。S22は切り目石錘で、形態的特徴から縄文時代の所産と考えられるが、出土位置が4a区の頂部であることから弥生時代以降に他の円礫と共に持ち込まれたと推察される。S23・S26は叩き石である。S24・S25も叩き石だが、敲打痕の磨滅状況から敲打と同時に捏ねるような作業にも使用している。S27～S31は砥石で、S31のみ荒目である。S32は上面が被熱により剥落していることから台石と判断した。S33も上面が磨滅しており、やはり台石と考えられる。両者とも未加工の自然礫で、竪穴住居6・7のすぐ下位で出土していることから、本来はこれらに帰属する可能性がある。S23～S33も調査時の排出土や流出土から出土したものもあるが、弥生後期から古墳前期の遺物と判断して良いと思われる。(杉山)



第99図 遺構に伴わない遺物③ (2/3・1/2・1/4・1/8)



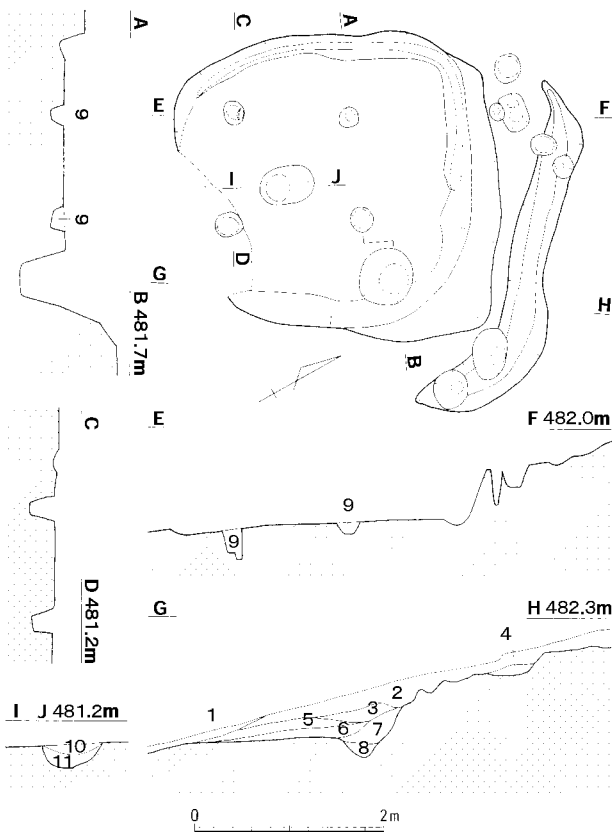
### 第3節 斜面調査区の概要

#### (1) 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

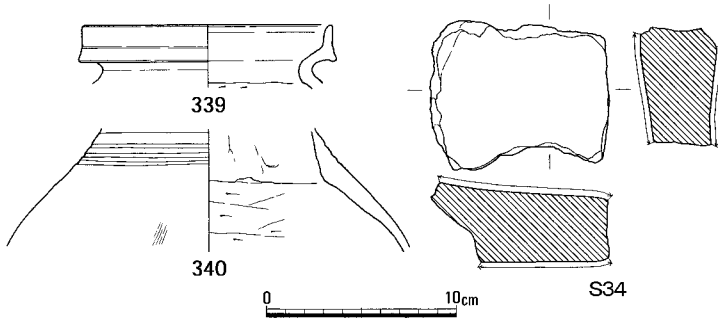
##### 1 竪穴住居

竪穴住居27 (第100・102図、図版6・15)

4 f 区北西側付近に位置し、緩斜面から平坦面に移行する裾部にあたる。一辺約310cmを測る隅丸正方形の掘り方を有し、深さは約60cmである。床面には4基の小柱穴の間に浅いピットがみられる。



- |         |         |         |
|---------|---------|---------|
| 1 暗茶褐色土 | 5 淡黒褐色土 | 9 黒褐色土  |
| 2 褐灰色土  | 6 黒褐色土  | 10 黒褐色土 |
| 3 淡黒褐色土 | 7 暗黒褐色土 | 11 黒褐色土 |
| 4 暗褐灰色土 | 8 褐灰色土  |         |

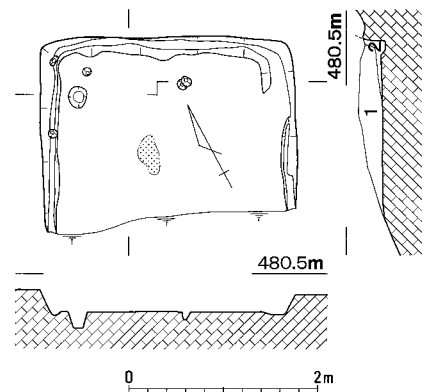


第100図 竪穴住居27 (1/80)・出土遺物 (1/4)

北・西壁では壁体溝が巡り、東隅に大形の柱穴が確認された。上方では円弧状の溝が配され、その底面に小柱穴がみられた。遺物を見ると、甕339は口径13cmで外湾する口縁部から内湾して上方に立ち上がる口縁端部をもち、外面と内面口縁部にヨコナデ、内面胴部にヘラケズリを行う。壺340は長頸壺の頸胴部の破片であり、外面に沈線文を巡らせ、内面に工具ナデ、ヘラミガキがみられる。また、流紋岩製の砥石S34が出土した。時期は弥生後期後葉である。(澤山)

竪穴住居28 (第101・102図)

6 g 区で、斜面下位方向は流出しているが、検出面から約25cm掘り込まれている。埋土は2層に分層でき、第1層は段状遺構26を築く際の整地土と判断される。床面には壁面周囲に深さ6cmほどの壁体溝が巡り、中央部に赤



- |          |        |
|----------|--------|
| 1 鈍い黄褐色土 | 2 褐灰色土 |
|----------|--------|

第101図 竪穴住居28 (1/80)

化した被熱面がみられる。柱穴は、杭状の小ピットは散見されるが、主柱穴と考えられるものはない。出土遺物には弥生土器の碎片がわずかにあるのみで、詳細な時期は明確でないが、段状遺構群との切り合い関係等から弥生時代後期後葉頃と推察される。(杉山)

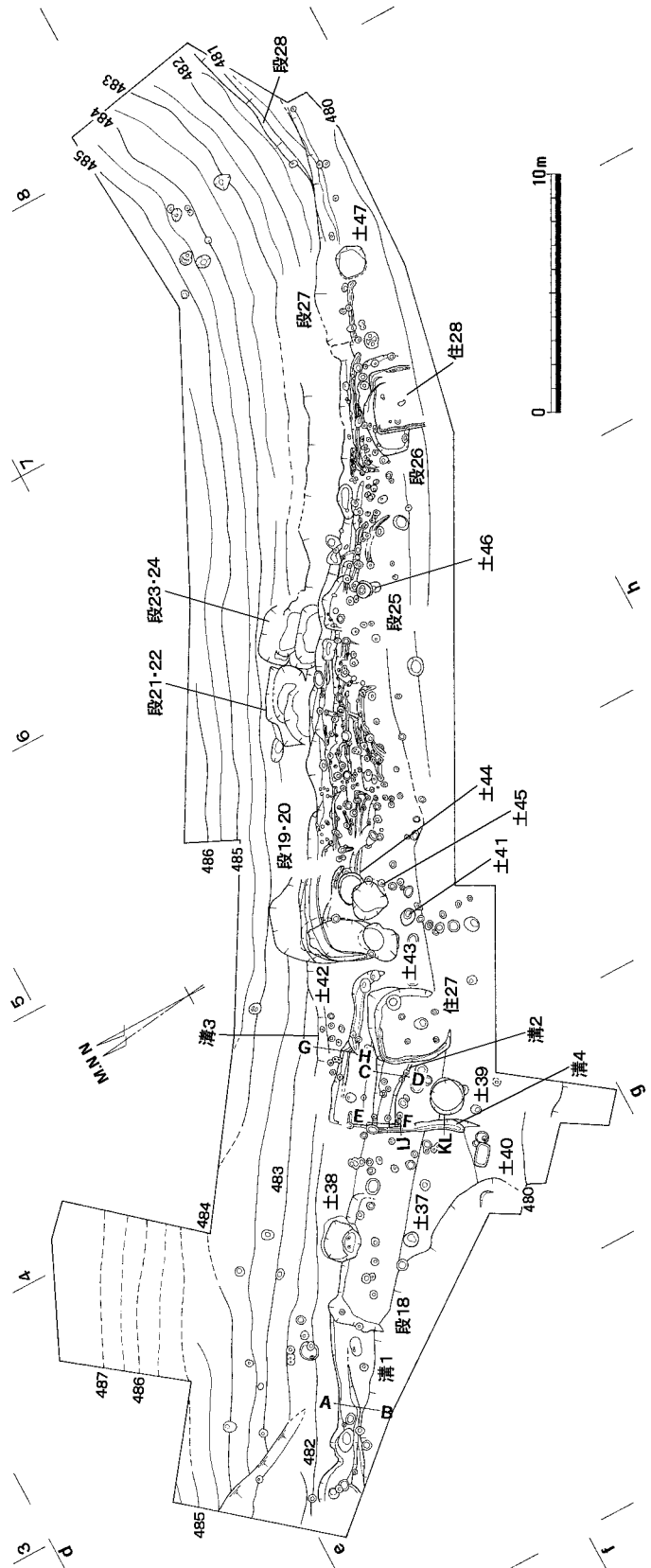
## 2 段状遺構

### 段状遺構18 (第102・103図)

3 e 区で地形的には谷部に位置する。約25cmの深さでほぼ方形に掘りこまれており、埋土は地山礫を含む暗黒褐色土が掘りこみ縁辺で一部みられるが、基本的には黄褐色土の単層であった。床面は比較的平らで同一埋土のピットがみられる。また、土壌37が同一面で検出でき、本遺構に関連する可能性がある。出土遺物には黄褐色土中には多量の弥生土器があるが床面近くでは小片があるのみである。時期は、土壌37との関連から弥生時代後期後葉と推察される。(杉山)

### 段状遺構19・20(第102・104・105図)

4 f 区北東側付近の丘陵南斜面の裾部に位置する。段状遺構19は土壌42～45と切り合いをもつ4基の柱穴と奥側の壁体溝を確認した。20は土壌43・45の埋没後、斜面を粗く掘削して床面を第6・7層で整地している。北・西側には壁体溝を検出したが、柱構造は不明であった。遺物は19で、口径17.5cmで、「く」字状の口縁部に外傾する肥厚端部をもつ甕341、口径14.9cmで、外上方に延びる口縁端部をもつ甕342、口径12.6cmで、外反する口縁上部に工具痕をもつ壺343、底径13.6cmで、脚裾部に円孔を配し赤色顔料を施す高杯344がある。20で、壺345が口径10.8cmで、頸部に沈線文を施す。甕346

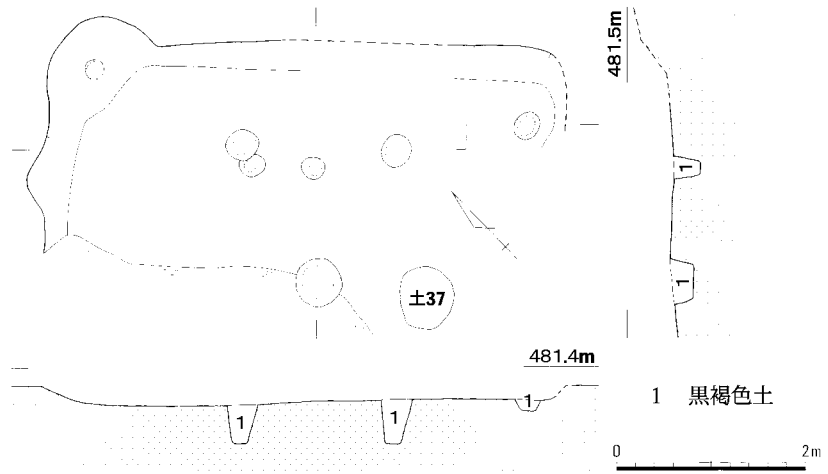


第102図 斜面調査区 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構配置 (1/300)

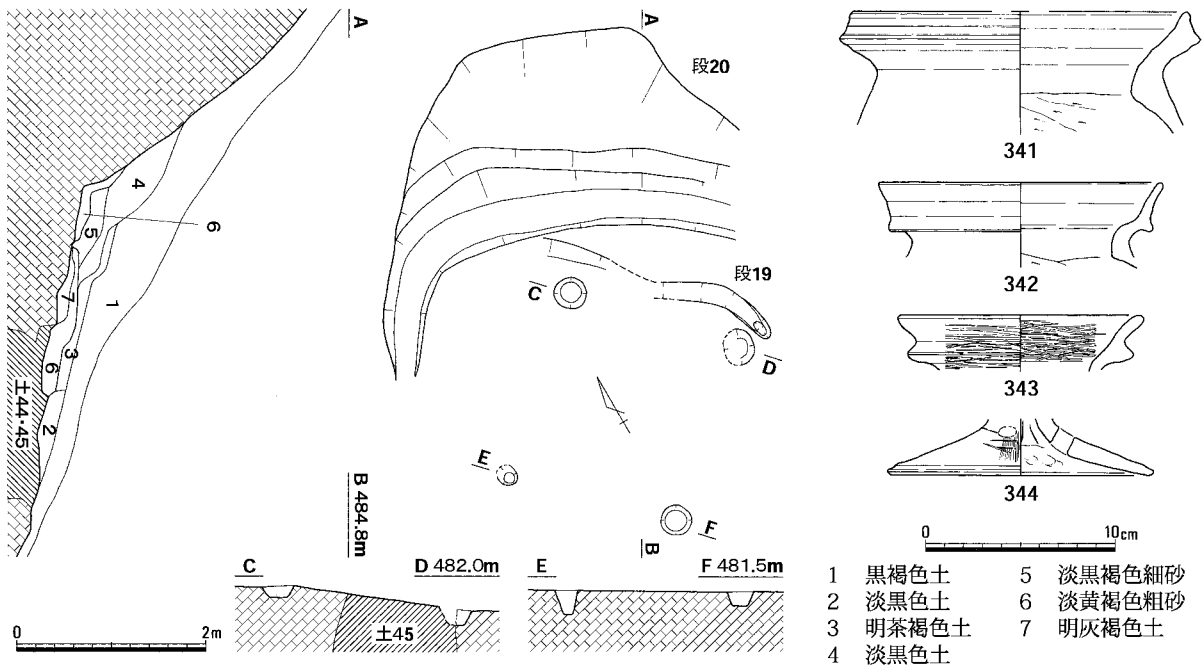
は口径10.5cmで、口縁端部は立ち上がる。甕347は口径16cmで、外上方に開く口縁端部に波状文が巡る。甕348は口径11.7cmで、口縁端部は外上方に延びる。甕349は口径14.6cmで、口縁端部は外上方に開く。甕350は口径17.2cmで、外上方に延びる口縁端部をもつ。また、角閃石玢岩製の砥石S35がある。時期は弥生後期後葉と思われる。(澤山)

段状遺構21・22 (第102・106図、図版6)

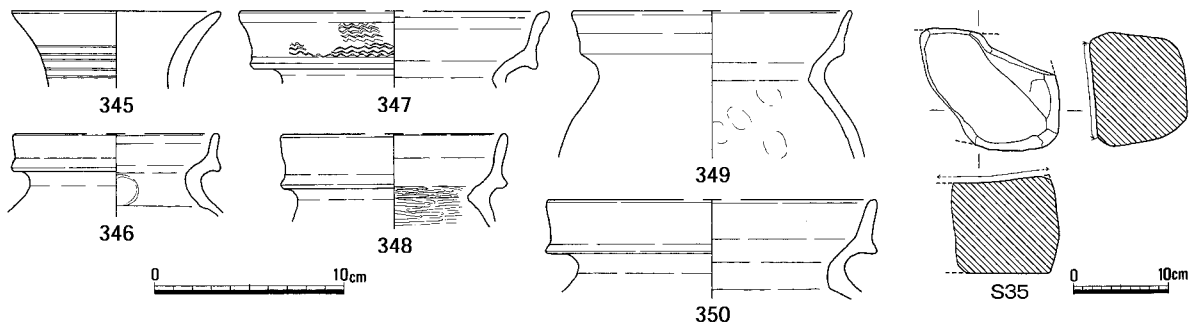
5 f 区の斜面に掘削された遺構で、22の床下で21を検出した。平面形はナメラと花崗岩の地山なため流出



第103図 段状遺構18 (1/80)



第104図 段状遺構19・20 (1/80)・段状遺構19出土遺物 (1/4)



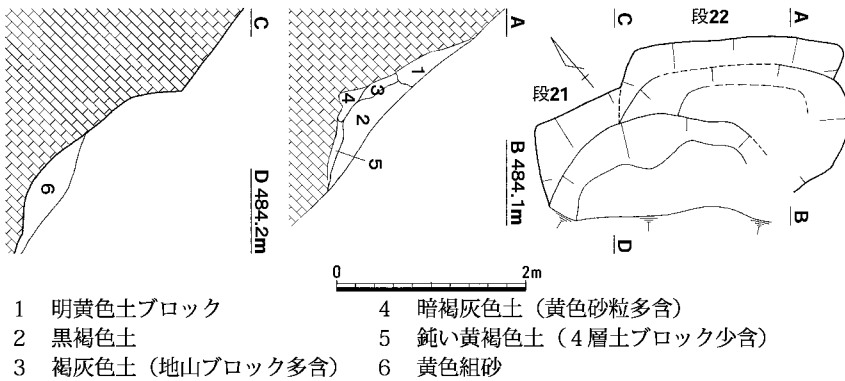
第105図 段状遺構20出土遺物 (1/4・1/8)

が顕著だが、方形を意識していると推察される。埋土は第1層が地山ブロックの崩落で、第2～5層は自然の流入土である。第6層は花崗岩風化土の単層であることから22を築く際に21を埋めたものと判断される。21は壁面から床が緩やかに落ちるが、22は比較的しっかりした掘りこみがなされる。また、22の断面では壁体溝状の落ち込みが確認できるが、平面では確認できなかった。機能については、両者共幅が2.5m程度と恒常的な住居としては狭いため明確でない。出土遺物は第1層中から弥生土器の小片があるのみで時期は判然としないが、周囲の状況から弥生後期後葉頃と考えられる。(杉山) 段状遺構23・24 (第102・107図、図版6・15)

5 f 区の斜面に掘削された遺構で、段状遺構21・22に近接するが直接の切り合いは持たない。土層は第1層で全体が被覆されているが、第3～6層も遺構が埋没した後の堆積である。23の埋土の第11・12層が埋め戻し土の可能性もあるが、第10層は土質から24を築いた際の整地層である。掘りこみは23が比較的しっかりしているのに対して24は壁面側は緩やかである。機能は、床面を比較的丁寧に築いてはいるが、規模が幅約2.5m前後と狭いことから段状遺構21・22同様明確でない。遺物は24の床面近くから口縁部にヨコナデを行う甕351と砥石S36が出土した。時期は、出土遺物から弥生後期後葉頃と推察される。(杉山)

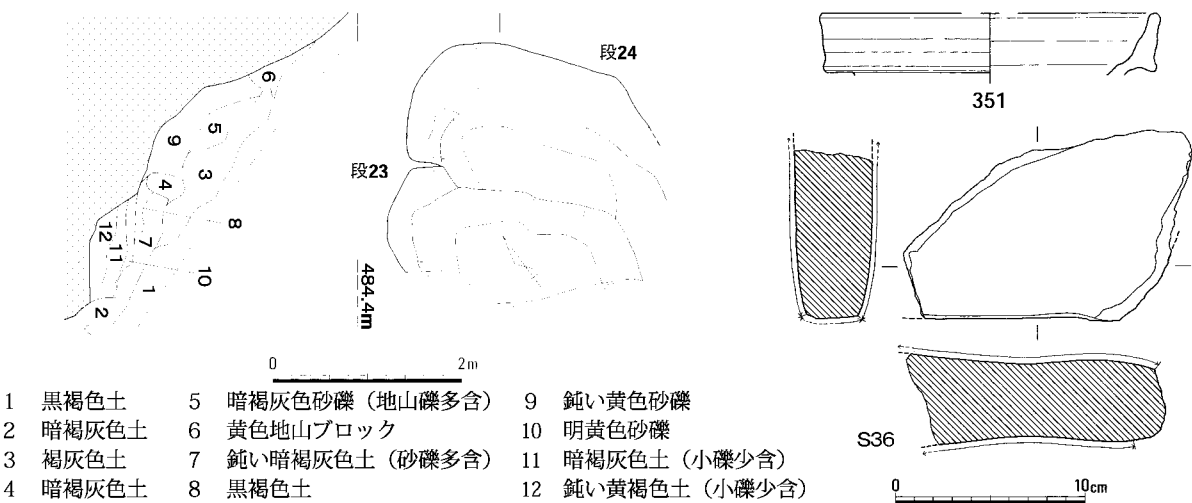
段状遺構25 (第102・108図、図版6・12)

5 f 区の斜面裾に掘削された方形の遺構で、埋土は黒褐色土である。地山がナメラの岩盤であるため壁面はしっかり掘られ床面に至る。床面には被熱面などは確認されなかったが、深さがまちまちの柱穴4基が確認された。遺物は、床面付近で甕352・353が出土し、P3が土壌46に切られることから時期は弥生後期後葉と判断される。(杉山)



第106図 段状遺構21・22 (1/80)

め壁面はしっかり掘られ床面に至る。床面には被熱面などは確認されなかったが、深さがまちまちの柱穴4基が確認された。遺物は、床面付近で甕352・353が出土し、P3が土壌46に切られることから時期は弥生後期後葉と判断される。(杉山)



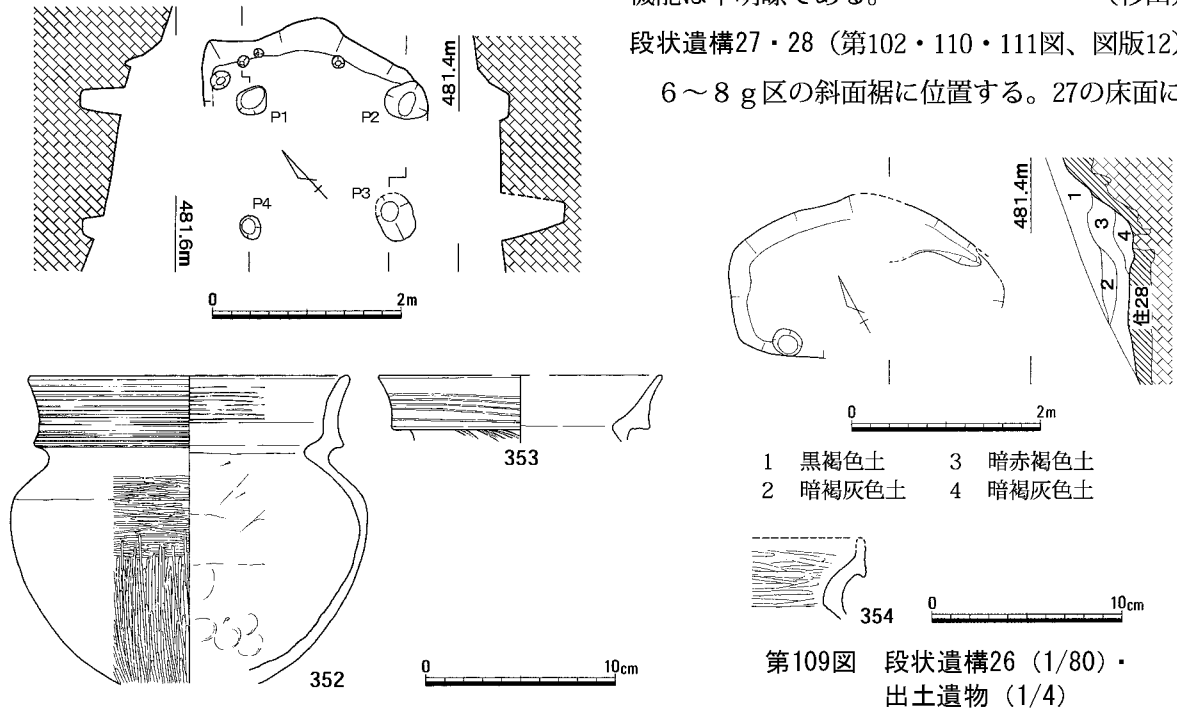
第107図 段状遺構23・24 (1/80)・段状遺構23出土遺物 (1/4)

段状遺構26 (第102・109図)

6g区の斜面裾で竪穴住居28を埋め立てて造られている。埋土は第1・2層が覆土で、第3・4層が埋土である。平面形は歪な方形を呈するが、床面は比較的平らである。床面には北西部で壁体溝が確認できるが他辺では確認できていない。柱穴も深さ20cmのものが1基のみあるが直接的な関連性は不明である。遺物は甕354が埋土から出土しており、これから時期は弥生後期後葉頃と判断されるが、機能は不明瞭である。 (杉山)

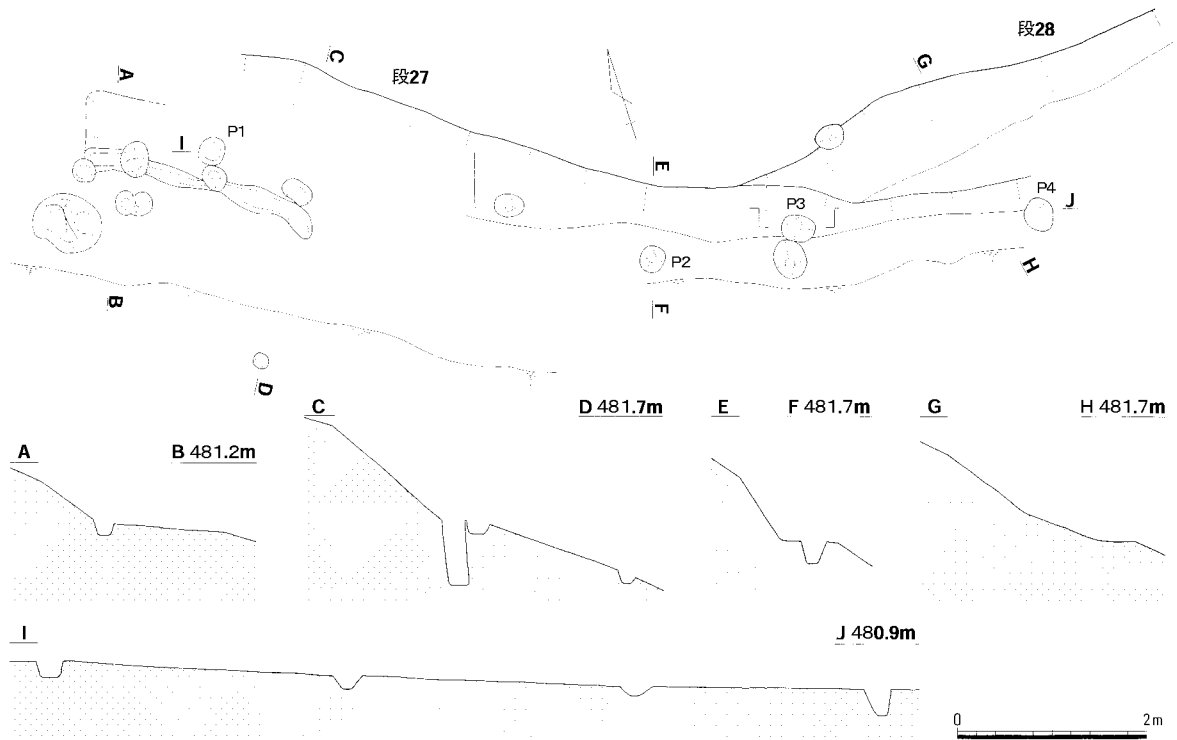
段状遺構27・28 (第102・110・111図、図版12)

6～8g区の斜面裾に位置する。27の床面に

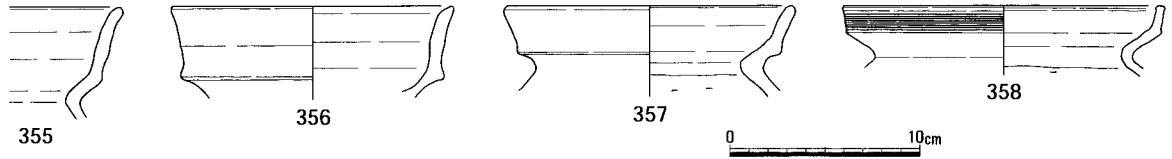


第108図 段状遺構25 (1/80)・出土遺物 (1/4)

第109図 段状遺構26 (1/80)・出土遺物 (1/4)

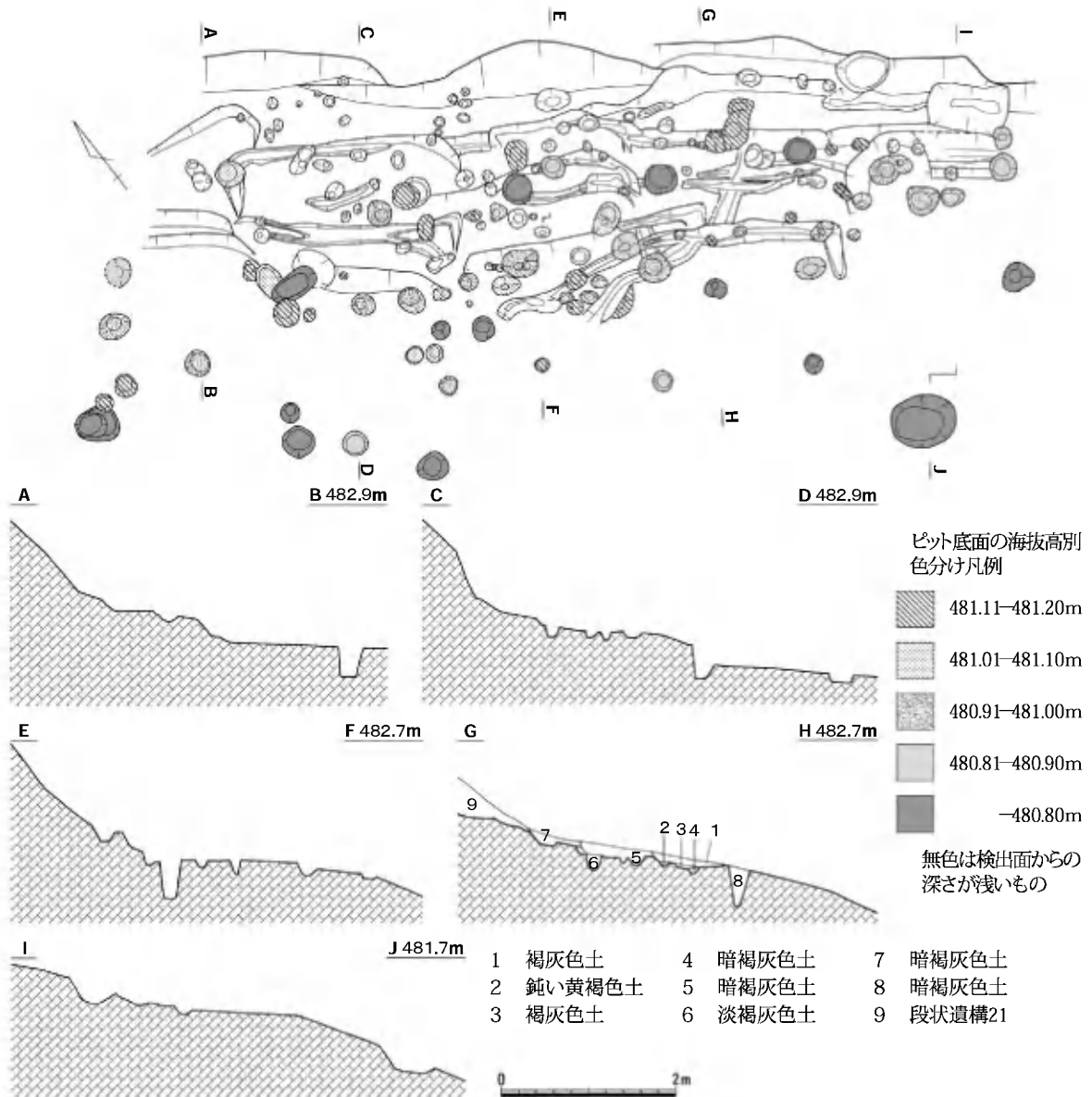


第110図 段状遺構27・28 (1/80)

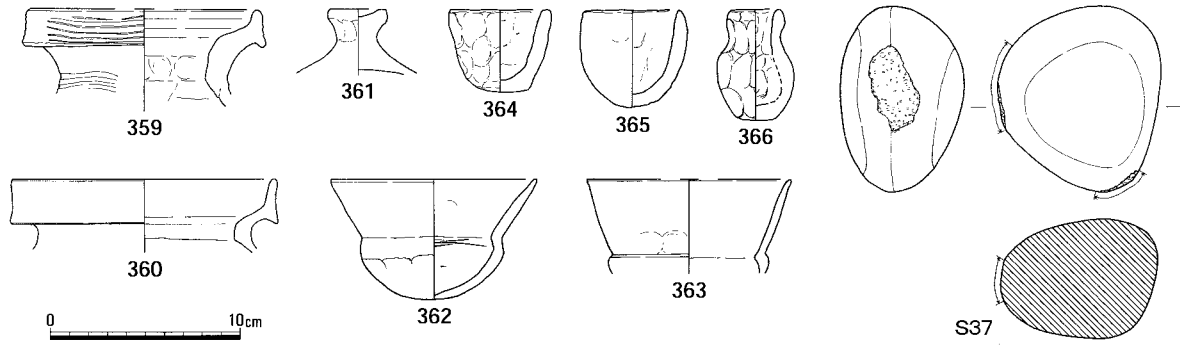


第111図 段状遺構27・28出土遺物 (1/4)

は柱間距離はまちまちだが、掘削面の法尻にP 1～P 4が並ぶことから本遺構に伴うと判断される。また、27と28は一連で検出されたが、床面が約20cmの段がつくので、別遺構と判断される。図示した出土遺物は、黒褐色の覆土からのもので、355は弥生土器の壺、356・357が弥生土器の甕である。いずれも口縁部にヨコナデを行う。土師器358は吉備南部のいわゆる吉備型甕で口縁部外面に8条のクシガキ沈線が巡り、端部は面をもち終わる。段状遺構の時期は、土壌47に切られることから古墳前期以前が推察され、機能としては段状遺構群からは外れて、尾根が東へ回り込む地点に造られていることから通路状の施設の可能性が考えられる。 (杉山)



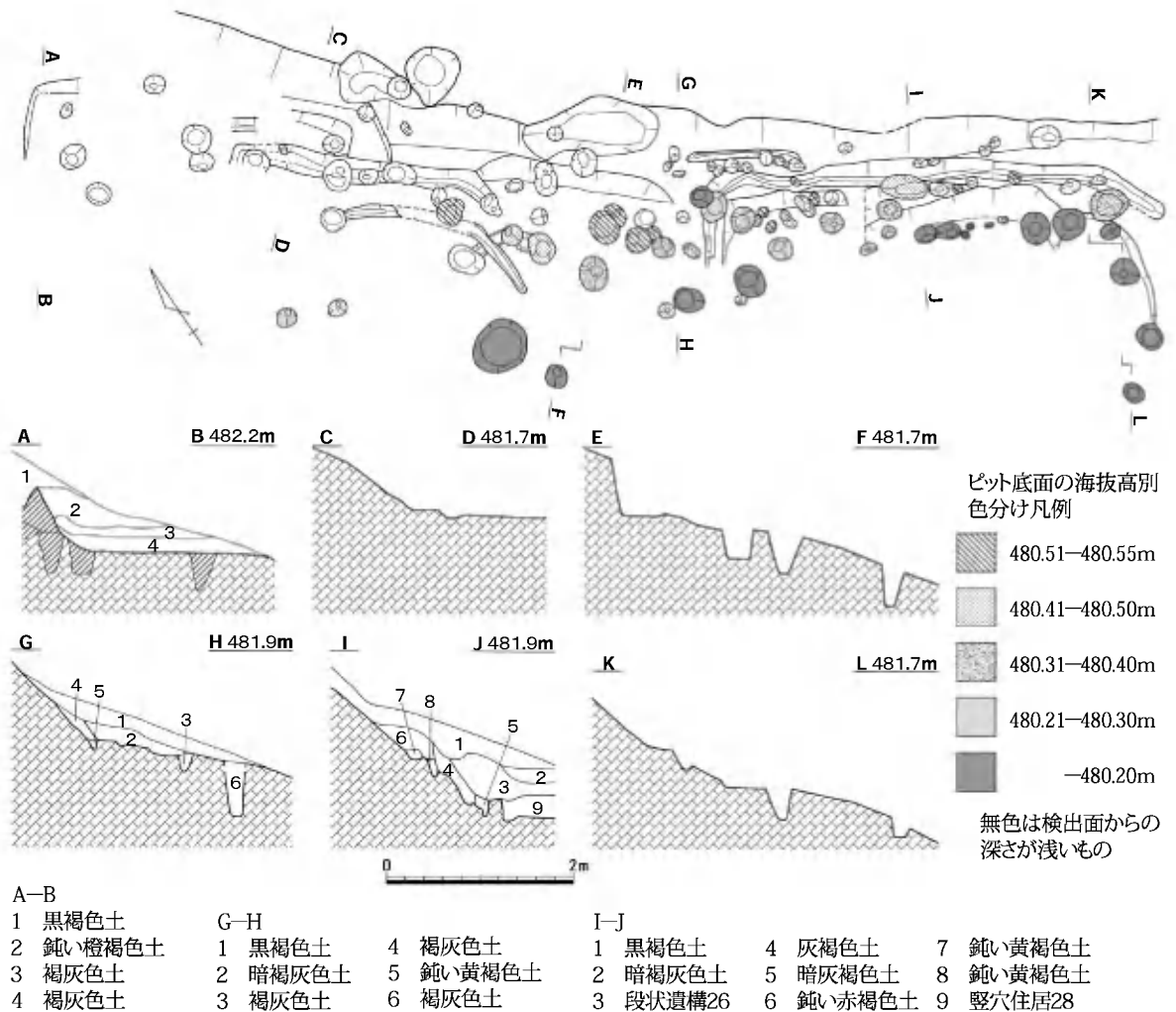
第112図 西半段状遺構群 (1/80)



第113図 西半段状遺構群出土遺物 (1/4)

西半段状遺構群 (第102・112・113図、図版12)

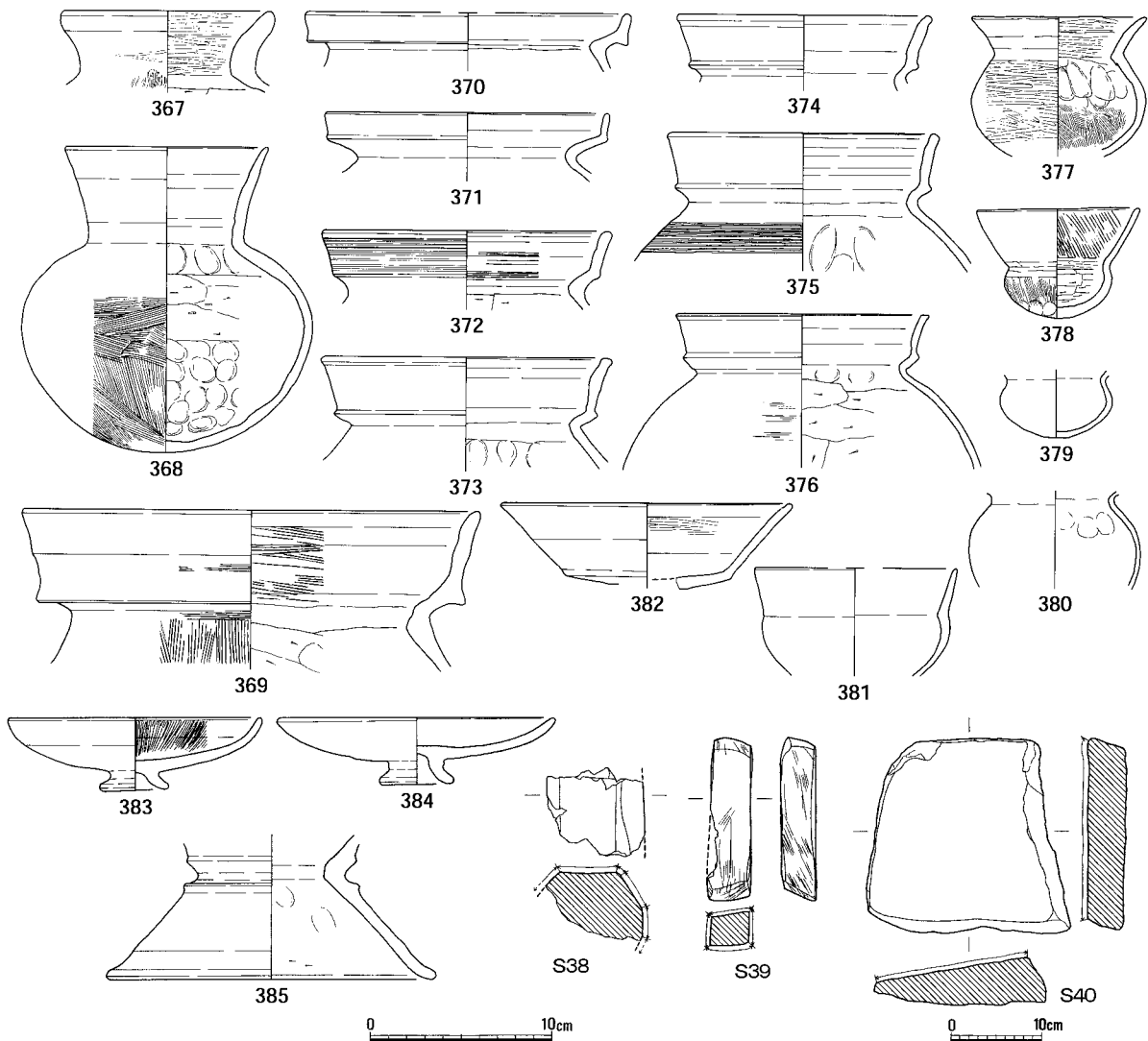
5 f 区の斜面裾に位置する加工段と溝、柱穴群を一括した。黒褐色土の覆土を除去するとほぼ同一面で検出され、個々の切り合い関係は判然としがたい。しかしながら、溝や加工段の幅が約2.5m前後でまとまることと、ピットの深さとの関連から、段状遺構25と同様の遺構が数回にわたって造り替えられていると考えられる。図示した遺物は、359～361が弥生土器、364～366はミニチュア土器である。362・363は覆土中から出土した土師器埴である。これらの出土遺物から段状遺構群の時期は弥生後期後半と推察されるが、一部古墳前期初頭のものも含まれる可能性がある。(杉山)



第114図 東半段状遺構群 (1/80)

東半段状遺構群（第102・114・115図、図版6・12・15）

5・6 f g 区の斜面裾の加工段と溝、ピット群を一括した。黒褐色土の覆土を除去後にほぼ同一面で検出され、溝の中には幅2.2～2.6mの区画のわかるものがある。ピットはまばらで深さの分布でもまともは掴みにくい。基本的には西半段状遺構群と同様の状況と判断される。遺物はC-D断面付近の覆土中で大半が出土した。368・373・375～385は土師器、その他は弥生土器である。367は壺、368は直口壺で口径11.0cm、器高16.9cmを測る。369～376は甕で、375は肩部に櫛状工具により11本の沈線が巡る。377・380・381は小形壺、378・379は埴で、379は精製粘土を用いており非常に脆弱なため接合不能だが、出土時は完形であった。382は高杯で内面に横方向のミガキが僅かに残る。383・384は低脚杯で、383は鈍い橙色を呈し口径14.0cm、器高4.1cmを測る。内面にはミガキが看取される。384は灰黄色を呈し口径15.0cm、器高3.8cmを測る。杯部は383がやや口縁部が内湾して杯状なのに対して、384は皿状を呈している。385は淡黄色を呈する鼓形器台である。S38・S39は砥石、S40は台石である。検出状況と周辺の状況から、本段状遺構群も弥生後期後半頃を主体とした時期に営まれたと判断される。しかし、覆土中から出土した土師器類が比較的集中して出土したこと、埴380が低脚杯383によって蓋をされた状態で出土したことから丘陵上からの転落とは考えにくい。したがって、



第115図 東半段状遺構群出土遺物（1/4・1/8）



I-J断面の第2・3層などが出土土師器の時期である古墳前期前葉の段状遺構で、調査時に検出できていない可能性が高いと考えられる。(杉山)

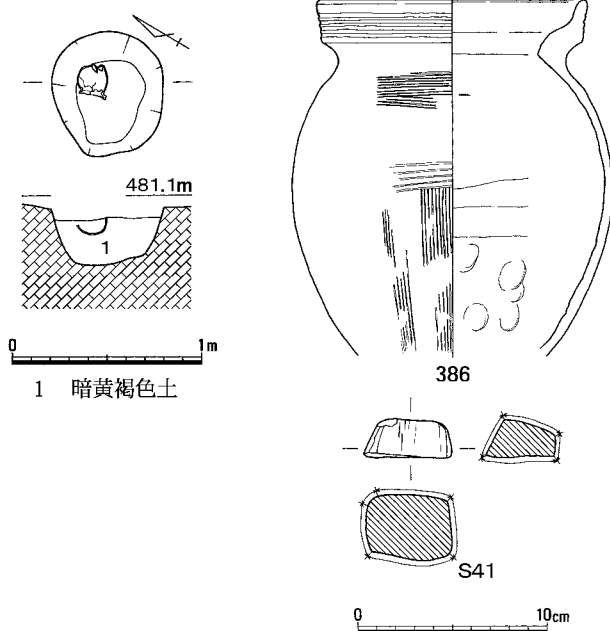
### 3 土 壌

#### 土壌37 (第102・116図)

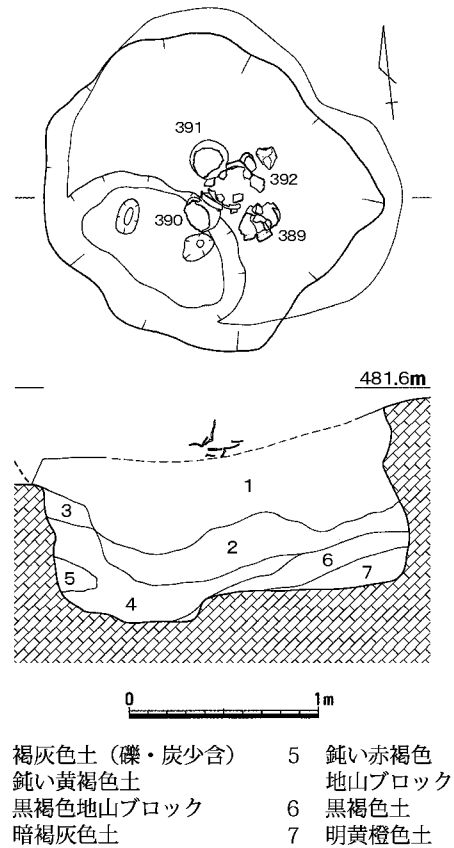
3e区の段状遺構18の床面で検出した。検出面から約6cmの深さで半裁された甕が横転して出土した。弥生土器の甕386は口径13.9cmで口縁外面に4条の沈線が巡り、端部は尖り気味にやや外反する。胴部外面には煤が付着し、肩部に横方向、下半部に縦方向のハケメが看取され、内部下半には炭化物が付着している。出土遺物から弥生後期後葉と判断される。(杉山)

#### 土壌38 (第102・117・118図、図版6・12)

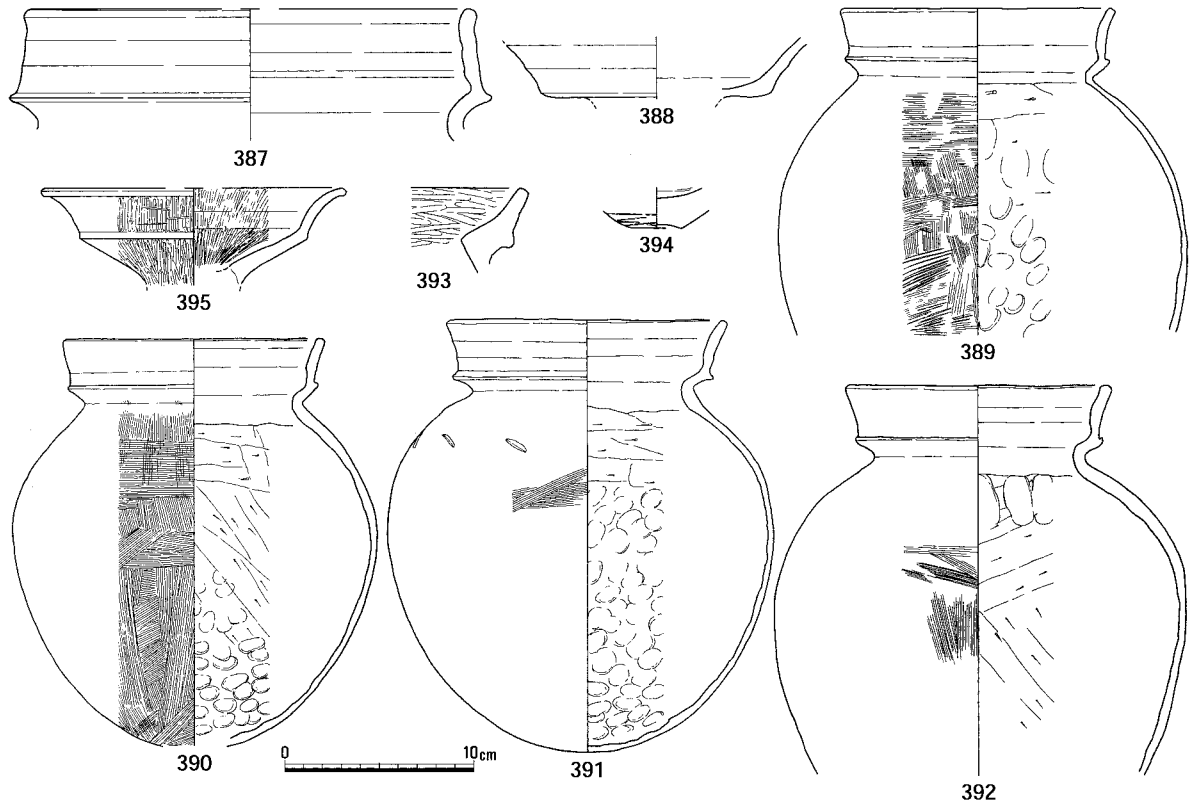
3e区に位置し、段状遺構18を切って築かれている。掘下げ中に甕389~392がまとまって出土したことから精査を行い掘り方を検出した。土層観察では、流入土と判断される第3~7層の流入後に一度掘り直しがなされていると考えられ、第1・2層には地山土がブロックで入ることから埋め戻し土と判断できる。また、4個の甕は一部合わせ口になっているので、埋め戻しの最終段階で中央に置かれたと推察される。底面は南側に約15cm下がった段があり、その底面に径15cmほどのピット2基がある。深さが約10cmとやや深い、梯子などの昇降具の痕跡と考えられる。出土遺物は、389~392が上面で、これら以外は第2層を中心に出土した。387は鈍い黄色を呈する土師器甕で口径23.0cmに復元できる。388は橙色の壺で内外とも丁寧にヨコナデを行う。389~392は鈍い黄橙色の土師器甕で、器壁が薄く碎片になったため接合できなかったが、389・390共に丸底である。389は口径14.0cmを測り、胴部外面は横方向のハケメ後タテハケメ、内面は下半に押圧を施す。口縁部は外反気味に立ち上がり、下端部は水平に鋭く拡張し端部は面を持つ。390は口径13.3cm、器高21.7cmを測り、胴部外面は斜方向のハケメ後タテハケメ、



第116図 土壌37 (1/40)・出土遺物 (1/4)



第117図 土壌38 (1/40)



第118図 土壌38出土遺物 (1/4)

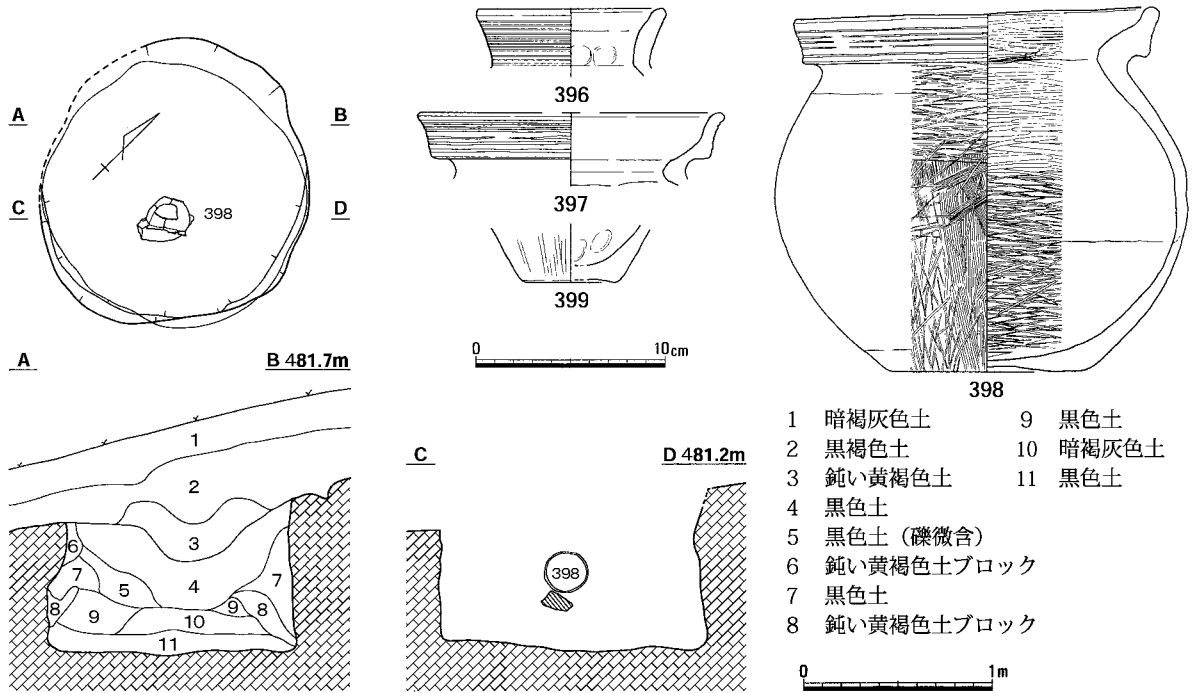
肩部はさらに横方向のハケメを施す。内面は底部付近に押圧を行う。口縁部は外片気味に立ち上がり、下端部は水平に鋭く拡張し端部は面を持つ。391は口径14.4cm、器高23.0cmを測り、胴部外面は部分的にハケメの後下半にはナデが看取され、肩部には幅2.3cmの板状工具による刺突文が計12カ所施文されている。内面は肩部以下に押圧を行う。口縁部は外反し、やや下方に鋭く拡張し端部は面を持つ。392は口径13.7cmを測り、胴部外面は剥落が顕著だが、一部ハケメが看取される。口縁は外反気味に立ち上がり、下端部は水平に鋭く拡張し端部はやや鈍重で丸みをおびる。393~395は弥生土器で混入品である。393・394は甕で、394は外面に赤色顔料の塗布が看取される。395は高杯である。

時期は段状遺構18を切ることから、弥生後期末葉から古墳前期前葉と考えられる。(杉山)  
土壌39 (第102・119図、図版13)

3 f 区で竪穴住居27の西に位置する。埋土は9層に分層でき、第5層以下は自然の崩落や流入土で、第3・4層は埋め戻し土と考えられる。弥生土器の甕398は第4層底面に人頭大の角礫を置き、それに寝かせるように置かれていた。396は外面に赤色顔料の塗布された壺で、口縁外面には櫛状工具による沈線12条がある。甕397は、口縁外面に6条の沈線が看取され一部ナデを行う。398は口径18.5cm、器高19.2cm、底径10.1cmを測る。胴部は内外とも丁寧にミガキ、外底部もナデの後ミガキを施す。399は甕の底部である。断面形状から貯蔵穴と推察され、出土土器から弥生後期後葉まで機能していたと判断される。(杉山)

土壌40 (第102・120図)

3 f 区中央付近の南斜面に位置し、平坦面から緩斜面に移行する場所で確認した。埋土は周辺で古相を示す暗黒褐色土であった。図化し得ていないが、遺物はわずかに出土しており、遺構の時期は弥生後期末葉と思われる。(澤山)



第119図 土壌39 (1/40)・出土遺物 (1/4)

土壌41 (第102・121図、図版12)

4 f 区中央付近の南斜面に位置し、緩斜面から移行する平坦面にあたる。周辺ではピットが検出されており、本来はこれらに比定される可能性がある。出土遺物の甕400は口径11.8cm、底径2.9cm、器高13.2cmで、尖り気味の平底に倒卵形の胴部を有し、口縁部は肥厚させて端部を外上方に立ち上げている。外面ヨコナデ、内面ヘラミガキがみられる。時期は弥生後期後葉と思われる。(澤山)

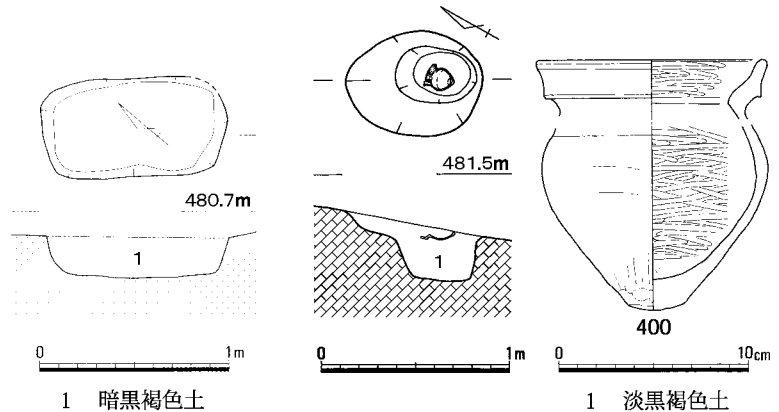
土壌42 (第102・122図、図版6)

4 f 区北東側付近の南斜面から現状で平坦面に移行する裾部に位置している。検出当初は地山崩落土と斜面流入土が、長楕円形の浅いたわみに互層状の堆積を呈しているものと想定したが、土層断面の状況から北東側に内湾する壁を有する一種の貯蔵穴と判断した。埋没過程には第1層、第2～20層、第21～25層、第26～40層、第41～50層の最低5段階が認められる。

出土遺物は検出されなかったが、時期は弥生後期後葉と思われる。(澤山)

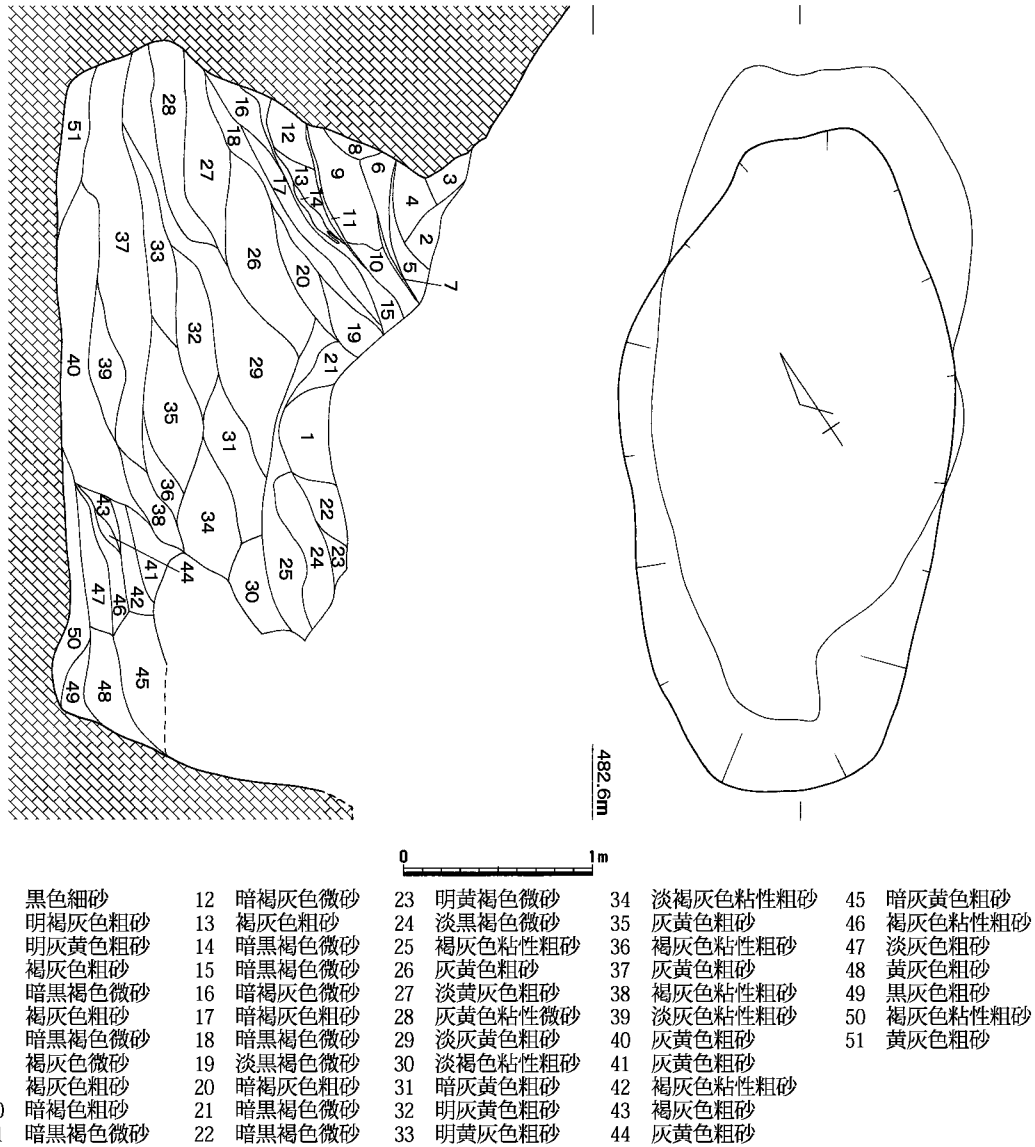
土壌43 (第102・123図、図版6)

4 f 区中央の南斜面に位置している。現状で緩斜面から平坦面に移行する付近で確認し、土壌42の南西端を切っている。検出過程では当初大形の柱穴として調査をしていたが、土層断面の状況から比較的短期間に埋没したと思われる貯蔵穴と判断した。



第120図 土壌40 (1/40) 第121図 土壌41(1/40)・出土遺物(1/4)

出土遺物はみられなかった



第122図 土壌42 (1/40)

が、遺構の時期は弥生後期後葉頃と思われる。(澤山)

土壌44 (第102・124図、図版6)

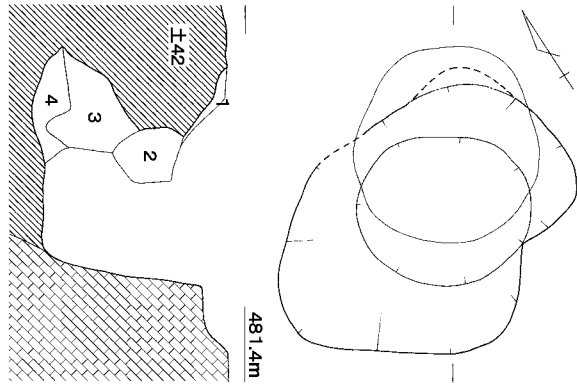
4 f 区東側中央付近の南斜面に位置し、現状で緩斜面から平坦面に移行する場所で確認した。遺構形状から貯蔵穴と考えられる。土層断面の状況から比較的短期間に埋没したと思われ、斜面側ではなく、平坦面側からの埋土流入がみてとれる。出土遺物は口縁部を肥厚させて、端部を下方に拡張させた甕401の破片が認められた。時期は弥生後期後葉である。(澤山)

土壌45 (第102・125図、図版6)

4 f 区東側中央の南斜面から現状で平坦面に移行する付近に位置しており、土壌44の南西端を切っている。遺構形状から貯蔵穴と考えられ、初期流入土の第13・14層から第10～12層および第6～9層段階までには、多量の地山崩落土の堆積がみてとれ、遺物も包含していない。図化し得ていないが、第1～5層で僅かに遺物の出土があり、時期は弥生後期後葉頃と思われる。(澤山)

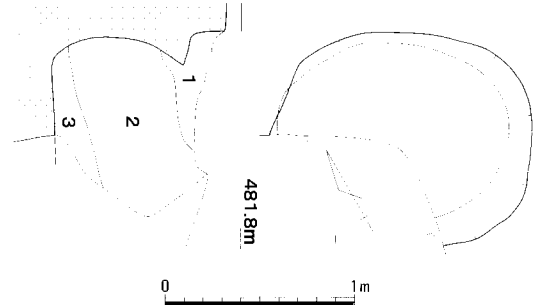
土壌46 (第102・126図)

5 g 区に位置し、段状遺構25の柱穴を切る。断面が袋状を呈することから貯蔵穴の可能性はあるが、



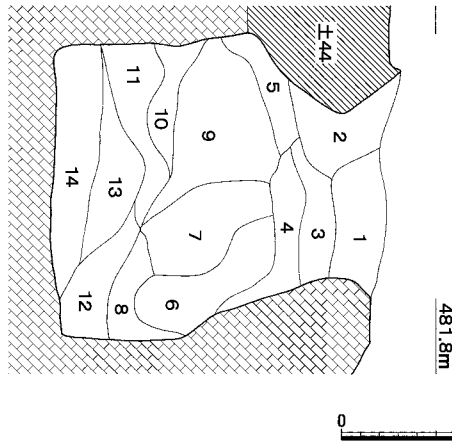
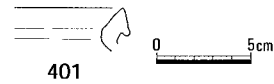
- 1 暗黒褐色微砂
- 2 明褐黄色細砂
- 3 淡黒褐色粗砂
- 4 褐黄色細砂

第123図 土壌43 (1/40)



- 1 暗黄褐色土
- 2 黄褐色土
- 3 淡黒色土

第124図 土壌44 (1/40)・出土遺物 (1/4)



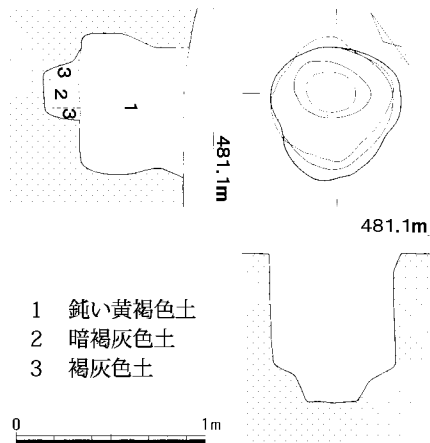
- 1 淡黒色土
- 2 淡黒色土
- 3 鈍い黄褐色土
- 4 淡黒色土
- 5 褐灰色土(礫密含)
- 6 鈍い黄褐色土
- 7 鈍い黄褐色砂礫
- 8 黒色土
- 9 地山礫ブロック
- 10 鈍い黄色地山ブロック
- 11 鈍い黄色地山ブロック
- 12 鈍い黄褐色土
- 13 鈍い黄褐色土
- 14 地山礫ブロック

第125図 土壌45 (1/40)

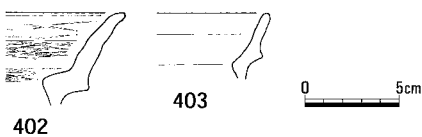
底面中央のピットの機能は不明確である。壺402は外面はナデによる凹凸がみられ、内面は丁寧なミガキが看取される。甕403は内外ともナデで、端部は丸く収まる。

出土土器から弥生後期末葉頃と推察される。(杉山) 土壌47 (第102・127図、図版13・15)

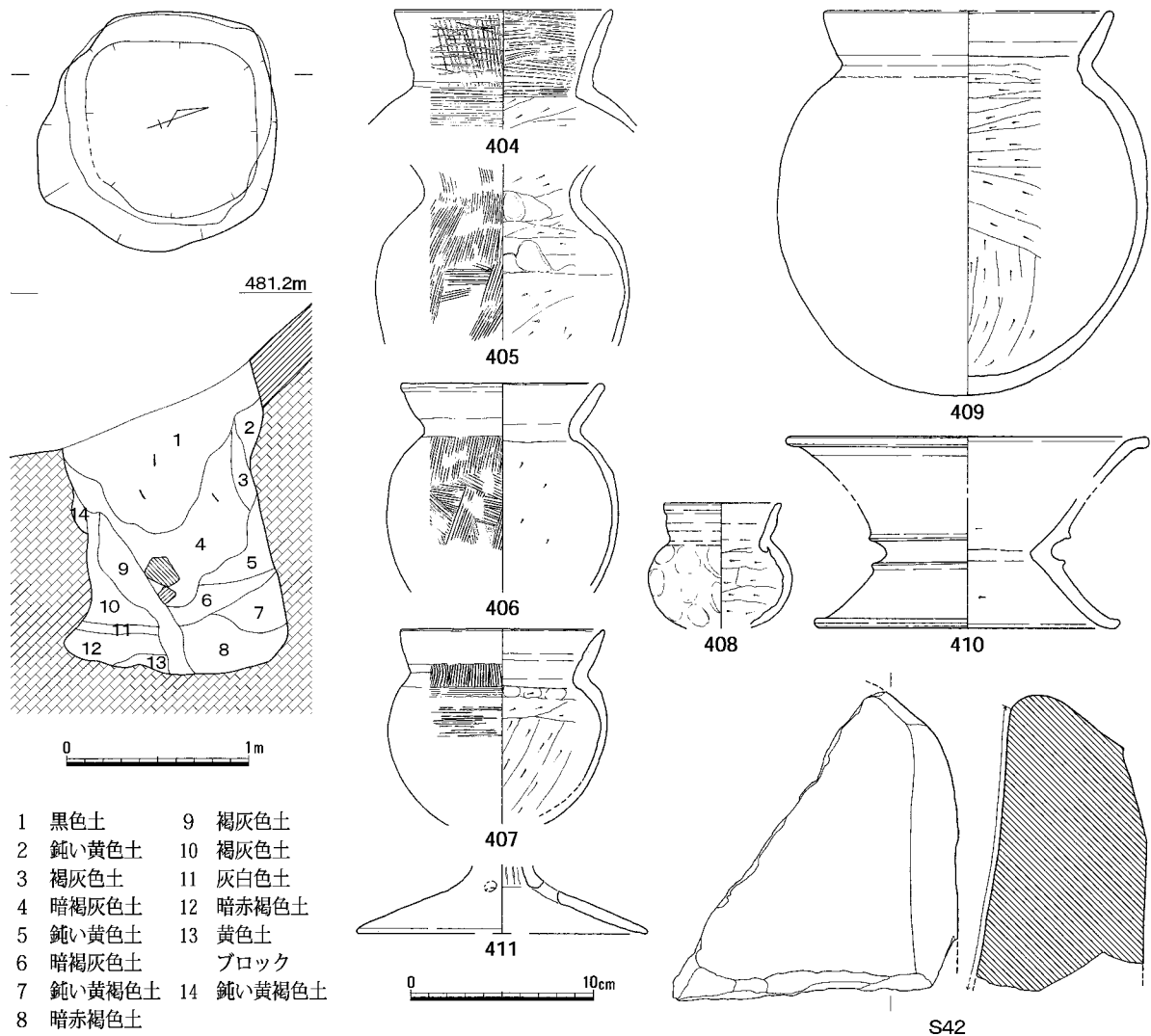
7 g 区の段状遺構群からは外れた位置で、段状遺構27が埋没した後に掘削されている。埋土は14層に分層でき、第9層を境に堆積状況が大きく異なることから第10~13層が流入後に掘りかえされ第1~9層が堆積したと考えられる。遺物は第1~4層までの出土が目立ち、405・407・409・410が第1層の下面付近、その他が第4層の下面で出土した。第4層出土遺物はS42などの礫の上でまとまって出土しており、第1~8層土に地山ブロックが目立つことから埋め戻し土と推察される。図示した土器は土師器で、壺404は口径11.8cmで鈍い褐色を呈し、胴部外面は横方向



- 1 鈍い黄褐色土
- 2 暗褐灰色土
- 3 褐灰色土



第126図 土壌46 (1/40)・出土遺物 (1/4)



- |          |           |
|----------|-----------|
| 1 黒色土    | 9 褐灰色土    |
| 2 鈍い黄色土  | 10 褐灰色土   |
| 3 褐灰色土   | 11 灰白色土   |
| 4 暗褐灰色土  | 12 暗赤褐色土  |
| 5 鈍い黄色土  | 13 黄色土    |
| 6 暗褐灰色土  | ブロック      |
| 7 鈍い黄褐色土 | 14 鈍い黄褐色土 |
| 8 暗赤褐色土  |           |

第127図 土壌47 (1/40)・出土遺物 (1/4)

のハケメ、口縁部は外面がタテハケメの後横方向のミガキ、内面が横方向のハケメを施す。405～407は甕で、405・406が鈍い黄橙色で407が橙色を呈し、胴部外面には粗いハケメが残る。406・407共口径11.0cmを測る。埴408は鈍い黄橙色を呈し、口径6.3cm、器高約7.0cmを測る。壺409は鈍い黄橙色を呈する鈍重な土器で、口径15.4cm、器高21.1cm、最大胴径20.2cmを測り、煤の付着がみられる。胴部外面は平滑にナデを行っているが、部分的に線状の工具痕と面が看取されることからタタキ整形をしている可能性がある。鼓形器台410も鈍い黄橙色を呈し、口縁部が小片であったが図上で復元して口径19.2cm、器高10.5cmと推定され、台径16.1cm、筒部内径約7.0cmを測る。表面の剥落が顕著で調整が不明瞭だが、内面は全面にヘラケズリの痕跡がわずかに残る。高杯411は鈍い黄橙色を呈し、脚径推定15.7cmに復元され、透かし孔は2個残っている。柱部内面にはシボリの痕跡がみられる。S42は砥石片である。掘削時期は不明だが、古墳前期前葉まで使用されたと判断される。(杉山)

#### 4 溝

##### 溝1 (第102・128図、図版13)

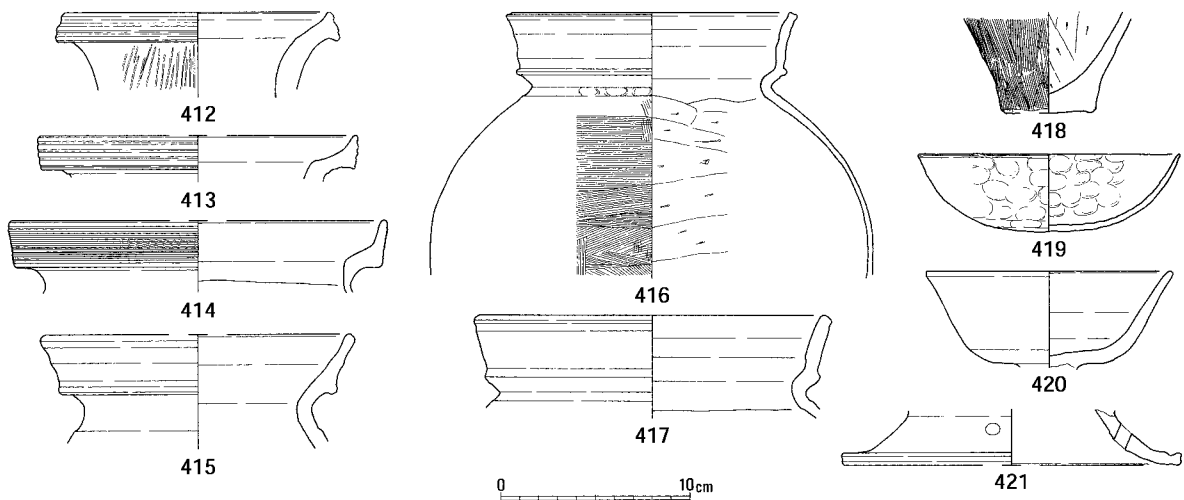
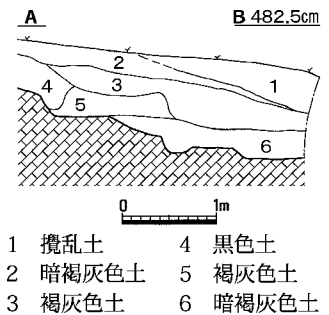
2・3e区の斜面裾で斜面に平行に走る溝である。埋土は第6層の単層で、第3～6層が土器包含

層である。遺物は412～414・418・421が第6層中出土で、これら以外は第3層出土である。412は壺、413・414は甕、弥生土器の甕415は口縁部はナデを行う。土師器416は鈍い黄橙色で口径14.6cmの甕で、胴部外面は細かいハケメ、口縁部は下端が水平にやや鈍く突出して外反気味に立ち上がり、面を持つ端部には沈線が巡る。甕417の口縁外面はナデで端部は僅かに外反する。甕418は外面に煤が付着する甕である。土師器杯419は口径13.8cm、器高4.1cmを測り、内外共指頭圧痕がみられる。土師器高杯420は口径13.0cmで直線的に延びる口縁部は端部付近で僅かに外反する。鼓形器台421は台径17.6cmに復元され、内面に煤が付着していることから破損後に蓋に転用したと考えられる。時期は第6層出土遺物から弥生後期後葉には機能しており、古墳前期前葉には埋没していたと判断される。(杉山) 溝2 (第102・129図)

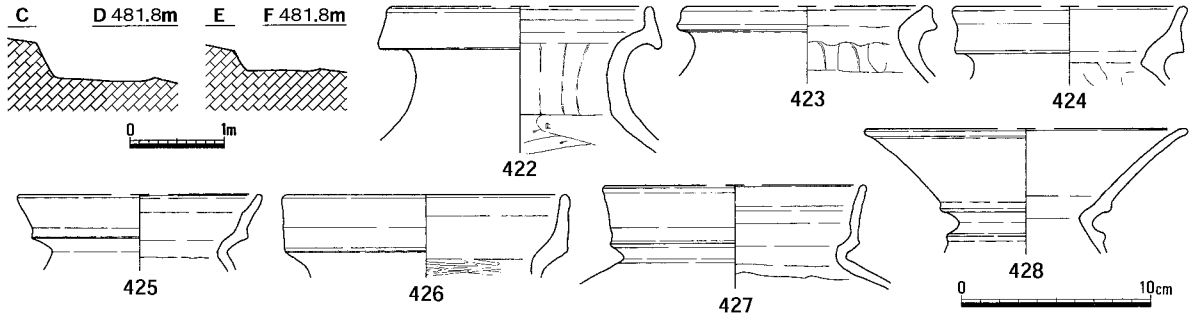
3・4 f 区で斜面に平行に流れる溝で、東端を竪穴住居27に、西端が溝4によって切られているが、底面海拔高と方向が近似することから溝1へ繋がる可能性もある。遺物は埋土が薄く一部混入がみられるが、壺422、甕423～427、鼓形器台428などのほかに小片が多くみられる。甕427は口縁部の立ち上がりが比較的薄く僅かに外反気味で、端部が丸く収まる。また、下端部はほとんど拡張されず、他の甕よりも新しい様相を持つ。鼓形器台428は口径16.8cm、筒部内径5.6cmを測る。非常に脆く調整は不明である。時期は切り合い関係などから弥生後期後半頃まで機能していたと判断される。(杉山) 溝3 (第102・130図、図版13)

4 e f 区の斜面裾に位置し、斜面に平行に掘削されている。段状遺構の可能性もあるが、溝として扱う。埋土は第1・2層共流土で、遺物は第2層中から弥生土器が多く出土する。図示したものは436が蓋でこれ以外は甕である。432は鈍い赤褐色を呈し、胴部にはタテハケメの前に平行のタタキ痕が残る。433は鈍い橙色を呈し、外面には縦方向のミガキがみられる。435は口径19.0cmを測り、橙色を呈し、口縁部はナデを行う。時期は、弥生後期後半頃と推察される。(杉山) 溝4 (第102・131図)

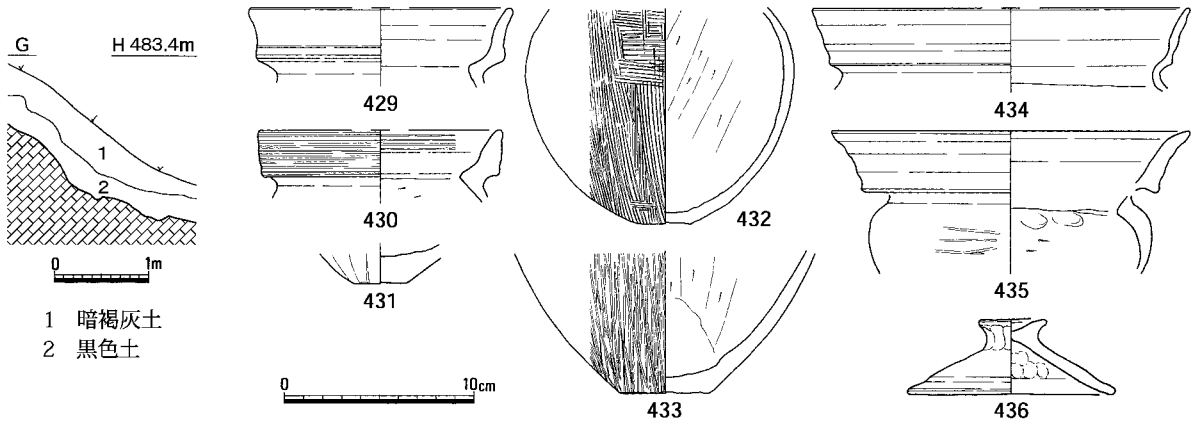
3 f 区で斜面に直交する流路を取り、溝2を切って掘られている。断面形が上位では「V」字状を呈し、この溝を境に東西で約20cmの段差があるが機能や性格は不明である。出土遺物はないが切り合い関係か



第128図 溝1 (1/40)・出土遺物 (1/4)



第129図 溝2 (1/40)・出土遺物 (1/4)



第130図 溝3 (1/40)・出土遺物 (1/4)

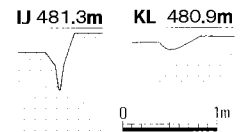
ら弥生後期後半頃に機能していたと考えられる。

(杉山)

(2) 遺構に伴わない遺物 (第132・133図、図版15・16)

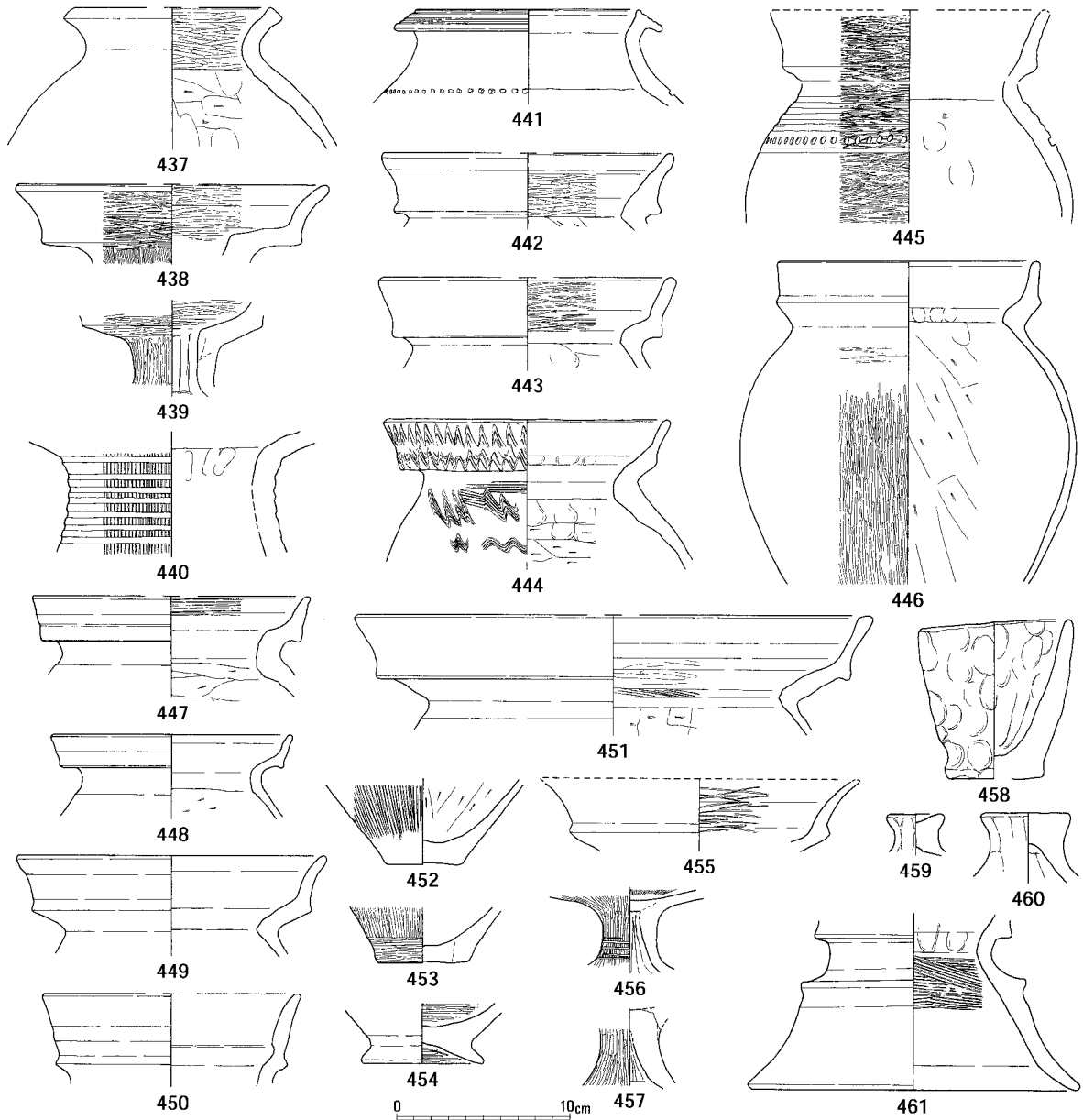
遺構検出中に多量の土器が出土したが、それらの大半は斜面上位からの転落品である。ここでは、3 d e 区の旧谷部で検出した黄色土中から出土した弥生土器を図示した。この堆積は、斜面上位の遺構築造時に行われた大規模な地形改変の際の排出土と考えられる。

437~440は壺で、437の外表面調整は不明だが口縁内面は丁寧なミガキを施す。438・439は口縁部内外共横方向のミガキ、頸部はタテミガキである。438は外表面全面と口縁部内面に赤色顔料が塗布される。440は長頸壺の頸部で、タテハケメの後沈線が巡り、外表面全面と口縁部内面に赤色顔料が塗布される。441~454は甕で、441は口縁部を下方に拡張してそこに凹線4条が巡る。肩部には角棒状の工具による刺突文が巡る。442・443は口縁部外面にはナデによる条線がみられ、口縁内面にミガキを行う。444は口径16.1cmに復元され、外面には粗雑な波状文が施される。445は外表面全面と口縁部内面に赤色顔料が塗布される。外表面全面に丁寧なミガキを施し、肩部に円棒状工具による刺突文と沈線が巡る。口縁部内面は調整は不明瞭だが、胴部はヘラケズリの後丁寧にナデを行う。446は胴部に煤が付着している。口縁部外面には横方向のナデによる条線がみられ、胴部には肩部に横方向、下半部に縦方向のミガキが看取される。447は口縁部外面にナデによる条線がみられ、内面にはハケメがみられる。448~450は口縁外面にヨコナデを行う。451は大形品で口径約30cmを測る。口縁部外面の調整は不明瞭だが、内面にはミガキと一部ハケメが残る。452~454は底部片で、454は台状を呈し底部の内外共にミガキを行う。455~457は高杯で、455は全面に赤色顔料が塗布される。456・457は短脚の柱



第131図 溝4 (1/40)

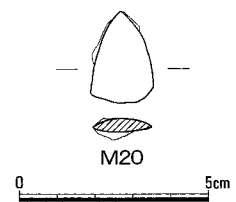




第132図 遺構に伴わない遺物① (1/4)

部で、両者共外面は丁寧なミガキを施し内面にはシボリ痕が看取される。しかし、杯部との接合方法が456が円板充填、457が差し込み式の差違がある。胎土には大差は認められないが、色調が456が明赤褐色、457が鈍い黄橙色と異なることから製作地の違いを示すかも知れない。458は全面に指頭圧痕の残る鉢である。459・460は蓋で、460は外面に赤色顔料が塗布される。鼓形器台461は鈍い黄橙色を呈し、やや焼成が悪く、脚部内面にはハケメが残る。筒部内面に面を持たず、新しい様相を示すことから、取り上げ時の混入の可能性がある。脚径は18.7cm、筒部内径7.2cmを測る。441のように弥生後期前半のものも混じるが概ね後期後葉から末葉の土器で構成されていることから、概期に大きな地形改変が行われたと判断される。

M20は4f区で出土した鉄鏃だが、同一包含層中出土の土器から弥生後期後半頃と推察される。(杉山)



第133図 遺構に伴わない遺物② (1/2)

## 第5章 まとめ

### 第1節 小坂向城山城跡について

小坂向城山城跡は、分布調査の時点では人工的な削平段が尾根上と尾根先端にみられたことから連郭式の山城と認識されていた。中世城館の概念では、村田修三は「山の場合は自然地形の要害性(急傾斜など)を利用するので、削平だけで、堀などをともなわなくても、城郭となりうる。(中略)中世城郭の確認の原則は、削平地(郭)のあることが必要条件、堀(山城では空堀)のあることが十分条件となる。」<sup>1</sup>とし、「陣所として使った空間をすべて城と評価するわけにはいかない。(中略)まずはその空堀や土塁だけを城郭遺構として把握し、その後方の無限に広がる平野は遺跡からははずすべきだろう。」<sup>2</sup>としている。

この概念に従えば、東側の尾根は中世以降の削平段を持ち、防御施設としての土塁を持つことから山城と評価できる。しかし西側は、古墳時代前期以前の地形改変であることが調査の結果明らかとなり、中世に何らかの機能を有していた痕跡が認められない。東側との間には空堀もなく、土塁も西側へは閉塞されていることから城跡とは判断できないといえる。また、尾根先端の細かい削平段は近世以降の畑などの痕跡である可能性が指摘された<sup>3</sup>。したがって、本山城跡は土塁に囲まれた東側尾根のみの単郭式山城跡と判断される。

次に、本山城跡の性格について考えてみたい。本地点は麓の可耕地からの比高差約60mの南東に延びた尾根上に位置する。尾根上からは、眼下に可耕地が望め、旭川から谷沿いに東西に走る街道と見明戸から分岐して北へ山越えする街道が一望できる。本城跡では土塁に画された内面には通路を伴う二段の削平段があるものの建物や柵といった遺構が確認されない。これに対して南東正面の尾根上には、堀切で区画された連郭式の見明戸城山城跡があり、その正面で本城跡からは谷を挟んだ丘陵の緩斜面には、館跡の存在が推測される遺物散布地が確認されている。これらのことから、小坂向城山城跡は、必要時に街道を見張るために設けられた見張り台であったと推測される。

最後に時期に付いて若干触れておく。調査の際には出土遺物が皆無であり、時期を判断する材料に乏しい。本城跡が築かれた美作国真嶋郡は、南北朝期以降北朝方の三浦氏が地頭となったが、その後すぐに南朝方の山名時氏の攻撃を受ける。そして1392年頃には山名氏に代わって赤松義則が美作守護職となるなど緊張感が高まり、郡内に築城の必要が高まったとされる<sup>4</sup>。15世紀以降、戦国時代に入ると山陰の尼子氏や西国の毛利氏、備前の宇喜多氏などが美作の領地を取り合い、再び緊張が高まったと推測され、現在本地域に残る山城跡はこのころに築かれたものと考えられる。ちなみに、文献上に見明戸の地名が登場するのは、続史料大成中に1465・1466年に美作国守被官人井伊将監が違乱した記述があるのみである<sup>5</sup>。

そこで改めて小坂向城山城跡の構造を見ると、南北朝期の城の特徴である切り岸は認められず、防御施設は土塁のみである。そして、近隣に所在する見明戸城山城跡とは密接な関係があったと考えられることから、現時点では戦国期以降の築城と考えた方が良いだろう。『作陽誌』中には、見明戸

地内には「ハイタカ山」と「小坂山」に屯所があったとされる<sup>6</sup>。小字名から本城跡が直接小坂山の屯所に比定できるかどうかは明確でないが、立地条件からは本地点が屯所を置くには最適といえる。

## 註

- 1 村田修三 1984 「中世の城館」『講座・日本技術の社会史』第六巻
- 2 村田修三編 1987 『図説中世城郭事典』第一巻
- 3 米原町教育委員会中井均氏並びに久世町教育委員会池上浩氏の現地踏査によるご教示をいただいた。
- 4 二川村史刊行会 昭和41年 『二川村史』
- 5 久世町教育委員会池上博氏のご教示による。岡山県、1988、『岡山県史 第19巻 編年史料』に所収。
- 6 長尾勝明 大正元年 『新訂訳文 作陽誌』

## 第2節 ヒロダン・小坂向遺跡について

本遺跡は、麓の可耕地からの比高60mの尾根上と尾根中腹に営まれた集落遺跡である。調査前には尾根中腹の斜面調査区が周知されていたのみで、尾根上については新規発見であった。尾根上と中腹の比高差は約18mで斜度は40°程と比較的急斜面で、尾根上と中腹の遺構間の直接的な移動は不可能である。このため調査に際しても通路状の遺構の存在に注視したが、段状遺構27・28が想定される以外には明らかにできなかった。

遺跡中からは、旧石器の可能性のある礫石器S21や縄文時代の石錘S22が単体で出土する。古墳時代後期以降も6世紀後半の須恵器335や土壙35・36などがあるが、本遺跡の主體的な時期は、弥生時代後期から古墳時代前期前葉である。

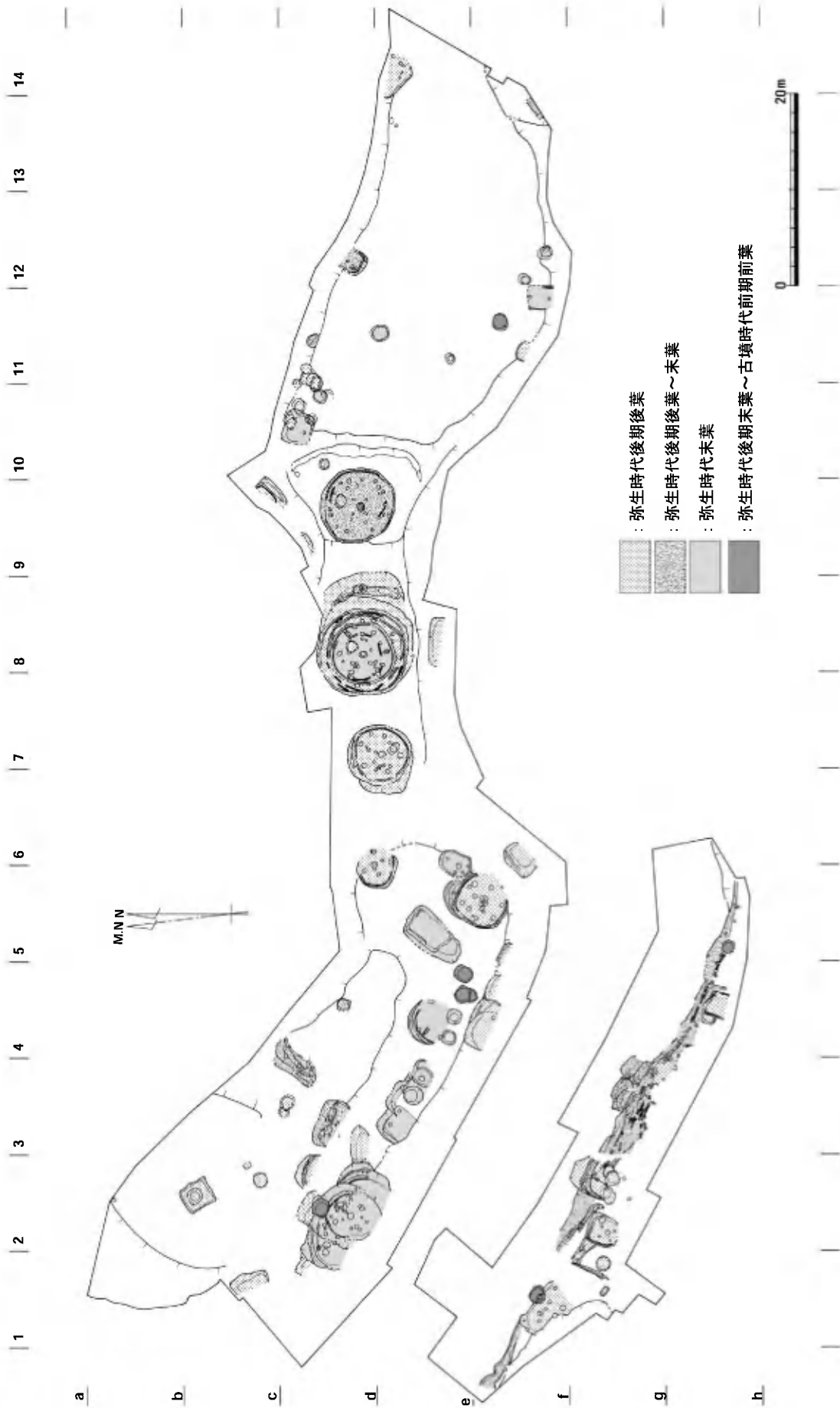
以下、該期を中心に出土土器から推測される遺構の変遷を中心にまとめたい。

出土土器には、尾根上調査区の南斜面にみられた排出土中の317～319・330、斜面調査区出土の441など弥生時代後期前半の土器が若干含まれる。このことから、明確な遺構は確認できていないが、該期になって小規模な集落が営まれ始めたと考えられる。

弥生時代後期後葉になると、多くの遺構・遺物が残されている。東側尾根上は、山城築城時に上面が大きく削平されている。このため、削平があまり及んでいない北斜面を主体に竪穴住居24・25や土壙18～22・24・25が確認でき、中央の状況が不明瞭だが、貯蔵穴と考えられる土壙群と工房の可能性が推察される住居が存在するのみである。このことから、新段階には西側尾根上の生活区域とは区別した空間利用を行っていたと考えられる。

西側尾根上調査区の状況では、遺構は平坦面から斜面にかかる変換点付近に築かれた、小型の竪穴住居(2・3・22)や段状遺構(11～16)がみられる。これらは斜面上位の遺構が構築される際に排出された土砂で埋没したもの(竪穴住居2、段状遺構14・15)もあり、出土土器も古い様相を示すことから、後葉の古い段階には大きな地形改変は行わずに遺構を築いたといえる。しかし後期後葉の新しい段階には、最高所から大きく地山を削平し、3段の平坦面を作り出して遺構を構築している。このうち最高所には竪穴住居1がほぼ中央に造られ、他には削平を受けた古い段階の土壙しか存在していないことから、集落の中でも特殊な性格を持った空間であったと推察される。他の平坦面には、段状遺構や竪穴住居が築かれ、末葉まで継続して使用されている。

さらに、東西の尾根を分断するように竪穴住居14を築き、その東西の斜面裾に竪穴住居13・19を配している。竪穴住居14は後葉段階では2回の建て替えで住居を拡張していき、最終的には径約10mの



第134図 弥生時代後期～古墳時代前期の時期別主要遺構変遷 (1/600)

竪穴住居16となり、集落内でも最大規模になるが、構築された位置からも本集落の中心的な住居であったと考えられる。

一方、斜面調査区では段状遺構18が一辺約5.5mと比較的規模が大きいものの、3m前後の小型の段状遺構が主体を占める。また、これら段状遺構群が頻繁に建て替えが行われた様子が窺え、尾根上の遺構群とは大きく状況が異なっている。斜面調査区の遺構床面からの出土遺物が希少なため、この状況が一般生活を行う上での遺構の機能差を示すのか、階層差を示すのかは明確でない。

出土遺物の中で注目すべきものとして、本時期に帰属する備中南部からの搬入品である器台328と特殊器台329がある。特殊器台や特殊壺は、岡山県北部においては墳墓出土が主体であったが、本遺跡では墓壙は確認されていない。出土地点が竪穴住居12のある平坦面からの流出土であることから、竪穴住居12か、平坦面に置かれていたものと推察され、いずれにしても集落内で使用されたものと判断される。

弥生時代後期末葉になると、後葉に築かれた遺構の大半が建て替えや造り替えが行われる。竪穴住居は尾根上に築かれていた12・13が廃棄され、新たに南斜面を埋めて竪穴住居4～7が築かれる。また、東側尾根上にも小規模の竪穴住居や土壇が築かれ、尾根上の中心的な住居であった竪穴住居16も一端埋められ、規模を縮小して竪穴住居17に建て替えられる。この結果、後期後葉のように突出した規模を持つ中心的な住居は消え、住居規模が均一化する。また、前段階では住居と貯蔵穴が区域を分けて存在していたが、本時期になって住居に近接して掘削される。

斜面調査区では、明確な該期の遺構は土壇のみだが、前段階以来小型の段状遺構が築かれつづけている。

古墳時代に入ると、土壇内や、斜面調査区の溝埋土と段状遺構の覆土から土師器は出土するものの、竪穴住居や段状遺構といった遺構はみられなくなる。土壇13・14・30・38・47から出土した土師器は、いずれも埋土の上位もしくは最上層からの出土で、完形に接合される土器が多いことから土壇を埋め戻した際に遺棄されたと判断される。斜面調査区においては、遺構覆土中から出土する土器の状況から、段状遺構が存在した可能性は否定できない。しかしながら、本時期になって、近隣の別地点に集落の中心が移動し、弥生時代以来集落として利用されていた本調査地点は、居住地として利用されなくなったと考えられる。

以上、本遺跡の変遷をみてきた。本遺跡は弥生時代後期後葉をピークにした、後期中葉から古墳時代前期前葉までの期間、継続して営まれた集落である。尾根の麓の可耕地近くには低い尾根が多くあるにもかかわらず、尾根上に集落を営んだ要因は、周辺の調査が行われていない状況では明確にしない。しかし、周辺の低丘陵上でも本遺跡と同時期の土器が採集されており、それらとは機能的な差を考慮する必要があるかも知れない。ただ、遺跡の所在する地域が、旭川上流域の山陰との交流で利用される路線の一つであったことは明確で、特殊器台や吉備型甕といった吉備南部の土器と鼓形器台や山陰型甎などの山陰産の土器が出土することからも重要な地域であったことは想像にかたくない。

参 考 文 献

[岡山県]

- 亀山行雄 1996「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104 岡山県教育委員会  
 亀山行雄 2003「吉備の古式土師器」『古墳出現期の土師器と実年代』シンポジウム資料集 (財)大阪府文化財センター  
 高橋 護 1980「入門講座弥生土器 山陽1～4」『考古学ジャーナル』173・175・179・181  
 高畑知功 1992「備中地域」『弥生土器の様式と編年』

[鳥取・島根県]

- 中川 寧 1996「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」『島根考古学会誌』第13集 島根考古学会  
 中川 寧 2003「山陰における古式土師器の編年と派生する問題について～出雲を中心に～」『古墳出現期の土師器と実年代』シンポジウム資料集 (財)大阪府文化財センター  
 花谷めぐむ 1987「山陰古式土師器の型式学的研究」『島根考古学会誌』第4集 島根考古学会  
 牧本哲雄・八峠興 1998「石脇第3遺跡ほか」『鳥取県教育文化財団調査報告書』54 財団法人鳥取県教育文化財団  
 牧本哲雄 1999「長瀬高浜遺跡Ⅷほか」『鳥取県教育文化財団調査報告書』61 財団法人鳥取県教育文化財団  
 松井 潔 1997「東の土器、南の土器」『古代吉備』第19集 古代吉備研究会  
 松山智弘 2000「小谷式再考」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会  
 山柵雅美ほか 1991「南谷ヒジリ遺跡ほか」『鳥取県教育文化財団調査報告書』26 財団法人鳥取県教育文化財団  
 第31回 山陰考古学研究会事務局 2003「山陰の集落遺跡」山陰考古学研究会

編 年 対 比 表

本書で用いる時期	柳瀬1977 備前・上東	亀山1996 備中・津寺	高橋1980 吉備	中川1996	松井1997	牧本1997 伯耆	牧本1999 伯耆	花谷1987 出雲	
弥生後期前葉	鬼川市1	弥・後・I	VII期	a	山陰I期	V期	I期		
				b					
				c					
弥生後期中葉	鬼川市2	弥・後・II	VII期	d	山陰III期	VI期		九重3号墓	
				a	山陰IV期	VII期			
弥生後期後葉	鬼川市3	弥・後・III	VIII期	b	山陰V期	VIII期	II期	的場	
				c	山陰VI期古相	IX期	III期		
				d					
弥生後期末葉	才ノ町1	弥・後・IV	IX期	a	山陰VI期中相	X期	IV期	鍵尾A区 5号墓	
	才ノ町2			b					
	c								
古墳前期前葉	下田所	古・前・I	X期	a	山陰VI期新相	XI期 XII期	V期	天神川I期	大木
				b					
				c		VI期古	天神川II期		
				d					
古墳前期中葉	亀川上層	古・前・II	X期	e		VI期新	天神川III期	小谷	
				a			天神川IV期		
古墳前期後葉		古・前・III	XI期	b					
				a					

- 1 別表に記した岡山県の編年対応は亀山1996を、山陰の編年対応は第31回 山陰考古学研究会事務局 2003を主に参考にしてしている。しかし、本書で用いる時期名称を中心にしていないため、必ずしもそれぞれ横軸の対応は合致していない。
- 2 本書で用いる時期名称は、基本的には別表に準拠するが、土器の様相によっては「前半」「後半」などの用語を使う。

# 附編1 ヒロダン・小坂向遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

## 1 分析の目的

この胎土分析では、弥生時代後期中頃～古墳時代前期前半の堅穴住居・段状遺構・土壙・包含層からの出土土器に関して理化学的な分析を実施し、どの地域の胎土に類似しているか調べた。検討方法は、遺跡内から出土した土器と、現在までに蓄積している備中地域（足守川加茂遺跡、足守川矢部南向遺跡、津寺遺跡）、伯耆地域（米子上福万妻神遺跡、米子城跡西町遺跡、青木遺跡、倉吉猫山遺跡、倉吉夏谷遺跡）の土器と比較検討した。

また、出土土器の中には、表面に赤色顔料が塗られているものがある。この顔料がどのような成分で構成されているか検討した。

## 2 分析方法

分析は、蛍光X線分析法と実体顕微鏡による砂粒観察の2つの分析法で検討した。

蛍光X線分析法では、エネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーインスツルメンツ社製 SEA 2010L）を使用し、胎土中の成分（元素）量を調べた。測定した成分は、13元素でそのうちK（カリウム）、Ca（カルシウム）、Ti（チタン）などの成分に顕著な違いがあり、これらの成分を用いてXY散布図を作成し、胎土の差異について検討した。

実体顕微鏡による土器表面の観察では、胎土に含まれる砂粒（岩石・鉱物）の種類、含有量について調べた。

分析した土器は、第1表に示した110点の土器である。

## 3 蛍光X線分析法による分析結果

第1図K - Ca、第2図Ti - Caの両散布図は遺跡内での土器のあいだで比較してみた。すると、大きく3つの胎土にわかれた。それは掲載番号26（壺）・74（器台）・75（器台）・98（器台）・106（高杯）・328（特殊器台）・329（器台）のAグループと、404（壺）・444（甕）・445（甕）のBグループと、それ以外の同遺跡出土土器のほとんどが分布するCグループである。また、第1図K - CaではCグループが、Ca量が約1.5%以下に分布し、K量が1.5%付近を境界として2つにわかれる傾向がみられた。そこで、このK量が1.5%以下のものをC'グループとして分類した。なお、このC'グループに分布する土器は92（甕）・289（壺）・296（罎）・297（甕）・307（鼓形器台）・368（壺）・376（甕）・382（高杯）・384（低脚杯）・385（鼓形器台）・387（壺）・391（甕）・392（甕）・410（鼓形器台）・411（高杯）・440（壺）である。

第3図K - Ca、第4図Ti - Caの両散布図では、備中地域および伯耆地域の各遺跡出土土器との比較をおこなった。その結果、備中地域の分布域には、ヒロダン・小坂向遺跡出土土器はほとんどが入らなかった。また、同遺跡出土のAグループに属する特殊器台（328）・器台（74・75・98・329）・高杯（106）は備中地域の特殊器台分布域に入り胎土的には類似していた。26（壺）もほぼ特殊器台

に近い分布であった。そして、伯耆地域の土器は、備中地域と半分ほど分布範囲が重なるが、ヒロダン・小坂向遺跡のC・C'グループには伯耆地域が半分ほど分布している。特にC'グループには伯耆の倉吉地域の土器が分布した。

#### 4 実体顕微鏡観察（肉眼観察）による結果

実体顕微鏡による肉眼観察で胎土に含まれる砂粒の岩石、鉱物の種類を同定した。観察方法は土器表面を観察し、観察倍率は10倍～30倍で随時観察した。その結果、5種類の胎土に分類できた。

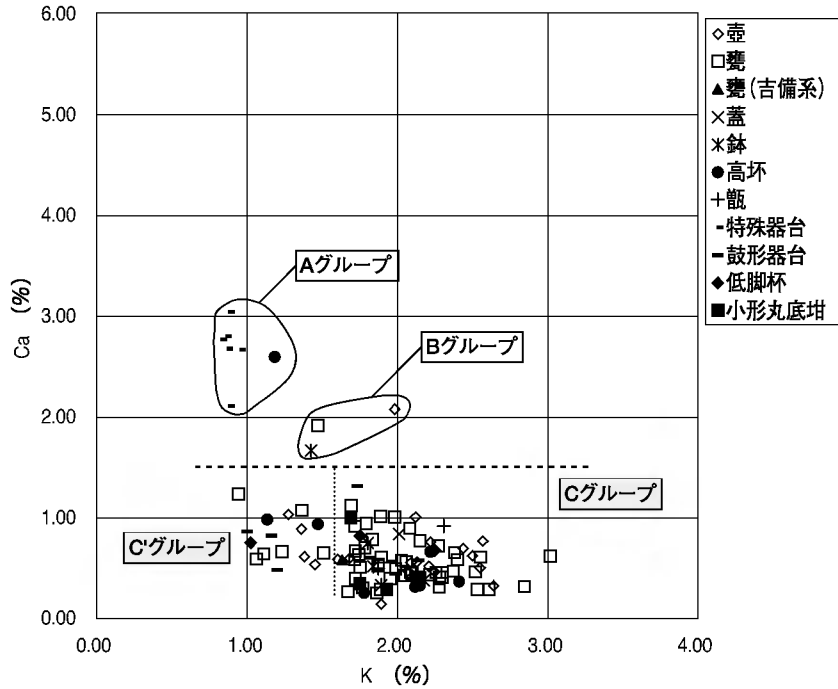
砂粒Ⅰ類 …… 1mm以下の石英・長石・角閃石を多く含み、1mm以下の黒雲母を少量含む（写真1）。特殊器台、器台の胎土。

砂粒Ⅱ類 …… 1mm以下の石英・長石を多く含み、0.5mm以下の角閃石を少量含む（写真2）。

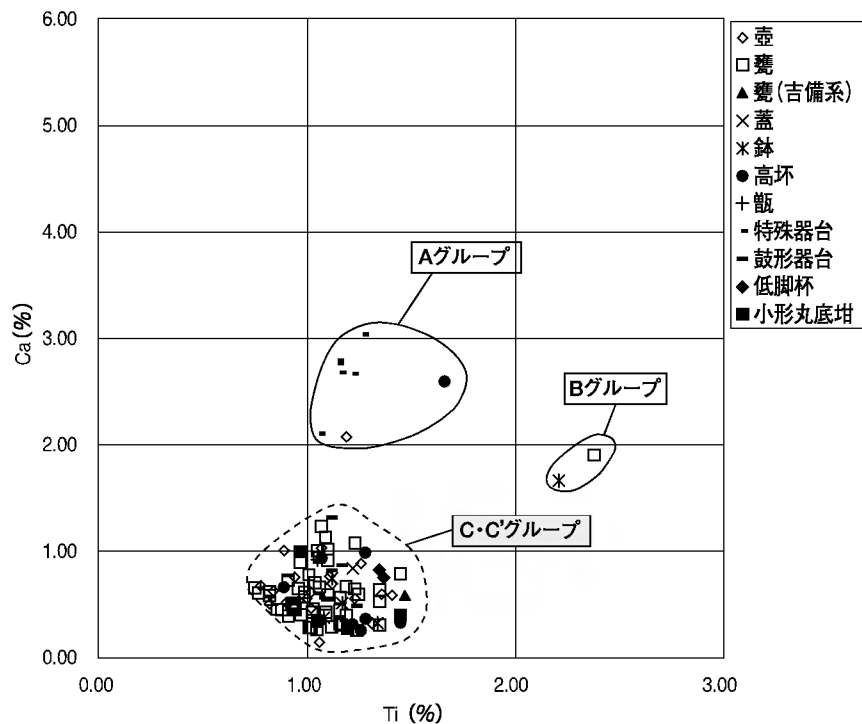
砂粒Ⅲ類 …… 2mm以下の石英・長石を含み、0.5mm以下のごく少量の黒雲母・角閃石を含む（写真3）。

砂粒Ⅳ類 …… 3mm以下の石英・長石を含み、0.5mm以下の黒雲母を少量含む（写真4・5）。

砂粒Ⅴ類 …… 2mm以下の石英・長石・片岩を含み（いずれも円



第1図 遺跡内での胎土の比較 (K-Ca 散布図)



第2図 遺跡内での胎土の比較 (Ti-Ca 散布図)



レキ)、0.5mm以下の火山ガラスを少量含む(写真6)。

以上のように、5種類の砂粒に分類できたものを蛍光X線分析結果と比較すると、I類(備中地域の特殊器台・器台の胎土)は蛍光X線のAグループに、II類はBグループに対比できる。またIII類、IV類、V類はC・C'グループの胎土に相当する。なお、IV類には黒雲母花崗岩の岩片が観察される。

なお、V類に分類された土器は66(甕)・90(甕)・254(甕)・257(壺)・306(鉢)・395(高杯)・441(甕)である。

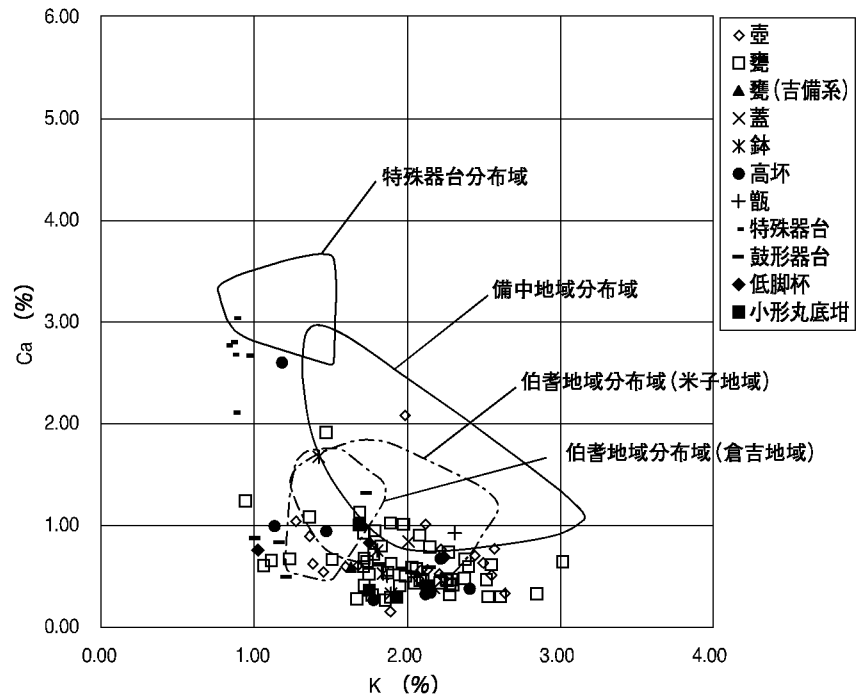
### 5 土器表面の赤色顔料の分析結果

今回分析した土器のうち土器表面に赤色顔料が付着したものが17点あった。このうち、赤色顔料の残存状態の良い6点の土器について分析を実施した。分析は蛍光X線分析法で行い、土器表面に付着している赤色顔料を被破壊で測定した。

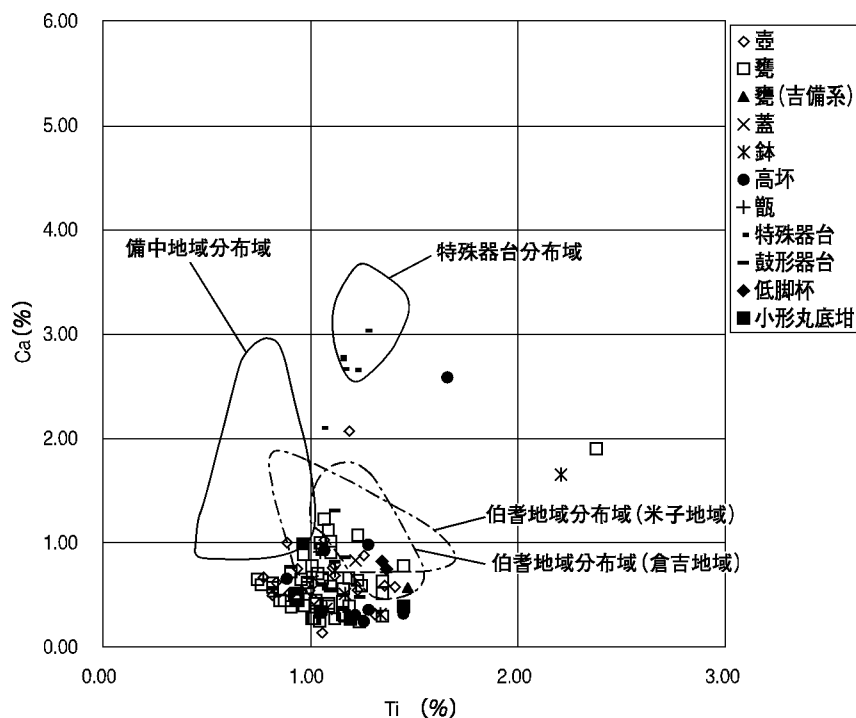
また、第2表に示しているように比較データとして、同一の土器の分析値も併せて掲載した。その結果、6点の土器表面の赤色顔料からは、すべてFe量が検出され、比較した土器胎土とは明らかにFe量が多いことがわかった。また、水銀などの元素が検出されていないことから、これらの赤色顔料は、すべて酸化第二鉄を成分とするベンガラであると推定される。

### 6 まとめ

ヒロダン・小坂向遺跡



第3図 遺跡と各地域間との比較 (K-Ca 散布図)



第4図 遺跡と各地域間との比較 (Ti-Ca 散布図)

出土土器の胎土分析（蛍光X線分析、実体顕微鏡観察）を実施した結果、以下のことが明らかになった。

同遺跡内出土土器の胎土比較では、蛍光X線分析法で大きく3つのA・B・C（C'）グループに、また、実体顕微鏡観察では砂粒分類でⅠ類からⅤ類の5種類に分類が可能であった。以下に両分析結果を比較してみた。

- (1) Aグループと砂粒Ⅰ類は、備中地域の特殊器台分布域に相当し、同遺跡で出土した特殊器台・器台は備中地域から持ち込まれたと推定される。
- (2) Bグループと砂粒Ⅱ類は、第3図のK - Ca 散布図で備中地域の各遺跡分布領域に入るが、第4図Ti - Ca 散布図では444（甕）と445（鉢）がどの分布域にも入らないことから、産地ははっきりしないが他地域から持ち込まれた可能性はある。
- (3) C・C'グループには砂粒Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類が相当し、特に第3図のC'グループには伯耆地域（倉吉地域）の土器が分布することから、この分布域は倉吉地域の土器分布域と推定される。また、それ以外のCグループの分布域には、伯耆地域（米子地域）が半分ほど重なる以外は他のものは分布しない。そして、砂粒分類ではⅢ・Ⅳ類が、花崗岩および花崗閃緑岩に起源を持つ砂粒がみられ、ヒロダン・小坂向遺跡が立地する尾根の基盤層は、花崗岩および花崗閃緑岩で構成されている。このことから、同遺跡出土のほとんどの土器は、遺跡周辺の粘土を使用し製作されたことが十分想定される。この結果、C・C'グループの領域は遺跡周辺で生産（在地産）された土器の分布域と推定される。また、砂粒Ⅴ類には円レキに近い研磨された砂粒が含まれ、特に片岩が含まれることから、このⅤ類も、遺跡近辺の河川堆積砂粒を使用したことが推定される<sup>(1)</sup>。

このように、ヒロダン・小坂向遺跡より出土した土器の胎土分析を実施したが、ほとんどの土器が遺跡周辺で生産されたことが推測された。また、384（低脚杯）のように形態、技法的に山陰産と考えられるものは、胎土分析でも山陰地域に分布することから、搬入品かもしれない。

今回の蛍光X線分析では、ほとんどの土器（C・C'グループ）がほぼ一つにまとまったが、このまとまりには、山陰地域の土器も一部分布する結果となった。そして、このグループの砂粒観察を実施したところ、ヒロダン・小坂向遺跡周辺の砂粒に類似していることが指摘できた。しかし、定性的な砂粒観察のため、不十分な分析結果であるため、このC・C'グループの土器は在地および山陰の両分布域と推測される。

この分析の機会を与えていただいた、杉山一雄氏をはじめ、岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々には、いろいろご教示いただいた。末筆ではありますが記して感謝いたします。

#### 註)

- (1) 砂粒Ⅴ類に関しては、研磨された特徴的な片岩などが含まれており、今回は遺跡近辺としたが、もう少し南の地域（久世町、津山市など）の土器にも観察される砂粒で、今後試料の蓄積を行い再検討する必要がある。



附編 1 ヒロダン・小坂向遺跡出土土器の胎土分析

掲載番号	実測番号	出土遺構名 (掲載名)	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
383	486	東半段状遺構群	低脚杯	60.67	1.35	21.42	9.45	0.10	1.97	0.83	2.18	1.75	0.01	150	210	328
384	487		低脚杯	62.89	1.37	25.21	3.77	0.03	2.01	0.76	2.75	1.02	0.03	71	227	393
385	504		鼓形器台	65.78	1.17	23.03	3.27	0.04	2.06	0.87	2.54	1.00	0.07	75	263	330
387	400	土壙38	壺	65.23	1.07	22.28	4.01	0.03	1.86	1.04	2.85	1.27	0.10	126	302	314
389	485		甕	61.87	0.86	25.34	4.04	0.06	2.09	0.46	2.47	2.52	0.10	189	142	342
390	483		甕	64.17	0.88	23.45	4.02	0.04	1.93	0.46	2.27	2.30	0.30	207	153	321
391	482		甕	65.44	1.19	22.51	3.46	0.04	1.92	0.67	3.00	1.23	0.35	112	198	341
392	484		甕	63.40	1.23	23.76	4.65	0.05	2.00	1.08	2.31	1.36	0.00	111	309	389
395	399		高杯	64.29	1.22	19.14	7.98	0.08	2.04	0.32	2.55	2.12	0.08	223	70	355
404	475		壺	56.18	1.19	23.89	9.62	0.14	2.15	2.08	2.29	1.98	0.25	171	236	349
405	476	土壙47	甕	61.75	1.45	22.83	5.91	0.07	2.13	0.79	3.01	1.83	0.03	201	235	357
406	478		甕	61.10	1.12	24.79	5.03	0.04	2.01	0.29	2.74	2.53	0.16	197	70	314
407	479		甕	61.48	1.06	25.43	4.04	0.05	1.84	0.95	2.51	1.79	0.67	139	254	355
408	477		小形丸底埴	62.66	0.97	24.74	3.68	0.05	1.89	1.00	2.81	1.69	0.35	139	223	306
409	474		甕	63.84	1.04	24.16	3.36	0.04	1.98	0.71	2.83	1.78	0.04	167	158	305
410	480		鼓形器台	66.14	1.12	22.20	3.60	0.04	1.90	0.83	2.60	1.16	0.24	105	230	329
411	481		高杯	64.22	1.28	23.93	4.77	0.04	1.81	0.99	1.67	1.13	0.00	90	272	427
416	420	溝 1	甕	63.04	0.91	24.69	4.11	0.04	1.87	0.40	2.44	2.28	0.02	232	130	334
420	419		高杯	54.60	1.34	30.44	6.60	0.04	2.03	0.33	2.58	1.89	0.00	182	121	392
440	522	斜面調査区包含層	壺	67.71	1.02	19.26	5.30	0.05	1.81	0.62	2.34	1.38	0.38	121	141	355
441	534		甕	67.99	1.24	18.90	4.95	0.04	1.76	0.26	2.18	1.86	0.59	147	87	394
444	538		甕	57.99	2.38	24.01	7.66	0.12	1.95	1.91	2.11	1.47	0.15	102	242	377
445	533		甕	59.70	2.21	20.69	9.90	0.13	1.87	1.67	1.84	1.42	0.33	184	228	408
461	537		鼓形器台	61.95	0.91	25.17	4.28	0.06	2.01	0.78	2.66	1.98	0.08	137	205	336
507	507	甕	61.94	1.16	25.17	5.05	0.05	1.79	0.32	1.43	2.85	0.03	200	68	458	

第 2 表 赤色顔料付着土器の分析結果 (%)

掲載番号	実測番号	出土遺構名 (掲載名)	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	測定面形状
26	3	堅穴住居 4・5	壺(転用器台)	51.16	1.06	27.98	12.10	0.15	2.35	2.11	2.02	0.87	0.00	粉末固形試料
				35.17	1.19	20.06	39.28	0.46	1.22	1.27	0.00	0.46	0.51	赤色顔料表面
75	205	堅穴住居13	器台	51.14	1.15	24.63	13.78	0.21	2.75	2.80	2.54	0.85	0.03	粉末固形試料
				48.37	1.78	20.87	19.74	0.33	2.38	2.59	2.56	0.97	0.08	赤色顔料表面
98	274	堅穴住居14~18	器台	49.06	1.15	25.96	14.49	0.21	2.46	2.77	2.38	0.82	0.50	粉末固形試料
				50.14	1.67	21.17	18.89	0.30	2.39	2.73	1.15	1.07	0.12	赤色顔料表面
257	174	土壙14	壺	64.19	1.36	18.75	8.27	0.09	1.82	0.60	2.87	1.68	0.15	粉末固形試料
				55.60	1.24	23.69	12.48	0.10	1.90	0.53	2.05	2.13	0.02	赤色顔料表面
293	299	土壙30	壺	63.00	0.82	24.81	3.27	0.05	2.01	0.51	2.73	2.55	0.04	粉末固形試料
				49.77	1.64	21.49	19.13	0.36	2.23	2.60	1.30	1.06	0.19	赤色顔料表面
440	522	斜面調査区 弥生成成土	壺	67.71	1.02	19.26	5.30	0.05	1.81	0.62	2.34	1.38	0.38	粉末固形試料
				61.59	1.27	22.76	7.40	0.14	1.99	0.55	2.10	1.78	0.21	赤色顔料表面

※同一試料の上段が胎土分析した試料である。

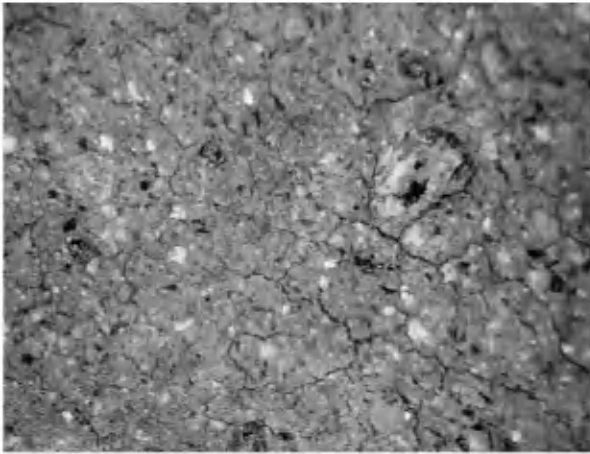


写真1 砂粒Ⅰ類 掲載番号10 (甕)

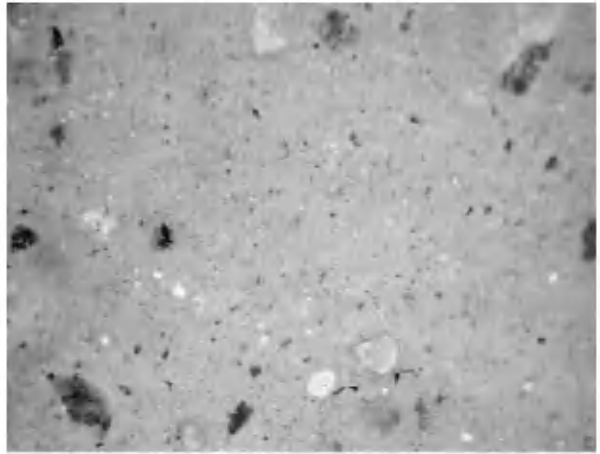


写真2 砂粒Ⅱ類 掲載番号445 (甕)

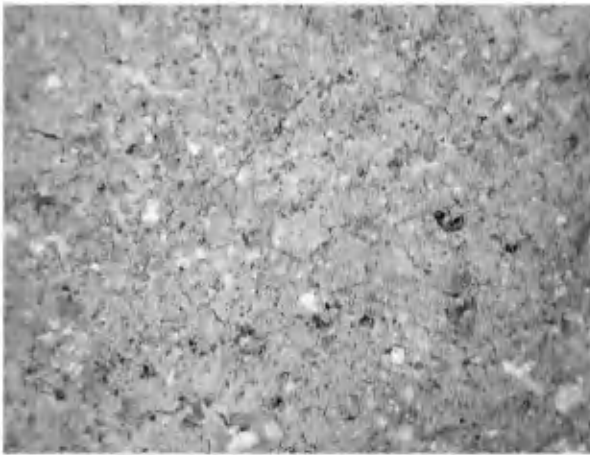


写真3 砂粒Ⅲ類 掲載番号253 (甕)

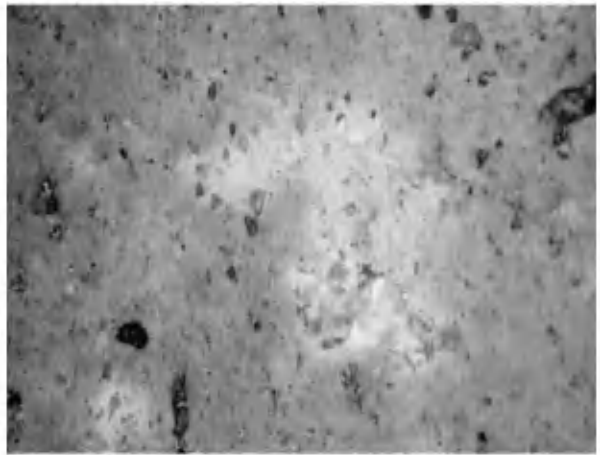


写真4 砂粒Ⅳ類 掲載番号236 (壺)

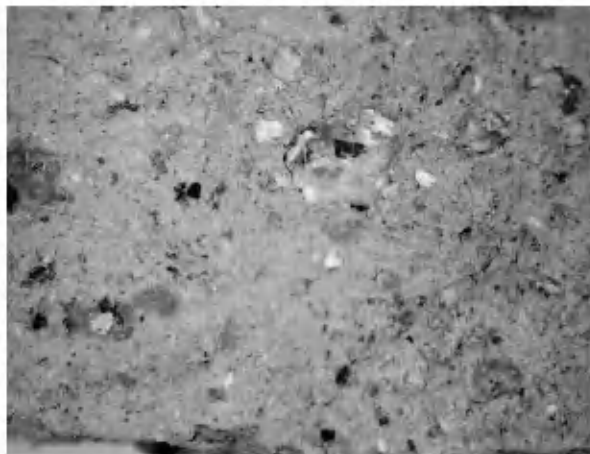


写真5 粒粒Ⅳ類 掲載番号72 (蓋)

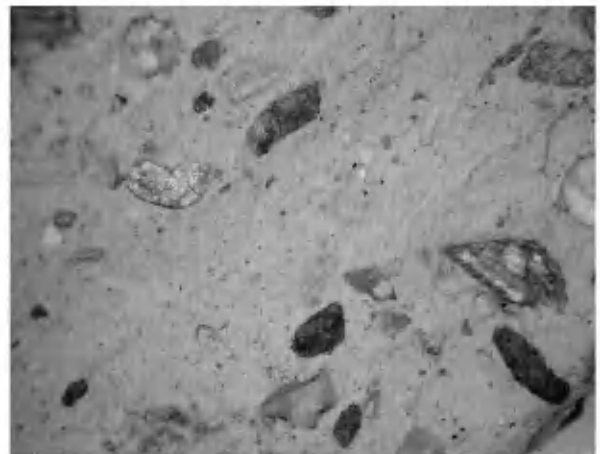


写真6 砂粒Ⅴ類 掲載番号441 (甕)

実体顕微鏡による砂粒観察 (8倍)



## 附編2 ヒロダン・小坂向遺跡から出土した炭化材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

### 1 はじめに

ヒロダン・小坂向遺跡は、鉄山川左岸の標高480～500mの山地尾根上に位置する。発掘調査により、弥生時代後期～古墳時代前期の集落や中世の山城跡に関わる遺構等が検出されている。一方、4c区および6d区では、木炭を大量に伴う遺構が検出されている。これらの遺構は、検出面から山城跡に関わる可能性があるが、表土から出土した遺物から、近世以降に構築された可能性も考えられている。

本報告では、時期不明の遺構から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行い、遺構の構築時期に関する資料を得る。また、樹種同定を併せて実施し、木材利用に関する資料を得る。

### 2 試料

試料は、4c区土壙35から出土した炭化材1点と6d区土壙36から出土した炭化材2点（上層出土炭、土壙内炭）の合計3点である。いずれも一袋中に多量の木炭が入っていた。放射性年代測定は、土壙35と土壙36の土壙内出土炭の2点について行い、樹種同定は3点全点について行う。

なお、いずれも多量の木炭が入っていることから、各試料から無作為に10点を選択して樹種同定試料とした。年代測定試料は、樹種同定試料から同定結果を考慮して単一樹種になるように抽出する。

### 3 方法

#### (1) 放射性炭素年代測定

木炭はいずれも20g以上が確保できたため、 $\beta$ 線計測法で行う。なお、測定は、株式会社加速器分析研究所（IAA）が行った。

#### (2) 樹種同定

木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

### 4 結果

放射性炭素年代測定および樹種同定結果を表1に示す。炭化材の年代測定値は、土壙35が $1480 \pm 70$  BP（補正年代 $1450 \pm 70$  BP）、土壙36が $1390 \pm 80$  BP（補正年代 $1420 \pm 80$  BP）であった。一方、各土壙から出土した炭化材は、すべて落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属クヌギ節に同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) プナ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射状に配列する。導管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

表 1 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

地点	遺構	出土位置	点数	樹種	年代	$\delta^{13}C$	補正年代	Code No.
4c区	土壙35	トレンチ	10	コナラ属コナラ亜属クヌギ節(10)	1480±70BP	-26.9‰	1450±70BP	IAA-188
6d区	土壙36	上層出土	10	コナラ属コナラ亜属クヌギ節(10)	-	-	-	-
6d区	土壙36	土壙内	10	コナラ属コナラ亜属クヌギ節(10)	1390±80BP	-23.3‰	1420±80BP	IAA-189

- 1) 放射性炭素年代測定は、 $\beta$ 線計測法による。
- 2) 年代は、1950年を基点とした年数で、補正年代は $\delta^{13}C$ の値を基に同位体効果による年代誤差を集成した値。  
なお、年代は補正年代と $\delta^{13}C$ の値からパリノ・サーヴェイ(株)で逆算した値。
- 3) 放射性炭素の半減期は、5570年を使用した。

## 5 考察

### (1) 遺構の年代

放射性炭素年代測定結果は、土壙35が1480±70BP(補正年代1450±70BP)、土壙36が1390±80BP(補正年代1420±80BP)であった。これらの年代測定値の補正年代について、INTCAL98(Stuiver et al)の較正曲線で歴年代を算出した。その結果、土壙35の年代値は中央値の交点がAD620とAD635にみられ、誤差範囲を含めるとAD540～AD660となる。一方、土壙36の年代値は中央値の交点がAD645にみられ、誤差範囲を含めるとAD595～AD665となる。この結果から、土壙35と土壙36は山城跡よりも古い6世紀～7世紀中頃に構築・使用された可能性がある。また、2遺構の年代が似たような値を示すことから、近い時期に構築・使用されたことが推定される。

### (2) 木材利用について

土壙35および土壙36から出土した炭化材は、抽出した全点がクヌギ節であった。その他の炭化材についても実体顕微鏡で確認したが、クヌギ節以外の樹種は認められなかった。日本に自生するクヌギ節には、クヌギとアバマキの2種があり、二次林などに普通な樹種である。本遺跡の立地からみて、両種とも遺跡周辺に分布していた可能性がある。クヌギ節以外の樹木の分布も推測されるが、クヌギ節以外の木材を利用していない状況は土壙35・36の性格を考える上で興味深い結果である。クヌギ節の木材が選択的に利用されていた可能性がある。

クヌギ・アバマキの材質は、いずれも重硬で強度の高い材質を有し、薪炭材としては国産材の中でも最も優良な部類に入る(平井, 1979)。クヌギ節の出土例は、岡山県内では川入遺跡や百間川原尾島遺跡の杭、田井ちご池遺跡の住居構築材等にクヌギ節が確認されている。また、河内城跡の炭窯からは、クヌギ節と同じコナラ亜属に分類されるコナラ節が出土している。周辺地域の例では、兵庫県坂遺跡および山平B遺跡の製鉄関連遺構から出土した炭化材にクヌギ節の多い結果が報告されている(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1992)。このようにクヌギ節は薪炭材、住居構築材など多様されている。今回の炭化材の用途については、遺構埋積過程に関する情報と合わせた評価が必要と考える。



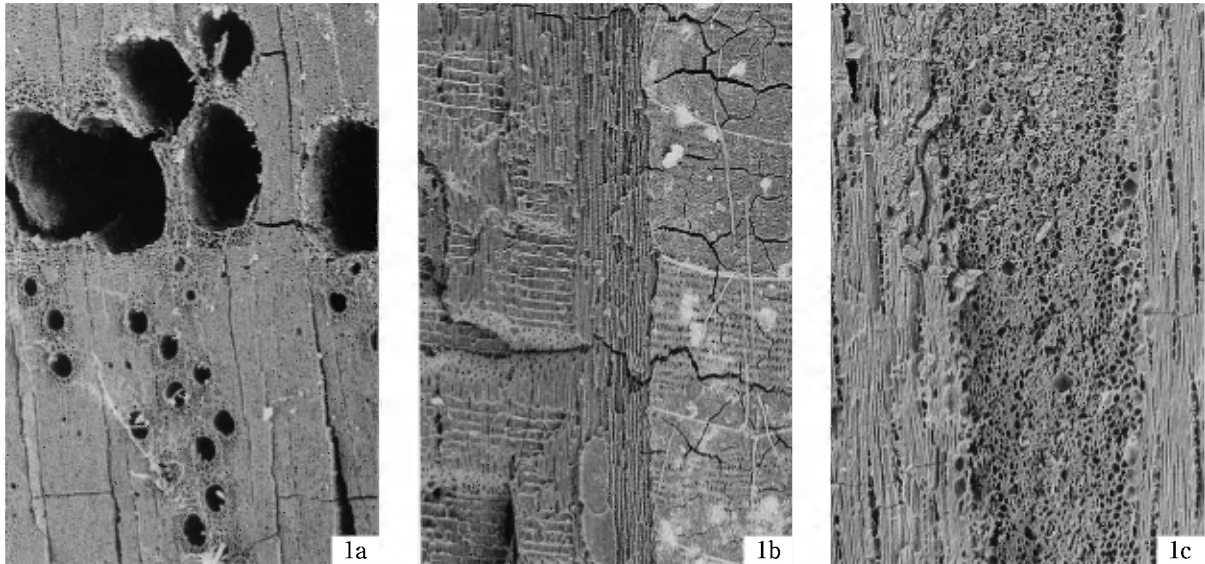
引用文献

平井信二 (1979) 木の事典 第2巻. かなえ書房

パリノ・サーヴェイ株式会社 (1992) 炭の樹種鑑定. 「兵庫県生産遺跡調査報告第1冊 製鉄遺跡I (佐用郡)」, p.92-95, 兵庫県教育委員会.

Stuiver, M, Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, J. W. Burr, G. S., Hughen, Kromer, B., McCormac, G., van der Plincht, J. and Spurk, M. (1998) INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

図版1 炭化材



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (西部下段土壙35内炭)  
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200  $\mu$  m:a  
200  $\mu$  m:b,c



## 遺構・遺物一覧表

## 凡 例

## 遺構一覧表

- 第1表内の「床面積」は現存値、〈 〉の数値は推定復元値、空欄は不明であることを示す。
- 第1表中の「柱穴」は主柱穴の数とそのうち確認できたものの数を示す。?の付いたものは推定される主柱穴の数を示す。  
例 「8/9?」:推定9本の主柱穴のうち、8本を検出している。
- 第1・2表内の「○」は存在を確認したもの、「-」は存在しないものを示し、「△」は土層断面では確認できるが平面では確認できていないことを示す。
- 第3表内の底面の状態は、以下の定義で用いている。  
「水平」:全面にわたってほぼたいらなもの。  
「凹」:壁面から中央部に向かって窪むもの。  
「凸」:壁面から中央部に向かって盛り上がるもの。  
「凸凹」:全面にわたって凸凹が顕著なもの。
- 第3表内の断面形は以下の定義で用いている。  
「鉢型」:上面径が底面径より大きいもの。  
「フラスコ型」:上面径が底面径よりも小さく、壁面が直線的に開くもの。  
「箱型」:上面径と底面径がほぼ同じもの。  
「鼓型」:壁面の途中に傾斜変換点を持ち、断面形が鼓形を呈するもの。  
「横穴型」:地山面に対して横方向に掘削されたもの。  
「二段型」:水平な底面に、ピット状か段状の落ち込みをもつもの。

## 遺物一覧表

- 第4～6表には掲載した遺物のほかに、出土した全品について掲載している。
- 「整理番号」は整理時に遺物に付した番号である。
- 「計測値」の空欄は計測不能なもの、「+」を付した数字は破片の現存値を示す。

## 竪穴住居一覧

遺構名	位置	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面積 (㎡)	柱穴	床面 海拔高 (m)	中央穴			焼土面	壁体溝	調査時遺構名	備考	
								形状	長軸× 短軸 (cm)	深さ (cm)					底面 海拔高 (m)
竪穴住居1	4 b	方形	310	178	6.5	-	498.67	-	-	-	-	-	I区No.1	中央に皿状の窪み	
竪穴住居2	3 b	隅丸方形	400	250+		-	496.77	-	-	-	○	△	I区No.7	段状に残存	
竪穴住居3	3 c	隅丸方形	200+	240+		-	494.78	-	-	-	○	-	I区No.6	段状に残存	
竪穴住居4	3・4 c	円形	610+			○5/5	494.70	-	-	-	-	○	I区No.20・25	斜面上位側壁面に棚を持つ	
竪穴住居5	3・4 c	円形				○5/5		-	-	-	-	○			
竪穴住居6	4 c d	円形	600+			○4/4	493.74	不整円	66×56	60	493.17	○	○	I区No.21	斜面上位側壁面に棚を持つ
竪穴住居7	4 c	円形	620+	606	〈17.57〉	○4/4	493.56	不整円	68×62	29	493.27	-	○	I区No.16	
竪穴住居8	7 d	隅丸方形	680	354	9.38	-	494.44	-	-	-	-	○	○	I区No.36	総床面積11.49㎡
竪穴住居9	7・8 d	隅丸方形	346	226	5.39	○2/2	494.20	-	-	-	-	○	-	I区No.37	
竪穴住居10	7 d e	円形	101	910+	〈22.25〉	○6/6	494.25	楕円	88×72	44	493.77	○	○	I区No.35	
竪穴住居11	7 d e	不整円			-	○4/4	494.22	楕円	45×42	56	493.80	○	-		
竪穴住居12	7・8 c d	隅丸方形	394+	390+	〈12.32〉	○4/4	494.10	楕円	70×68	41	493.68	○	○	I区No.39・46	段状に残存
竪穴住居13	8・9 d e	円形	695	670	24.50	○5・6/5・6	490.98	不整方	69×56	39	490.59	○	○	I区No.33	残存床面積9.75㎡

遺構・遺物一覧表

遺構名	位置	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面積 (㎡)	柱 穴	床 面 海拔高 (m)	中 央 穴				焼土面	壁体溝	調査時遺構名	備 考
								形 状	長軸× 短軸 (cm)	深 さ (cm)	底 面 海拔高 (m)				
竪穴住居14	9~11 c d	円形	796	782	47.76	○6/6	490.36	楕円	87×56	66	489.70	○	○	I区No41古	斜面上位に段を持つ
竪穴住居15	9~11 c d	円形	860	860	55.80	○8/9?						○	○		
竪穴住居16	9~11 c d	円形	1026	992	61.36	○8/9?10?						○	○		
竪穴住居17	9~11 c d	円形	508	478	17.30	○6/6	490.10	円	39×33	56	489.54	○	○	I区No41新	斜面上位に段を持つ
竪穴住居18	9~11 c d	円形	666	640	3.60	○10/10						○	○		
竪穴住居19	11・12 c d	円形	590		25.66	○6/6	493.28	不整方	84×70	44	492.84	○	○	Ⅲ区No9・12	斜面上位に段を持つ
竪穴住居20	11・12 c d	円形	770	750	42.58	○13/13						○	○		
竪穴住居21	13 e	方形	202+	248		○2/2	493.70	-	-	-	-	○	○	Ⅲ区No3	
竪穴住居22	11 b c	方形	355	200+		-	492.17	-	-	-	-	○	○	Ⅲ区No10・11	段状に残存、奥壁部に欄状の段あり
竪穴住居23	12 c	隅丸方形	352	302	5.20	○2/2	494.32	-	-	-	-	○	-	Ⅲ区No13	
竪穴住居24	14 c	隅丸長方形	366+	250	5.53+	○2/4?	494.67	円	33×28	10	494.51	○	○	Ⅲ区No20	
竪穴住居25	15・16 d	隅丸方形	429	240+		○	493.55	-	-	-	-	○	-	Ⅲ区No18	
竪穴住居26	15 d	-	-	-		○	493.76	-	-	-	-	○	-	Ⅲ区No19	
竪穴住居27	4 f	隅丸方形	318	313	7.02+	○4/4	481.04	楕円	58×40	23	480.75	-	○	Ⅱ区No18	
竪穴住居28	6 g	方形	210	208+	4.70+	-	480.12	-	-	-	-	○	○	Ⅱ区No17	

段状遺構一覧

遺構名	位置	平面形	長さ(cm)	床面海拔高(m)	柱穴	壁体溝	調査時遺構名	備 考
段状遺構 1	4 c	隅丸方	365+	495.28	×	×	I区No22	
段状遺構 2	5・6 c	不整方	528	496.24	○	×	I区No12	2基重複か
段状遺構 3	4 c	不整方	362+	496.50	×	○	I区No9	
段状遺構 4	5 c	隅丸方	486	496.28	○	○	I区No10	奥壁部に段状高まり
段状遺構 5	4・5 c	隅丸方	400	495.08	×	×	I区No13	
段状遺構 6	5 d	隅丸方	375+	494.80	○	×	I区No18	
段状遺構 7	5 d	隅丸方	328	495.04	×	×	I区No19	
段状遺構 8	5 d	隅丸方	383	494.93	×	×	I区No27	
段状遺構 9	6 d	円	470	495.04	○	○	I区No29	
段状遺構10	7 e	隅丸方	267	494.11	×	×	I区No38C	
段状遺構11	6 d e	隅丸方	412	493.72	○	×	I区No30	
段状遺構12	6 e	隅丸方	315+	493.65	×	×	I区No38A	
段状遺構13	6 e	隅丸方	285+	494.01	×	×	I区No38B	
段状遺構14	10 d	隅丸方	512+	489.64	×	×	I区No42	
段状遺構15	7・8 e	隅丸方	354	491.74	×	×	I区No34	奥壁部に段状高まり
段状遺構16	11 c	隅丸方	214+	492.16	×	×	Ⅲ区No24	
段状遺構17	13 e	隅丸方	212+	493.88	×	×	Ⅲ区No4	
段状遺構18	3 e	隅丸方	545	481.05	○	×	Ⅱ B区	
段状遺構19	4 f	隅丸方	270+	481.72	○	○	Ⅱ区No24・26上	
段状遺構20	4 f	隅丸方	360+	481.94	×	○	Ⅱ区No7	
段状遺構21	5 f	不整楕円	226+	481.80	×	×	Ⅱ区No27	
段状遺構22	5 f	不整方	242+	482.38	×	△	Ⅱ区No23	
段状遺構23	5 f	隅丸方	268+	481.56	×	×	Ⅱ区No29	
段状遺構24	5 f	隅丸方	255+	482.06	×	×	Ⅱ区No22	
段状遺構25	5 f	隅丸方	236	481.05	×	○	Ⅱ区No28	
段状遺構26	6 g	不整長方	290	480.36	×	×	Ⅱ区No15	
段状遺構27	6・7 g	-	1020+	480.40	○	×	Ⅱ区No11	
段状遺構28	7・8 g	-	740+	480.67	×	×		

土壌一覧

遺構名	位置	上 面		底 面				断面形	深 さ (cm)	底面海拔高 (m)	調査時 遺構名	備 考	
		平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	平面形	状態	長軸 (cm)						短軸 (cm)
土壌 1	4 a	楕円	29+	36	楕円	水平	22+	29	鉢型	15	498.77	I区No8	
土壌 2	4 b	隅丸方	136	132	楕円	水平	160	141	フラスコ型	86	497.92	I区No17	
土壌 3	4 b	隅丸方	74	59	隅丸方	凹	60		二段型	34 51	498.36 498.19	I区No2	底面中央に径23cmの円形ビット
土壌 4	5 c	隅丸方	78	65	楕円	水平	110	90	フラスコ型	65	497.77	I区No15	
土壌 5	5 c	不整隅丸方	107	105	円	凸凹	156	150	フラスコ型	76	497.49	I区No14	
土壌 6	4 c	円	190+	180+	楕円	水平	143	130	鼓型	196	493.47	I区No26	
土壌 7	5 c	不整円	93	80	楕円	凹	49	30	フラスコ型	103	495.29	I区No11	
土壌 8	5 d	楕円	200	182	円	水平	136	132	フラスコ型	168	493.30	I区No24	
土壌 9	5 d	楕円	204	175	楕円	凹	170	152	二段型	72	494.33	I区No23	
土壌10	6 c	隅丸方	140	125	楕円	水平	118	104	箱形	66	495.37	I区No45	
土壌11	6 d	円	155	150	円	水平	111	104	鼓型	126	493.35	I区No40	
土壌12	6 d	不整円	156	146	円	凸	91	88	鼓型	95	493.81	I区No28	
土壌13	6 d	不整	225	180	不整円	水平	145	143	鼓型	159	493.19	I区No32	
土壌14	6 d	楕円	188	160	円	水平	141	139	鼓型	199	492.71	I区No31	
土壌15	10 c	楕円	88	77	不整円	凸凹	110	93	鼓型	202	491.12	I区No47	竪穴住居14~18床面
土壌16	11 c	不整	140+	50	不整	凸凹	136	82	箱型	29	492.93	Ⅲ区No25	竪穴住居19・20床面
土壌17	12 c	不整円	112	98	不整楕円	凸凹	90	78	鉢型	40	493.48	Ⅲ区No17	
土壌18	12 c	不整円	97	95	隅丸方	水平	112	77	横穴型	69	493.65	Ⅲ区No28	

遺構・遺物一覧表

遺構名	位置	上 面			底 面				断面形	深 さ (cm)	底面海拔高 (m)	調査時 遺構名	備 考
		平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	平面形	状態	長軸 (cm)	短軸 (cm)					
土壌19	12 c	不整方	120	65	隅丸方	水平	108	65	横穴型	67	493.66	Ⅲ区No27	
土壌20	12 c	不整楕円	140	115	不整円	水平	142	127	フラスコ型	116	493.63	Ⅲ区No23	底面中央に径約50cmの円形ピット
土壌21	12 c	不整	111	92	楕円	凸凹	47		鉢型	36	494.33	Ⅲ区No21	
土壌22	13 c	円	104	94	円	水平	106	104	フラスコ型		494.44	Ⅲ区No 8	
土壌23	13 c	不整長方	131	102	不整	水平	98	48	鉢型	31	494.61	Ⅲ区No26	
土壌24	12 c	隅丸方	170		楕円	凹	133	86	箱型	142	493.33		
土壌25	12 c	不整方	143		円	水平	172		フラスコ型	72	494.03	Ⅲ区No22	
土壌26	12 c	隅丸方	103	86+	隅丸方	水平	68+	66	鉢型	36	494.42	Ⅲ区No14	
土壌27	12 c	楕円	148	138	円	凸	125	121	箱型	85	493.75	Ⅲ区No15	
土壌28	13 d	楕円	151	144	楕円	水平	191	168	フラスコ型	148	493.21	Ⅲ区No 7	
土壌29	13 d	不整楕円	109	85	円	水平	41	38	鉢型	45	494.04	Ⅲ区No16	
土壌30	13e	不整方	148	125	不整円	水平	175	157	フラスコ型	68	493.48	Ⅲ区No 5	
土壌31	14e	不整円	15	115	円	水平	155	147	フラスコ型	86	492.72		
土壌32	14e	不整楕円	100	86	楕円	水平	31+	22	箱型	59	492.87	Ⅲ区No 2	
土壌33	13e	楕円	103	83	円	水平	115	114	フラスコ型	164	492.18	Ⅲ区No 6	
土壌34	15e	隅丸方	232							130+		Ⅲ区No 1	
土壌35	4 c	隅丸長方	223	140	長方	水平	180	57	鉢型	57	494.55 494.37	I 区No 3	2基重複か?炭密含
土壌36	6 d	楕円	276	240	楕円	凹	219	166	鉢型	44	494.99	I 区No 5	炭多含、被熱顕著
土壌37	3 e	楕円	66	59	楕円	凹	44	36	鉢型	32	480.70	Ⅱ区No 4	
土壌38	3 e	不整方	160	150	不整楕円	水平	180	145	フラスコ・二段型	112 122	480.47 480.37	Ⅱ区No 3	底面南に段とピット2基
土壌39	3 f	円	156	152	円	凸凹	133	132	フラスコ型	79	480.19	Ⅱ区No 6	
土壌40	3 f	隅丸長方	98	52	長方	凹	85	44	鉢型	32	480.34	Ⅱ区No 9	
土壌41	4 f	楕円	72	55	楕円	凹	30	23	鉢型	42	480.94	Ⅱ区No19	
土壌42	4 f	楕円	350	175	不整楕円	凸	343	165	フラスコ型	244	479.76	Ⅱ区No25	
土壌43	4 f	不整	145	120	楕円	凸凹	101	94	フラスコ型	105	480.27	Ⅱ区No31	
土壌44	4 f	楕円	135	109+	楕円	水平	121	88+	鼓型	91	480.80	Ⅱ区No26	
土壌45	4 f	不整	162	158	不整	凸凹	141	116	鼓型	185	479.77	Ⅱ区No24	
土壌46	6 g	不整楕円	71	69	不整楕円	水平	67	61	フラスコ・二段型	67 78	480.33 480.22	Ⅱ区No16	
土壌47	7 g	不整	138	128	不整円	凸凹	120	115	鼓型	142	479.11	Ⅱ区No12	

土製品一覧

掲載 番号	整理 番号	出土遺構・土層名	器 種	現存計測値 (mm)			現存重量 (g)	備 考
				最大長	最大幅	最大厚		
C 1	390	竪穴住居19・20埋土	紡錘車?	55	46	19.0	32.5	孔径7mmの円孔
C 2	457	15 c 土塁盛土	円板	49	44	7.0	16.0	壺片転用
C 3	456	15 c 土塁盛土	円板	40	34	6.5	8.0	壺片転用

石器一覧

掲載 番号	整理 番号	掲載出土遺構・土層名	器 種	計測値 (mm)			現存重量 (g)	石 材	備 考
				最大長	最大幅	最大厚			
S 1	39	竪穴住居16床面	鎌	23.0	15.0	2.8	1.0	サヌカイト	
S 2	43	竪穴住居16床面	叩き石	116.0	82.0	53.0	794.3	珩岩	
S 3	44	竪穴住居17・18床面	台石	444.0	278.0	86.0	15400.0	花崗斑岩	
S 4	38	竪穴住居17・18覆土	素材剥片	30.0	20.0	12.0		碧玉	鳥根県玉湯町花仙山産?
S 5	185	竪穴住居19・20床面	叩き石	151.0	111.0	55.0	1082.5	花崗斑岩	
S 6	29	竪穴住居19・20下層埋土	叩き石	159.0	78.5	88.0	1520.0	珩岩	
S 7	40						146.0		
S 7	41	竪穴住居19・20埋土	砥石片	182.0+	71.0	51.5	183.3+103.0	頁岩	接合
S 7	42						174.1		
S 8	33	竪穴住居19・20埋土	砥石	98.5	38.0	33.0	180.0	細粒花崗岩	被熱
S 9	35	竪穴住居19・20埋土	砥石	75.0+	67.0+	59.0	403.9	半花崗岩	
S 10	32	竪穴住居19・20埋土	砥石	91.0	36.0	33.0	188.9	流紋岩	
S 11	36	竪穴住居19・20埋土	砥石	294.0	165.5	90.0	5200.0	珩岩	
S 12	2	段状遺構 3埋土	叩き石	123.5	74.5	65.0	915.7	珩岩	
S 13	1	段状遺構 4埋土	叩き石	77.0	73.0	34.0	277.7	珩岩	
S 14	7	段状遺構 1 5埋土	叩き石	113.0	66.5	49.0	443.2	花崗岩?	
S 15	3	土壌5埋土	台石	327.5	259.0	90.0	1130.0	花崗閃緑岩	
S 16	8	土壌11埋土	石庵丁	108.0	35.0	8.0	51.5	緑色片岩	磨製
S 17	5	土壌14埋土	砥石片	173.0+	101.0+	43.5+	617.6	流紋岩	S18・6と同一個体・被熱
S 18	4	土壌14埋土	砥石片	144.5+	56.0+	42.0+	228.3	流紋岩	S17・6と同一個体・被熱
S 19	34	土壌19埋土	砥石	156.5	66.0	26.0	348.7	頁岩	
S 20	65	土壌28中層埋土	砥石片	142.0+	48.0+	77.0+	269.2	花崗斑岩	被熱
S 21	26	9 d 区南斜面表土	礫器未成品?	120.0	76.5	35.5	432.3	泥岩	スクレイパー?
S 22	18	4 a 区西斜面包含層	鎌	84.0	44.5	18.5	104.9	火成岩	切り目
S 23	16	5 d 区南斜面包含層	叩き石	106.5	52.5	23.0	172.1	流紋岩	被熱
S 24	23	8 d 区東斜面黄色土	叩き石	129.0	85.0	61.0	971.1	角閃石珩岩	
S 25	24	4 d 区南斜面流出土	叩き石	136.5	72.0	41.0	600.0	花崗斑岩	

遺構・遺物一覧表

掲載番号	整理番号	掲載出土遺構・土層名	器種	計測値 (mm)			現存重量 (g)	石材	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
S26	19	4 b 区現代掘乱土	叩き石・磨り石	93.5	84.0	57.0	631.9	角閃石珩岩	
S27	20	8 d 区東斜面流出土	砥石	117.5+	18.0	21.0	58.6	流紋岩	
S28	17	9 d 区南斜面流出土	砥石	86.5+	39.5	17.0	66.6	流紋岩	
S29	21	4 d 区南斜面黄色土	砥石	102.5	35.0	27.5	149.6	流紋岩	
S30	186	11 b 区西斜面流出土	砥石	152.0+	116.5	52.0	1011.2	流紋岩	
S31	27	5・6 d 区排出土	砥石	123.5	79.5	48.0	707.2	花崗閃緑岩 (細粒)	
S32	31	4 d 区南斜面黄色土	台石	356.0	319.0	102.0	19500.0	粗粒花崗岩	
S33	28	4 d 区南斜面黄色土	台石	264.0	231.0	45.0	4500.0	珩岩	
S34	25	竪穴住居27埋土	砥石	79.0	94.5	44.0	515.8	流紋岩	
S35	10	段状遺構20埋土	砥石	147.0	130.0+	104.0	2980.0	角閃石珩岩	
S36	15	段状遺構24床面	砥石	153.0+	101.0+	46.0	991.0	半花崗岩	
S37	22	西半段状遺構群覆土	叩き石	86.0	98.0	65.0	723.2	角閃石珩岩	
S38	12	5 d 区東半段状遺構群覆土	砥石	49.0+	54.0+	46.0+	90.2	流紋岩	
S39	13	5 d 区東半段状遺構群覆土	砥石	90.0	24.5	19.5	68.5	流紋岩	
S40	14	5 d 区東半段状遺構群覆土	台石	225.0	216.0	54.0	3680.0	花崗斑岩	
S41	9	土壘3埋土	砥石	46.5	36.5	21.0	54.6	流紋岩	
S42	11	土壘47中層埋土	砥石	170.0+	156.0+	90.0	2690.0	花崗斑岩	
	68	竪穴住居 8 上層埋土	焼石	185.0	102.0	85.0	1980.0	粗粒花崗岩	全面被熱
	79	竪穴住居10・11埋土	焼石	38.0	29.0	18.0	27.0	花崗斑岩	
	184	竪穴住居15P10	叩き石?	115.0	98.0	12.0	941.6	珩岩	
	189	竪穴住居16壁溝内	石屑	12.0	16.0	47.0	4.4	石英	
	49	竪穴住居14~16埋土	砥石	56.0	47.0	22.0	72.5		
	59	竪穴住居14~16埋土	石屑	37.0	21.0	19.0	17.2	石英	
	48	竪穴住居17・18下層埋土	砕片	43.0	20.0	4.0	6.9		
	54	竪穴住居19・20埋土	台石片	56.0+	26.0+	24.0+	29.7	花崗斑岩	
	88	竪穴住居19・20覆土	焼石	148.0	74.0	73.0	898.0	半花崗岩	円礫
	188	竪穴住居22埋土	石屑	30.0	20.0	7.0	7.9	石英	
	51	段状遺構 9 北側外	台石	156.0	163.0	101.0	4900.0	角閃石珩岩	
	56	土壘3埋土	石屑	19.0	13.0	8.0	3.8	石英	S17・S18と同一個体・被熱
	6	土壘14埋土	砥石片	93.0+	25.0+	70.0+	140.4	流紋岩	島根県玉湯町花仙山産?
	37	土壘19埋土	砕片					碧玉	
	63	溝 3	石片	33.0	31.0	5.0	17.0	珩質片岩(黒色片岩含)	
	45	12 d 区南斜面黄色土	台石	422.0	275.0	78.0	1280.0	花崗斑岩	
	46	11 c・d 表土	叩き石	146.0	82.0	50.0	1051.9	花崗閃緑岩	
	47	6 c 区流出土	叩き石片	126.0	68.0	89.0	876.4	珩岩	
	50	6 e 区南斜面包含層	台石片	177.0	68.0	57.0	630.0	角閃石珩岩	
	60	3 c 区南斜面黄色土	砥石片	62.0	15.0	5.0	6.6	頁岩	
	30	3 f 区包含層	台石	300.0	185.0	92.0	6600.0	珩岩	
	61	4 d 区南斜面黄色土	石片	60.0	55.0	10.0	54.4	珩質片岩(黒色片岩含)	
	62	4 d 区南斜面表土	石片	69.0	65.0	6.0	75.4	珩質片岩(黒色片岩含)	
	64	4・5 f 区包含層	砥石片	51.0+	35.0+	19.0+	34.5	流紋岩	
	182	11 b c 区西斜面流出土	叩き石	98.0	147.0	53.0	1210.0	角閃石珩岩	
	183	11 d 区南斜面包含層	叩き石片	80.0+	70.0+	36.0+	167.8	流紋岩	
	57	12 c 区土壘盛土	石塊	87.0	73.0	53.0	358.0	石英	
	58	12 c 区土壘盛土	石塊	103.0	65.0	34.0	299.0	石英	
	52	13 c 区北斜面表土	砥石	172.0	76.0	98.0	2340.0	角閃石珩岩	
	197	14・15 c 区北斜面流出土	砥石	38.0+	46.0	31.0+		流紋岩	
	53	14 e 区南斜面包含層	叩き石	192.0	74.0	54.0	1169.2	花崗斑岩	
	55	14・15 c 区北斜面流出土	台石	112.0+	160.0+	83.0	1930.0	石英斑岩	

鉄器一覧

掲載番号	整理番号	出土遺構・土層名	器種	現存計測値 (mm)			現存重量 (g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
M1	9	竪穴住居13埋土	鐵	36.5	12.5	10.5	2.79	
M2	19	竪穴住居13下層埋土	鐵	54.0	16.5	15.0	7.75	有基方頭
M3	18	竪穴住居13下層埋土	ヤス?	80.0	10.0	15.0	8.90	木質残存
M4	26	竪穴住居16埋土(南)	鐵	30.2	26.0	9.0	7.20	無基三角形円孔あり
M5	25	竪穴住居16埋土(南)	鐵?	33.0	20.5	8.5	5.30	有基
M6	14	竪穴住居17・18埋土	鐵	40.5	25.0	6.0	7.23	無基三角形円孔あり
M7	28	竪穴住居17・18埋土	鐵	51.0	24.5	2.0	8.53	
M8	29	竪穴住居18P14	ヤス?	44.5	5.0	3.5	2.74	
M9	24-②	竪穴住居17・18中層埋土	ヤリガンナ	62.5	12.0	7.0	8.40	
M10	24-①	竪穴住居17・18中層埋土	斧	88.5	42.5	14.5	110.76	
M11	20	竪穴住居19・20埋土	鐵	32.0	12.5	11.6	5.35	無基三角形
M12	30	竪穴住居19・20P14	不明	26.5	7.0	3.5	1.50	
M13	10	段状遺構 4 埋土	ヤリガンナ	115.7	15.0	11.0	19.77	
M14	15	土壘5埋土	鐵	25.0	21.5	2.5	3.95	木質残存・無基三角形円孔あり
M15	27	土壘10埋土	刀子の柄	32.0	18.5	9.0	5.75	木質残存
M16	23	土壘21埋土	鋤先	92.0	40.0	19.0	64.20	2分割・破片多数
M17	1	3 d 区南斜面包含層	板状	73.0	38.5	12.5	35.33	
M18	31	12e区南斜面包含層	鐵	31.0	21.5	2.0	2.98	
M19	22	12~14 c、14・15 d 区北斜面土壘盛土	刀子	30.0	14.0	7.0	2.70	
M20	21	3 e 区包含層	鐵	24.0	17.0	116.0	2.99	無基三角形円孔あり
	16	竪穴住居 8 上層埋土	破片	20.0	15.0	3.0	1.51	
	11	段状遺構 3 埋土	不明				2.03	
	12	東半段状遺構群覆土	不明				1.93	



1 調査前の空中写真（北西から）



2 調査終了後の空中写真（西から）

図版 2

小坂向城山城跡 ヒロダン・小坂向遺跡



1 郭面上空写真（上が南）



2 郭内の状況（南東から）



3 西土塁土層断面（南から）



4 南土塁土層断面（東から）



5 尾根上調査区（西側） 遺構空中写真（上が北東）





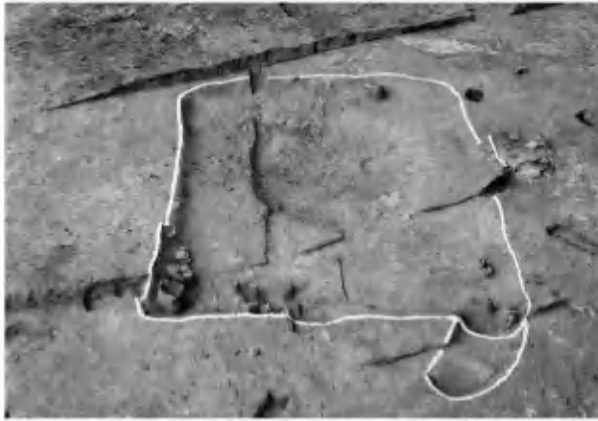
1 尾根上調査区（東側） 遺構空中写真（西から）



2 竪穴住居13～20周辺空中写真（上が北）

図版 4

ヒロダン・小坂向遺跡



1 竪穴住居1 (南東から)



2 竪穴住居3~7周辺 (北東から)



3 竪穴住居5床面土器出土状況 (南東から)



4 竪穴住居10・11 (北から)



5 竪穴住居18床面甑出土状況 (東から)



6 竪穴住居22 (西から)



7 段状遺構4、土壇7 (南西から)



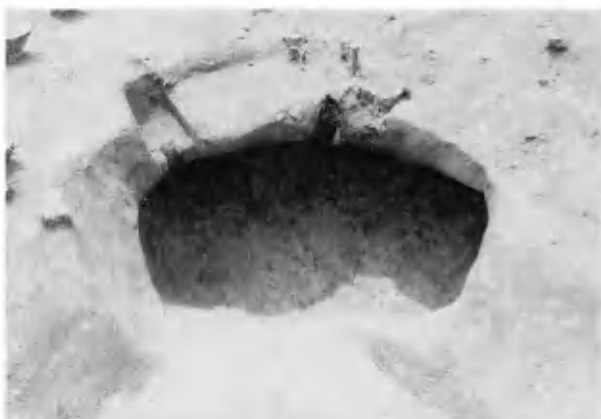
8 段状遺構6~8、土壇8・9 (南東から)



1 土壇1 (北東から)



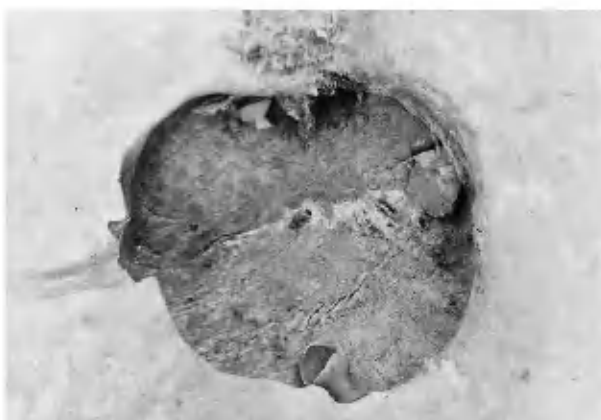
2 土壇4・5 (北東から)



3 土壇19 (南東から)



4 土壇18~21 (南から)



5 土壇30土器出土状況 (東から)



6 土壇35 (南東から)



7 土壇36 (北東から)



8 斜面調査区 調査前の状況 (北西から)

図版 6

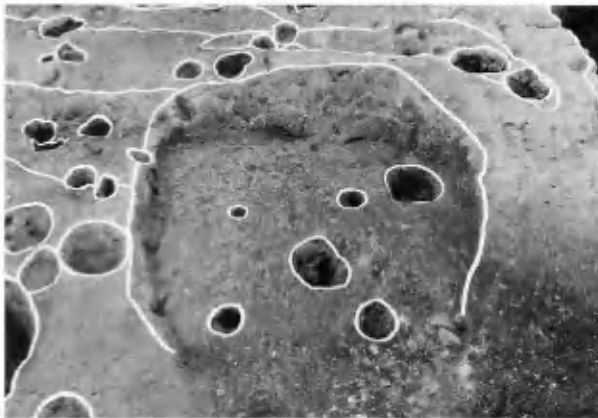
ヒロダン・小坂向遺跡



1 斜面調査区（西半） 遺構全景（北西から）



2 斜面調査区（東半） 遺構全景（南東から）



3 竪穴住居27（南西から）



4 段状遺構21～25周辺（南西から）



5 東半段状遺構群覆土中土器出土状況（南西から）



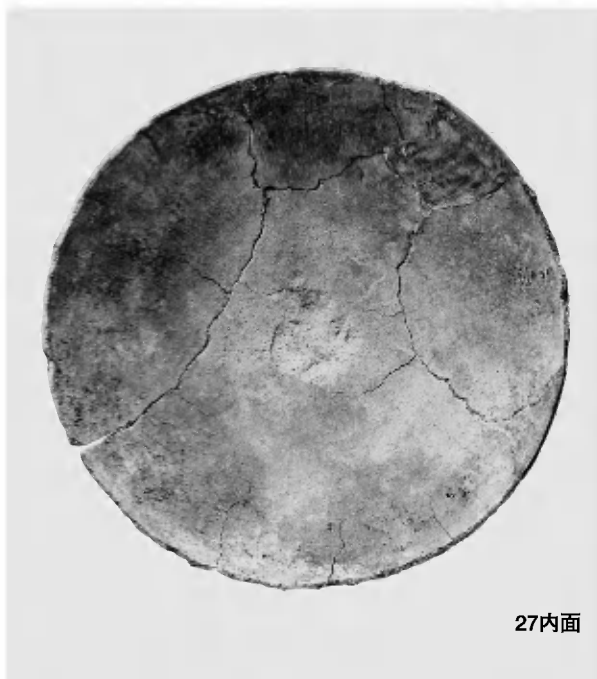
6 土壇38土器出土状況（南西から）



7 土壇38完掘状況（南西から）



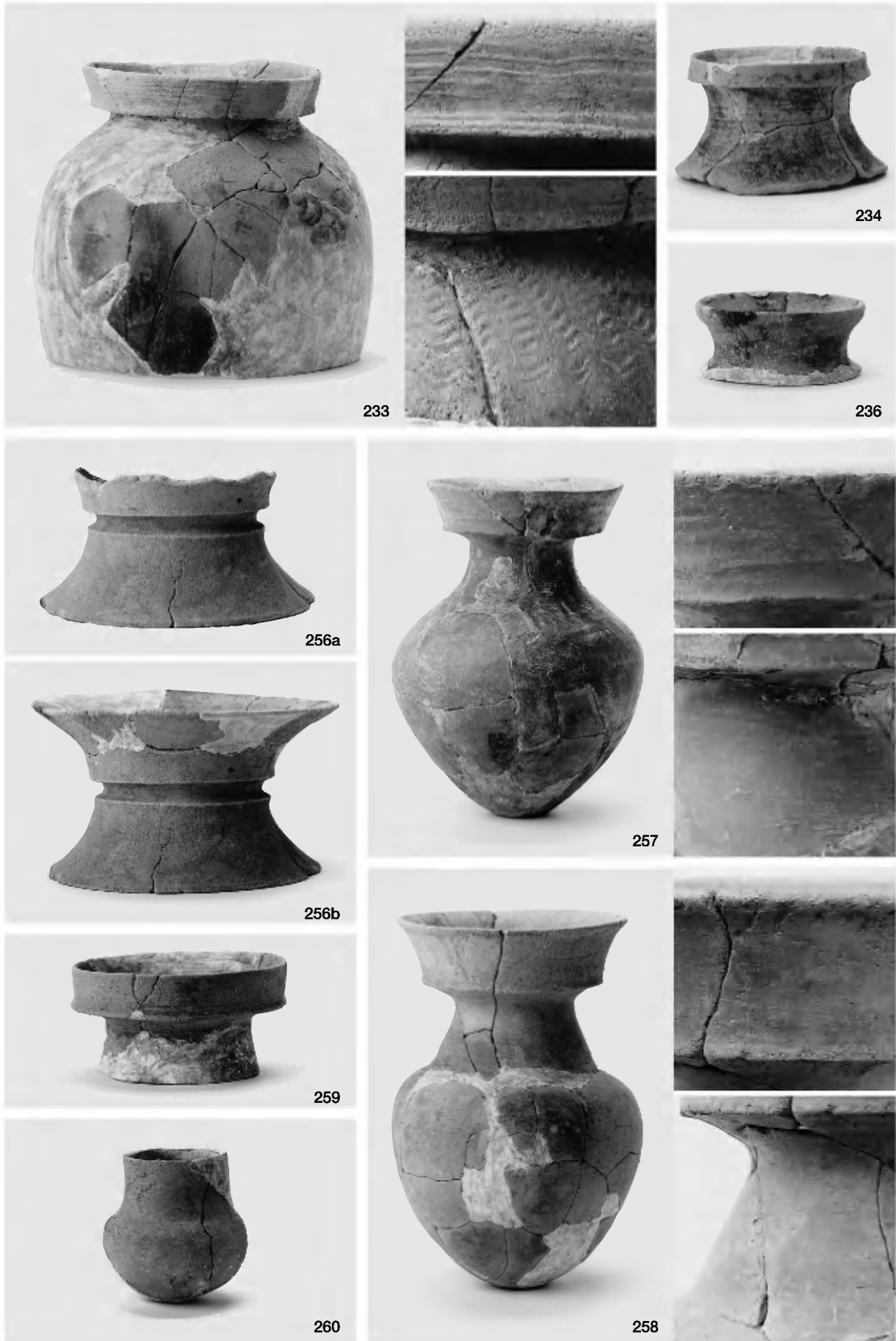
8 土壇42～45（南西から）



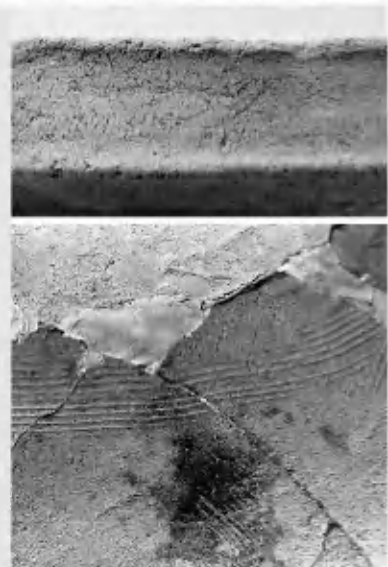
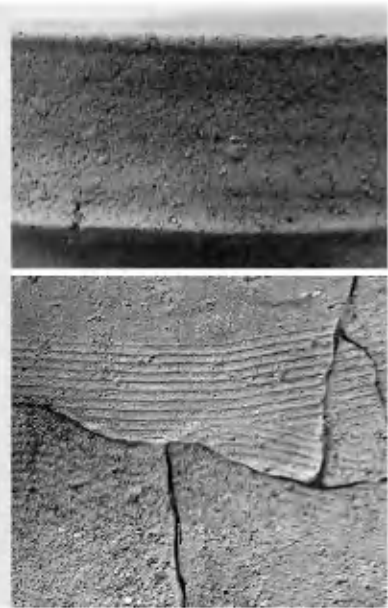
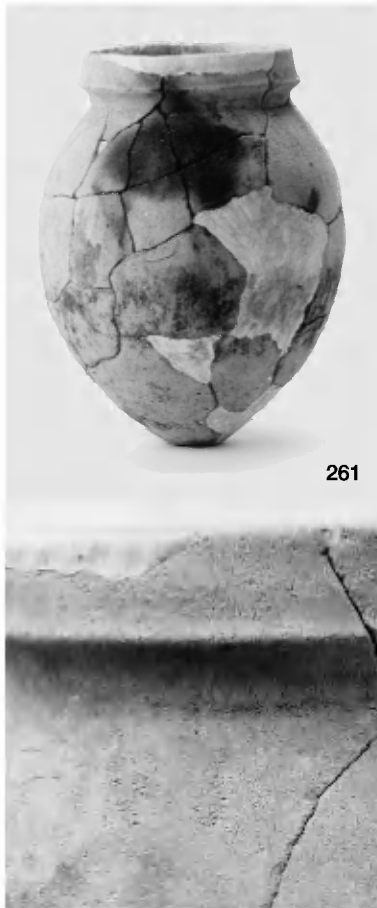
竪穴住居1・3・5・8・10・11・13出土土器



竪穴住居17~20、段状遺構5・13・15出土土器

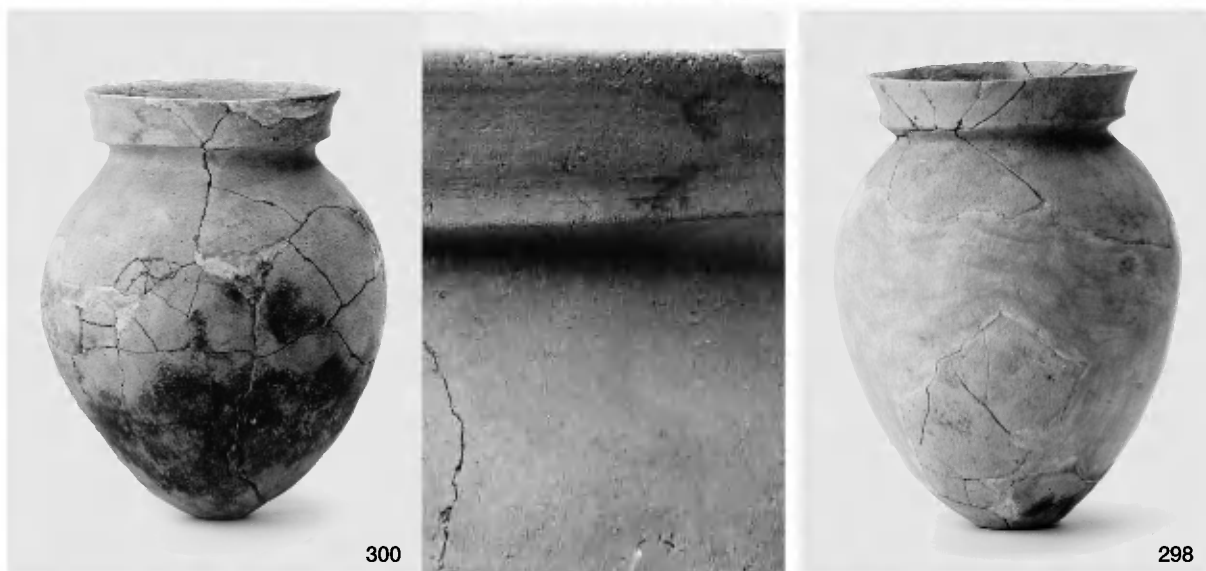


土壇1・2・13・14出土土器

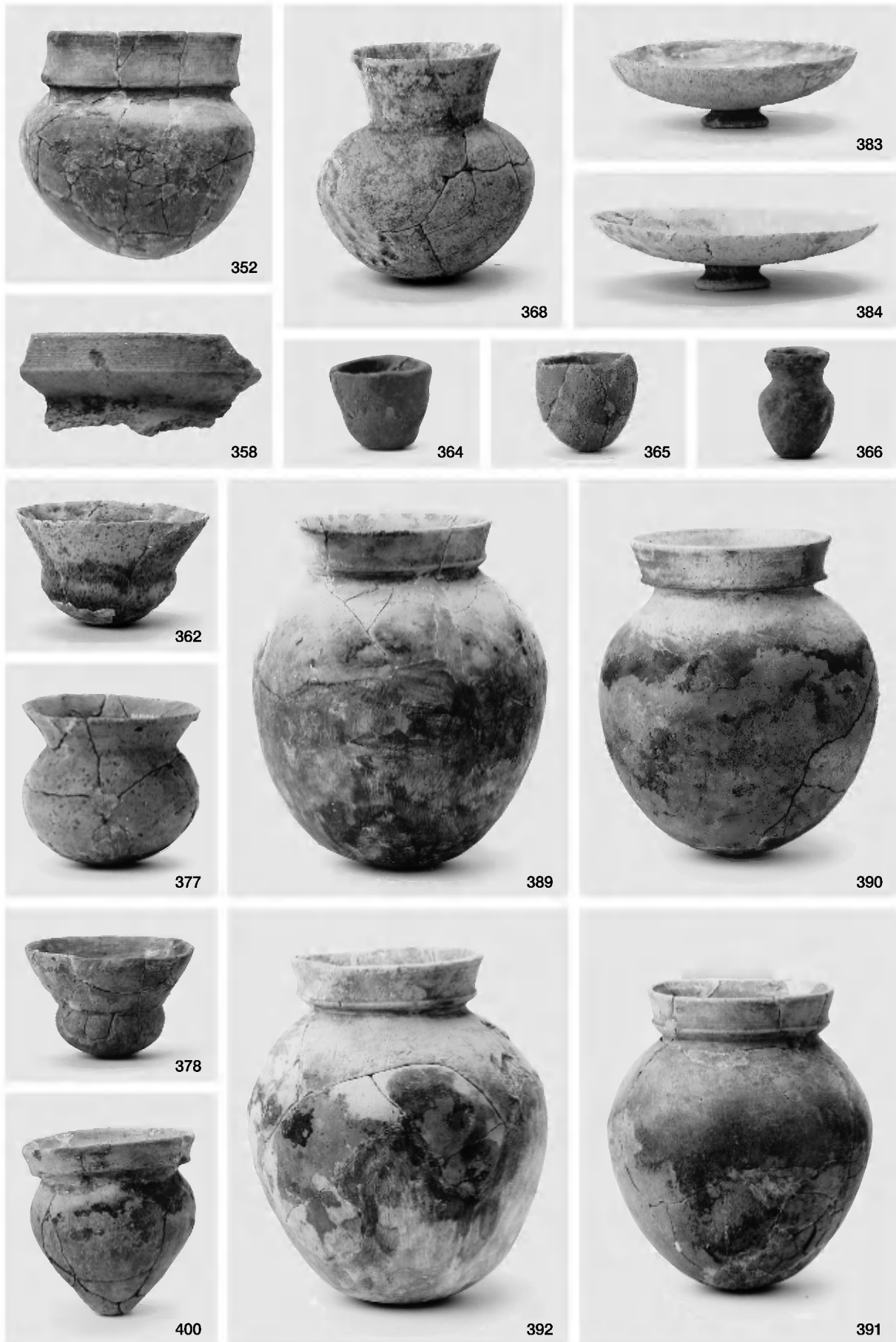


土壇14・19・20・28・30出土土器





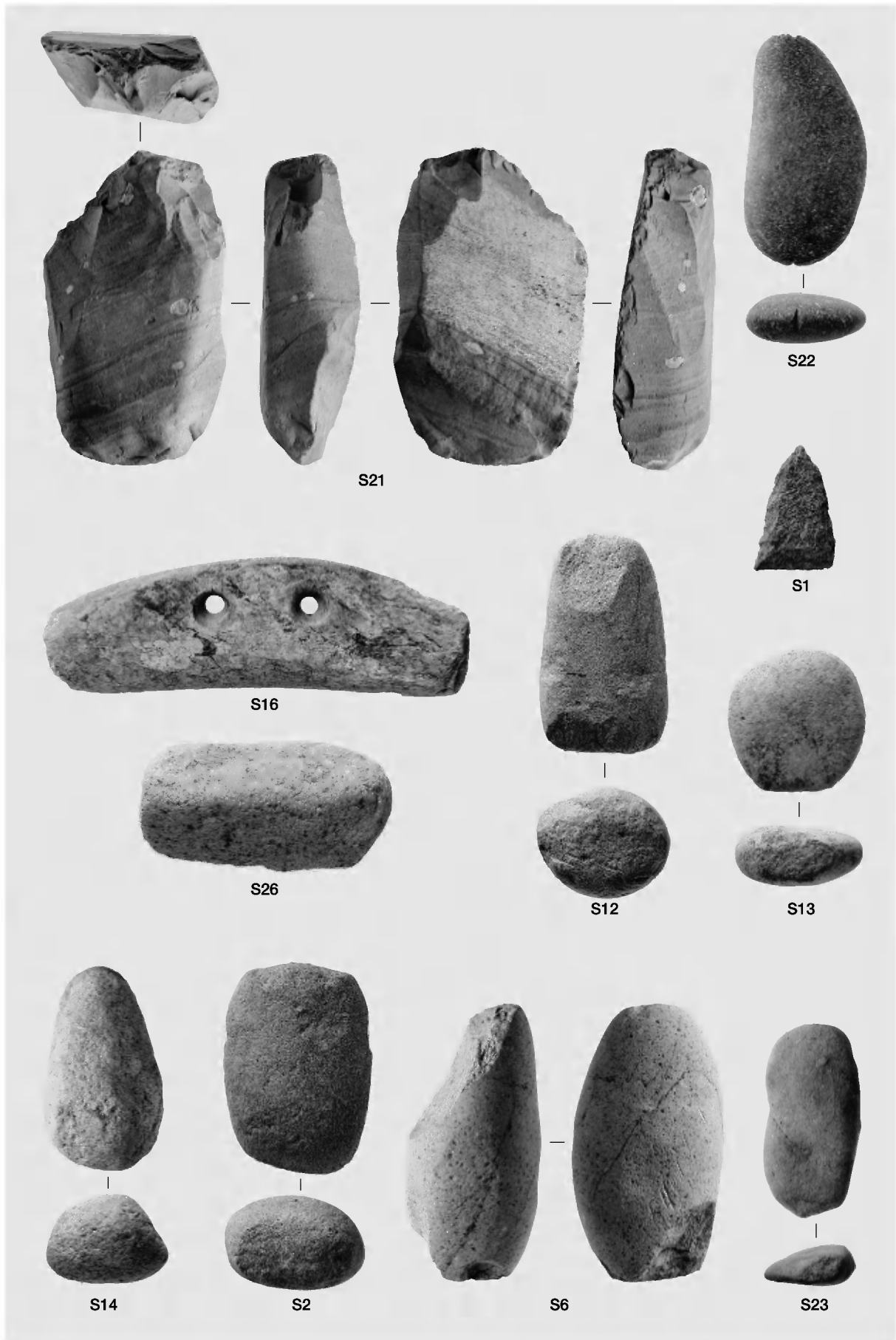
土壙30・31出土土器



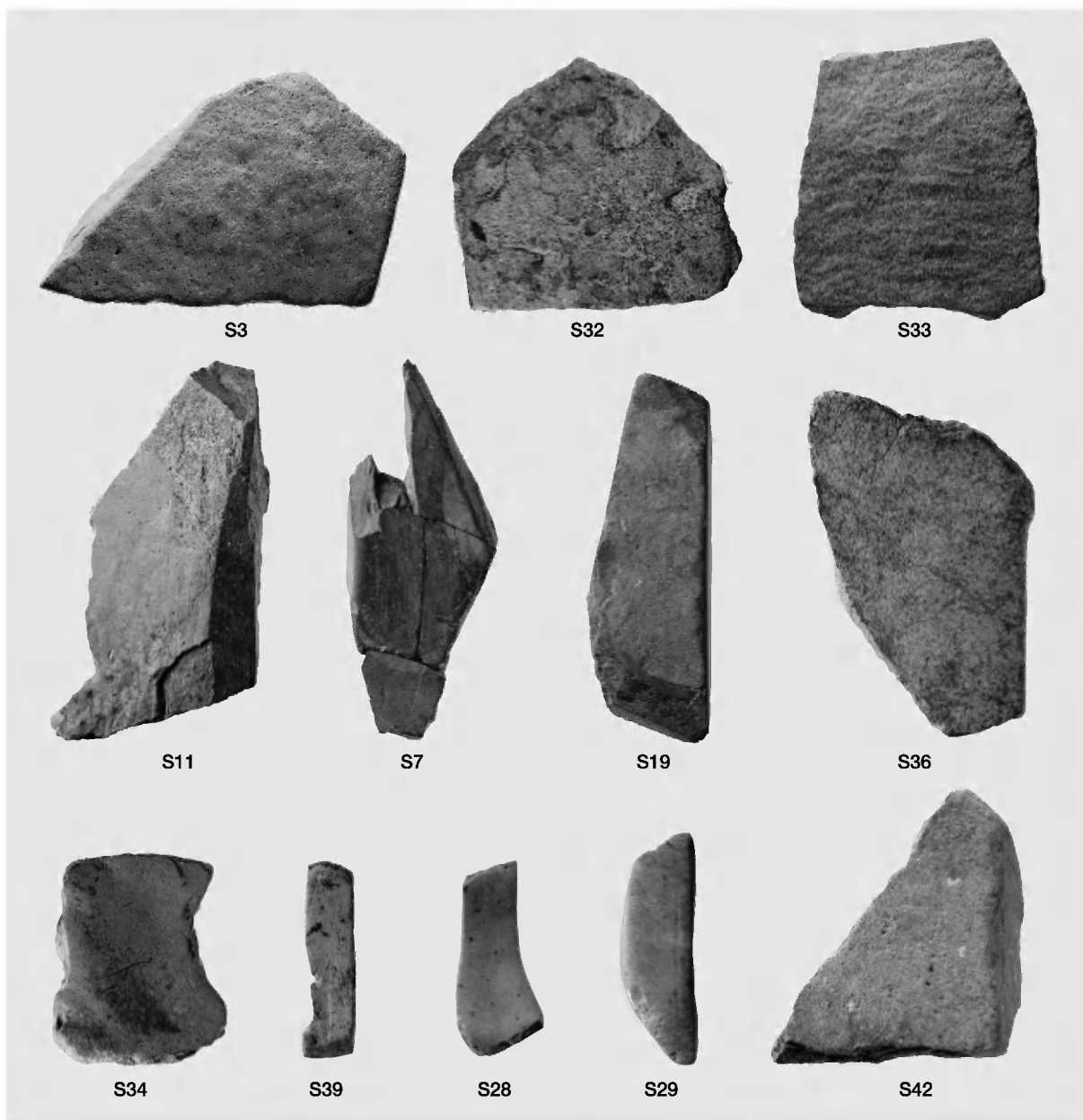
段状遺構25・27・28、段状遺構群、土壇38・41出土土器



土壙39・47、溝1・3、包含層出土土器



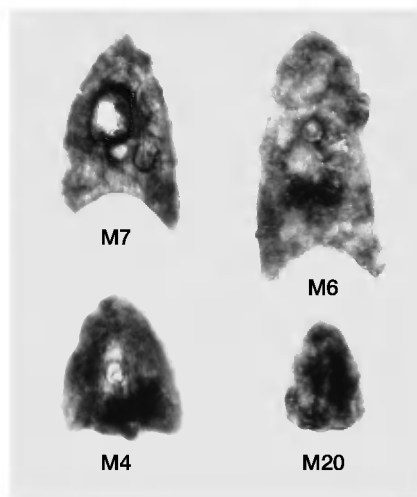
出土石器



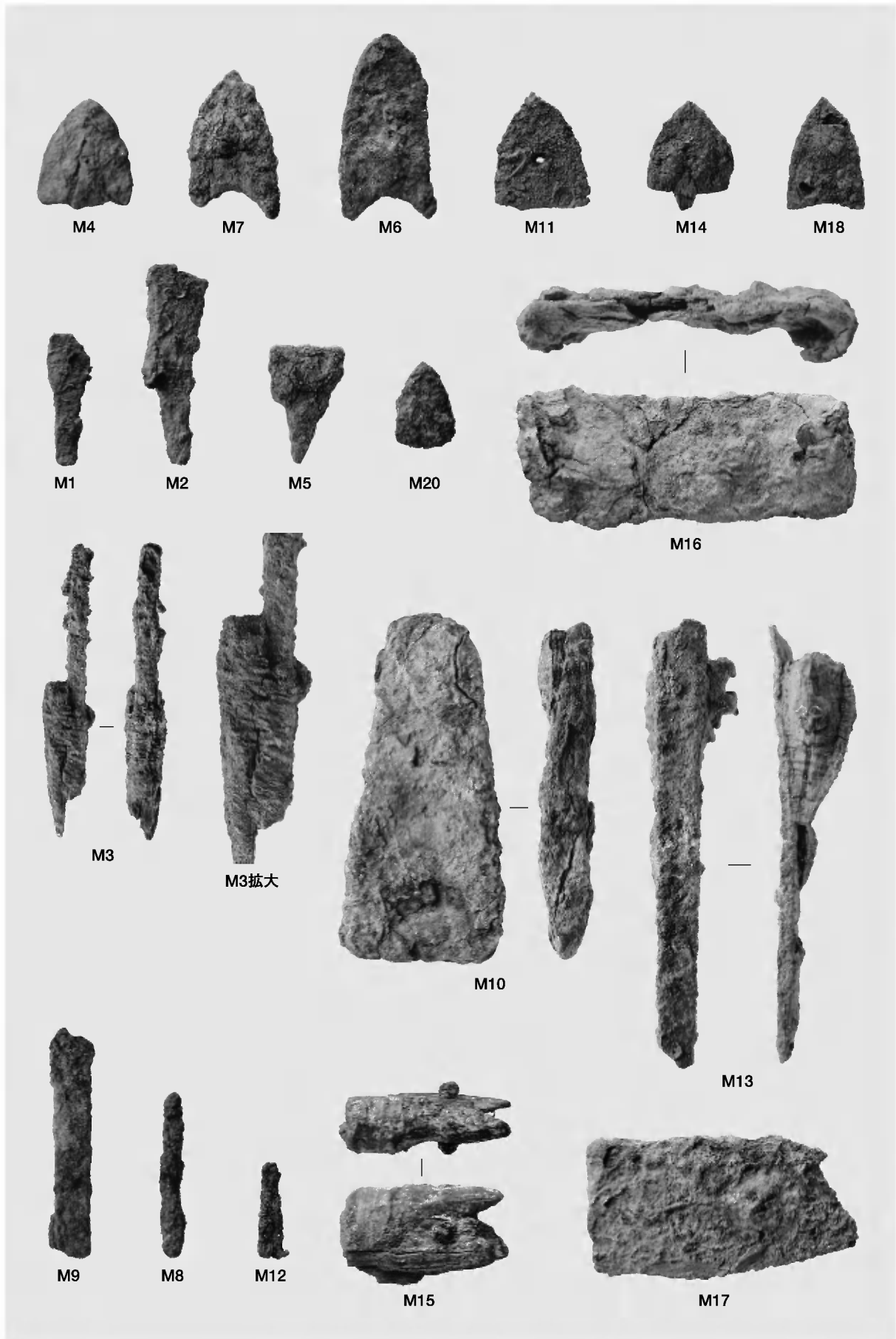
1 出土石器



2 出土石英塊



3 出土鉄鏃X線写真



出土鉄器

## 報告書抄録

ふりがな	おさかむこうしろやまじょうあと ひろだん・おさかむこういせき							
書名	小坂向城山城跡 ヒロダン・小坂向遺跡							
副書名	一般県道種見明戸線道路改築に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	176							
編著者名	杉山一雄・澤山孝之・白石 純							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL 086-293-3211							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6 TEL 086-224-2111							
発行年月日	西暦2003年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小坂向城山城跡	お か や ま け ん 岡 山 県	33583		35° 10' 50"	133° 40' 10"	2001. 4. 1 ～ 2002. 6. 30	6, 150 m <sup>2</sup>	一般県道 種見明戸線 道路改築
ヒロダン・ 小坂向遺跡	ま に お ぐ ん ゆ ぼ ら ち ょ う 真 庭 郡 湯 原 町 み あ け ど 見 明 戸			35° 10' 52"	133° 40' 8"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
小坂向城山城跡	山 城	中世	土塁・郭					
ヒロダン・ 小坂向遺跡	集 落 生 産	縄文時代以前		石器（切り目石錘・削器?）				
		弥生時代～ 古墳時代前期	堅穴住居 段状遺構 土壙 溝	弥生土器、土師器、石器（台石・砥石・ 叩き石・磨り石・玉素材）、鉄器（鏃・ ヤス・斧・鋤先・ヤリガンナ・刀子な ど）				
		古墳時代後期 以降	土壙	須恵器				

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告176

# 小坂向城山城跡 ヒロダン・小坂向遺跡

一般県道種見明戸線道路改築に伴う発掘調査

平成15年11月28日 印刷

平成15年11月30日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会  
岡山市内山下2-4-6

印刷 山陽印刷株式会社  
岡山市富吉3098-1